

明治学院歴史資料館資料集

第16集

山田幸三記「二榎日記」(明治26年)
「今里日記」(明治27年)

明治学院歴史資料館



写真1-1 山田幸三が記した日記

東京都八王子市 山田家文書 山武市歴史民俗資料館所蔵

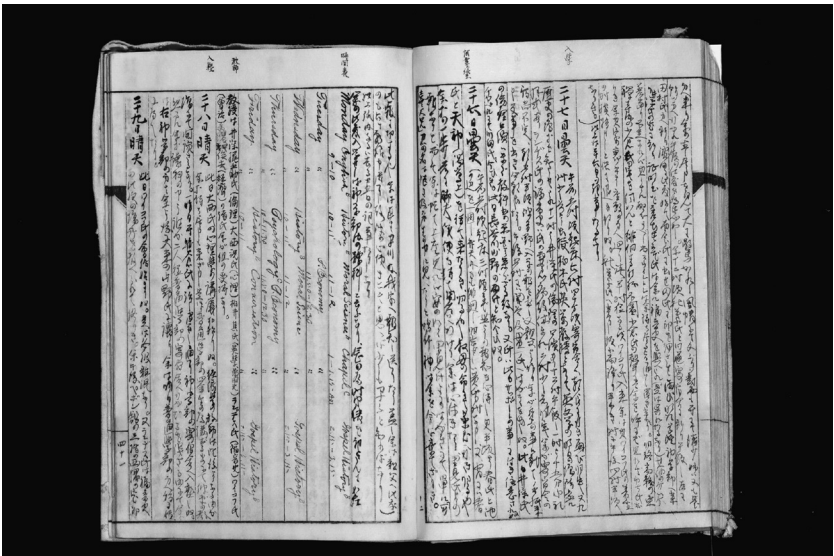


写真1-2 時間割に関する記述がある1893（明治26）年9月26日部分



写真2-1 山田幸三と明治学院神学部本科第一年生の記念写真

1895(明治28)年4月18日、東京芝区神明社内の写真士田中武撮影
山田幸吉氏寄贈 当館所蔵

前列右から*千磐武雄・深尾泰次・*清水久次郎・松村米太郎
中列右から*山田幸三・*矢島宇吉・郡山源四郎・*和田三郎・*長山万次
後列右から*山野友一郎・河野政喜・柴山幾久松
*は1893(明治26)年9月に神学部予科に入学した者

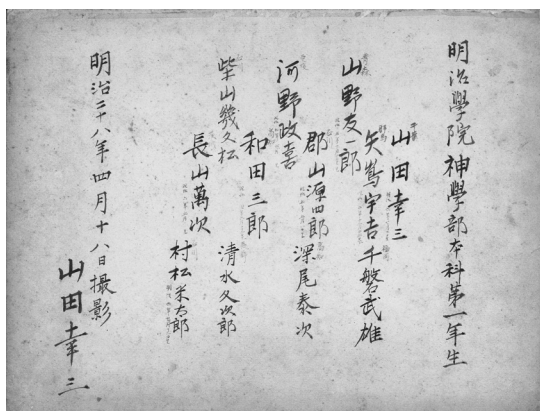


写真2-2
写真2-1の裏面



写真3 明治20年代の明治学院白金キャンパス 当館所蔵

写真にはレンガ造の神学部校舎兼図書館の尖塔が写っている。撮影時期は、同館の創建された1890（明治23）年以降で、1894（明治27）年6月に発生した明治東京地震により同館の2階と屋根部分が崩壊する以前である。

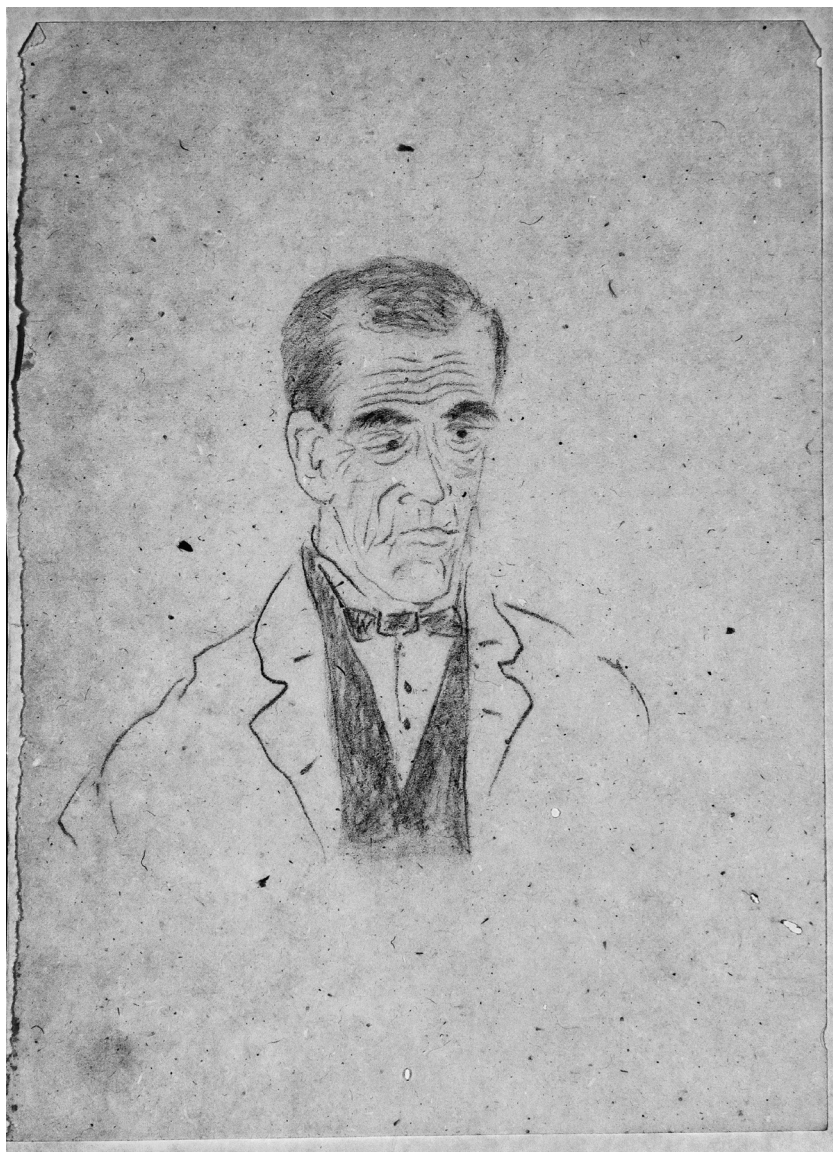


写真4 「今里日記」(1894年)に挟まれたフルベッキの肖像画
東京都八王子市 山田家文書 山武市歴史民俗資料館所蔵

明治学院歴史資料館資料集 第一六集

明治学院歴史資料館

はじめに

『明治学院歴史資料館資料集』第一六集が刊行の運びとなりました。

本書では、一八九三（明治二六）年から約四年間、明治学院神学部在籍した山田幸三（一八七三—一九四〇）が在学中に記した四冊の日記のうち、二冊を紹介します。明治学院が白金の地に開校したのは一八八七年、神学部が築地から移転したのは一八八九年です。この日記には、開校直後と比べていい初期の明治学院を舞台に、本学神学部で学んだ学生たちの生活や、学院の出来事、授業内容、学生たちが通った教会の活動などが、いきいきと記されています。当時の学院の様子やキリスト教伝道のありようなどを知ることができる、貴重な資料といえます。このたび、本館研究調査員・スタッフによってまとめられ、公刊できることになりました。基礎資料としてご利用いただければ幸いです。

本書の刊行にあたりましては、資料を所蔵される山武市歴史民俗資料館、また同館古文書調査員の加藤時男・川島秀臣の両氏、さらに当館に山田幸三関係の写真資料など一八点を寄贈くださいました山田幸吉様を初め山田家の皆様に、大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

二〇二〇年三月

目次

凡例

解題

山田幸三とその日記について

石崎康子・松本智子

1 頁

一八九三（明治二六）年「二榎日記」

35 頁

一八九四（明治二七）年「今里日記」

199 頁

註

343 頁

凡例

- 一、本書は、千葉県山武市にある山武市歴史民俗資料館が所蔵する山田幸三が記した「二榎日記」（明治二六年）と「今里日記」（明治二七年）の翻刻である。
 - 一、翻刻は原則として原資料の通りに行ったが、次の事項は例外とした。
 - ・漢字は常用漢字を使用し、俗字や略字等も改めた。
 - ・合成字は、平仮名とした。例「カ」↓より「ト」↓こと補った。
 - ・並列する語句の区切り等には「・」（中黒）を付した。また、読みやすさを考慮して適宜読点を補った。
 - 一、外国人名、平仮名、カタカナ、濁点、傍線、傍点については、原文のままとした。
 - 一、誤字・脱字・書き間違いと思われるものについては、右傍に「　」で案を示すか、「ママ」を付した。
 - 一、判読困難な箇所は□で示した。字数が分かる場合は字数を□で示した。なお破損等による場合は、その旨を右傍に「破損」と記した。
 - 一、本文中の空白部分には、その字数分を空け「　」で示した。
 - 一、原資料の欄外への書き込みについては、当該日の日付・天候を記す行の次行に「欄外」と記し、「　」で内容を記載した。複数の記載については、「／」（スラッシュ）を付し続けて記載した。
 - 一、日記中に挿まれた別紙については、「別紙」として当該の記述に続いて記載した。
 - 一、註の記述において、人名の読みが不明の場合は、推定の読みを記し*を付した。
 - 一、本文中には、現代社会では不適切と思われる表現を含むものがあるが、当該期の社会状況を伝える歴史資料として、原文のまま掲載した。
 - 一、解題と翻刻は、明治学院歴史資料館研究調査員の石崎康子と松本智子が担当した。
- 翻刻に当たり、山武市歴史民俗資料館古文書調査員の高藤時男・川島秀臣の両氏が翻刻された筆耕資料を参考にさせていただいた。また資料の閲覧等で山武市歴史民俗資料館には大変お世話になった。記して謝意を表します。

解題

山田幸三とその日記について

石崎 康子
松本 智子

ここでは、一八九三（明治二六）年から約四年間、明治学院神学部に在籍した山田幸三（一八七三—一九四〇）が記した四冊の日記を紹介したい。本資料集一六集では、一八九三年に記した「二榎日記」とその翌年に記した「今里日記」を紹介し、次年度以降「明治二十八年日誌」・「明治二十九年同三十年日誌」を紹介する予定である。

山田幸三が記した日記は、山武市歴史民俗資料館（千葉県山武市殿台）所蔵の「東京都八王子市山田幸信家文書」（以下山田家文書）に収められている。同家文書は、旧掛川藩士であり、同藩が移封後は松尾藩士となった山田家に伝わった文書である。

一八六八（慶応四）年、徳川幕府崩壊に伴い、徳川家達が駿河・遠江の七〇万石に移封となり、その結果、駿河・遠江を所領としていた諸藩は、上総・安房に国替を迫られることとなった。遠州掛川藩主太田資美は、一八六八年九月、上総国武射・山辺郡内へ移封となり、資美は翌年五月に武射郡柴山村に仮藩庁を設置し、柴山藩を立藩した。所領は五万三三五〇石であった。同年六月には、版籍奉還をうけて知藩事に任命され、新たな土地を開拓し、掛川城内の地名にちなみ松尾と命名し、一八七〇年十一月にはその地へと移り、松尾藩と改称した。しかし翌年七月の廃藩置県で、松尾藩は廃藩となり、松尾県となり、同年十一月には木更津県に合併される。上総への移封から廃藩まで、わ

ずか四年足らずであった。

山田家は、「山田家々譜」（山田家文書目録番号F-12、以下番号のみ）によると、初代山田幸政より太田家に仕えており、五代幸寿は家老職を務めていた。同家資料には、九代幸萌が残した「加奈川御警衛一件書抜」（第四次-9）など掛川藩が幕末に担った海岸防備に関する文書などが残されている。遠州掛川からの移封は、一〇代幸律の時であった。

山田幸律は、日記を数多く書き残しており、「庚午日録」（I-7）・「明治日録」（I-8）などには、芝山から松尾への移住、一八七一年の廃藩置県に到る藩内の情勢や、藩から派遣され福沢諭吉が創設した慶応義塾に通ったことなどが記されている。また山武市松尾町松尾にある九十九里教会は、千葉県内で現存する最も古い教会の一つであるが、一八八〇年代後半以降、旧松尾藩士族への信仰の広まりが教会を発展に導いたといわれている。幸律の日記（「丁亥明治二十稔日誌」E-4）の明治二〇年二月二七日条には、「会堂建築費壹円五十銭差出ス」、同一〇月二日条には「建築費ハ信者一同ノ義捐金ニテ不足ヲ補、自分ハ本月中ニ二円差出シ、三円ヲ明年中ニ都合五円差出ス事ニ致シ申候」とあり、幸律の熱心な教会活動がうかがえる。

山田家資料は、同家より山武市歴史民俗資料館に寄贈され、「東京都八王子市 山田幸信家文書」として整理されている。資料は四期に分けて寄贈され、第一次から第三次受け入れ分については、その目録が『掛川藩から松尾藩へ（補遺）—追加目録—山武市郷土史料集二三』（以下『山武市郷土史料集二三』、山武市教育委員会編刊、二〇一七年）に、第四次受け入れ分については、その目録が『山武市松雄町広根 北田定男家文書調査報告書《付録》旧松雄地区目録（追加）（二）史料編 山

武市郷土史料集二五』（山武市教育委員会編刊、二〇一九年）に収録されている。また『山武市郷土史料集二三』の三章「近世後期の掛川藩の治政」・四章「明治維新と掛川藩・松尾藩」には、同家資料の一部が翻刻、掲載されている。

なお、山田幸三に関する写真資料等一八点が、二〇一一年、山田幸吉氏より明治学院歴史資料館に寄贈された。口絵に紹介する写真資料〔口絵写真2〕は、その中の一点である。

（1）山田幸三とその日記について

本資料集で紹介する日記は、幸律の長男山田幸三（山田家一代）が記したものである。幸三は、父幸律、母りゑの長男として、一八七三（明治六）年七月二〇日に生まれた。一八九三年九月、明治学院神学部予科に入学し、一八九七年三月、明治学院神学部を卒業している。卒業後伝道志願者試験を受験するも失敗し、三井銀行に就職、銀行員としての生活を歩み始め、東京・大阪・横浜などで勤務した。一九四〇（昭和一五）年四月一日に六六歳で死去している。

山田幸三の日記は、山田家資料のなかに、一八八八年の「日記（第壱号）」（I-18）など少なくとも一冊が残されている〔口絵写真1-1〕。本資料集では一八九三年の「二榎日記」（C-2-3）と一八九四年の「今里日記」（C-2-4）を紹介するが、「二榎日記」は、上京した幸三が寄留した秋葉省像宅の住所（芝区二本榎西町）に因み、「今里日記」は、幸三が一八九四年九月二四日から年末まで寄留した小倉家の住所（芝区白金村今里町）に因み名付けられたものと思われる。日記の紹介に先だち、ここでは山田家資料などをもとに、山田幸三をめぐる（2）郷里松尾での学習環境、（3）

九十九里教会と幸三の受洗、(4) 自営館での生活、(5) 明治学院神学部入学と学生生活について記しておきたい。

(2) 郷里松尾での学習環境

父幸律の日記(「丁亥明治二十稔日誌」^[14] E-2)によると、幸三は、一八八七(明治二〇)年三月一日、学校大試験があり及第、「高等二期」を卒業した。同年六月には、東金にある菁莪義塾^{せいが}への入学が決まり、通学を始めた。

菁莪義塾については、『山武市郷土史料集一〇 旧成東地区近現代編 中』(山武市教育委員会編刊、二〇〇八年)に、「明治十九(一八八六)年、東金町に設置されたとされている。英学科なども置かれ、要綱からは先進的学校と思われるが、『東金市史』にはその記述がない。従ってこの学校の所在地、実在の有無等は不明である」とあり、残された数少ない資料の一つ「菁莪義塾塾則の要綱」が紹介されている。^[2]

幸三は、一八八八年の日記(「日記(第老号)」)、一八八九年の日記(「日記(第二号)」I-19)に菁莪義塾への通学や塾の様子を記している。幸三の日記は菁莪義塾に通学した学生の記録としても貴重と言えよう。

(3) 九十九里教会と幸三の受洗について

九十九里教会は、「明治十九年四月日本基督一致東京第一中会記録」^[3]所収「一千八百八十六年 日

本基督一致東京第一中会 明治十八年十月ヨリ全十九年三月ニ至ル概略表」によると、一八八三（明治一六）年一〇月三〇日に創設された日本基督一致教会所属の教会である。

その始まりは、一八八二年、武射郡大平村の渡辺伊十郎が自宅に戸田忠厚牧師を招いて集会を開き、この時一二名の者が受洗したことと言われている。一八八三年、信徒は一六名ほどで、この信徒は本来東京芝教会の信徒であったが、芝教会と協議の上分離して九十九里教会と称した。一八八七年には教会の総員は一四〇名ほどに増加していた。その中には、後に松尾村の村長となる里見富三郎や幸三の父幸律など旧掛川藩から移住した士族らが多くおり、彼等が中心となって教会運営にあっていた。当初会堂はなく、一八八七年一月に現在の千葉県山武市松尾町松尾に教会堂が建てられたが、その際の会堂新築委員にも、里見富三郎や幸律の名が見える。幸三は会堂が建てられる前年の一八八六年七月二五日、父幸律、母りゑとともに、仮会堂（若林種芳宅）において和田秀豊から受洗した。

九十九里教会と明治学院との関係も深く、一八八五年一月年に井深梶之助と三浦徹が伝道説教に訪れたのを初めとして、以後、東京一致神学校・明治学院の教員や宣教師、神学部卒業生らが九十九里教会に出向き伝道説教を行っている。歴代牧師には明治学院神学部卒業生が多く、幸三や里美富三郎の子息里見純吉のように明治学院へ進学する信徒もいた。

日記が書かれた一八九三年頃の九十九里教会の状況について触れておきたい。『福音新報』（第一一四号、一八九三年五月一九日）に掲載された「上総九十九里通信」には当時の教会の様子を次のように報告している（読点は筆者にて付す）。

当教会は三年来兎角寂しかりけるが、目下神恩の優なると伝導者柳沢氏の尽力とにより一大進歩の有様にて、去る四月三十日東京より博士フルベキ先生を聘し、午前には十時より『我儕に信を益せよ』て面白き懇切なる説教あり、其れより男六人女四人、近来に稀なる多数の受洗者あり、晚餐式を終へて散会しぬ、午後には未信者の為めに演説会を開きしに、頃しも桑の芽は生長し蚕児は発生し田植も近み一年中最も多忙なる時節にもかゝらず聴衆は百二三十名にて中々の盛会なりき、第一席に柳沢氏今後我国に起る可き社会問題と云ふ題にて演説し、次にフルベッキ氏は「誰か己の過失を知り得んや」てふ詩篇十九編の一句を題とし面白き譬喩を快活なる見振とを以て説かれたる、一時半間の演説は謹聴の内に過ぎ去りぬ、六十六番の讚美を歌ひて閉会しぬ、○三四年來眠りつゝありし我九十九里教会は今や有望の教会とはなりぬ。

九十九里教会が「神恩の優なると伝導者柳沢氏の尽力とにより一大進歩の有様」を呈していること、「今や有望の教会」となったことが記されている。伝道師柳沢氏とは柳沢直治（永井直治）であり、一八九〇年六月明治学院神学部を卒業後、一八九二年一〇月から専任教師として九十九里教会に赴任していた。幸三の日記の明治二六年一月一日条によると、柳沢自身も九十九里教会について「彼地教会の模様先づ好景気なり」と語っており、この頃の九十九里教会は以前に比べるとかなり盛況であったことが知られる。

(4) 自営館での生活

山田幸三は、明治学院普通学部への入学と自営館 (The Industry Home, インダストリー・ホーム、ただし幸律・幸三の日記にはしばしばインダストホームと記される) への入館を目指し、一八八九(明治二二)年九月上京することとなる。父山田幸律の日記により明治学院の受験と自営館入館に関する記事拾い、その経緯をたどっておきたい。なお山田幸律が記した日記の翻刻については、山武市歴史民俗資料館提供の同館古文書調査員、加藤時男・川島秀臣両氏による日記翻刻原稿(未刊)より引用させていただく。

明治二二年四月三〇日〔己丑明治廿二年日誌 幸律〕E-5)

(前略)

一、作朝秋葉兄入来、本年夏小川豊吉氏明治学院卒業ニ付、其跡へ幸三ヲシテ(学費ハ西洋人ニテ出シ呉ル)差入呉候義、秋葉兄ヨリ小川氏へ依頼致、自分ヨリも依頼申遣候、実ニ此事出来候ハ、好都合ニ候(後略)

八月五日

一、小川氏、幸三入学ノ件ニ付種々世話相成候間、今夕招キ候ニ付家鴨一羽五百四十目、廿壹錢六厘ニテ求メ、午後より筧井幸三手伝調理致、自宅ノ黄柏メス九斤も料理ナシ、夕小川・秋葉夫婦・和知・里見并隠居・ふじ・筧・若林親父等来リ飯馳走いたス(後略)

九日八日

(前略)

一、幸三・貫一一同午後四時馬車ニテ東金へ参り二泊ナシ、十日千葉ニ行早川へ一泊シ、十一日出京候積り、関谷・波多野・早川・和知等へ手紙為持遣ス(後略)

九月一五日

(前略)

一、幸三ヨリ手紙参り、去ル十一日東金出発、千葉ニ参り早川へ一泊候旨、翌十二日午前十一時着京シ直チニ田村教師宅へ参り種々問答ナシ、来ル十六日ヨリ明治学院試験有之、本科及第スレバインダストリームニナルコト出来候旨、目下関谷方ニ居り候由ナリ(後略)

九月一六日

一、昨夜手紙認メ幸三方出ス、若シ試験落第スルモ在京シテ勉強スヘク旨申遣ス(後略)

九月二〇日

一、幸三へ差送ル夜具并本箱等ノ荷物通運会社安部倉方へ差遣直ニ出荷ス、登戸迄ノ賃錢九錢五厘相払申候(後略)

九月二十四日

(前略)

一、先日幸三ヨリ手紙来リ、廿二日認メ之書状ニ去る十六・十七日ニ明治学院ニ於本科試験有之候処、終ニ落第相成故ニインダストホームニ入ルコトヲ不得、甚々残念之至リ申越候(後略)

明治二三年一月一〇日〔庚寅明治廿三年日誌〕E 17)

一、幸三ヨリ端書来リ、去ル八日本科入学試験有之候処、終ニ落第セシ旨申来リ候
一、小川豊吉氏并幸三へ遣手紙認ム

一月二〇日

(前略)

一、幸三ヨリ端書来リ候処、去ル十五日ヨリ明治学院ニ於テ試験ヲ受候処、幸ニシテ及第致候旨報知有之、誠ニ喜ニ不堪事ニテ候、何レ近日インダストホームニ入ル都合ニ可相成、尚申越候筈ナリ(後略)

一月二十六日

解題

(前略)

一、小川君ヨリ昨日手紙来リ、幸三試験ニ付種々心配致呉候由ニ付同人又幸三へ手紙遣ス

一月二八日

(前略)

一、幸三及第入学セシ喜ぶ、及竈出来上リシ喜之為メ自宅七面雄ツブシ、夕若林親父・ふじ・林・里見・鈴木・寛・田中等相招馳走致申候、寛昼ヨリ入来リ調理方手伝呉申候、須貝君ハ寄合之為御出無之候

一月三一日

一、幸三ヨリ手紙来リ、去ル廿九日インダストホームへ入舎セシ旨申越候(後略)

自営館は、日本基督教会の牧師田村直臣⁵⁾が「明治学院に学ぶ苦学生のための寄宿舎を白金に建て、米国に倣つて、学生が勉学に必要な費用や住まいを、自活しながら賄える」場として一八八八年一〇月八日に創設した施設で、田村による「青年育成事業」の一つであった。⁶⁾なお山田幸三が記した一八九一年三月の日記(「三光日記」C-2-1)には、田村が自営館の活動を広く海外の人々に告知し援助を得るため、英文の書簡を海外に発送したことが記されている。自営館の設立の趣旨、運営方法を知ることのできる資料であることから、紹介することとする。

明治二四年三月二日

(前略)

田村氏に、此インダストリーホームをもすこし盛大になさんとて、同氏在米の折知り得たる人々に左の如き書簡を送りたり。

An Appeal to American Christians in behalf of The Industrial Home.

Tokyo, Japan

March 2nd 1891.

Dear Sir:

Prior to the Restoration of 1868, the Shizoku, or soldier class, were form the most part well educated and tolerably well off. The effect of the Restoration was to reduce most of them to poverty.

In old time they constituted the life of the nation; and they still retain their prestige and their spirit. Obviously therefore every trace Japanese must desire that opportunities should be afforded them to obtain an education in the science and learning of the west which recent years have introduced into Japan.

But the practical question, immediately arises, how can students find support while they are

engaged in study? Two difficulties are in the way. In the first place, all the traditions of a Shizoku teach him that any thing like manual labour [labor] is beneath his dignity. With this difficulty we have no sympathy. It is to be overcome by the promulgation of right ideas. Our industrial Institute is a standing protest against it. But in the second place - and this is the serious difficulty in the case - it is next to impossible, even for a student who is willing to work, to obtain employment that will put bread [feed] into his mouth which continuing his studies.

The Industrial Home is an endeavor on the part of a few of the ministers of the Church of Christ in Japan (the body with which the Missions of the Presbyterian and Reformed Churches cooperate) to meet this second difficulty. A farm was rental in Shirokane Mura, the south-western suburb of Tokyo, and near the Meiji Gakuin, which is the college connected with the synod of the Church. By the kindness of a Christian brother, a small house was erected. In this house, eight young men of promise reside. When the weather permits they work on the farm for three hours a day. The proceeds of their labour go towards their support, the deficiency being made up by the contributions of Christian friend. This is the plan of the Institution, it has been in operation for two years. As already stated eight students are now receiving support by means of it. It should be added that those eight all studying with the ministry in view. What we desire, and that for which we make our appeal, is the enlargement of the Home so as to accommodate twenty or thirty young men. The following is a more detailed statement [statement] of our plan for the future.

1. To purchase a farm of about twenty-five acres.
 2. To erect a simple building supplying rooms for thirty young men. A larger room will also be required in which the students shall meet morning and evening for family prayers, and for other purposes.
 3. The farm will raise potatoes, tomatoes, turnipe [turnip], radishes, and other vegetable. We desire also to plant an orchard of Japanese and foreign fruit trees. We hope also to keep two or more cows. Experience proves that milk is one of the most profitable products of a farm in Japan. The work connected with the care of the cows would be comparatively little.
 4. If it should seem desirable in the future, a printing shop may be added to give the students study work during the winter.
- To carry out this plan \$5,000 will be required to purchase the land; \$1,500, for the purchas [purchase] of cows, the farming implements, etc. In all we shall need at least \$7,000. Subscription may be paid either at once, or in installments. And subscribers may rest assured that any gift will be appreciated not only by the trustees but also by the inmates [inmates] of the Home. Permit us finally to strengthen our plea by quoting the word of the Apostle, Ye know the grace of our Lord Jesus Christ that thangh [thang] he was rich, yet for your sakes he become poor, that ye through his poverty might be rich. Remember also the words of the Lord Jesus, how he said, It is more blessed to give than to receive.

In behalf of the Trustees of the Industrial Home.

Naomi Tamura.

John T. Swift.

Miki Karasawa.

N.B. All communications regarding the Home should be addressed to the Secretary Naomi Tamura, No.2, Uraku chio Sanchiome, Tokyo, Japan.

但し右ハ本文にも有る通りスウィフト氏や唐沢氏の友人にも送りしと云ふ、されバ米国人のこと故余り六ヶ敷ことにハ非るべし。右書簡ハ今朝投与せしこと故返事ハ定めし四五月頃ならでハあるまじ

また田村は『福音新報』第一二号（一八九一年七月三一日）の「寄書」欄に、「自営館設立の趣意」と題する文章を寄せている。⁷⁾

自営館に暮らす学生は、野菜の栽培や牛乳配達などの労働をして生活費を稼ぎながら、明治学院に通った。幸三が自営館で暮らしたのは、一八九〇年一月から翌年の一八九一年一二月までであった。前述したように幸三は一八九一年の日記「三光日記」を残しており、自営館での生活についても記されている。同日記は、自営館の創設期にそこに暮らし明治学院に通った学生の記録として貴重であるが、この日記については、本資料集では取り上げないため、「三光日記」より自営館に関する記事の

一部を以下に紹介しておきたい。

日記には、自営館で一八九一年九月、牛乳配達を開始したことが記されている。

明治二四年八月二十九日

ホームにても愈々来月一日より牛乳配達を始るよしにて一昨日其牛屋の主人来り、余等に面会に
来りしが、余等十二社に行し留守なりし故余等に今日来る様話し置れたれば、余等午前九時頃よ
り右牛乳屋上田氏方に到り主人に面会し、又同家より警察に届る為己々の元籍を記しをき、少し
く配達の話等承り殆ど半時ばかりにして帰宿したり（後略）

九月一日

牛乳配達も愈々本日より初むることとなり石川君先づ番に当り、同氏は午前三時より起き同半頃
より上田に到り、それより田村氏近辺まで配達され帰宿せしハ午前七時頃なりし。（中略）今日
より森田両氏は毎朝夕牛乳を学校へ配達せしむることとなりたり、今日石川氏の配達せし量は八
合位なり。

同年一二月七日には、冬季のため牛乳の生産量が減少しているの、一合当りの単価を上げるよ
う、上田氏（牛乳屋）より要請があったことが記されている。

一二月七日

余等此週間は二時より起て乳取の番なりしに幸にも今朝は鬮にて免れたり、然し暗に交代なること故明日より余等も二時より行かざるを得ず、今朝は笹尾と吉村行れたり、明日は余と芝田なり、田村先生午後二時頃来る、かくて先生は上田氏を呼びよせ何やら相談せられしが、後様子承るに目下上田より当館に持来る牛乳は一合一錢三厘づゝの割合なりしが、当今追々気候も寒くなるに従ひ乳の出も悪しくなるに、飲手の多きよりは非此上に二厘増して一錢五厘に為し呉れよとの上田氏の請求なりしと、此事は前日より田村先生へ掛合れたるを今日当館にて談しられしなり、而して結局中間を取り一錢四厘にて受取る様定りたりとなん

一八九一年九月一日より始まった自営館での牛乳配達は、学生が配達先を間違えたり、価格の変動があつたりなどして、事業として維持していくのは難しかったようだ。また、牛乳配達の過酷さが問題になったのであろうか、自営館の主催者田村に自営館に住む学生三名（笹尾糸太郎・川田〔河田繁太郎〕、原田章吾）が意見をされた様子が記されている。⁽⁶⁾

一二月一日

（前略）

午後四時半頃より昨夜議決せし如く館員の内、笹尾・川田・原田・浜田・芝田・田島・石川・吉村及び余は一同田村先生方へ相談に行きたり、石川は目下築地方へ午後配達を務めつゝ居れば先

方より直に田村方へ行れたり、かくて余等田村方へ行きたれば先づ重なる諸般方をば川田と定て同氏より一応ホーム全員の意見とするところを延べ、決極如何とも今の牛乳配達は余等の出来得ぬことにて当底永續し難き由を上申し、然して外に今少し容易なる仕事はなきものにやと打談ずれば、田村氏は不意に出会ふて大に驚きたる様子にて……しばしは返答なかりしも稍々ありて答へらるゝには、諸君にして若し牛乳配達がとてもやりおふせざるやうなら如何とも他に方法なしと云れたり、それより田村氏は種々牛乳配達を為し通すに付ても其方法及び今後ホームにて仕事を為すことに付ての意見を延べられたり、氏の意見とする所を左に記す、

一、目下のところにては自営館の仕事としては牛乳配達に限ること、
一、若し此仕事に耐へ得ざる方々には是非共当館に居らねばならぬと云ふには非ずして随意に退館さるゝとも苦しくなし、

一、若し仕事の為め学科の障りとなる様のことある節は学校に掛合ふて四年にて卒業すべきものは五年或は六年にて卒業し得る様特約をなすべしと、

一、若し又学力或は何事にも牛乳配達を為して得らるゝ丈の利金一円七十銭なり二円なり位を他の仕事にて動き得しものをも牛乳配達人と同視し得べしと、又さなくてもクラスの上下及び体格の如何に由ては仕事を分業させ、或は労働の増減をもなすべし、而してクラスの上に来る程動き方を減すべしと（之はクラスの昇る程学科も多くもなり六ヶ敷もなるを以てなり）

先づ今夜余等に答へられし田村氏の意見は右四ヶ条に出でざりし、（中略）

余は浜田・吉村の両氏と少し諸氏に先達ちたるうちに笹尾等と別れて帰路につきたり、かくして余は里見氏を見舞かたぐ、此回の出来事に付相談せんものと思ひ両氏と別れたり、偕て里見君には不相変差したることもなければ昨日よりは幾分か快よき様なりと、而して余は今度の出来事を細々に打ち語り、万一不得止る節は一度は退館して帰国の途につかんと思ど如何と相談せしに氏も大に同感を表したり、然し此事たるなくゆゑしき大事なれば、又とくと勘考し全く退館して一先づ帰国するも御身の為如何なるものによ、若し得策とならば余よりも御父上へ精しく事情を延て一筆を□すべしとて諾されたり、かくて時刻も遅くなりたれば余は氏に重為を念じて退宿せしは十時頃にてありし、(後略)

一二月一二日

昨夜川田・笹尾・原田の諸氏の遅れしは最初余等の同家を退きし際、田村先生は余程怒られて居られたり、故を以て諸は先生を慰めん為に途中より引歸りて再び同家に到り、先生を慰めて帰りしなりと云ふ、其節又三氏は当館のことに付き如何にか相談せられしならんが知らず、如何に相談せられしにや、今日正午頃田村先生来り、余等と共に午飯を召されたり、かくして午後二時頃より又昨夜の談般^(ママ)を判然と定めんとて館員総集にて会議ありたり、其結局左の如く定まりぬ、

一、牛乳ヲ芝新掘町の長谷川より受て先方より有楽・築地等へ配達すること 原案者 田村先生
 一、館員は其時のクラスの上下に依て仕事を軽重にすること (但し四年生ハ極容易なる仕事にて、強壯の第一年生ハ極六ヶ敷仕事を為さしむる由なり、今の所にてハ四年生ハ林氏の手伝

と牛乳の得意先と書記及び牛乳代を取りに出る者に任すと、其次の三年・二年・一年と段下に至る程重くすること、右は来年の一月より実行するものなりと） 投案者 笹尾桑太郎氏
一、当館を蜂須賀庭^(マヤ)へ引移すこと、原案者 田村先生、
右は従来の自営館の主意として余等は賛成したり、然し笹尾・川田・原田の三氏は来る一月より実行する積に得々として定められたり、此三氏の今日議せらるゝ事及び三氏の主張する主義の一昨夜の議決及び彼時諸氏の主張せし説と月鼈の差あるは諸氏の為誠に氣の毒の心持と云ふべし、

一八九一年一二月、幸三は自営館を退館し、明治学院も退学することとなった。退館・退学の理由は、日記からは明らかすることができないが、幸三が進級できなかったことも一因であると思われる。

明治二四年九月二二日

(前略)

余前学期にて定期試験とも云ふべき試業の不合格にてありしより去る十九日其再試験に文法及び化学等を試験されしに、元より化学は本もなく何分にも思ふ様行ず、又文法は違[□]てはなからめと思ひの外是も又不足となりたり、されば学院の教授会にては余を昇級^(マヤ)さすべき至格^(マヤ)なきものと定め、杉森氏も余が^(ママ)余が^(ママ)最前当学院へ入学せし際も充分になく、只インタストリーホームに入らんが為無理に一年級に入学させしもの故、今一年二年級を繰返さしめん方然らんかと田村氏に相

談せしに、田村氏も然るべき方可ならんとの由杉森氏より余に通知ありたれば、余は如何せんと考めせず兼て覚悟し居り、又たとへ二年級を又一年繰返したればとてあまり不得策のことにもあらねばと思ふより、杉森氏の言るゝ通り明後日より二年級へ出席する積りなり

また幸三は、自営館を退館し明治学院を退学し松尾へ帰郷するにあたり、千葉の早川家で叔父と再会する。幸三は、その際の様子を一八九二年の日記（「松尾日記」C-2-2）に記しており、そこには牛乳配達などの作業が過酷であったことが記されている。自営館での労働も退館理由の一つであろうと思われる。

明治二五年一月七日

（前略）それより御叔父様には余が身の上のことども語り初め、余が将来のことに就ても種々勘考せられしよしにて、余に在京中の有様を問われ、余も在りのまゝに語りぬ。然して叔父様には余が今まで為し来りし仕事の酷なるに驚かれたり。（後略）

一八九一年一月一六日、幸三は田村と相談し、退館することとなった。その際、「毎月一円或は五十銭なりともを一ヶ月一円五十銭の割にて今迄の年限支払はれても苦うなし」と、毎月五〇銭を「弁償費」として自営館に支払うことを約束し、同月二九日、自営館を引き払った。経緯を「三光日記」より記しておきたい。

明治二四年一二月一五日

(前略) 午後六時頃より秋葉氏を問ひ、同氏も元々余が入館せし時の保証人にもあること故、今度の事件をば相談するは道理とこそ知りたれば、件の子細をうち語り同氏の意見を伺ひしに、同氏もさることなれば退館する方御身の為得策ならん、僕に於ては異論なしとて同意を表されたり、其節お勝様にも傍にて余の物語を打ち聞かれ大に驚きたる様子にて、さやうなる有様にて候やさそかし苦しからん、早速御退館なされよ、さるにても御身には誠に御氣の毒のことにこそと慰らるゝ、此身は有難覚へたり、又次て申さるゝには御身にして今学校を出なば何処へか行くにや、若し国元へでも行く様になりては誠に御氣の毒なれば、何処か東京にて宜しき所はあらぬものによ、若し秋葉にして今少し月給の多かりせば御身を助くべきも、今の所ではとても出来難しとなん云ひて余の為を想ひ給ふ御心の切なるには余も感涙にむせひたり、(後略)

一二月一六日

午前九時頃より田村氏方へ到り退館を請求せしに、田村氏もさほど驚きたる容子(様)もなく、初の程は今の仕事を為せばとて左程骨の折れることはあるましなどと少しく言張りしが、中頃よりは大に和ぎ又兼て余の有様をも注意し居られたるよしにて大に事情を察せられ、先づ退館を許されたり、然るに彼保証金は是非共払れたし、然らざれば御身も十分なる事情あるにもせよ此後の者の為にも相成るまじければ、何卒是丈は払れたし、只名義にても宜し(此意は払ずしも宜しとの様

なれど左のことには非ず) 只御身にして直に払ふことの難ければ毎月一円或は五十銭なりともを一ヶ月一円五十銭の割にて今迄の年限丈払れても苦うなし、余に於ては御身の出るを忌みて此金を求むるもなく、又ホームの入費を使せんと^の為にもなく、全く此後の者の為^に御身を只にて出す例を残すまじく願ふよりなりと明に道理をのべられ、又實際余のことを想ひ又ホームの後に残る人々の為等を想ひ、まさか御身に只許して後との人には御身より取りたりと語ることも出来ざれば、誠に氣の毒にはあれど如何にか父君や秋葉氏とも相談なされて毎月二十五銭なり五十銭なりにても御払ひ被下よと懇に^覚し給ふ御心の程の正しさに感じ、今は余も如何てが逆^{さま}ふべき、如何にかして払ふやうになすべしと云ふや、田村氏は左様になされよ、直に父上様にも相談致し来れよと言畢りぬ(後略)

退館後、幸三は一八九二年一月、一旦松尾に帰郷した。その年に記された「松尾日記」には、帰省中、幸三が自営館に自身の無事を知らせる便りを送ったこと(一月一日条、六月一三日条)や、自営館の仲間からも手紙が届いたことが記されている。六月二〇日、石川より送られたその手紙には、自営館では、牛乳配達だけではなく、洗濯も始めたことが記されている。

明治二五年六月二〇日

(前略) 今日石川・里見の両氏より手紙来り居りたり、又日本評論第四十三号も来たり。石川氏の手紙要領左の如書き付けありし。自営館も去ル二月より牛乳の外に亦西洋洗濯濯をも初めたり

と、又田村氏も此頃自営館の傍に健物^(マヤ)を為し移転されしと、然して吉村氏には去る四月退館されし由、又米国人チェーン氏なる者此度世界漫遊の節なりとて立寄られ、ホームへも来られ同氏は自営館員を写真に影させたりと、其時諸氏は皆思々の身なりにて写せし由、或者は飯を持ち或は牛乳管を携て採影^(マヤ)せし由、又笹尾・原田の両氏は今度学問の為渡米さるゝ由、同氏等は此チェーン氏と同行する由、又田村氏も伝道学校健築費暮集旁保養の為渡米さるゝ由、又同館今日の仕事ハ牛乳と洗濯にて浜田・柴田・石川等洗濯掛にて其外は皆牛乳掛なりと種々細々申越されたり。(後略)

そして幸三は、同年九月に上京、明治学院神学部^(マヤ)の入学試験を受け、不合格となった。同月二九日、幸三は自営館を訪れ、さらに一〇月三日、昨年末の退館時に約束した「弁償費」月五〇錢を、九月分より支払っている。同日の記事に「補助金弁償として」とあることから、「弁償費」は、篤志家から自営館に寄せられた寄附金のうち幸三が消費した金額を弁償するための費用であったと思われる。日記に記された「弁償費」支払いに到る経緯を上げておきたい。

明治二五年九月二二日

今日午前九時頃より神学校の入学試業はじまり十二時頃終りたるか、残念にも余か成績ハ定点に四点程の不足にて不合格とわなりたり、されど試業掛の井深・石本・植村の三氏ハ余を見込まれし処あるにや、余を後に残し余か不合格に付き失望せぬ様、又来年来れかし。今年一年損すると

想ふて今少し普通学を勉強せられんことをと念ぜられたり。因に記す、今日受験者(ママ)わ余と共に九名程にてありき、されど全く合格となりしハ僅に四名にてありし由、(後略)

九月二十六日

(前略) 国元親父より手紙来り、余が試業の不合格なりしを残念がりて来りしハ理りにて其書をかき居る時秋葉氏来り、氏も大に残念かりし由、何も彼も我学力不充なる故にありと思へば少しく面目なき事ながら、又是も神の恵としらば敢て□む可きに非る也、かくて親父は一先づ帰国致して又来年を待つの外なしと申越されぬ。(後略)

九月二十九日

今日午前十時頃より三光坂の自営館を伺ふに、前と変りたるハ前の本屋の南方へ継出を為し田村氏の寓居とせし居らるゝことと、其東南の畑中にかね形の平屋に伝道学校を造りつゝあることとぞある、又其外に人員の篠尾・原田・川田・吉村・森兄弟・林等ハ出で、伝道学校の人と普通学部へ行く四五人の替わりたることにぞある。(後略)

一〇月三日

(前略) かくて三時半頃にか三光坂上なる自営館へ着しぬ。兼て約束しおりたる補助金弁償として月々一円五十錢ツ、の割にて毎月五十錢(ママ)つゝを払込むこととなし、先九月分を本日五十錢正に

払ひぬ、併して請取書をも呉れられたり。(後略)

その後幸三はそのまま東京で暮らし、一八九三年九月、再度神学部を受験し合格、再び明治学院神学部に通学することになる。

(5) 明治学院神学部入学と学生生活

幸三の日記から分かる神学部入学前後と学生生活の様子について見ておきたい。

まず、幸三が明治学院に入学する一八九三(明治二六)年九月前後の居留先に着目してみると、一八九二年九月に一度神学部の試験に不合格となった幸三は、父親に「一先づ帰国致して又来年を待つの外なし」と言われるも、そのまま東京に残っていた。一八九三年の日記をたどると親戚宅を歩き来する様子も伺われるが、二月九日の記述によると、芝区役所からの通達で、「於寄留地徴兵応徴願済届」の提出に付き、秋葉氏の押印を必要とする旨が伝えられていることから、普段は芝区二本榎西町の秋葉省像宅⁹⁾に寄留していたことが知られる。ただし、四月二十九日、徴兵検査の達書を受け取る際、「近日波多野氏方へ移るやも不知」ことを幸三は役所に伝えており、実際五月六日に波多野家へ転居した。これは秋葉一家が信州高田へ伝道に向かい暫く留守にすることから生じた転居であった。波多野家の住所は氷川町一七番地。五月一日、幸三は芝区役所へ転居届を出している。

その後、幸三は六月一二日に松尾へ帰省し、三ヶ月を実家で過ごすが、明治学院神学部試験を受けるため九月一七日に再び上京。二一日に着京し、信州高田より帰京していた秋葉省像宅に寄宿。翌日

神学部試験を受け、二五日に試験に及第、二七日に入学した。二八日には神学部の寄宿舎（ハリス館と思われる）に一旦入るが、幸三の所属する神学部予科の中から誰か二人が普通学部の寄宿舎（ヘボン館）へ行かねばならず、幸三は自らそれを希望した。翌日二九日ヘボン館三階の西隅の部屋、二八番へと移った。この部屋は同室となるクラスメート矢島宇吉に任せて選んだという。こうして幸三の学生生活が始まったのである。

幸三が神学部予科に入学した一八九三年は、東京一致神学校、東京一致英和学校および英和予備校を合併して「明治学院」とし東京府から設置が認められ、キャンパスが築地から白金の地へ移されて六年ほど経た頃であり、総理には二年前の一八九一年に井深梶之助が就任していた。

のちに詩人や英文学者として名を馳せる島崎藤村・馬場勝弥（孤蝶）・戸川秋骨らは、既に一八九一年六月、幸三が神学部に入學する二年ほど前に卒業しているが、幸三は一八九〇年一月から翌年一二月まで明治学院普通学部在籍しており、明治学院で過ごした時期が藤村らと一年半ほど重なる。幸三は、一八九〇年七月五日から一五日にかけて明治学院講堂で開かれた第二回基督教夏期学校に参加しているが、「第二回夏期学校来会生姓名簿」⁽¹⁰⁾には島崎藤村の名前も見える。幸三は当時一八歳、藤村は当時一九歳、学年は違うがともに明治学院普通学部に通う青年であった。二人に接点があったかどうかは定かでないが、同時代を生きる同世代であったことに間違いなく、幸三の生きた環境や時代背景を考える上でも注意されよう。

次に、一八九三年九月の入学時の様子と授業内容について見ていきたい。

『福音新報』第一二七号および第一二九号（一八九三年八月一八日・九月一日）に、明治学院神学

部学生の募集広告が次のように掲載されている。

神学生募集

来ル九月廿二日入学試験執行ス入学志願者ハ同日迄ニ申込アルベシ

規則書入用ノ向ハ二銭郵券ヲ送ラルベシ

東京芝白金

八月 明治学院神学部

この年の入学志願者の一人であった幸三は、試験当日から入学までの様子を日記に書き記している。概略は次のようになる。

明治二六年九月二二日試験当日の天候は晴。幸三は八時半頃神学部に着。間もなく幸三を含む本科へ入学の者は二階へ、別科の者は一階へと移り、九時頃より試験が始まった。一科目目に漢文附点、二科目目に英文和訳、三科目目に文章の試験が執り行われ、一二時半頃にはすべての科目試験が終了した。幸三は秋葉省像宅へと帰り、試験内容について秋葉に語ったところ、秋葉は、漢文は支那の小説か何か、また英文は、フィッシャーの万国史と、何か心理学くらいのもの、作文は「武士道とキリスト教」と推測した。幸三自身の出来具合としては、英文と作文は「並にハ出来た」ようで、漢文は三科目の中で最も難しかったことを記している。合格の知らせは三日後の九月二五日、先に普通学部に入學していた里見純吉からの葉書によってもたらされた。幸三はその喜びを日記に「嗚呼、神

は余を今は棄てざりき」と書き残している。

こうして幸三は明治学院神学部予科に入学した。九月三〇日の日記によると、この年、神学部に入學した学生は、本科へ一五人、別科へは七人だったという。当時、明治学院神学部は大きく本科と別科に別れており、本科は一年生から三年生と予科生、別科は一・二年生で構成されていた。⁽¹⁾ 幸三が入學したのは本科内の予科で、同級生には、千磐武雄（出身地、以下同、福岡県）、池幸雄（高知県）、矢島宇吉（群馬県）、山野友一郎（青森県）、清水久次郎（長野県）、長山萬次（茨城県）、和田三郎（高知県）の七名がいた（口絵写真²）。

これらの新入生には「貸費」が支給されており、幸三の日記からは、神学部に入學した翌月一〇月からほぼ毎月「貸費」を受け取っている様子をうかがうことができる。⁽²⁾ この「貸費」について触れておきたい。『明治学院神学部一覽 明治二十八年十月改正』⁽³⁾ には次のように記されている。

貸費生

一 伝道志願者ニシテ入学試験ニ及第スト雖モ学資ニ乏シキ者ノ為ニハ詮議ノ上協力「ミツシヨ
ン」ニ於テ在学中学資ヲ貸与スルコトアルベシ

「貸費」とは、ミッションから支給されるいわゆる奨学金であり、日記の明治二六年一〇月二五日条によると、幸三たちが入学する前は六円の貸費が支給されていたが、幸三たち神学部予科の一年生だけは、総理である井深の提言により五円になったという。

表1 貸費支給状況一覧

支給日	支給者	金額
1893年(明治26年) 10月25日	(記載ナシ)	5円
11月20日	(記載ナシ)	5円
(12月14日貸費申込書類提出)		
12月20日	バラ	5円
1894年(明治27年) 1月20日	バラ	5円
2月20日	バラ	5円
3月22日	バラ	5円
4月20日	バラ	(記載ナシ)
5月18日	ワイコフ	5円
6月8日	ワイコフ	(記載ナシ)
7月24日	ワイコフ	5円
8月31日	ワイコフ	8円(9月分)
10月10日	ワイコフ	6円(10月分)
12月19日	ワイコフ	(記載ナシ、但し12月分)

日記の中では、「サポート」「サッポート」
とも記されているこの貸費の支給状況につい
てまとめると表1「貸費支給状況一覧」のよ
うになる(一八九四年八月分と十一月分の貸
費支給についての記述は見られない)。

一八九四年四月以前はバラから、それ以降
はワイコフから受け取っているが、これは彼
等が学院の会計を担っていたことによると思
われる(『明治学院普通学部一覧 明治二十
六年六月改正』(内容から明治二七年六月改
正の可能性もある)によるとバラは明治二七
年一月より、ワイコフは明治二六年一月より
会計をつとめている)。

日記に別紙として挟み込まれている幸三の
出費書付けによると、一ヶ月平均六円のほど
の出費があり、その大半を貸費で賄っていた
ことになる。自営館の館主田村直臣は、自営
館で暮らし働きながら通学する学生と幸三の

ような貸費生の暮らしの違いに思うところがあつたのであろう、明治二六年一月二四日条には、貸費生となつた幸三が自営館を訪れた際、田村から「君の方にては何も仕事はせなひの：うん甘るね：えー楽だねー、大層勉強が出来るだろーねー」、「自費ならそんな出来やすまひ、貸費の勢は非常なものだねー」と言われたことが記されている。

また、日記には当時の時間割についての記述も見られる。一八九三年九月二六日には授業の時間割が新入生に伝えられており、幸三は控えとして日記に記している（「口絵写真1-2」）。その内容をまとめたものが表2「一八九三（明治二六）年神学部予科時間割」である。月・水・金曜日は四限授業、火曜日は二限授業、金曜日は三限授業で、土日休みの週休二日制であつた。各授業時間は、大西祝の心理学が一時間五〇分、美濃部俊吉の経済学が四〇分、それ以外は一時間となつている。三限終了後には一五分間のチャペルアワーが毎日設けられていた。

そのほか日記には、一八九四年六月二〇日に発生した明治東京地震についての記述がある。幸三は、あまりの揺れの激しさにへボン館の自室から飛び降りたという。日記には、幸三は飛び降りながら、神学部校舎兼図書館（現在の明治学院記念館）と普通学部校舎（サンダム館、一九一四（大正三）年焼失）の屋根部分が崩壊したことを目撃したこと、学院が写真屋に依頼し崩壊箇所の撮影をさせたことが記されている。残念ながらその際に撮影された写真は見つからないが、学院が崩壊部分写真屋に撮影させたことは、今まで知られていない。

また、同年一月二日には、明治学院の秋季運動会が王子村（現在の東京都北区王子）で開催され、様々な競技が行われたことが記されている。これらは、当時の学院のカリキュラムや学生の生活

表 2 1893 (明治26) 年神学部予科時間割

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
1限目	English B (英学)	English B (英学)	English B (英学)	English B (英学)	English B (英学)
担当	柏井園	柏井園	柏井園	柏井園	柏井園
(時間)	9:00-10:00	9:00-10:00	9:00-10:00	9:00-10:00	9:00-10:00
2限目	History B (万国史)		History B (万国史)	Psychology C (心理学)	History B (万国史)
担当	柏井園		柏井園	大西祝	柏井園
(時間)	10:00-11:00		10:00-11:00	10:00-11:50	10:00-11:00
3限目	Moral Science A (倫理学)	PEconomy (経済学)	Moral Science A (倫理学)	PEconomy (経済学)	Conversation (会話)
担当	井深梶之助	美濃部俊吉	井深梶之助	美濃部俊吉	ワイコフ
(時間)	11:00-12:00	11:50-12:30	11:00-12:00	11:50-12:30	(原本に記述ナシ)
	Chapel C	Chapel C	Chapel C	Chapel C	Chapel C
	1:00-1:15	1:00-1:15	1:00-1:15	1:00-1:15	1:00-1:15
4限目	Gospel History B (福音史)		Gospel History B (福音史)		Gospel History B (福音史)
担当	ラソデイス		ラソデイス		ラソデイス
(時間)	2:15-3:15		2:15-3:15		2:15-3:15

を知ることのできる貴重な記録である。

幸三が明治学院神学部に入学したところ、時代は大きく変わり始めていた。一八八九年二月一日、大日本帝国憲法が發布された。また日本政府が明治初頭から取り組んでいた不平等条約の条約改正交渉の結果、一八九四年七月、最初の改正条約である日英通商航海条約が締結され、この条約締結を期に日本は日清戦争開戦へと向かうこととなった。

一方大日本帝国憲法制定の翌年、一八九〇年一〇月には、教育イデオロギーの統一を図るため「教育ニ関スル勅語」（教育勅語）が發布された。一八九一年の一月には、教育勅語に対する抗議行動の一つである内村鑑三不敬事件が起き、社会問題化した。さらに東京帝国大学教授の井上哲次郎が『教育ト宗教ノ衝突』¹⁴を著し、キリスト教信仰が近代天皇制の国家理念と相容れない反国家性を持つと非難したことで、キリスト教への反発は一層強くなった。一方教会内部でも、正統派神学を批判するユニテリアンの宣教師ナツプやマコーレーらの「新神学」思想が盛んになり、混乱や対立が生じ始めていた。

山田幸三の日記は、そのような時代のなかで記された。

註

(1) 小倉は、明治学院神学部の二年先輩にあたる小倉鋭喜で、小倉家はその親族の家。

(2) 「菁莪義塾塾則の要綱」（一八八六年一月、安井家丈太郎家文書スー23―18）『山武市郷土史料集一〇

旧成東地区近現代編 中』（山武市教育委員会編刊、二〇〇八年）。なお『山武市郷土史料集二五 山武市松尾町広根北田定男家文書調査報告書（二）史料編《付録》松尾地区目録（追加）』（前掲書）には、「菁莪義塾規則」（東金市北之幸谷 小川家文書）も紹介されている。

（3）明治学院歴史資料館所蔵、紙焼資料（KY一四二）

（4）「九十九里教会献堂並に演説の景況」（『基督教新聞』第二三〇号、一八八七年二月二一日）による。

（5）田村直臣（たむら なおおみ 一八五八―一九三四）は牧師。一八七三（明治六）年、築地大学校に進学し受洗した。東京一致神学校に編入し、一八七九年に卒業、フルベッキにより按手礼を領し、銀座教会牧師となった。アメリカに留学後、銀座教会が改称した数寄屋橋教会に着任、同教会が巣鴨に移転し巣鴨教会と改称して以後も、生涯同教会の牧師を務めた。『日本の花嫁』事件（註26―75参照）で、日本基督教教会教職を免ぜられたが、伝道者養成のための日本伝道学校の設立、自営館の設立の運営、日曜学校協会への尽力など、様々な分野で活躍した。

（6）『田村直臣の基督教教育論』（小見のぞみ著、教文館、二〇一八年）。なお自営館については、『明治学院百年史』（明治学院編刊、一九七七年）など参照。

（7）田村が『福音新報』第二〇号（一八九一年七月三一日）の「寄書」欄に寄せた「自営館設立の趣意」と題する文章については、『明治学院百年史資料集 第三集』（明治学院百年史委員会〔編刊〕、一九七六年）六―八頁参照。

（8）『明治学院同窓会会員名簿』（明治学院同窓会編、一九八四年）によると、笹尾条太郎・川田（河田）繁太郎・原田章吾は、三名とも一八九二年に普通学部を卒業し、河田は神学部に移行し一八九五年に同

学部を卒業している。幸三の日記からこの三名が自営館に住む学生の中心的な役割を果たしていたことがうかがえる。

(9) 『明治学院百年史資料集 第一集』(明治学院百年史委員会〔編刊〕、一九七五年) 二〇五頁参照。

(10) 『明治学院歴史資料館資料集 第四集―『精神的基督教』―』(明治学院歴史資料館〔編刊〕、二〇〇七年) 所収。

(11) 『明治学院神学部一覽 明治二十八年十月改正』(明治学院〔編刊〕、(一八九五年)) による。

(12) 貸費については、『福音週報』第四七号(一八九一年一月三〇日)に「神学校における貸費制廃止論」なども見える。

(13) 註(11) 参照。

(14) 井上哲次郎(一八五六―一九四四)は、明治時代の哲学者。欧米哲学を多く日本に紹介し、帝国大学で日本人初の哲学の教授となった。一八九一年一月に起こった「内村鑑三不敬事件」を機に、井上は『教育ト宗教ノ衝突』(敬業社、一八九三年)を記し、キリスト教批判の論陣を張った。

二榎日記

東雲生記〔印〕「山田蔵書」

明治二十六年

神武天皇即位紀元二千五百五十三年

耶蘇基督降世紀元一千八百九十三年

一月

元日 晴天 安息日 四方拝

〔欄外〕「四方拝／地方へ年賀状ヲ出ス」

午前六時起床、同七時雑煮を食し目出度昨夜を以て昨年を送りぬるこそ神の御恵と感謝の外なけれ、午前十時より台町教会(26-1)に到り石原氏の説教を聞き、且又晚餐式もありき、授洗者女一人あり、十一時頃帰宅、午後一時半頃より蒿履掛にて波多野・草間を年賀し関谷(26-2)へ着せしハ午後四時頃なりき、今朝国元山田・若林・里見・須貝へ同封にて年賀状を差出し又はがきにて在原・早川・九十九里教会へ年賀を出しぬ。今宵関谷へ宿す

二日 晴天

〔欄外〕「北田彦三郎(26-3)氏ニ会ス／歌骨牌(26-4)／(敬掛)□会」

午後北風吹き暴れたり、午前十一時頃より出発、牛込なる大森を年賀し、それより伊藤氏方に到り北田氏を訪るに、佐瀬氏のみ居りて北田氏不在にて、直に本郷駒込なる渡辺方へ到り、一寸年賀し、土足なるよしして昇座を辞して、少し先なる太田様に年賀し、帰関谷せしハ午後四時頃な

明治二十六年一月

明治二十六年一月

りき、是より先き渡辺より帰路に、大学の前程にて洋服着の一書生余が名を呼びて行き過りしを再び戻り来りしに余も誰やらんと顧みると、堵端（おぼ）に北田氏と心付き「ヤ是ハ」との掛声の返答にて談話の端開けり、今村氏の寓を見舞し由打語り、一寸立話にも里見君が事までと来りしが何れ後日余より訪ふ由して別れにき、時に塵風呼吸を止めもやせんはかりにてありき。当時浅見倫太郎氏なる者関谷に來り居り、昨日上州前橋へ出立らるゝこととて友人三人程來り、荷纏りなぞして、午後十時過まで居られき。若者の寄り合ふたればとて歌かるたを一二度遊ひにき。今宵は第一月曜日なれば、今夜より初週祈祷会始り、今宵は「謙遜及び感謝」の主意なり、但し余（マユ）で教会へは出ざりし、

三日 晴天

〔欄外〕「元始祭／波多野ノ歌骨牌」

午前ノ十時頃より福島・出口・田中の諸家に年賀し、午後二時半頃波多野へ着きぬ、時に承五郎様も稽古様も御在宅にて出口氏も居られき、さる程に出口氏は四時少し前退かれ、同家御一家て四時頃より上野のパノラマとやらを御見物に行かれ、午後八時頃御帰宅ありたれ、それより食後九時頃より歌骨牌会あり、午後十一時頃まで遊びたり、余思の外拙工なりしハ口惜かりし。臥床は十二時過にてなりき。出口氏は不相変肺病未だ全快ならず困まり居る由。今宵祈の主意は「公同教会」となり、

四日 晴天

余午前七時頃起床九時頃より出発、十時頃関谷へ着きぬ。今日は消防夫の出初め式なり、十一時

過る頃同署一隊の人足等、恰も戦地より帰陣せしが如き勢ひにて戻り来り、一寸役所前にて二三人の梯子乗りありき。それより十二時少し過る頃、兼て要意（用）し置きたれば、役処の者七人程に茂草の蒸気掛りの人なりと云ふ染川なる者と都合八人程の来客あり、酒酣なるの頃、樋口おたつ様御良人と御出遊され、又それより少し前、波多野よりおさく様・峰子様御出一時に大勢となりたり、其うちに染川なる者おたつ様の来りしと知り、花婦花郎出づべしとて、茶の間に誘に来るやら大騒となりき、かくて来客の半分は四時頃帰られたり、それより関谷にて、よひ臥して前後を失ひて臥床に入りき、それより間もなく関谷と同役なる丸山なる者、年賀に来り、殆ど一時間も飲酒されて退かれたり。其際関谷を起せしもあまりゑひ過ぎしにや不起、（や）後後に到り丸山氏来りたりと聞て驚き。さても酒の害は今日初て知りしよと悔やまれしも銚なかりき。かくて午後五時頃より歌骨牌を初め午後八時頃まで遊び樋口様御歸りに付き閉ぢたり。今宵は関谷へ宿す。今宵祈の主意は「国民及び執政者」なり

五日 晴天

〔欄外〕「小かん／ウエスト姉来ル」

午後風起り塵風口を閉したり。余午後三時過ぎ半頃出発二本榎へ歸りしハ午後五時少し前なりし。時に青木澄十郎（26-6）氏来り居り。しるこの馳走あり、秋葉氏（26-7）と青木氏は台町教会の祈会に行き、余は所疲を以て見合せぬ。在原・石川の両氏より年賀のはがき来り居りぬ。前年帰国されたるウエスト姉は又／＼今日を以て来朝され従前の通り聖書学館（26-8）の教師たるよし。今宵祈会の主意は「外国伝道」と云ふにあり、今日より小かんなり

六日 晴天

〔欄外〕「年賀状ヲ出ス／年賀畢ル／台町教会ニ於ル初週ノ祈会ニテ大ニ益ス」

午前吉村・石川の両氏へ年賀のはがきを出し、九時頃より自宮館・加藤・佐藤・小倉等に年賀したり。昨日も来りと云ふ大西おやうなる人來り、午食後歸られたり、昨夜里見叔父(26)より秋葉氏へ送られたる書簡に、今度松尾にては、旧知事公より小学校健設費(26)として金六百円程を下賜さるゝに付き、其外に諸先輩より二百位を寄付させ高等小学校を設くるの挙ありと云ふ、又同叔父は来る五月を以て村長満期にて辭職すべしとなん。秋葉氏は午後六時頃より芝教会(26)へ祈会に行かる、余も六時半頃より台町教会に到り午後八時半頃(26)歸宅す、秋葉氏は十時頃歸らる。今宵の祈の主意は「内国伝道及び猶太人に付て」と云ふにありて、余が行きたる頃は石原氏の司会にて、同氏の励めのまさに終らんとする処にてありしが間もなく小倉の励めあり、即ち教会振否の別は會員諸氏の熱心一にありと云ふに附て、祈と行の一致することの大切なる事、及び信者各が今年中に一名又は是非共誘引すと云ふことを決心せられよと云ひ、青木氏は又此と同意にありしとて大に感涙に咽せばれて励と祈を為され、其外にて佐藤・石本・瀬川・三好・川田等の感話及び励め等あり、常設より十五分後れて閉会せしハ八時十五分頃にてありき、又石原氏は最後一語告らく今宵の祈会は非常に有益なりしよと云ふハ諸氏の働なり、祈に責任を帯びて居りし故なりと、実に然るべき理なるべし、又余も非常に感働(動)しぬ、是即ち諸氏の熱心なりし為もあるならんが、最も力ありしハ、今宵の祈の主意の誠に大切なることにて、余も昨年より考へ居りし程に、今日も十分仕度を為し行きたる勢ならんと思惟す、就ても祈会に先ち其仕度を為す事の大切なことを輕驗(經)

したり。是即ち神の御精霊の御感化を賜りたるに依ることと信ず。今日純吉氏より年賀来りし。余思ふ処あり今年は聖書の友を脱す。

七日 晴天

〔欄外〕「□□□波多野家歌骨牌会／海軍省英文写字ノ事」

午前九時頃波多野より益太郎氏来り、承五郎様余が為に海軍省へ写字生に周施すべしとのこと故、直に見本を以て益太郎氏と同道彼方へ参上せしに、何か著述物を写すことにて、日当金四十銭なりと、承五郎様は余が見本を以て十二時頃社へ御出掛となりぬ。十一時半頃同家の御伯母様青山の観兵式より御帰宅遊す、余は午食を馳走になり一時頃より関谷に到同叔父とも相談し、それより二時半過ぎに同家を退き、お茶の水橋より朝野新聞社まで五銭の車に乗りしも余り遅かりければ途中にて下車しやりたり、但し賃は定の通り遣りき。かくて新聞社へ行きしも承五郎様留守中にて、一寸豊田氏の宅に到休息せんとせしに、波多野の伯母様御出の処にて、暫時談話し、一時間も過て再び新聞社に到るに、余が到りてより五分も後れて御帰社あり、余は直に応接所に到り、関谷の異存なき由を述べしに、承五郎様ハ関谷が父に更りて承諾せんことを望みしが如くありし、されど関谷ハ余が心一なりと云ふより、尚父上に相談すべしとて別る、但し余が見本は先方へ届け、又候補者とハ頼み置く故、若し国元より異存の申込あらば早速報知し送れとの事にてありき。それより豊田氏の宅より伯母様同道又波多野へ来り、関谷叔母も力を携て来り、又里見およし様も年賀に来り居り八時頃より十二時頃まで歌骨牌あり、なか／＼盛大なりき、今宵は波多野に宿す。今宵祈会の主意は「家族及び学校」にてありき。

明治二六年一月

八日 晴天 安息日

余午前六時頃起床、直に出発、帰宅せしハ七時頃なりき。波多野にては誰も知らざりき。又秋葉様にてもまだ休み居りき。午前台町教会に到り、瀬川氏の説教あり、又執事の按手札ありき、今朝国元父上へ手紙出しぬ、写生字事件に就てなり。昨夜渡辺嘉夫氏より年賀状来り居き。又国元より日本評論送り来り居き。今夜七時頃地震入りぬ、今夜台町教会に青年共励会建設の相談会ありし由。

九日 晴天

〔欄外〕「小倉君主トナリテ遊戯会開カル」

午前八時頃より小倉君の宿に到り、写生字事件に付て相談する所ありしに、同氏の意ハ余にして秋葉氏方に在留することを余り心の毒に感ずるの心なら此三月までにて済めばよし、又来年まで神学校入学をのばすも不得止なるべしとなん言れき。十時頃帰宅す、諸処学校今日より初る、午後六時頃か川田来り、小倉よりの頼言にて今夜小倉氏寓にて遊ぶとの事にて直に同道、到れば松原・島田の両氏居り、五人にてランプを遊び居る間、佐藤来り、それより歌骨牌など初まり午後十二時頃まで遊びき、但し遊戯の相間に茶菓の馳走あり、又勝負により賞与の菓子等もあり、皆胸襟を開て時候相応なる遊をなしたりき、余今宵より読史余論を読む。

十日 雨天

〔欄外〕「初雨」

今年となりて雨降ること今日を初とす、又去年十一月廿四日雨降り、時に余英文を取りに三田な

る磯野氏の寓に到りしが、其後全く雨天とは今日ぞ初めなる、此間四十六日、
十一日 晴天

〔欄外〕「柳沢君来京ス／台町ノ教会水曜祈会ニテ大ニ学ブ／九十九里教会ノ教勢」

朝飯の時おせい様吐き気を催したれば直に臥床さす、是より少し前、余おせい様の常に変りて大人似しきをほむるにぞ、お勝様ハ直に、さるにやせいは何時も大人似しき事、二日なれば其後は病付き故心配なりと、まだ口の閉ちぬうちに疾なりと啼き出されしなり、聞けば起床の際より心地悪かりしも我慢し居りしなりと、直にブドー酒を飲せき。又午食の時半膳も食されしと、思ふ程にまた吐気を催し、今度は食机の傍へ吐出されたり、それより直に臥床着かせ、余サントニネを買ひ来り、是を服用さす、午後大に快方なりとて、牛肉にて夕飯を喫せらる。午後五時頃にか柳沢直治君²⁶来り、彼地教会の模様先づ好景気なりと、又水深の善右衛門氏外は少しく事件出来、入獄し居る由、目下予審中なりと。親父より施せられしとて金壺円を渡さる、同氏今夜用事ありとて六時頃帰らる、同時に秋葉氏も芝教会へ祈会に行る、柳沢直治氏出京の由は、同氏類中の者疾気なりとて、其外にも何かあるならん、二週間程居らる由。余七時頃より台町教会の祈会に行き、九時少し前帰宅す、今宵会する者三十人程にて、石原氏の司会にて開かれ、同氏の励は「祈と実行」と云ふ意にて、それより目下在留の瀬川氏の励ありしが、丁度余が此儀本考中の家族及び親族伝道の大切なることを説かれしにて、余の考と暗合せし故、そゝろに面白又一層余が考を堅固にされたり。其外にも熱心なる祈あり、時間の不足を感じて閉会せしハ午後八時三十分頃なりき。九十九里教会にても求道者三四名あり、其内一家族の人道を望む者ある由。

十二日 曇天

〔欄外〕「初雪」

午前九時頃より波多野に到り、昨夜父より報答し送りたる余が写字生事件に就て承諾せし由を聞へ上げ、金壹円を先日拝借せし金四十五銭の代に預け、未だ海軍省よりハ何とも返事（朝野新聞社員へ来ることなん）不來由と承り、直に退き歸路小倉君を一寸訪ひ、直に帰宅せしハ十二時頃なりき。午後和田氏秋葉氏へ年賀に來りき、午後秋葉氏と入湯す。秋葉の教る時間当期より変革ありたる為、午前二時間午後二時間となりたる由、

十三日 曇天

〔欄外〕「徴兵適齡書ヲ出ス／良一千葉ニ行ル」

午前六時半頃より雨林降り、其うちに雪となり十時頃まで降りしきりたり。国元親父より余が徴兵応驗事件に就て相談し來り、余は当地にて受験したき旨返答し送りぬ、良一は先日古和の眞壁栄氏と同道千葉早川へ遊に行れし由、又余が適齡届ハ來る十五六日までに彼地役所まで差出すなりと。今日足袋を（マヤ）續ぐ。

十四日 晴天

今日より再び岡氏の文学学講義を読み初む。読史余論読み畢りぬ。午後単衣を洗濯す。

十五日 晴天 安息日

〔欄外〕「二宿娘ノ舞踏」

午前おせい様を携れて台町教会に到り、午後一時頃より波多野へ行き同家に二時間程費し、それ

より日本橋区の齋藤三吉氏の店に到り、余がいろは字引を注文し、それより里見氏の宿に着せし
ハ午後五時半頃にてありき、同氏には目下□貝家列伝を纂訳せんとして仕度し居るよしにて、余は
折焼芝の記を貸しぬ。(今巻) 同宿にて夕食を食し、種々文談を為し居る中、下より遊に来とのことは当
家の娘兩人十七八なるが、今宵は彼女等の師なる老母来りとして舞踏を為す由にて、余等に見物を
進め来り、行けば極俗なるがおしん伝兵衛と云ふ段を為されしが、可なりの出来なりし、かくて
当宿を九時頃出で関谷へ着せし八十時頃なりき、是より先き今日午前より大に登せ気なる具合な
りしがはれするかな、波多野より出立せしより間もなく齒に痛みを感じ、里見氏が宿に来りても
まだ止まず、関谷に来りて最も烈しくなり、為に宝丹なぞ叔母の所持せし齒薬を包み、臥床後
十二時過に至るまで痛みき。今日波多野にて四十五錢のつり金五十五錢受取る。

十六日 晴天

〔欄外〕「藪入ニテ理吉ト関谷ニテ会ス／渡辺ヲ訖問ス」(マヤ)

今日は俗に藪入りとて市中の店の子僧及びおさん女に到るまで皆な暇を出さるゝ由にて市中の賑
ひ一層なり、されば弟理吉が事も余が洗身の際早や一人の弱年の小僧と共に来り、余が洗身最早
終らんとする時、彼は再び何処へか行かんとする故、何処にと問へば芝居へ行ばやと答るにぞ止
め得出来ず許しけるにて、余はそれより聖書を朗読し、何ともなく午頃となり、食後二時頃より
駒込なる渡辺へ行きしに、(嘉カ) 義夫氏はまだ下校されず、あべかわなぞ馳走になり、老母と叔母様と
にて種々談話に時を過す程に、三時少し過る頃、嘉夫氏帰宅され、御婦人方は奥へ御下り、何か
余がために支度なすものゝ如くありし、余と嘉夫氏の談話は単に学事修業上の事のみにて、多聞

明治二十六年一月

には同家の行衛ども尋ね合ふ等にてありき。余午食(夕)にすしを馳走になり、午後六時頃帰路に就きぬ、関谷へ帰りしハ七時頃なりしが、間もなく理吉再び来り、其遅かりし訳を問ふに、彼は春木座の芝居に入り得ず直に浅草辺へ遊に行きしなりと、余も種々問ふこと等あり語る事あり、九時頃にか彼は帰途に就れき、今日聞けば理吉を世話せし京橋区の井戸谷権三なる老人は去る秋十月頃死去されし由。関谷よりハ理吉に白砂糖一袋を持たして遣られき。今日本郷にておせい様の為積木の玩具を二十五錢にて求む、

十七日 晴天

〔欄外〕「海軍省ノ写字事件水泡トナル／おせい子ニ玩具ヲ呈ス」

余九時頃より発足、齊藤へ寄りし、又々留守なりき。かくて波多野へ着せしハ十時半頃にて承五郎様正に御出社の際にてありき、而して余が為の事件、元来北川氏の世話なりし由なりしも、同氏の子とやら急病にて其上遅れたる為、海軍省にては参謀本部より雇ひ入れたる由、而し余が見本は送りあれば後日採用もとむるも知れずとなん、かくて今の処では彼参謀本部より来りしを言張ることも出来ず、余が事水泡となりぬ、今日承五郎様は余に向て耶蘇教の話を為す者を呼び度ければ周旋し呉れよとのことなりき。帰路三田の勸工場⁽²⁶⁾にて西洋将義⁽¹⁶⁾を八錢にて求め是又おせい様に与ふ。帰榎せしハ午後一時頃にてありき、三田にて秋葉氏の為め女学雑誌を求め来ぬ。昨日来厳寒身を凍らす、秋葉様へ金二十錢貸す、入湯す。

十八日 晴天

〔欄外〕「^(破)十五年十二月朔日」

今日旧にて十二月朔日に当る。寒気昨日に一層なり。秋葉氏は午後五時頃より芝教会へ行かれ十時頃帰られき、

十九日 晴天

寒気骨髓にしむ。余又今朝より前齒弛らぐ。今日までに旧約書利未記を読み畢んぬ。又英文典の覆習を初む (*Sill's Lessons of English.*)

二十日 晴天

〔欄外〕「大かん」

今日より民数記略を読み初む。午後五時頃一寸小倉君を見舞ひ間もなく帰宅。又八時頃稲葉・谷口の両氏来り十時頃まで話されき。彼等にしる粉を馳走せり。

二十一日 晴天

〔欄外〕「初弓」

小倉君の依頼に応じ午前九時頃より氏が寓宿に到り、氏の為め訳文の写を為し、午食も夕食も馳走になり帰宅せしハ午後十時頃なりき。三時頃佐藤氏来り、氏が先日余の矢を持行れしことありしが、今日其代として白羽の矢四本持来られしこそ気の毒なれ。余は不敢取小倉君の処へ置きぬ。小倉君ハ今ママ在学中如斯内職様のことなぞせらるゝハ、同氏の家族国にあり、氏も彼方へ送金でもさるゝ故なるべきやに語られき、但し此事ハ秘密を要するよし、されば余が氏に対し助けん心も一層切とならざるを得ざるは理りなり。氏の今の寓宿に在らるゝも一つハよしなき学友をさけん為なりと胸襟を開かれて語られたり、氏の親友に対する天真・潔白・裕愛ママなる如斯。今日

午頃と夕頃と弓を試みき、但し今年になりて初てなり、是を初弓とは云ふべし。今日ほくば下駄を十八錢にて求む。但し秋葉夫に良君と共に買ひ来られしなり。今宵就寝午後十一時。昨日大寒なる。

二十二日 晴天 安息日

〔欄外〕「浅草西鳥越ノ出火」

寒風烈し。午前ハお勝様台町数会へ御出に付き留守居す、午後一時より数寄屋橋教会(26)に到り和田氏の説教を聞き、其まさに終らんとする頃鐘声しきりなり。出で見れば何処ともわからざりしが直に人の伝ふを聞くに浅草鳥越辺なりと云ふ、されば福島は向柳原なるも鳥越接近にて特に風下なるらん、いざ行さるを得ずと直に大通へ出て鉄道馬車を見るに、矢張余の如き者先驅し居り、余の分なかりしより足早に駈け出すに、先方に空車を曳きて急く人力あり、彼は火元近き者見へ余が命ずるや直に応じ、手前も御客様でもなくバナカ／＼急かれず、いざ乗り玉へ代金何らでもと云ふより余は四錢と約して向柳原まで乗り着けしハ三時半頃なりし、かくて福島へ行けば最早荷物は悉皆土蔵へ入れまさに封ぜんとせりき、時に火勢少しく衰へたりと雖も風烈しく殊に正下の風故とても助かるべふなかりしも、幸にも鳥越神社の森の為め又水便のよかりし為五時頃鎮火せり、全焼二百個程ありしと、かくて福島でも今宵は夜具のみ出し、其他は皆明日取整る積なりとて、余はむすびニツ程馳走になり、午後七時頃帰路に就き、直に焼跡は実見し、其時まだ火の風の為め飛されて衣服なぞへ就きる様に驚ひて、一向に関谷まで帰りしハ八時頃にてありし。

二十三日 晴天

〔欄外〕「衆議院議會ノ休会及ビ停会」

寒氣甚し、午前先日国元より関谷へ頼みたる染物を取りに行きしに、今正午頃ならでは出来ざる由にて空しく相待ち、正午再び到て受取り、代金二反にて壱円三拾錢払ひ、午後一時頃関谷を出発、小川町五十番地の米山なる柳沢氏の寓宿に到るや同氏不在にて、同宿に頼み置き、それより京橋区の齋藤氏方に一寸立寄り帰宅せしハ午後六時頃なりし、時に水田氏来り居りき。是より前通り尾張町にて墨十錢に□書三錢にて求めき。午後六時半頃より小倉君の寓に行き、写物を手助せんとせしに同氏最早自身にて為し得る由にて、餅など馳走になりて帰宅せしハ九時頃なりき、今宵佐藤氏より呉れたる矢四本持ち来る。帝國議會去る十八日より予算案に就き政府と議の叶ハさるより五日間休会となり居り、又々今日より開会となりしも尚ほ治まらざるにや、今日は天皇陛下より勅詞にて衆議院議會を本より来月六日まで停会すとの命下りたり。

二十四日 晴天

午後国元へはかきを出しぬ、築地の一二三売来り、童子を八錢にて求む、寒氣骨髓に徹し日中尚ほ寒を覚へき、明日は雪ふらんすらめと思わる、

二十五日 雪天

〔欄外〕「雪降り」

案の如く今朝八時頃より積り出し一日降り続きぬ、但し七時半頃より降出せしなり。今日の雪積る二三寸、午後四時半頃止みぬ。余午後五時頃より小倉君の寓に到り、七時十五分前より台町教

会へ同行し帰宅せしハ八時少し過ぎなりき。今宵は川田君の主会にて、会集は少かりしもかなり温かなりし。秋葉氏も五時頃より出て九時半頃帰られたり。

二十五日^(六分) 晴天

〔欄外〕「□恙の事」^(敬語)

午前六時半頃起床、例の如く居間の掃除を畢へ水飯に掛り正に終らんとする頃、不図心臓悪しくなりたり、こは余り寒さの烈しき為なり、かくて顔を洗わんせしに非常に痺れ面部は少しく温かなりしも手足は氷の如くなりし、あまりの勘へ難たきに面部を洗ひしに台所に入るに、おかつ様には最早御起にてありけるが、余は直に板の間に腰打かけると同時に前後を失し、自身をも忘却せん有様なり、初て心付て秋葉様に頭部を水にて冷し呉れよと言ひつゝ倒れたりしハ時に同姉は大に驚き、秋葉氏を起したるに同氏も大に驚き、直に余が机より宝丹を持来り余が口に入れ、それより板の間にては好ぬらじにとて直に秋葉氏の床にぞ入りたりける、さる程にこたつなぞ入れ呉れる中に半時間も過ぎ、朝飯も出来たる頃元の如くなりぬ、秋葉氏は脳貧血なりと言ひき、或は然らん。昨日聖書学館にてはウエスト姉の歓迎会ありし様子にて秋葉氏一同行れき。

二十七日 晴天

午後より南風起り一昨日の雪たちまち消ゆ。植村先生^(26|18)をはじめナックス氏^(26|19)・巖本^(26|20)の両氏も昨日とやら帰都せりと、高知よりなり、

二十八日 曇天

午前小倉君の寓に到り英文の不審を聞き、午後七時頃より秋葉氏と三田に行き、余は啓紙六占^(帖)を

十二錢にて求めぬ、お勝様ハ午前十一時半頃より和田氏方へ倅の学校の婦人某と出かけられ、午後五時過ぎ頃帰られき。

二十九日 雪天 安息日

〔欄外〕「大雪」

午前六時頃より雪降り、午後七時頃止み、旧曆十二月の十二日の明月の映づる様言わん方なかりき。偕て余は午前九時頃よりシャツ二枚に単衣と綿入に羽織（綿入）と下にはさるまたと股引を佩き、雪降りなればとて粗末なる足袋を穿ち、北風にて吹付らる雪を忍びて小川町へ着せしハ十時半時なりし、直に柳沢君の寓宿へ行くに、同氏は二三日前埼玉県の方へ行れたりと言ふなり、秋葉氏より蓮沼へ送る毛糸細工と余が手紙を同氏帰宿次第渡さるゝ様頼み置きぬ。それより里見氏の寓に到り午飯を馳走になり、午後一時頃再び南方京橋なる斎藤に転足し、同家にて余が兼て注文し置きたる漢英いろは辞典を受取りぬ、製本代三十錢と云へば悉皆で壱円五十錢の品となりたり。それより数寄屋橋教会へ来りしハ二時頃にて、帰途に就きしハ三時過頃にて雪降極盛なりしが、鳩居堂にて細書を求めて、三田にて美濃紙の罫紙を五錢六厘にて求め、帰宿せしハ五時半頃にてありき。今日教会に集る者三十人、積雪七寸也、

三十日 晴天 孝明天皇祭

〔欄外〕「孝明天皇祭」

雪解の寒さとして骨髓に染み込むこと非常なり。

明治二十六年二月

三十一日 晴天

出金額合計金壹円十三錢五厘

二月

一日 晴天

午後四時頃より品川に到り、先頃より朝□りたる余が分として金十八錢、秋葉様御内方の分として八十九錢の薬料を払ひたり、

二日 晴天

〔欄外〕「せつぶん／初午」

今日は旧の十二月十六日にてせつぶんなり、又初午なり、昨日余が薬料ハウがひ薬一びんに頓服料二包の代なり。

三日 晴天

午後五時頃より小倉の寓に到り同道、同氏ハ湯屋へ余は食事に帰り、それより小倉君を湯に向へ、伊皿子坂上に到り、鶏を三十五錢にて求め、同氏と台町にて別れ帰宅せしは午後八時頃なり、

四日 晴天

〔欄外〕「親睦倍食ノ為メ小倉君ノ寓ニ招カル／雪投」

小倉君より招かれて九時頃より同氏が寓に到り、今日の企なる食事の仕度に取り掛りぬ、是より前、佐藤・川田・松原の諸も来り居り、余が出張前、最早千葉等揃へ置かれたり、扱て今日小倉君の食会を催されたるハ、同氏知己の松尾氏屢くにて来訪さる故同氏への馳走片々余等を招かれたる由にて、十一時頃にか弁尊の松尾氏来り、先づ一回会してとらんふなぞを遊びしに、松尾氏も不相変入興にて首尾好かりし、さる程に料理の専任ハ余位なものにて、十一時半頃より煮物を初め十二時半頃より契し初めたることなるが、松尾氏は今日は何か用事あるよしして大に急がれ、為にせつかくの料理も充分に召さずして十二時四十分頃退寓さる、さりとは余り草々なりし、さる程に居残りたる余等へ今まで二鍋にて煮居りたるを大鍋に一個にし煮ること二時間程にて、其間ハ或ハ弓を引き或はトランプを遊ぶやらして全く食ひ上たりしハ二時過ぎにてありき。それより衆皆な満腹典るべく如もなりし程に雪投となり、初めハ川田ハ庖前にあり、松原・小倉ハ南畑にあり、余と佐藤ハ西畑にあり、三陣にて投げ合ふこと一時間、其うちに川田ハ小倉・松原等を引き入れ、一方ハ余と佐藤のみとわなりき、それより余等ハ松原・佐藤・川田・小倉等と又トランプに打掛り、負方のやき芋と定めしも互角なりければ、川田は一步先発帰宅、これより二度目は佐藤の行くこととなり、又ハ腹を延して帰宅せしハ午後五時過なりき、

五日 晴天 安息日

〔欄外〕「石川省吉君ノ病危篤」

午前ハ留守居し、午後一時より発足、数寄屋橋教会に到り、帰路京橋の斎藤氏の宅に到り、秋葉

明治二六年二月

氏の注文したりし専門学校の講義録を受取り、帰宅せしハ六時頃にて、其うちに食事を為すや間もなく小倉君来り、先日余が同氏に見せたるいろは字典を飯倉(26)にて冷かせしも首尾好く離さず、何れ近日又々□□る積りなるとて余が都手を曰われたりし、それより余は同道台町教会に到り、佐藤氏の説教を聞き帰宿せしハ午後八時頃なりき、又今日教会にて和田氏の報告を聞くに、先頃病を以て帰郷されたる石川省吉氏事、目下病大に募り危篤なる由、去りとしてハ氣の毒の至りなり。

六日 晴天

〔欄外〕「土屋家の一大事」

昨日国元祖父より秋葉氏へはがき来り、柳沢氏の帰国遅きを以て教会内にも不平を鳴す者あり困まる由、一応最もなり、昨日数寄屋橋教会の会六七拾名程なりし。午後三時頃、里見お淑様御入来、同四時頃お帰り遊されき。同姉にハ身体肥満にて渡られき。国元里見叔父より秋葉氏へ手紙来り報すらく、土屋おます姉目下同家に在宿せる水戸の人にて国武と申す巡査と醜聞ある由にて、世間への声へも囂々しく近事の一大禍事こそ出来たと、今日午前波多野より引越の手伝を依頼し来る、

七日 晴天

午前六時頃より出発、波多野へ着せしハ七時頃にて直に朝飯を馳走、直に荷物の運送に係り午後一時頃悉皆運び尽しぬ、但し氷川町十七番地なればなり、

八日 晴天

〔欄外〕「波多野の転宅ノ波多野のおさく姉結婚す」

土屋家事件に就きおひで姉ハ六時頃より横浜へ行れし由、一昨日の波多野よりの手紙ハ昨日来りしを、又昨日の記ハ全く今日事、又今日の土屋おひで姉出横ハ昨日の事、かくて同姉ハ今日午後帰京、秋葉氏に語りたるを聞くに、羊郎氏は昨七日午前急に帰郷せられし由、寛氏よりの手紙ありし故なりと、其留守居の者の話に、羊郎氏ハ寛氏の手紙を見るや否や非常なる看相に今日出発せられしとなん、今夜波多野より帰路、台町教会に到り大に益しき。今日波多野のお伯母様の話に、おさく様ハ急に縁談整ひ先日出嫁せし旨語らる。高田某氏の処なりと、

九日 晴天

〔欄外〕「小雪ノ応徴の件に役所に呼る」

昨日降雪、今朝ハ一寸程積り居き。今朝芝区役所より召喚状来り、直に出頭せしに、秋葉氏と余の印ある応徴届を為すべしと云ふにありき、其用紙にハ美濃を用すと、又楷書なりと、其行掛に若林芳郎氏26より頼まれたる金一円22を三田郵便局にて受取り、其より日蔭町に到、若林の日本政記を七拾八錢にて求め、余が分にスタイン講義を十七錢にて求めぬ。

十日 晴天 午後入浴す、

十一日 晴天 紀元節

〔欄外〕「紀元節」

秋葉君ハ午前八時頃より芝を経て牛込教会26へ行れ、午後十二時頃帰宅されき、但し□見23に本郷に

て學術演説会に寄られし由。

十二日 晴天 安息日

〔欄外〕「国家の為の大祈祷会」

午後一時頃より数寄屋橋教会に到り拜礼式に与り、同三時半頃より同教会にて国家の為の大祈祷会あり、集る者凡そ百名、和田氏の司会にて四時半頃閉会せりき、但し中頃にて今度勅詞の全く至上の御心よりか、又ハ下の者の慫慂ならんと言ふことの二者興り、聖瞬の折柄いみじかりき。かくて余は六時頃を以て帰宅せり、而してお勝様ハ直に台町教会へ行れたり。今日蓮沼より秋葉様へかきもち・いわしのしほから・万年すし等来りぬ。昨今ハ寒氣烈しく、再び大寒に戻りしやの心地せり、特に今日の如きハ昨末より今年に無き寒さにて、余が知る初めての烈寒たりし、そは余が腕正に凍死せんはかりの有となりし程なり。但し裸体にてはありしなり。昨夜金杉辺に出火ありき

十三日 晴天

〔欄外〕「於寄留地徴兵応徴願済届を出す」

昨日に一層の寒さなり。余昨夜より今朝まで快寝せず、但し嚴寒の故なり。此国の有様想像して余りぬ。午後一時頃より芝区役所に到り、於寄留地徴兵応徴願済届を出しぬ。午後四時頃浜田君来り居ること二十分、余が柳北遺稿の上を以て帰らる。午後入浴す、一時頃より風烈しく六時頃止みぬ。

十四日 晴天

〔欄外〕「大寒」

昨夜里見叔父より秋葉氏へ手紙来り、柳沢氏の帰国を待ち居るよし。又土屋家の事件落着せし由。今日まで昨日にまけず寒冷す。特に昨日の寢床の下部の温まざりしには閉口したり。小倉氏来り、植村氏ハ来る月曜日に波多野へ行かる由、又尚之より双方へ談般〔談判〕せよかしの事なりき。

十五日 晴天

水曜日なれば台町教会へ祈会に行きぬ。午後風起り夜分尚烈し。柳沢氏は明日帰国する由はがき来りぬ。

十六日 晴天

〔欄外〕「柳沢氏〔破損〕□国す」

午前九時頃より波多野に到り植村氏来訪の談を為し、同家にて金三十銭を借り受け、十時半頃より隣の赤坂病院〔26〕〔24〕に到り眼力試験を為し貰ひたるに、当時使用の方ハ少く弱く、今少し強きを好しとすと、又年齢二十三、四に到らば昇度の憂なしと言へり、而して尚ほ西洋人に診察を為し貰ふ方可然、就而ハ来る土曜日に再び来れかしのことにて今日診察料二十五銭を払ひ、一寸波多野へ寄り、帰宅せしハ午後一時頃なりし。午後谷口来り、其内に小林権氏来り、谷口に先ちて去り、谷口ハ十時過まで居られき。

十七日 曇天

〔欄外〕「旧曆二十六年一月一日」

明治二十六年二月

俗にしくれ日とや謂ふべし、さる程に午後四時頃より雨降り来り、夜に到り益々烈し。秋葉氏ハ六時頃より芝教会の説教会に行かる、青木午後五時前来り談ずること時余五時少し過ぎに退かる。同氏の容貌好からざりし。今日は旧の二十六年一月一日なり、田舎にてハさぞかし賑はしからめ。

十八日 晴天

午前九時頃より赤坂病院に到り、ホイトニー氏に眼の診察を乞わんとせしも、時後遅れたりとて草臥れ儲けとなり、帰宅せしハ十一時半頃なりき、其前波多野へ一寸寄るに承五郎氏問ひけらく、耶蘇教にて婦人の集会ハ如何なる^(方法)にて為すや、又何人位集るやと、新聞屋とて比評的^(比)の眼向通人と異なること如斯。午後散髪入湯す。今日午後芝の山本真竹氏方に婦人の祈会あり、お勝様ハ其会へと十二時半頃より出欠^(掛)られ、又々午後の説教会へも行れ、秋葉氏ハ午後四時頃より出掛られ、何れも帰宅されしハ午後十時頃なりき。偕て昨日ハ芝教会に於ける説教会の初日なりしも雨天なれば如何と心遣にありしが、思の外の集りにて、無慮百五十人程なりとハ先づく目出度、又今夜ハ晴天なればにて無慮五百人程の集りにて聴衆も極静肅にて居られしとなん。今夜親父より秋葉氏へ土屋家の事件再発の報来りぬ。又柳沢氏ハ一昨日着松せし由、

十九日 晴天 安息日

〔欄外〕「芝教会の三日間大説会／千葉講義所の教授」

午前九時半頃より台町教会に到り、石原氏の説教を聞く際、千葉の泉氏より彼地の教報を送られしなりと云ふ手紙を読み聞せられしが、実に非常な盛力にて教会建築の議もあり、特に其費用と

二十日 晴天

〔欄外〕「波多野ニ於ケル二新聞記者ト教師植村氏ノ談話」

午後六時頃より波多野へ参上、兼て今夜ハ植村氏の波多野へ入来被下旨、小倉君を以て□たる事故談話拝聴をもがなと着先せしハ彼此七時半頃なりしが、時に益太郎氏入浴の最中にて、不敢取余ハ植村氏へ茶を差出しに行くに、先方にも余と知られき、而して今一人北川氏も列席し居られしが、談話ハまだ互に知るや知らぬやの冒頭挨拶にて、余ハランプを取替て其替たるを次の間に持行き、一心に談論如何と耳を欬て、清ませし程に、先づ冒頭挨拶ハ終りしと見へ、植村氏ハ彼に問ふて曰く、私ハ数年前にいぶむら構にて御身の演説を拝聴せしことありしが、彼ハ何か社会的（貧民何とか聞へき）の演なりしが、其後矢張り種々ソシャルズムの事に就て御調成り居るやと言ふより波多野曰く、ハイ彼時ハ一寸彼の方も調べ居りしが、其後間もなく官員となりましてな、遂に支那の方へ参り居り、それからと云ふものハ皆悉境遇の定りたる為、読書特に右ソ

明治二十六年二月

シャルに係^(四)することもお留守となり絶^(五)てぬと云ひ、其後に次で偕て今日御招き申したるハ小生此間芝教会へ参聴致しまして一寸感ずる処あれど、就ても御教会の伝道の方法ハ如何なものかと問ひ初めしが、本談に入り初めにて重に波と植の間ハれつ答へつ、其間合に北川氏も出口せしも、談意ハ重にキリスト教会と社会の係関に就ての談話と教会の有様に就てのことなりし、要するに波氏ハ家内の者を初め(自分ハ置て) 我国の婦人老人等にハキリスト教にかぎると認めしならん、就てハ今の様にキリスト教が衰微するのハ如何なる次第ならん、何れ布教の方法が当を得ざるにあるならんとの存意らし。さる程に十一時頃にか、植村氏曰あゝ此ハ大部長話を致しましたよと云ふより北川氏一寸時計を出し、イヤまだ其様に遅くハあらじと云ふ中に、波多又話を起し、遂に十一時半頃植村氏突然此ハ失礼と立上りて礼す、二人答礼互に宿所を告げ、此後ハ御懇意に願ます左様ならんと、植氏場末の余にも左様なら、余ハ後よりランプを以て主人と共に送る、植氏急で帰路に出でにき、北川氏も後を追ふて去らる。

二十一日 晴天

〔欄外〕「赤坂病院に到り眼力の検査を受けたり／九十九里教会教報」

昨夜ハ波多野へ宿^(三)まり、今朝八時半頃より隣の赤坂病院に到り、先日より約束し居りたる通りホイト⁽²⁶⁾ニ⁽²⁶⁾氏の診察を乞はんとせしに、彼れなか／＼遅くて遂に十時過に漸く来られ、別段の事もなかりしが遂に三、五の両眼同等なる度なるを求めよと云ふことにて其書付けを渡されたり、其鏡屋ハ銀座の松島⁽²⁶⁾と云ふ商塵にて、余が最前鏡^(眼鏡)を掛け初めたる処ハ此商塵にてありし、それより一寸波多野へ寄り帰宅せしハ午後〇時半^(四)頃にてありし。国元親父より今朝手紙来り居り、其内に

小使金二円送られたり。其うちに里見叔父より秋葉氏へ手紙来り、両氏の手紙を調査すれば、教会の模様大部好景気なる由、勿論内部にハ或ハ各人の間に不和のこともあり、又土屋家の如きありて少しく悲しむべきことあると同時に外部ハ非常に好都合にて、特に此頃ハ旧正月なれば諸所へ演説を頼まれて多忙なる由、目下教会に毎安息日に集る者平均三十名位に求道者四五名ありと
なん、又芳郎・純吉の両氏も小児の話をする事となり、随分意外に話さるゝ故、小児等も面白がりて其方の集りもかなり盛なる由、又柳沢氏ハ今まで教会を開け居りたる由にて先月分と二月分の当教会より出ざる五円ハ是を受取らざる由、故に是を以て婦人の集金に合し、其時に少々義損金を募りフルガンを求め度積りなりとて目下計企中なるよし。今夜も秋葉氏ハ山東氏の説教会に行かれたり、集りハ凡そ六十名程にてありし由、午後入浴す。今日浜田氏来りし由、時に余不在失敬。在原の死ハ去年の今日午前一時なりし。

二十二日 晴天

〔欄外〕「石川省吉君逝去す」

午後一時頃浜田君来り、石川君にハ兼て病気の処、去る二十日遂に逝去せりと、彼地より当地の同氏兄君へ報知ありしとなん、報し来り間もなく帰宅されたり。又昨日父よりの来状に母事又く、抜歯し、愈々今年中にハ総入歯を為さるを得ざるべしと申越されぬ。うぐいす鳴き初む。

二十三日 晴天

午後秋葉様へ金十八銭の借金を返しぬ。午前六時頃郵便来り、即ち秋葉氏受取らるに里見純吉氏よりののがきにて、同氏ハ昨年より病み続ける眼を東金病院に診察せさせしに、全く遠眼病にて

明治二十六年二月

余のと反対の眼鏡を要するなりと、併し輕性(症)なれば安しる程にもなしとなん。又午前九時頃より芝口に為替を受取りに行き、帰路銀座にて学問のすゝめを十錢にて求め帰宅せしハ午後半頃なりき。純吉氏の手紙に東金にても会堂新築落成し、来る二十六日ハ奉堂式ありとなん。今日受取りたる金員二円なり。

二十四日 晴天

両三日前より大工来り、台所や諸所の損所を繕ひ行ぬる。今夜明治学院に同盟文学(26)会ありとて、秋葉氏ハおせい子を携れて隣の学校より貰ひたる切符を以て出席せられたり。今日石川省吉氏計音同家の孝雄君よりはがきにて報知し来り、早速弔詞を出しぬ。

二十五日 晴天

〔欄外〕「明治学院に於る同盟文学会」

午前九時頃より自営館に到り先月分と今月分の弁償金一円を払ひ、二階にて浜田氏と談ずること二十分、帰路小倉君を伺ふに不在にて帰宅せしハ十時半頃なりき、波多野より承五郎様御自筆にて明日ハ同氏亡妻の記念日なれハ茶飯を焼く故来駕あられよとのことにて、時刻ハ十時半までにとをこされたり。小倉君一寸午後来り、波多野(ママ)にて植村氏の談話に就き聞す。昨夜同盟文学会に即席演説にて明治学院よりハ中山某、人物批評論てふ題にて演せられ、青山の大(ハ)「某ハ新日本てふにて、又確か青山の人ならんが想像てふ論文を朗読せられたりと言ふ。

二十六日 晴天 安息日

〔欄外〕「波多野末子姉の記念会／数寄屋橋教会の説教会品川（南）の大火」

午前九時頃より波多野へ行き一寸彼氏と今夜の仕度を為し、偕て午後五時頃に到り、里見お淑様・同貫一氏(26)、其内に青山様より奥様初め子供衆を二人携れになり、又当家今の妻君の媒介人たりと云ふ某婦人及び高田おさく様等のお客にて、峰子様(29)の舞踏の師匠さんも三人程の舞子を携れて来られ、食後しきりに舞われたり、貫一氏ハ九時頃余ハ九時半頃帰途に就きぬ。今日余等も小児達の間となりて馳走に与りしか、余ハ兎に角貫一氏にハ変に感せられしならん。今日の風烈しかりき。今日此間中より当家に来れる関谷に来るせいじさんの母に聞くに、力氏事病気の由、今夜数寄屋橋教会にて美山貫一(26)・早乙女豊秋(30)の両氏の説教会あり、来会者七十余名を得たりしと
なん。午後品川(南)大火三百家も焼けたりと、波多野にても少し見へき。

二十七日 曇天

〔欄外〕「大雪」

午前一寸長谷川氏の寓に到り昨夜の模様を聞きたり、午後数寄屋橋教会の教報を福音新報へ出しぬ。今日午後二時頃より雪降り、見る間に積り、夜分に到り五寸程となり、十時頃止みたらん。

二十八日 雲天

秋葉氏午後六時頃より芝山某氏方へ行き、参月ハ石原氏の番なりと云。午後入浴す。

出金額合計金壹円七拾一錢九厘、但し内壹円ハ先月分と今月(ママ)として自営館へ払ひし分なり。

三月

一日 晴天

去年の今日ハ家の繁忙を避けんが為、若林の座敷を借りて引移りたる日なり。午前関谷へ力の病
気見舞にはがきを出しぬ。秋葉姉おせい様を携れて一時頃より銀座辺へ見物に行れたり、時に行
がけは品川より汽車にて行きしよし、そはせい子さん未だ汽車に乗らざるを以てなり。朝より小
風あり、午後三時頃になり吹き付く。

二日 晴天

〔欄外〕「上総の大雪」

昨夜芳郎氏より本の追送分を急かれてはかき来り、此間の雪ハ八寸程申由。余昨夜七時頃、スウ
イトン万国史（余の分）と政記を通運にて送りしに三百四十目^宛あり、東金まで七錢なりき。台町
教会の祈会にも行きにき。時にさほんを二錢にて求めぬ。午後禪繪を洗沢^瀧しぬ。石原保太郎氏²⁶二
本榎へ移宅さる。今日ハ至て静快の景なりき。去年の今日種痘せりき。

三日 晴天

〔欄外〕「武藤健太郎氏来訪」

東京ハ今日を以て三月の節句とす、蓋し何事も新暦を用ゆればなり。正午後、武藤健太郎氏来
訪、恰も好し、今日ハ此地の節句なればとて、兼て余も一寸手伝たるすし出来、今や食せんとせ
し時にて、倍食満腹して遺□となりぬ。同氏ハ不相変江戸ツ子まる出しにて快談二時間、秋葉氏
出校に先ちて去らる。秋葉姉にハ一時頃より学校へ行れ、二時半頃不図洲崎とやらへ観梅の催起

り、三時頃より出掛られたり。然に秋葉姉ハ女学校連としほ湯に入り、観梅ハ見合せたりとハ未だ花期に至らぬ故ならん。

四日 曇天

隣の学校より庄田・馬場の両姉倫理学へ聞きに来らる。午後入湯す。昨夜より神学汎論を読み出す。土屋おひで(26)姉家婦に聖書の講義を聞に来る。十二時頃(正午)国元よりはかき来り、為替の受取通信を催促し来りしなり。而して彼地にても教勢ハ非常に宜しく、下大蔵及び芝崎・東陽村等にも求道者合して六七名程起れりと云

五日 晴天

午后二時半頃乍雨数分にして止む、風烈しく閉口せりき。午後(17)半時頃より数寄屋橋教会へ出発に先ち、二本榎にて保齒(18)下駄を十九錢にて求め、既に教会へ着せば、和田氏の説教にて督□式に倍し、終りて小雨を衝て里見氏の寓に到り、夕食を馳走になり、快談闌なるに及び戸田某なる者来り、其うちに同氏の友人(里見へ対しても)三人程来り、戸田氏の快談一座を振わたるハ氏の能弁を以て、今日上野辺へ散歩に行かれし感話の文学的のしかも理想的に散感せられしなりき、其うちに山田となん云る者酩酊して来り、大に暴るゝこと二時程に渡り、一座興を失したりき。因に記す、右戸田何某と其友人ハ右基督教賛成者にて特に当地の青年会委員(会員なるべし)にて、既に先頃も青年会雑誌に(五号)詩人管見と云る文を載せられたりし人なり。里見氏の友人村上氏なる者来り、留り行に余ハ九時半頃より関谷に行き留る。余今朝国元へはがきを出しぬ。関谷へ幕府衰亡論を貸しぬ、

六日 晴天

〔欄外〕「鳥羽権三郎氏ノ音」

関谷を午前八時頃退き、里見君の寓に寄り金三十銭を借り受け、同氏と同道有楽町辺まで来り、斎藤にて秋葉氏の本を持ち来り、余が製本料をも三十銭とらしたり、三田にて半紙を求め帰宅せしハ十一時少し過にてありし。里見氏へ太平記を（上）貸し、先日の折焼柴記（たぐ）を貰ひ来る。力氏病の処快全なりし。秋葉丈太郎氏留られたるよし。里見君が草間氏より聞きたると云を聞くに、波多野ハ又く官員になりたしと望み居る由。今日午後里見純吉氏より秋葉氏と余に同封の手紙来りぬ、曰く略上聊も天涯万里雁絶て通せざるの地より喜の音ハ来り、之兼て印度地方を漫遊し居りて、遊客ハ西印度漫遊を見合せモトジャガタラツトとやら云ひし地方より遥かに諸岸を廻り、Soldavaに入郵便を得て、一月三十日出本日当地着し、若林一家其他の誰か家の者よりも御祖父さんの喜び一方ならずも、二三嶋漫遊して帰朝せらる由云々と報知し来りしハ、去る三日出にて本日着したる音也、噫嘻！鳥羽権三郎氏ハ生存し居たり。彼を知る者誰か喜はざらん。まして彼の家人特に両親ハ。我輩是を天父の加護に帰して宜しく感謝せざるを得んや。又教報欄に又東洋村の向後・竹内の両氏も愈々授先（ママ）する由、其外一般に好景気なりと、是れ又一喜音なり。因に記す、純吉氏本日の手紙ハ秋葉氏へ年賀を兼て送られあり、至事なり。

七日 晴天

今日若林芳郎氏より秋葉氏へ手紙来り、余が病気にハ非ずやと問ひ来りしハ、余が送本の遅延をかこててならん。今夜秋葉姉ハ兄と芝の山本氏方へ行れき、午後入浴せり。

八日 晴天

午後風烈しく沙塵の飛入るも甚しかりし。

九日 晴天

〔欄外〕「波多野の内室罹病同伯母君も同段／山内益太郎氏出奔か」

午前五時頃より秋葉氏に更りて同氏に來りし為替金一円を受け、同氏の為東洋純正哲学を四十五錢にて求め（飯倉）、転して波多野へ至れば、御伯母様ハ三日ほど前よりお円実は五日程前より病気の由、御伯母様ハ余が至りてより間もなく起られし、奥様の力ハ大事なりし由にてありしも此頃ハ余程快方なるよし、承五郎様側に侍られき、又国元より鳥羽氏の手紙を送られたるよしにて見せられたり、彼ハ重（主め）にジャワに居られしやに見へたり、山の内益太郎氏ハ去る三日頃とやら何処へか出奔されしよし、波多野にて少し困ることハ第二として御自身ハ如何するらん。帰路三田にて帳面を十二錢にて求めぬ。

十日 晴天

午後大風、午後八時頃不凶門を叩く者あり、お勝様の取次に山田なる者居るや、若し居らば波多野にて直に入來を頼み度とて、余直に其者と同道烈風を犯して着先すれば、別段の事ハなかりしも、御病人の未だ御在床なる上に余り大風にて火事なぞ恐ろしければ御身を頼みつなりとの御用なりき、是も今夜下女母の病なりとて歸られしなり、

十一日 晴天

今日朝程より新聞を取り調べたり、御伯母様にハ益太郎氏の事に付き大に心配の御様子にて余に

も種々計られしも、余も少しも心当りなければ計り様もなかりき、

十二日 晴天 安息日

今日も少し新聞を調べたり、御伯母様ハ大に御快方にて奥様も亦余程御快方の事なりと、今までの下女他の下女を携れ来り、彼ハ去られたり、午後豊田氏来り宿らる。亦昨夜ハ海老原氏とやら六時頃より来り、直に奥様を見舞われ、承五郎氏の九時半頃帰られしまで彼室にて談話せられ、承五郎氏一杯遣しぬ、

十三日 晴天

〔欄外〕「益太郎氏掛川に行き再び帰京豊田に蟄居す余其護人□^(敬掛)り／益太郎氏余に告るに秘密を以てせらる」

今朝ハ朝湯あり入浴す、御伯母様二時頃より銀座の高田様へ散歩傍々出払、午後五時頃御帰宅、奥様の御下貧職にハ呆れたり、行末如何にも氣遣し、今日も午後少雨乍に止みき、余帰宅せんとせしに、承五郎様曰く益太郎氏義昨日豊田氏方まで来りしが、又々外出の恐あれバ御身保護されよとのことにて、余ハ新聞紙を借りて直に豊田氏方へ参上す。午後十時頃より着床、聽て談、益太郎氏此度の事件に就き其始末由来を聞きたゞすに、氏も大にうち解けて波多野家出脱の理より掛川へ行かれし目的より此後の目的等一分始終を語られしが、談酣なるに及び感涙禁するを得ざることありき、其大略ハ氏ハ去る三日学校の費賃とて伯母様より五円を受取り、それを持って新橋より掛川指して出発、数日にして着川、彼地にてハ旧知の見を避け先づ此地の様子地位等を知し置き、墓地の行路を見、其夜再び墓地に至り、父君の墓前にて今世にて御墓に拝するハ此夕

を以て最後に候とて泉光（線香カ）を焼き、再び帰宿して明晩北池魚の腹中に身を休めんと心組し処、是より先き同氏の母君へ同氏の書置と写真とを送り、其彼地に着する頃、丁度此方にて入水の志を遂げん積なりしに、其夜不図一日早く先へ着便せしこと見え、母君より大に心配して差留めてなかく親心にそむかぬ文面にて氏も大に覚る処あり、遂に今までの宿望を廃棄して再び出京の事とハなりしと、又其斯く心計りたる原因ハ、波多野家の氏に戴する所業の不当なる故なりと云ふ、其次第随ら一理なきにしもあらざる義もあり、座に同情に堪へざるものありき、尚□外の益太郎氏の密秘の話は爰に載ず。

十四日 晴天

余益太郎氏安着の報を同氏母君へ認む、但し益太郎氏より彼方へ送りたる書状の異常なるに係わらず、同氏より返事無之故、余更りて送りしなり、初め電報と存し（ママ）でせし其言他言を用することとて書状とハせしなり、今日午後二時頃より二本榎の方へ来り、日記折焼芝等を取り（たくま）（益太郎氏同道）再び高輪へ廻りて帰宅、（豊田氏方へ）芳郎氏より書物宅着の報来りぬ

十五日 晴天

余一日波多野より借り来りたる時事新報社説を写して暮しぬ、余一昨夜益太郎氏の為祈り遣りたり、之を例とす。

十六日 晴天

〔欄外〕「品川教会（26、35）の基督教大演説会」

今日も新聞写しをす、当家来客繁なり、一昨夜より品川教会に大演説会ありし由、峰子様本日よ

り大試験初まりし由、

十七日 晴天

午後三時頃より愛宕山見物の途に就き土橋を経、烏森を過ぎ、田□町より愛宕山の裏道に出でんとするや路傍に矢場あり、数日の閉鬱を散せばやと益太郎氏三十本余七十本其うち余ハ大概弓割を射たりしが五度程射たりければ、見物人の興に入りたりしやに見へき、此処は三寸程の弓割りに初度の当りに二本二度の中りに三本と追て度数の昇る程裳数の前を呉るゝこととて中り甲斐あり、爰に至り一寸登山日の没すると同時に帰宅せしは午後五時頃なりし、此日午後六時頃益太郎氏母君より余が名当にて手状来り、中に豊田氏及び益太郎氏の分もあり、余へハ益太郎氏安着の旨報知被下難有し、後來とてもよく御相談相手となり被下度しとのことなりし、扱て益太郎氏も明日より新聞社の方の活版の部に入職する様とハなり、氏も承諾否望まるゝ方にて漸く方着(片付)たり、されバ余も解役の命を受け、亀右衛門同道波多野へ帰りしハ午後九時半頃にてありし、而して直に奥に到りしに、御奥様ハまだ御着床にて檀那ハ傍に御床あり、余ハ益太郎氏事落就きの上申を為すのみなりしに、勿論此事ハ同氏の行ひ改善□□したれど由なし、彼ハ余に益太郎の様子を問いにし時、余ハ只だ氏の掛川の方に到りしハ北池入水のことならんと告げしに、氏ハ初の程ハ信せざりしも余が益太郎氏母君よりの書状を見せたりする程に、然らんかと一寸心付たりしなり、彼の臆測にハ先頃出たる「まあ」と云ふ下女と少しく関係のあるやふに語られたり、而して昨日も銀座辺にて彼らしき者に会ひたるぞなぞ談せされしが、益太郎氏の言伝ならば此事無根なるべし、何ハともあれ波多野氏の心掛不当たること余の憶測なり。余益太郎氏と別れんとせる

時、二階にて氏為祈り聖書を呈したり、

十八日 晴天

〔欄外〕「梅花満開」

午前七時半頃起床、峰子様今日読書の試験なりとて余其仕度に一時間程教へ遣しぬ、午前又々新聞調を為し、午後二時頃より帰路に就き着秋せしハ三時半頃なりき、午後至午前十時頃より風烈しく十時過まで吹き続きぬ、実に閉口せし、午後七時より台町教会にて井深氏の基督教と〔 〕、ナックス氏の基督教と倫理てふ演説を聞き帰宅せしハ九時頃なりし、来会者二百五十人程

十九日 晴天 安息日

〔欄外〕「台町教会基督教大演説会」

午前台町教会に到り石原氏の説教を聞き、午後一時より数寄屋橋へ行き月報を貰ひ、豊田氏方へより婆に益太郎氏の様子を聞くに、同氏ハ昨日より新聞社（活版）へ出らるゝ由、又同氏ハなか／＼の醜歴ある者なりと今日初めて聞て驚き入りたり、又今度のことも矢張まあ下女と関係ありての出来事なりと、実説に近し。それより銀座にて秋葉姉の為に五錢にて新約聖書を求め、帰路三田にて史海の日本部自巻至九を二十六錢にて求めぬ、今日秋葉氏より金三十錢拝借す、波多野奥様今日又不快一層とか、今夜台町の演説会ハ貴山幸二郎氏⁽²⁶⁾と植村氏⁽³⁶⁾にて、何れも好出来にて特に植村氏の日本の歴史と基督教ハ最も価値ありしとなん、秋葉姉今日より明治学院の日曜学校を教へらる、

明治二六年三月

二十日 曇天 春氣皇靈祭(春)

〔欄外〕「春氣皇靈祭」

俗に云ふ花曇りと云ふ景色なり、但し梅見にハ適當なるらん、お勝様腹部痛まるゝ由にて臥さる、今朝国元へ小使金催促のはかきを出す。お勝様、午後庄田姉と三田へ行かれ、先頃注文し置たる置時計を持来られたり。秋葉氏も来る六月頃にハ当学校も退き度しと語らる。

二十一日 晴天

秋葉姉尚在床、秋葉氏ハ午後芝教会へ行けり、余今朝より風邪の萌あり、昨夜引きしものゝ如くなれど、実は先日波多野にて遅く入浴し其上まゝ三時間程も□したるが聞きしならん。

二十二日 曇天

〔欄外〕「インフルエンザ流行／秋葉氏着床」

午後に到り少し雲薄らぎたる故洗濯を為しぬ、余快身たり、午後青木氏来りき、秋葉氏大義なりとて着床す、但し風邪の始まりにや、同姉も今日は余程快なりと夕方より起きたり。又おせい様も幾分か御感冒の気味と察せらる。蓋し此頃ハ又／＼インフルエンザ大に流行し、岡見氏方にても皆様御罹病の由洩れ聞か。

二十三日 雨天

秋葉氏学校を休まれて着床す、其夜に服薬（熱出）三包、村木なる者来り二時間程話さる、余心気常ならず、午後小倉氏来り、千屋氏近日上総へ行かるゝに就き同氏の為県の地図を貸さんやとのことにて余渡す、

二十四日 曇天

折々洩れ降れり、秋葉氏尚在床、余午後一時頃自営館に至り、浜田氏に文体明弁第四巻を貸し柳北遺稿下巻を持来る、蓋し秋葉氏の伝道学校欠席の届言旁々にてなり、小倉・佐藤・川田・浜田の諸氏は去る廿日隅田川へ船遊されし由、今日浜田より聞く、午後五時頃品川の齋藤医師来り、秋葉氏の病ハ少しチブスに近き方にて先づ其軽き分なりと、余食後薬を取りに行きたり、

二十五日 晴天

午後品川の先生来り、余四時頃より薬取に行きしに先生余に告るに、秋葉氏の病のまだ判然せざれと此二三日にして熱降らざればチブスに名付るも可ならんが、今の処にてハ余程大事にせよかしとなん、今日午後七時より数寄屋教会(ママ)にて星野光太氏(26-37)の演説ある由、

二十六日 晴天

〔欄外〕「母事総入歯す」

午前六時頃国元親父より手紙来り、母事一昨日とやら東金に來り、藤木屋に在留の東京齒医に総入歯を為し貰ひたる由、其費用十円程なりしと、蓋し歯ばかり八円程かゝりたる由、品ハ瀬戸物なりとのこと、為替金壹円五拾錢送られたり、是ハ今月分小使としてなり。東金にてハ在原に三四日程滞留大に厄介になられし由、土屋家にてハ明日の中には横浜の方へ移らるゝ由。秋葉服薬後出汗非常なりしと、

二十七日 晴天

午前九時頃より三田に至り為替金一元五十錢を受取、半紙等求めぬ、午後品川の医師来り、秋葉

氏ハ全くインフルエンザの重症なるなりと、而して今日ハ大に快方となり、熱度三十七度二分程にて今二三日ハ着床せよとて去られたり、余又午後五時頃より取薬に行きけり、

二十八日 晴天

秋葉姉午前品川へ行き薬を取られ、序に姉の兼て痛み居る鼻中の腫物を診察し貰ひたるに、全て脳の少し震しきに因るとなん、秋葉氏今日ハ又快なり、午前九時里見純吉氏へ手紙を送りたり、文中に親父のも託しめたり。夜七時頃より風起る、午後入湯しぬ、先于湯而有醜事、

二十九日 雨天

〔欄外〕「大森に於て千葉県下基督信徒大五回大親睦会／柳沢・里見〔破損〕□両氏臨席」

昨夜より降雨今日一日続く、余午後品川へ取薬に行き、それより人湯す、又其前散髪しき、但し三銭、午後石原氏来談せらる。国元親父より秋葉氏へはかき来り、彼ハ来る中会に出演され、其節当地立寄る由、又柳沢・里見の両氏ハ大森へ行れし由、今日大森に千葉県下基督信徒大信睦会有之の日なり、午後、後于湯有醜事、是最後の人行也矣

三十日 晴天

〔欄外〕「秋葉氏全快」

秋葉氏更衣、尚ほ床上に整座す。余午後品川へ行く、其後先生来り秋葉氏最早熱冷めぬと、而して氏の脈の四十幾つとやらは全く運動の不足なるによれりと、余昨日箴言を読て大に感じ今日また伝道書を読初めぬ、之は少し六ケしかりし、午前村上なる者来りき、午後又元伝道学校の人たりし、吉村氏来りき。

三十一日 晴天

〔欄外〕「感冒流行益甚し」

秋葉氏今日より服薬を罷む。又午後入浴さる余も。余午前十時頃より自営館に至り、払金せんとせしも峰尾氏不在にてありければ、直に帰路小倉氏方へ依り、一寸話し、帰宅せしハ十二時頃なりき。昨日医師の話に流行感冒次第に蔓延、殆んど底止（底）する処を知らざるよし、衣服ハ矢張綿入羽織・同夜物・単衣・シャツ等にて尚袋も足に穿つこと寒中の如し、脱服を少々ハ為し得さるにあらねど風邪流行の折柄なれば為用心早まらざるなり、花ハ梅既に凋落の危になり、桃未だなる景色なり、氣候ハ時に相当せり、起時ハ大概五時、寝時ハ十時、今日秋葉氏へ庄田、やゝありて渡辺の両姉来談、又男にて萩野氏も来談ありき、明治学院神学部ハ本日より来月二十日頃まで春期休業となれりとなん。

出金額合計金壹円

四月

一日 晴天

〔欄外〕「頌栄学校卒業式」

在米の陶山賦太郎氏より秋葉氏へ手紙来りぬ、同封にて石本・石原へも来り、余石本氏へ届け石原氏の方同氏より届る由氏に托しぬ。今日午後一時半より頌栄女学校に同校と小学校合しての卒

明治二六年四月

明治二十六年四月

業式あり、余萩野氏と同行せしハ二時にして、最早小学生の卒業文章終らんとするときなりき、順序を記さんに、唱歌（君か代）・歓迎・小学校卒業文章・唱歌・小学校小学部卒業生文章・唱歌（英語）女学校生徒・女学校生徒卒業生意見・唱歌（英語）女学校生徒・証書授与式・奏樂・勸告岡見清定氏・生徒の祝詞・卒業生答辭・唱歌・演説安東太郎氏・余興薩摩琵琶等にて目出度閉会せしハ午後五時頃なりしならん、余ハ少し前萩野氏と退席しき、加藤寛⁽²⁶⁾氏も見へき、今日卒業生小学部に男四人に女六人、女学校に三人なりき、安太郎⁽²⁷⁾氏の演説ハ日本婦人ハ宜しく醜言を慎しむことを注意すべし、我国婦人の醜聞外国に甚だしと話さずもかなと思ふ程精く語られ、而して終に我国の婦人を改良せんにハ此様の学校の大切なることを以て終語せしが、其我国の海外出稼人（婦人）の醜行を女生徒（しかも乙女子）の前にて遠慮なしにしゃべりしこそ自家動着⁽²⁸⁾なれとて難したるハ加藤なり、余も演説最中心付たりしが其節加藤の杖にて床を叩き居りしが案の条余と同感なりしが如し。又女生徒の作文ハ皆慷慨的の文にして、之れも漢文直訳体の口調なりしハ誠に聞苦しかりし、而して作文の巧妙ナルハ于惣男子も頗羞死せざるを得ざる程なりしが、聞か如くんば是皆自作物にハ非てなくも大概ハ作り添へられしなりと

二日 雨天 安息日

午前九時半頃より台町教会に到り石原氏の説教を聞き、午後ハ雨天、旁腹部異様なりし為頓塾しぬ。昨夜より雨降り夜分に到て尚続く。

三日 晴天 神武天皇祭

〔欄外〕「神武天皇祭／眼鏡請求」

午前谷口氏来りき。余おせい子を携れて九時頃より銀座へ出掛け、松島にて眼鏡玉斗り二十五錢（二度半）にて求め待つこと二十分、それより十字屋へ行き秋葉氏より頼まれたる哲学会雑誌を二錢五厘を二錢づゝに負けさせしも彼承諾せず、今度秋葉氏に相談すべしと退き、帰路に就き芝口に来るや、恰もよし時まさに発車の用意しあり、余等直に投車し聽て二十分にして伊皿子下へ着し、余金三錢五厘を払ひ（十才以下の者無料）、それより泉岳寺へ行かはやと既に到るや、何事も見へき様の物なきより足を進めて、後藤の後より二本榎に上らんとせしに、せい子余りの寂寥さに啼出されしも氣の毒なりし、かくて難なく帰宅せしハ午後一時頃なりき、今日上車前せい子にパン二錢与へき。昨夜より今朝明方かけ風雨烈しく現つゝ心に安からざりし、但し九時頃雷鳴りしと覚へぬ、午後六時頃国元より親父参りたるハ、兼てより嘯ありたる横浜に於る第一中会（東京）に九十九里教会代員として出られたるなり、彼地教勢大に好景にて、頃日も手紙にて申来られし通り求道者も七八名ハ有之、又柳沢氏も非常に勉強さるゝ由。又大森の親睦会にハ川島芳太郎氏・里見富三郎氏・柳沢氏の三人行かれ、里見ハ土曜日に（昨日）帰松されし由、然して景況ハ中位にてありし由、東京よりハマクネア氏（26）只た一人行れし由、教会休にても鈴二・寛ハ不相変呆れ入る次第の挙動のみありと、氣の毒のことなり。

四日 曇天

〔欄外〕「横浜に於る第一東京中会開く／親父為中会寄京／柳沢氏亦来京」

乍雨乍晴定らずと雖も概せば朝より夕まで曇ハ天や云わん。親父午前七時半頃出發、品川停車場へ行れぬ。昨夜ハ大夜深しにて余等着床せしハ一時頃にて、寝入りしハ其半過にてありしなら

明治二十六年四月

ん。余午前八時頃より赤坂に到り、昨日求たる眼鏡をホイトニー氏に検査し貰ひたるが久しく待たせしにも不拘、検査の粗陋には憫れたり、此処より波多野に到りし頃ハ十一時頃なりしが、一寸新聞を調べなぞして午食を馳走になり、一時頃よりおまつ・御伯母様の兩人と久保町辺まで来り、彼処にて別るゝと同時に篠雨に遇ひ、元数寄屋町の豊田氏方までに悉皆濡れたり、去る程に又十分程の中に違日程の晴天となり、十字屋にて秋葉氏の為哲学会雑誌を一冊二錢宛にて四十八冊程求め、帰路山東氏方へ寄りしも彼不在にて秋葉氏の手紙のみを置き来り、廳て帰宅せしハ二時半頃にてありし。波多野にても峰子様此間の試験に及第し第四年生となられし由（尋常）、尚奥様にハ未だに御着床の御次第にて、余一寸見舞至し時に上床にて地裨やらを縫ハれ居き。

五日 晴天

昨夜八時半頃越後高田の伝道師森堯道氏来談、一時間せりき。親父事午後七時頃帰京、柳沢氏ハ一寸飯島氏へ寄りたりとて一時間程後れて来り、談話に時を費すこと十一時頃に至りて止みき、中会も今夜切りなりと。又今度九里教会（九十九里）にてもラルガンを買ひ度、就而ハ一寸バラ（横浜）氏に相談せしに、彼の知人に五十五円にて極堅固なるあり之を求めよとて、最初二十三円とやらの小物を出されしも柳沢の大を□□かくハ出でしなりと、それにしてもバラ氏五円出すとすれば後ハ教会にて大概兼金（献金）せざるを得ざるべし、去るにても最早彼地にても二十円□□切りなりと云へバ六ケし。余は余り高価の物ハ欲しくも、九十九里教会にて今少し憤発せざるに於てハ二十三円位の物にて□めて然るべしと思ふなり。

六日 晴天

〔欄外〕「聖書学館卒業式／桜咲初む」

余午前十一時頃より本郷に親父国元より土産として持来りしを届けたため藁履にて出発、先着せしハ午後半頃にて直に午餐を馳走になり、一寸関谷にも面会し、また六時と言ひ□より出発、帰宅せしハ四時頃にて、青木澄太郎氏来り居き。午後六時より聖書学館の卒業式あり、余宿に付居し、蠣^(殻カ)町田中より七時頃帰りし親父等も直に出掛、帰宅されしハ午後八時頃にてありき、今日親父にサツクを二十銭で売り付、本郷行きにとて又二十銭都合四十銭を貰ひぬ、依て本郷より帰路飯倉にて二十四銭のカツケンボクのレストランを求めぬ。卒業生ハ馬場・服部・阿知波・大岡・鈴木の諸姉なりしと、又神学生も大概来事ありしとなん、

七日 晴天

午後石川氏来談、直前土屋・服部・阿知波の諸姉来談、土屋ハ間もなく横浜へ行れぬ、又小林・山下の二人来談、十一時半頃帰らる、又親父ハ午後一時高輪馬車にて関谷を指して出車さる、余送る。今夜せい子様演説を為さること五題、そは日曜学校にて教えられしを覚て居られてなされしなり、感心と云ふべし。

八日 晴天

〔欄外〕「蛙鳴く」

午後、河崎・稲葉の両氏来談、其うちに春井氏も来り、午後四時半頃散退する、余秋葉氏と入湯す、今日山東氏に改悔曆を送らる。余純吉氏へ手紙を書きぬ。また昨夜ハ母とふじ子へ書きぬ。

明治二十六年四月

余今日初めて蛙の声を聞きぬ、桜花綻び初めぬと見へ河崎等御殿山へ行かる。

九日 晴天 安息日

午前台町教会にて石原氏の説教を聞きぬ、午後一時頃より本郷へ出発、先着せしは五時頃なりし、蓋し途中古本屋を冷かしたればなり、午後七時頃より本郷会堂に至るに宮川氏の聖書中の人物其外海老名・ケレーの両氏も演説されき、親父も行かれたり、余最後の海老名氏の時大氣になり途中にて退堂しき。河合氏居りき。

十日 雨天

午前十時頃出発、帰宅せしハ午後二時なりし、今日学校の渡辺・服部・土屋の諸氏を招きすしの馳走ありしとて余も後れたれど分ありて満腹しぬ。又午後四時頃光氏来談、其前余学院に至り稲葉・河崎の両氏招ぎ来る、而して谷口も呼びたるに氏ハ生憎留守なりければ後れて来りき、かくて彼等午後九時頃まで快談さる。今日政教新論を十銭にて求む、昨日ハまた基督伝を八銭にて求き。今日親父理吉の為彼手に至り年限を定めん積なりと語らる。昨日親父より金壹円受取る、蓋し今月分小使なり。

十一日 晴天

午前八時頃よりおせい子と御殿山に観桜に行き九時半頃帰宅しぬ。時に花ハ蕾花開花に半ばしたる頃にて見物なりしに、如何にも梨畑とも謂フべき風情ハ余り若木なる上に如何にも人物製造の跡見へて余感服せざりし。反て芝山内の北裏のべんてん社内及び其近傍の景なそ見物なれ。秋葉氏今日初て学院へ遊談に行かる。午後又有馬氏来談、秋葉氏同道、御殿山より品川の加藤氏方へ

行かる。余小倉氏を訪ひ、直に自営館に到り先月分と今月の弁償金を払ひ証書を請取る、昨日自営館にて約翰福音の註解を求めぬ、二十五錢なり、

十二日 晴天

〔欄外〕「腦恙」

午後一寸曇りしハ花曇りならんとみる程に乍ち驟雨となりき、されどいで花みんと御殿になぞへ出掛られたる人々の周章見るか如し。午後河合氏来り、時に秋葉氏、石原氏へ行れ居し時なれば直に彼方へつれられぬ。余四五日前より氣力衰へ修学の心励まざるハ脳部の微恙にやあらん、さればこそ規則立ての読書も変用^(変練カ)怠り勝になるハ是非なき次第にていと齒痒し。夜祈会に行きぬ、

十三日 晴天

〔欄外〕「桜花満開」

午後一時より中山氏の葬儀台町教会にあり出席す、実^(部カ)に氏ハ明治学院の普通学院に居た人、今年ハ正に卒業せんと聞きしが、果なくも一昨夜十一時頃恍然逝去されしなり、于時年廿四、氏瀕遊の看病人ハ氏の□定姉なりしと、姉の悲痛如何ならん、余脳部尚不快、

十四日 晴天

脳部尚同前、午後八時頃に柳氏(小管)来談、姉ハ今日千葉より出京のよし、彼地も大部盛なりと、又此間中ハ五時間程大演説会あり、何れも好景色なりしと、同姉の評に我父も昨日帰国の途に就かれしよし。

十五日 天晴

午前土屋姉来り、秋葉姉同道品川の医者へ行かる、土屋姉ハ医者の内談にて肋膜とか肺とかの悪しきにて、秋葉姉ハ脳病（経恙）にてなり、

十六日 雨天

昨日午後四時頃より出発、波多野へ五時半頃着し同家にて夕飯を馳走になり、其うちに奥様御病氣大概御快方と見え牛込の海老原へとかへ行れたりとて帰られ、又七時半頃にか承五郎氏ハ社の北川と今一人を携れて帰宅す、余九時頃退去、直に神田錦町なる里見氏が寓に至りぬ、余到るか数本の管徳利と紅白の酒杯等の乱れ居しハ一宴の済みし処なりしと見へぬ、其うちに戸田なる者来談、十一時過着床す。今関谷へ傘を返しにと来しなれど又く雨模様となり、彼方へハ此次となし、帰宅せしハ午後五時頃なりき、時に此度佐倉より九十九里へ行るてふ馬場姉暇乞に来入、余初て面会（但し名乗らず）、今日里見氏の宿友二人に前宿友たりし大磯の者一人都合五人にて九段坂より同景内を散歩せりき、余昨夜より里見氏の寓に居るや友人の来談絶間なきに其彼等の談話たる穢醜極まるを非常なりし。柳沢氏昨夜来入、彼ヲルガンの金作大に運び好く、マクネヤの如きも即金十円、徳島の原・小川の両氏の世話にて五円、九十九里にて二十円、秋葉氏二円、^(26|42)バラ氏五円ハ既に定額にて、其外にバラ氏同五円、マカコー^(26|43)レー氏の世話にて十円、余ハ出来べしとのことにて氏の喜び言わん方なかりしとなん、又ピヤソン氏^(26|44)よりも即金二円送られし由、昨日里見氏へ太平記中、下の両巻を貸しぬ。

十七日 晴天

〔欄外〕「服部・馬場の両姉下東す」

服部・馬場の両姉ハ今朝佐倉出発の途に就けり。萩野氏来談、清子、秋葉氏と御殿山へ行れき、于時午後三時頃なりし、同氏同道、秋葉氏ハ四時頃より三田へ行かれ午後十時頃帰宅さる、余午後五時頃入浴す、去る十三、十四日と醜事ありき、而して今日又其復徹(復徹カ)に落ち入りぬるこそ悲しける、今日よりミステリーブライフを読初む、秋葉氏の計にて和田英作氏(26-45)に近思録貸しぬ、氏は直に横須賀へ行かるなりと。

十八日 晴天

〔欄外〕「旧暦三月三日」

中田姉木更津へ立たる。今日御殿山の観桜館にて神学部カミガクの親睦会ある由。脳恙昨日より快たり。今日ハ旧暦にて三月三日なり、田舎の雛形祭想わる。去年の今日雪降り積りき、

十九日 晴天

余此頃の着裳ハ去る十五日よりシャツハ重に重の羽織なり、足袋も同日より廃しぬ、且し外出の際ハ其限に非ず。今日半切を求む。

二十日 晴天

余国元なる親父と母に同封にて消息を出し、又里見の純氏と御叔母様へ同封にて出しぬ。午後秋葉氏の基督教新聞の表紙附を初む。

二十一日 雨天

午前七時頃、余正に沐浴齋戒せんと台所に至りし頃、小倉君入来、余を召くに例の写字件の依頼事にて、直に諾し彼直に去り、余食後出發せしハ八時頃なりし、かくて凡そ十葉の草稿を写し且つ添仮名を為すに午後七時頃まで、しかも寸時も休まずして掛かりたり。時恰も九時頃に至り、右草稿を逋送方引受て帰宅しぬ。

二十二日 晴天

今日芝教会の親睦会ありて秋葉氏午後出發せりき、昨日ハ風月堂にて今度歸米のインブリー氏の送別会⁽²⁶⁾あり、氏此へも行れき、今日又秋葉氏の新聞表紙を張りき。

二十三日 曇天 安息日

余秋葉氏と台町教会に伺ふぞ、氏ハ最早芝の方ハ休職のことに先方へ掛合たりと、午後川崎・有馬及び石原氏も一寸來談ありき、今朝親父より秋葉氏へ音あり、要ハ今度の日曜日頃フルベッキ氏來松に付き其相手に誰か日本人にて今一人來られ度しと云ふなれど、元來教師達の口無しに暇なしなる、大概ハ六ヶ敷由報し遣りき、昨日風月堂にて植村氏ハ秋葉氏に山田なる者ハ此秋神学部へ入学せらるゝやと問れしに、氏然りと答へし由、実植村先生の放忍⁽²⁷⁾且無頓着の様子にも不拘、かくも注意深きとハ案外の人物なりと知られたり。

二十四日 晴天

余昨日より内村氏のものせる基督教信徒のなぐさみなる書を読み今日読み畢りしが、余の凡人なる適當の批評なぞなし得るに非ずと雖も、字⁽²⁸⁾て飛ぶが如き勢あり、且つ題名に反かぬ意味紙面に

溢れ坐に心に安慰を得たり、蓋し近頃の一大文字と云ふべし。午後久野・荒木の両姉来談、午後小倉君一寸来り、余に先日の手間を呉んとす、余辞す。六時頃より雨る。

二十五日 雨天

乍ち雨降り乍雷鳴り乍晴れ乍風起り、遂に午後に至て尚止まさりき、五反田なる秋葉氏の父君より同氏へ書状来り、先日泰西通鑑届きし由、又小川氏の金十五円確に済渡せし由。今日午後大に冷気となりき。

二十六日 晴天

〔欄外〕「植村正度⁽²⁶⁾氏来談す」

植村正度氏来談、午前十時頃より午後一時半頃まで話されき、又間もなく青木・松原の両氏来談、之又二時半間位談ぜられき、秋葉氏午後五時頃より芝教会へ祈会にて行かる、植村氏との面会ハ今日を初めとす、余出京後其筈、氏ハ三四年前北海道の方へ行れ昨年の秋帰京されしなりと、而して目下ハ日本評論と福音新報社の会計掛を務め居る由、又聞きが如んバ氏ハ心臟病の処へチブスを罹病し已に危かりしを、医師其人を得先つ快復とわなりたれど彼地の寒を逃れん為帰京せしなりと、

二十七日 晴天

〔欄外〕「井上氏の宗教と教育の衝突論」

秋葉氏昨夜井上氏の宗教と基督教の衝突てふ小冊子を求め来り、余読み初むに所謂曲学阿世の名にそむかずと知られたり、然し此書前半分ハ既に二十八余の諸雑誌に出たることにて、井蛙の如

く世人の迷わされしこと少とならず、故を以て我等基督の慈悲者たるもの宜しく、之が弁駁を之れ務んこと、或ハ必要なきに非と謂ふべし、後論文の去る一月頃より世人の注意を惹起せしこと非常なる様子なり、是れ一寸基督教の為大に障碍なるか如くして、反て其呆れたるが如きハ感嘆の外なし、嗚呼神の摂理ハ深ひ哉！

二十八日 晴天

今日里見純吉氏より手紙来り。氏ハ目下リウマチにて学校休業中の由、然し性漫なる故日ならずして快復すべしとなん、又重吉氏ハ純吉氏と戯れて骨を違へ未だに立歩き不自由なる由、若林おぶし〔ぶじ〕叔も日増に快方にて今日にてハ並々の婦人に大差なしとなん、午後役所より兵事にて呼出来る、

二十九日 晴天

〔欄外〕「兵事に付区役所に到／徴兵検査の達書／頌栄学校・台町教会日曜学校親睦会」

昨日呼出来りたるに依り八時頃より出所し左の切符を受取りぬ。第八百八十九号、明治二十六年六月七日徴兵検査執行に付同日午前五時三十分無遅滞当芝役所へ此書携帯出頭せらるべし。明治二十六年四月廿九日東京芝区役所、山田幸三殿、注意云々：直に帰宅せしハ十時頃なりき。又余近日波多野氏方へ移るやも不知故、彼方へ行き居るも不可なるやと問ふに、当日（検査の日）出所を忘れされハ可なりと、午前稲葉氏来談、午食に筍すし出来、川崎・谷口の両氏をも呼来りき、而して彼等午後五時頃まで話されしと、今年後一時より台町教会日曜学校と頌栄小学校内日曜学校生徒の為め親睦会あり、台町教会の部ハ右時後前教会へ集りそれより田町の議論所の組を

三十日 晴天

待ち居りしも余り遅かりし為出発、大崎村やまもとやら云ふ岡見氏の宅にて執行せり、併し余り周施方不行届の盛か思わしく行かさりしやも見へしが、余ハ中頃より初め同家の山上に居りしも下り来り、小女の西洋鬼コッコや育自押へなぞありしが、是ぞ今日の首戯にてありしならん不知、其時山上にて男子ハ如何様に遊び居られしか、余は秋葉おせい子の宰領にて随行し帰宅せしハ午後六時なりき、余の分のみの会費金三銭（秋葉氏より出さる）菓子ハパンと餅菓子を二度に出されき、会費丈位にてありき。帰途に前より余石原氏等と随行せんと待ちたりしハ少しく氣の着かざりし事ありたり、えも余に於てハ知らざりしもの何かあらんなれば、か様の時ハよくく注意して回心あるべきにこそと坐に後になりて心気たり。全体か様事されまじくもがな。

〔欄外〕「理吉の年期定る」

午後一時より数寄屋橋教会に到、彼処より本郷関谷へ到一宿す、当夜横井氏の教会に至り、氏の我国現今の道德の欠点てふ演説ありき、余の出席するや丁度初まりし処にて、氏の演説の主意ハ今の日本にハ孔子の所謂君子に三の驚るべき者ありてふ語を忘れたるにありてふにてありき。帰関の時、秋葉おせい様の為め画を十五銭程求む、但し一銭六厘と五厘の着色と無色との別あり、又尋に力氏とおせいさんにも五枚と七枚とを呉れたり、総計二十銭五厘にて三十八九枚ありたり。衣服ハ重羽織・重衣・フラネルシャツ等なり、蓋し朝夕いまだ冷風身の毛のよだつ心地することもあり、関谷皆々無事、叔母様お産ハ来月早々なる由の様子に承りぬ、此間親父の理吉の為取定めたる年期ハ初年入店の翌年より八年間とかと確定せりとなん。承五郎氏の著になれる高山

明治二六年四月

明治二十六年五月

彦九郎の伝、大倉孫兵衛より出づ、値二十五銭なりと、好評判なる由し、又目下連載中の米沢鷹山公ハ氏が筆なりと。

出金額合計金二円四拾六銭一厘也、内金一円ハ先月分と今月分の自営館弁償金として払ひし分なり、

五月

一日 晴天

午前八時頃関谷を退き一向に波多野へ参上、皆様御変なく奥様も全快の趣き、然るに峰子様ハ二三日前より腹痛の由にて今日ハ非常なるより学校ハ休業されしとぞ、画本様の物を御覧遊れ居き、承五郎様まだ御出社前なりし、氏の余力なき余が到るや間もなく奥より出来り、一寸礼をなし少しく語り合ふ程にハ先方より余に秋葉の信州行の語を以てせらる、而して余バ其語に續で今月中秋葉氏出立後の間当家へ厄介を促したるに、誠に厚意を表せられしにハ敬服の到りなり、かくて当家を十一時頃退き帰宅せしハ午後一時頃にてありし、おせい様ハ其時学校（隣の）へ御出の留守なりしが、御帰宅するや直に御覧に御成り、御悦の程辞めならざりし、今日関谷退去前叔母様より金二十銭拝借しぬ。入湯す。

二日 晴天

秋葉氏午後山本氏方へ行かれき。当家せい子とおかつ子、田中へ写真を採りに行く、

三日 雨天

九十九里教会の竹内氏より秋葉氏へ手紙来り。氏ハ先月下旬フルベッキ氏より受洗せりと、

四日 晴天

今日萩野・久野兄弟・石原の諸氏来談、九十九里教会の柳沢氏より秋葉氏へ来書、何日頃帰郷せしものによ、余秋葉姉に時計及讚美の購求方依頼され、午後五時頃より出発、一寸波多野へ寄り明後日より厄介を願ふ様申込置き、直に神田の方へ出発、里見君の宿に着せしハ七時頃なりし、かくて同宿にて談話に時を費すこと三時間、後に碁を囲みしハ余黒を三日置きて二度とも負けき、更夜せしを以て宿まりぬ、是より前一寸秋葉氏の用にて自営館に到りたりき、今日青木氏来訪、明日千葉県松尾の方へ保養旁く伝道に出掛らる由、午前松本氏来りき。

五日 晴天

余里見君と同道、讚美歌を（皮表紙）二十五錢にて求め来宿、朝飯を馳走になり八時少し前里見氏ハ役処へ余ハ裏神保町の三〇会社（妻カ）の一元八十錢なる時計を求めぬ、而して帰途に就き着履せし八十時頃なりき、于時に風起り来りき、三田にて（秋葉氏の両国萩野氏方へ行き彼と田中へ行き彼に伝道方を頼み来りしとなん）秋葉氏に会ひき、午後谷口・有馬の両氏来訪、

六日 晴天

〔欄外〕「波多野へ移転す／秋葉氏家族信州へ出発／波多野朝野新聞を止む」

秋葉氏一行午前七時半頃出発。品川より八時二十分の汽車に乗る積りにて出発せられき。学校（神学部）川崎・稲葉・谷口・伊達の諸氏送らる、而して当秋葉家留守居へ神学部（撰科）生徒

明治二六年五月

四人程来りたり、一人ハ小児なり、余は十一時頃波多野の方へ引移りぬ。荷物多かりければ車に乗りぬ、貸^(賃カ)十銭なりし、是より前小倉氏を訪ひしに、氏ハ千屋氏と何処へか遊散にゆかれし由にて留守なりき。波多野へ来りしハ十二時頃にて于時承五郎様ハ庭前にて花園を耕し居られしが、余の為北窓の一間を勉強間に当て机へなぞも非常に立派なるを貸し与へられぬ、午後二時頃より峰子様と叔母様ハ関谷の方へ舞沙汰見舞^(舞)に行れ八時頃御帰宅。是より前承五郎氏ハ余を供ひ一ツ木の縁日にて植木五六本一円二十銭にて求む、中に六十銭なる紅葉ハ丈八尺程ありて見事なる色なり。又承五郎氏ハ今月頃日より朝野新聞を引かれ不日任官の都合なりと。今日波多野より十銭借る。

七日 晴天 安息日

午前ハ昨夜買求めたりし植木を植へにき、十一時頃里見およし様来訪、午後一時頃承五郎様と妻君を留守居に其外ハ余ハ数寄屋橋教会へ、其外ハ皆大久保のつゝじ見物に行かれたり、かくて余数寄屋橋より豊田氏方へ到るに、丁度叔母様と峰子様も御在しけり、余此方等に先にて帰宅しぬ、承五郎様ハ三時頃より駒込の太田家へ倍食に招かれしとて九時半頃御帰宅あり、御料理ハでんかくなりしと、蓋し此ハ太田家にて名代の料理なりしとなん。余教会へ行きしとき鈴木にて讚美歌を求む、代八銭なれど借り置きぬ。

八日 晴天

午前秋葉氏より安着の報来りぬ、途中絶景言筆に尽し難しとなん。今日より靖献遺言を読み初む。北川氏来談。

九日 晴天

今日午後二時頃小倉君来訪直に去らる、氏ハ隣の赤坂病院に明治学院の平山氏入院し居る故、彼を見舞に來りしなりと。千屋氏も伴なりき。

十日 晴天

承五郎様此頃ハ毎日庭作りに出精なり、余も運動かた／＼助く。午後ハ同氏妻君と共に村木屋に花段(花)の集せ木を買に行れき。北川氏来談。

十一日 晴天

〔欄外〕「茄子植」

昨夜注文せし時木來り。十時頃より製作方に掛り午後六時頃出来上りたり、又朝顔・夕顔・茄子・唐辛等を植ふ。又へちまも。午後食後竹を注文す。

十二日 晴天

午後より金魚の池を作らん為、承五郎氏の天津より持來りし桶にとやん及び外部にセメントをぬりたり。右桶とハ箱のことなり。今日家主より庭前の垣を膳はる。

十三日 晴天

〔欄外〕「明治学院文学大会」

昨夜明治学院に文学大会ありし由。庭前の垣を創り初む。里見氏午後立寄られき。北川氏来談。

十四日 晴天 安息日

午前より昨日の残りの垣を為し畢り。土の置き替等もなしたり。午後風少し出づ。今夕ハ一重物

を着す、但しシャツも。

十五日 晴天

承五郎様午前より出でらる。余午前散髪す。但し三銭なりき、今日又波多野より金五銭借る。午後芝区役処に到り余の赤坂波多野へ転居せしことを報届す。而して新堀町なる田中氏を訪わんと彼辺を尋ねしも、遂に見当らずしてむなく帰りたり、于時に風甚しく閉口したり。

十六日 雨天

当家井戸ポンプの処、此二三日中は兎角出悪しきより昨^(昨日)大家に知せたるに今日職人來り直さる。

十七日 晴天

〔欄外〕「松尾交誼社及び其社員」

頃日自家の本箱を窺ふに松尾交誼社文章なる冊子五卷程を見出したり、是れ松尾先輩の遺稿なり、此会たる其創めハ十三年十月頃中野・若林・浜野・大原の四氏の起す処にして、爾來十六年頃まで相續きしものゝ如し、今其会員たる者を同冊子より抜写せんに左の諸氏なりき。海津久馬多・武光軍蔵・横田左吉・大原友吉・中野鑑吉・福嶋庸吉・政尾伝三郎・田中音吉・四宮鶴雄・大原鐵蔵・糟屋帛六・須貝秀郎・浜野釦三郎・若林権三郎・大木寛勝・中山金吾・四宮義雄・横田鐵吉・鈴木勇蔵・鈴木八百次等の諸氏なり、蓋し右ハ文章起稿の者の姓名なるが、此外にも松尾交誼社員なる者あるならんが、其人を尋ね難たし。而して其文章を見るに皆見るべきものなりき。又其文意の歸する処ハ皆当代の政府を罵しりて、自由／＼よと呼ぶが如し。午前青木氏來談時余。又氏ハ里見純吉氏と重吉氏と八日市場にて写真を取りしよしにて見せられたり。重氏ハ目

下八日市場の十三枝へ入院し居れりと。而して氏の去る頃ハ大に快方となられしとなん。氏ハ一昨日帰京、今日より明治学院へ行かれしよし。午後里見お叔様の来訪ありき。今日また庭働きを四時頃より初め午後七時頃に及びたり。

十八日 雨天

〔欄外〕「関谷にて出産あり」

昨日青木氏の話に柳沢氏事又々目下出京せられ居る由。昨朝十五日出の秋葉お勝様の手紙来れり、彼行ハ目下越後国高田市高城村四ノ辻通宮崎八疇方に在留の由。寒冷近日の最なる位なり、一昨日まで一重衣なりしも昨ハ其上に重羽織を着したる、今日ハ又重衣をも重ねざるを得ざる程なり。而して尚寒を覚ゆ。昨夜関谷にて女子出産あり、母子共安全なりとはがきにて報来れり。昨日青木氏の話に河合氏と馬場姉ハ凡ぼ結婚すと、承五郎様尚未だ新聞社の方ハ引きとりにもならぬ様子にて今日も出掛られたり。

十九日 晴天

午後又一ツ花段^花を儲くることとなり、余村木屋に至り、ぬき二間なるを一本八錢にて求む、但し大なる部なれと白木なりし。

二十日 晴天

午後曇り六時半頃より降り出づ。午前小倉氏を訪ふに同氏ハ不在にて大に失望したり、然し聞が如くんバ氏の仕事も粗ぼ成就しかゝり居る由、(余是より先日頃ハ彼仕事多忙の頃ならんとは知り居りて、若し彼にて其最中なりせば助けん積なりしなり)不在と云い熊野氏老人同氏を目黒

見物に誘ひ、氏も逃れ難く東道せられし様子なりと、今日金魚の池の下路を創り初む。今日小倉氏の寓より秋葉氏留守宅へ行き、自分の硯及び御道具等持来りぬ。其帰路新堀町の田中へ寄りしに皆様在せられ、于時十二時少し前なりしが出口氏ハ間もなく出社、余ハ家内の者に大に留められ遂に午食を馳走になり一時半頃退きぬ。

二十一日 雨天 安息日

余午前八時半頃より本郷へ出発、本郷会堂に着せしハ丁度九時半頃なりければ、直に関谷に到り一寸先頃知せ来りし出産を祝し、又再び今の本郷会堂に行き横井氏の説教を聞きぬ。蓋し題ハ人間てふにて学術的に非ずして實際的に説明せられしなりき。関谷にて午食を馳走になり、同午後叔父様と囲碁す、但し余黒先手なりしが少し加減し居りしなり。又夕食をも馳走、七時頃当宿を去り、又本郷会堂にて松村氏(26)の神の秘密てふ題にて万事道理的に解し去らんハ無益なり、必ずや信仰ありて然るべきなり、其信仰の起るの元こそ神の秘密なれと、即ち實際的と云んか主観的と云はんか。同説教ハ七時より初まり八時頃終りぬ、余波多野へ着せしハ九時半頃なりし。国へはがき出す。関谷の安へそのを離れたり。為に沐浴ハ見合せ唯ふきしのみなりし。午後晴れき。

二十二日 雨天

〔欄外〕「吾妻岳の熾火／朝鮮防殺事件(26)落着(49)」

霧雨終日やまず。当家御伯母様午前九時頃より銀座へ出掛られ、承五郎氏ハ同時に出社、去る十九日午後二時十分福島県福島よりの信報に、本日午前十一時四十分県下信夫郡内一切待山と小富士との間突然噴火せりと、又一報にハ其山ハ東吾妻山なりと（朝野新聞）、又朝鮮防殺事件ハ

昨日彼の大石公使⁵⁶より其筋への電報によれば、防穀事件ハ同二十一日大石公使と朝鮮政府との間に公文を取換せ、賠償総額金十一万円、其内六万円を三ヶ月間に払ひ二万を五ヶ年にし二万を六ヶ年にて払はるゝことゝなりし由（同新聞）、尚委細ハ此頃の新聞に明かなり。

二十三日 雨天

霧雨終日、寒冷甚だし、余の単夜に重羽織なるも尚不足を覚ゆるぞわびし。今日純吉氏よりはかき来り日く松村氏の我党の徳育と学生の錦囊とを求められよと。関谷にてハ今日こそ七夜なる可し。今日も寒冷甚だしかりし。

二十四日 雨天

午後八時頃より愛宕の縁日に行き、^{びんば}びんば三本各一丈程・楓樹五尺・ざくろ五尺・外に霧島七本程を一円三十銭にて求めぬ。今日新聞に郡司大佐千島行に際し、氏ハ仙台より耶蘇教宣教師を携れ行かれし由し、然るに是より前、本願寺の某僧等にも彼地への布教策を促したりとて彼等も意氣込居る由し故、何れ彼地に又二大宗派の衝突あるべしとなん

二十五日 曇天

〔欄外〕「名古屋なる基督教同盟会」

午後二時頃より雨降り来る。今日植木屋より芝を持来るや、是より前昨夜愛宕にて求め来りし植木など植へ居りし事とて丁度好く早速芝も植付けたり。目下名古屋に基督教同盟会開会中なり。

二十六日 雨天

〔欄外〕「仏教の^{卑劣}鄙劣的妨害」

今日の新聞に古名屋(名古)よりの信なりとて、耶蘇教大会に際し仏教者に憤論を起し憤擾甚たしとなん。今朝国元より手紙来り、彼地にても皆々無事、里見も村長を止め、徴兵応検者二十名程ありて其うち七八名程ハ合格たりしと。また若林里見何れも養蚕一枚づゝ、須貝にてハ二枚なりと、又我家にてハ不相変売葉の方にて目下二円相場にて二駄程売りしがまだ四駄程ありと。為替にて余へ一円五十銭、福島へ祖母様一周帛にて里見と供に五十銭、是ハ先方より二十銭づゝ送り来りし故なりと、関谷へ産の見舞として七十銭と先來染物の時借りたる壺円三十銭と都合四円送られたり。

二十七日 晴天

午前少し雨降りき、昨日送られたる為替金四円受取りぬ。而して午後一寸庭前の仕事を為したり、又七時頃より承五郎氏と中六番町の祭日へ行き草花及び竹を求めたり、草花ハせき竹十本十銭に西洋な(マヤ)ぜし十銭の十五銭に呉竹二元の二十銭にて運賃六銭を払ひき。

二十八日 晴天 安息日

午前十時頃より当家御伯母同道靈南坂の教会(26-31)に到り綱島氏の説教を聞きぬ、同氏説教ハ聖書を研究せよと云ふにありき。昨日静思余録を求めたり。

二十九日 曇天

〔欄外〕「郡司大尉(26-32)の凶報及無事」

余午前より金魚池の製造に着手し午後三時過ぎ降雨と共に上りぬ、今夕六時頃号外来り、報ずらく郡司大尉自殺せりと、而して宮内省の報ハ変死の模様なりと、而して青森より来りし報なりと

云ふは大尉負傷せりと、又或る通信ハ大尉ハ或る者に面部をうたれしも無事なりと、何れが信ずべきものなりや、明日ハ定めし号外の来りて確実すべし。当家の伯母様ハ重に赤坂靈南坂教会員の設立になるてふ老人会へ出掛られたり。

三十日 雨天

余今朝国元へはかきを出し、秋葉氏夫婦へも手紙を出しぬ。伯母様事煉瓦の方へ宿られたり。承五郎氏昨夜またく銀座より植木を求め来られたり。楓樹三本二十五銭に西洋草花三十七董を四十三銭にて買ひ来られたり。郡司大尉は全く誤りにて、負傷せしにて目下八戸の病院へ入院中なるが何れ四五日中にハ全快すべしと。而して右誤報ハ彼地の警察警部の失策にて、同氏ハ多分相当の処分あるべしとか。余午後四時頃より里見氏の宿に到り更けたればとて宿りぬ。重に神学上の談話に消時せり。余今日青年と教育に人物管見及評論四冊と作文用字弁明を求め。此弁明ハ十三銭なりし。

三十一日 晴天

昨日里見の御叔母様より手紙来り。重吉氏も粗ほ全快せりと。又お越姉にハ再発の気味にて大に困まる由。而して今度ハ是非共再び里見家へ呼び戻さざるを得ざる事情になれりと、余里見氏の寓を朝食前に去りが、バン(二十五銭)を求め関谷に到りしハ八時頃なりし、(当家)家当にても皆様無事、併し昨夜ハ二三日前より時候中にて病み居りし馬事、遂に薬石其効なく死去せられたりとて叔父もまだ床中にありき。彼馬逝前ハ官のとは言へ看病怠なく、夜伽などなして病少しく変ずれば直に電報にて医を呼びたりし程なりと。今日関谷に送れとの金七十銭を香料として外に先來借

明治二六年六月

り受居りたる金壹円三十銭を払ひぬ。又当家を九時頃去り、向柳原なる福島に到り、又父より送られたる金五十銭を同家の祖母一周弔にて、同家より盛物料として里見と我家へ送られたれば、其線泉料(代りぢ)の変に余ハ御霊前御追想料として届けぬ。而して波多野に帰りしハ午前一時頃なりし。当家のおまつ子風邪の気味にて着床し居りき。当家にてハ今日高田・北川の両氏を招きしに、高田氏ハ用事ありとて不来、北川氏のみ来り、十時半頃帰られたり。午後三時頃夕立と思もしき降雨ありき。今夜青天に清月を見たれ共少なりしハ雨後の為空中に塵のなきためならん。

消費額金壹円三十五銭五厘

六月

一日 晴天

今日金魚池のたゞきの試みを為したり。午後主婦夫と共に琴平町の縁日に植木屋冷に出掛けしも是ぞと思ふ程のものもなく帰宅せしハ九時頃なりし、伯母様ハ今日も煉瓦の方へ出掛けられたりき。

二日 雨天

主婦夫始め伯母様・峰子様歌舞伎座の芝居に十一時頃より出掛けられ、午後九時頃御帰り遊さる。高田様よりハおさく様御夫婦のあまり励ませられざるより一幕とやらにて帰られしとなん。行業ハ勸進帳・曾我兄弟・興言(註)等なりし由。

三日 晴天

〔欄外〕「氷川神社の祭礼／川田君ノ帰省」

今日より三日間とやら氷川神社の祭礼なりとて賑わし。午前十時頃浜田氏来談、今日ハ徳富氏の元へ話に来り其帰りなりとて、彼の著書静思余録を貰ひたりとて見せられき。余氏に評論四冊を貸しぬ。氏の話に川田氏ハ去る十六日頃帰郷せりと、意ハ自己脚起りたるを以てなりと。午後一時半頃伯母様ハ峰子様と本郷方へ行かれぬ。余は午後二時頃より白金の方へ出掛け小倉君を訪ふに、同氏学校の方と写真を採りに行れしとのことにて不在なりければ、余は用意の鉛筆もて書置きを為し、願ふに写真送与のことを以てしたり。帰路自営館へ寄り浜田・椎名・田島等と談笑、一時余に亘り帰り掛に波多野へとてイチゴを四錢五厘にて求め、帰宅せりしハ六時半頃なりき、于時御伯母様ハ最早本郷より御帰宅なり、又銀座よりハおさく様御□を携れられて御来訪ありたり。午前浜田氏の来りし時手拭を呈したり。

四日 晴天 安息日

〔欄外〕「吾妻丘再破烈」

午後三時頃より曇りぬ。今日伯母様峰子様と靈南坂教会へ十時頃より出掛、誰とか云ふ西洋人の「未来の功用」と云ふ説教を聞きにき。今日礼例の金魚池のたゞきの実施に取掛りたり。吾妻丘丘またく大破裂となり、前の五倍も大なる穴を生じ今尚ほ焼烟甚だしとかに号外来りぬ。

五日 雨天

昨日出てたる高田なる秋葉氏のはがき、今日正後着午。彼地ハ長野より景氣思わしからずとかやに

申越さる。峰子様午後承五郎様同行(ト)を帰宅されぬ、是より前今朝車にて高田様へ出掛られしなり。秋葉氏進退不(ト)宜のよし。評論を求めぬ。

六日 晴天

今朝国元へはかきを出しぬ。今日また金魚池の叩きに着手せり。午後一ツ木の緑日に到り植木数種を求む中に、な(ト)ぜしこの大董一本十五錢とは安かりし。

七日 晴天

〔欄外〕「徴兵検査／小倉修吉氏逝く」(26-53)

徴兵検査。余昨夜(ト)夜明朝四時頃起さる様頼み置きしに、早や四時十分程前にか余を起さる、于時に食皿等取揃へられ、特に飯も焼き置かれし故、彼が起きたりしハ三時頃にてありしならん、さりとてハ気の毒なりし。かくて余ハ四時頃起き四時半頃出発、芝役所へ着せしハ五時十分程前なりし、于時早や十八人程の先行者ありき、而して其うちにも自営館の尾崎氏も十三番とやにて居りき、其うちに川崎氏も来りしが氏ハ六十七八番とやらに聞きぬ。余評論を持行き同氏に貸し来りぬ。六時と云ふに掛の者より一寸説諭様の申出あり、今日の人員八十九とやらに聞きぬ、偕て同役所を六時少し過出発、麻布役所に到り七時より検査相初り、余ハ八時半頃畢り帰宅せしハ九時頃なりし、検査の仕方ハ控処にて帯取裸体にて試験処に入り、第一に長を量るに五尺・七寸にて、其次に視力ハ医師余が顔を覗きしまでにて彼の見留二つを押され、其次ハ体格にて、少しく下等人か又ハ候者のみ下帯を取らするものによ、余や其前のも後のも取らざりし。其次も同様、今少し精しくして大体の終局を着くるらしき様子にて、此処にて今まで二葉なりし切符を一葉取

られ、渡されしにハ丈五尺七分、其次欄に甲種としてあり、其検査医（軍）の見留ありて此を次の検令官に渡すや、彼ハ余の何人にして何処に居るかを尋ねられ、遂に国民軍の兵とされたり。今日も九時頃より植木の植付を為し、午後ハ又礼の叩きを為しぬ。今日国元より手紙来り、柳沢氏今尚帰松尾せず、彼地にても困り居る由、午後青木氏来り、氏ハ明後日土佐の方へ行かるゝ由、而して余に純吉氏への手紙を託されぬ、氏去る頃水死されたる小倉修吉氏の後に行かるゝなりと、蓋し植村氏の世話なりと

八日 晴天

午前より昨夜承五郎様の銀座にて求められたる植木を植へ、それよりまたく金魚池の叩に取掛り、凡そ出来上りたり。国元よりの為替金二円落手す、昨日青木氏の話に佐藤氏ハ今夏ハ佐倉の方へ行るべしと。

九日 晴天

〔欄外〕「青木氏高知へ行く」

午前より金魚池の叩を初め午後五時半頃登りぬ、御伯母様午前十時頃より田中方へ御出掛、午後三時頃御帰宅あり。于時田中送り来り間もなく帰られぬ、今日彼より聞くに叩ハ叩上しよりこずることを丁寧にせざるべからずとのことにて、またくこすり初めぬ。青木澄十郎氏ハ今日高知の方へ出発せらるゝよし。

十日 雨天

午後二時頃より白金の方へ到り、先づ自宮館へ弁償金壹円を先月分と今月分のとして払ひ、居る

事一時半、浜田留守なりしが兼て同氏へ貸し置きたる評論を田島より受取り、直に小倉を訪ふに同氏丁度居合せ、雑談二時間余にして五時半頃同寓を去りぬ、今日小倉君ハ余が兼て申込たる写真贈与を只今写し合せなしとて言張りぬ、而して其替にとて「基督教と社会」と云ふと宗教哲学の二の何れをか贈る由にて余ハ前なるを受けぬ。同氏ハ此度ハ国へ帰られる様なり。何れ此秋ハ御家内様を引携て御出の由。兼て青木氏その談に佐藤氏は佐倉へ行るゝとのことにてあれば、同氏を訪はじやと到れば生憎にも不在にて千屋氏のみ居り、同氏と雑談とても重に佐倉のこと等なりしが一時間程話し、何れ佐藤氏は是非余を訪ひ度由にて、余は明夜波多野へ同訪あり度様告て帰路に就きしハ六時頃なりし、小倉氏ハ松尾の小供等に本及カードなどを送られて余に托する。今日自営館へ五六月分の払金す。

十一日 雨天 安息日

〔欄外〕「入ばい／叩出来上」

午前ハ何呉となく方付物（付）を為し、午後三時頃よりせき屋に到り、夜服を三枚（重に綿入）預け、帰路里見氏に靖献遺言を戻しぬ。于時同氏不在なりし。本郷にて清教徒紀事を五錢にて求めぬ。かくて帰宅せしハ六時頃なりしか、丁度今来りしと云ふて待ち居られしハ佐藤氏にて、氏ハ余が少しく今朝主婦より聞き記したるまゝを話し且つ見筆記を示したるにぞ大に嬉ばれ、其を以て間もなく帰られたり。当家の御伯母様は今日も教会へ御出遊にしが、全く御自心よりの発心にて未頼しき御様子なり。入ばいなり。

十二日 雨天

〔欄外〕「写真採／出荷／波多野を出づ」

昨日おさく様御来車、余の本郷より帰宅後間もなく帰られけり。当家金魚池に昨日正午頃初て水を入れしが別條なく思の外好景なるより、家内方の御賞讃も一方ならざりし。然て西岸の少しく破れ目を生じたりしハ下の叩の薄かりしとせめんと(マヤ)の欠亡等にて、少しく不完全に出来しが、此ハ大した事になければ今に又せめんとをぬる由、今日午後愛宕下町に買物に到り暗路の燈を八錢(新)にて、西洋婦人の状態を七錢にて求めぬ。又進んで日蔭町に到り田中にて写真を採りぬ、于時に降雨少しありしが至て明かりし、尤も此頃ハ雨天にても差尽なきものなりと、但し秋葉氏より切符を貰ひ来きし為二十五錢なりし。彼の暗路の燈ハ峰子様に呈上したるに、別袂の際承五郎氏ハ余に贈らるハ高山彦九郎を以てせられたり。偕て午後二時半と云ふに余は承五郎様の外の御家内中様に送られて首出の車に打乗て、間もなく蠣殻丁に來りぬ、而して少し前なる上総屋へ荷物を頼み舟錢三錢を払ひぬ、又車屋へハ十錢払ひぬ。而して田中様へ丁度訪ひ一時間程話し、国へ帰らば何れへも宜しとのみにて別に手紙なぞハ托せられず、又口盛氏も皆守してありし。かくて関屋(関)へ着せしハ午後六時頃にてありし、是より少し前柳沢氏を小川町の米山家に訪ふに丁度在宿にて種々話し、同氏私用も漸く方付き(方)かゝりたれば何れ近日帰国する由、尚ほヲルガンの方ハ今十円程不足にて、現に四十六円程ハ集り居る由、然し其不足ハ横浜のバラ氏に出さする積なりと、居ること一時間程なりし。午後里見氏の宿に到り宿まりぬ。今夜も同氏宿友四人程來り。遂に酒やすしやとて大した事になりしハ彼等にハ余り珍しからぬ事なるべし、尤も今日ハ大祝な

明治二六年六月

明治二十六年六月

り、旧宿友来りし為にやならん、里見氏の宿替愈々必要なるべし。今日同氏に金三十銭戻しぬ、是れ兼てよりの借金なり。

十三日 雨天

午後ハ三時頃渡辺嘉夫方を訪ふに同氏不在にて御婦人のみにして、氏ハ此頃ハ試験前の事とて学校より直に図書館に到るよしにて今日も然るよしにて、三時過に到りても見えさりじ(マヤ)、其うちに□本氏より電報を以て当家に來るべく約束せしてふ小沢氏に來りしにぞ大に心配し、当家のおつる様ハ右電報の処四直に就き、嘉夫氏ハ同会に行かれぬ。余ハ三時半頃退き直に牛込なる北田彦三郎氏の寓宅なる伊藤此方へ到るや、如何なる故にや北田氏なる者ハ当家には不在に候と云ふより、余等伊藤氏方にハ非ずやと伺ふに、其者ハ抱児のまゝにて当家の奥様とも思しきが、少しく異様の裁にて名前ハ佐藤にてと言れて出來りて、門札を改むるにぞ佐藤祐丞とんありける、されバ此春同家を問ふたる時、書生風の者北田氏の不在の由申されしも彼の好加減にてありしものか、かくて関谷へ歸りしハ午後六時半頃にてありし。今日は午後晴れ夕方またく降りき。

十四日 晴天

〔欄外〕「重量／出都（関谷を出）／須貝信敏／千葉」

昨日午前山かにて鳥への白地を六十一錢にて求めぬ。但し半金ハ里見氏の出す処にして連名にて送る積なるなり。形ハ一寸五分方(分)の千羽鶴なり。是より前勘工場にて墨を求め、又身体の重量を試みしに十三貫百目(貫)にてありし。其外見上物(土産物)を少しく求めぬ。今日午前七時半頃関谷を発足し福島へ一寸立寄り国元への手紙を受取ぬ、于時伯父君ハ出役、三造氏ハ学校へ御出の後なりし、又

当伯母様にハ今朝より少しく加減悪しく床へ就かるゝ様子なりし。かくて兩國に來りし頃ハ八時半頃にて市川へ來りし頃ハ十一時頃なりしならん、而して八幡より少し來りしに不図車にて來りし須貝信敏氏に會ひ、彼ハ直に余を供に上車させ船橋まで同車し、彼ハ彼地の役処へと別れぬ、彼ハ此四月より巡查の方を止め今の執達吏に転職せりし、然し今ハ其仮なるよしにて何れ近日其試験をなすなりと、而して給料ハ一月十二円程にて巡查より幾分か利益多かるよし、然し受持の範圍、市川辺より西ハ東京より東ハ船橋、北ハ関宿の方に到るまでにて、其間の經費ハ自弁の事なれば随分其費用も多かるべし、但し右試験合格の上ハ月に十五円位ハ入るべしと、兼て病氣なりし馨氏も全快せしよし。かくて夕々内辺にて午食（弁当）を使い、午後五時頃千葉に着しぬ、当家へ産物として画紙・かんざし（里見氏より送られし分）及び日光産なりてふはし二ぜんを遺しぬ。今日信敏氏の話に秀氏ハ二十円程□届、

十五日 雨天

午後二時頃より沓内氏を訪ひ、同三時頃より猪（亥鼻台）の鼻台（26）の医学（54）校なる清水小太郎氏を訪ひ、寄宿舎の応接所にて面談数刻、庭内の建物なぞ案内のまゝに見物し、同四時頃帰路に就き其午頃早川へ着しぬ。是より先き沓内氏を出るや直に降雨に會ひ、再び同家に戻りて唐傘を借り受けぬ。当家にて春子は今年十三歳なるが、学校も高等二年にて成績も賞すべき有様にて、今春の試験にハ優等となり二席にありと、又順氏ハ右へ引替へ落第せしよしにて、父君にも小言沙汰の多かるはさもありなん。

十六日 雨天

午前八時半頃早川を出発、同午後三時頃着金、少しありて松尾より里見叔父来金、在原にても親子共無事なりし、余は里見氏と三十錢つゝにて求めたりし白地六十一錢なるを送りしに、彼女の喜び一方ならざりし、又上より剛氏及び其妻来り、新宿よりハ□の叔母と申す者来り居り、叔父の驕りにて一杯初まりき。是より先き叔父と共に湯屋に到るや、一寸叔父に後れしに余はあやまりて女湯へ入りしハ田舎者と見られしがはしたなりしも其筈、余は未だ地の湯制の今年改正ありしに心付かざりしなり。夜分に及び大風甚だしかりし。

十七日 晴天

〔欄外〕「帰省」

在原にても今年は蚕も上出来の方にて、上げ方に少しく手落ありし為光沢を失ひしも、一杯四円半の割にて十九円程を得、其外に桑の残りを売りたるなどにて廿一円程の利金を得たりと云ふ、而して里見の叔父も自家の蚕繭を当地に持ち来りて売らんものと、余より一足早く車にて松尾方へ帰られたり。余は九時頃より出金、正午頃着松、先づ若林・須貝と一寸立寄りつゝ帰宅せり。午食後里見に到り彼の繭の採集に加勢し、午後八時頃退きぬ。是より先き富多の浅野氏を訪ひ、同氏に面会談話数刻ありて帰りぬ。

十八日 晴天 安息日

〔欄外〕「昔節句／屋形行／新店」

九時前波多野へ安着の報を出す。本日ハ旧の五月五日にて節句なり。されば屋形なる織見氏の処

にても初節句なりとて、昨日も里見・若林と我家へ餅を送られしにて、又今日ハ是非に來れかしのことにて、余は若林の祖父君と同行を約しぬ。但し安息日なりしも少しく思ふ処ありて行きぬ。発足せしハ九時頃にて一時少しにて着先し、午後五半頃先を発足、七時頃着松し直に若林に到り、□□にて入浴し夕食を馳走になり九時半頃帰宅す。老主の温厚にして刮眼なる好商人に相應せる、其婦の除才なく会釈の上手なる好婦、鐵吉氏の妻婦の温順貞婦らしき容貌と其次女の八日市へ嫁したりと云ふの男親に似たる立座の賤しからぬ、実に麗わしき家族とこそ覺ゆれ。而して最も驚たるは言語の応変なりし。

十九日 晴天

午前八時より横芝へ為替を出しに行き、帰路里見へ一寸寄り実業論を借り來りぬ、午後須貝に到りまい取りを手伝^(ト)へ、夕食にすしまかいの飯を馳走になりき。昨日帰路間野氏方を訪問せりき。

二十日 晴天

今日午後一時頃より三時頃までの暑さは非常にして、若林の如きも八十九度程となり、或家にてハ九十度や九十一度なぞ言ひ放てり。午後散髪し五錢五厘を取られ、其足にて若林に至り談話數刻。帰路一寸須貝へ立寄、昨夜の礼をなしぬ、午後六時頃板倉・永井の両氏擊劍を試みんとて庭を借りに來り、許して試させぬ、親父も一本試られき。

二十一日 雨天

〔欄外〕「秋葉氏帰京」

昨夜純吉氏來り、曰く秋葉氏より今朝はがき來り、氏は去る十三日頃帰京、來月の十五日頃まで

またく学校教授に取りかゝるよしは、ウエスト氏（姉）病の為輕井沢へ行かるゝ故なりと、又昨日ひこべい祖母来り昨夜宿られぬ。今夜里見に祈会あり行く、会者ハ我三人と若林おぶしのみなりし。

二十二日 晴天

ひこへい祖母午後退く、聞けば宗谷なる息子の元へ祈会に行てなりと。午前、寛賢次氏来話す、余午後弓を借り来る。今日柳沢氏より報来り。ユルガン已ハ買入れたりと。

二十三日 晴天

午後五時頃より母を置いて内中若林へ招かれすしの馳走となる。余今日午後三時頃より会堂の草取りす。松尾社今日より開業せり。

二十四日 晴天

東京田中より写真来る。午後八日市場へ矢を求めに行き四十錢の鳶の本白なるを求む、但しつる及び皮付の松やにを求む、やには貰ひしなり、つるは四錢五厘なりし。此日は里見純吉・若林芳郎の両氏も同行されたり、帰宅せしハ午後六時半頃にてありし。今夜より焼灸し初む。純吉氏も（相伴之）証番せり。

二十五日 晴天 安息日

午前少し前より会堂に到り一寸掃除を為し、間もなく九時少し過ぎし頃来会者続々入来りしハ、未だ養蚕名残にや十五名程にて、里見叔父祈会后一寸励めを為し閉会せり、此時竹内氏来入せりし。秋葉太平（26 | 55）二氏も来られ、余が家にて弁当を使用され、里見・竹内・川島太三郎（26 | 56）等の諸君と談

話数時、秋葉氏・太三郎氏の帰られしハ午後五時頃なりき。烈暑

二十六日 晴天

〔欄外〕「弓試」

午後里見貫氏より日本評論第五十二号を送られしハ、余が兼て評論を頼み置しがなり。間違にて是を送られしにや。直にはかきにて評論の事を送りぬ。良一事、昨日午後四時頃より青木氏と水深裏の川へうなぎつりに行き午後九時頃帰られしが、八十日程の獲物ありて来り、今日は余も同道、昨日程には行かず、兩人にて漸く良一人にて獲たる昨日の量位なりし。又昨日午後五時頃より会堂裏にて矢放の試みを為し、六時半にか親父も来り、遂に二寸半の的を中て損じき。若林に到り入浴しぬ。此日も会堂の草取を為しぬ。此こへハ父母来り釣せり。

二十七日 曇天

〔欄外〕「安房の勝地／九十九里教会ヲルガンを得」

昨日ハ雨降りぬ。過日早川叔父の話に房州の勝地（海岸）ハ勝山・北條・安房郡瀧口村・朝夷郡曦村北朝夷なぞ宜しと。午後二時頃より教会の草取を為し、同五時頃より六時半過迄試矢曳す。五寸丸二中せり。今日午前十時半頃横浜よりヲルガン到着し里見叔父来り開封せり、午後若林おぶし子来り試らる、量目三十貫程ありて横浜よりの運賃通運にて壱円九十銭なりし。横浜を出でしハ二十三日頃と記しありたり。此日佐倉より二姉今一ヶ月間彼地に滞在させたき旨佐久間氏より頼み来り、里見叔父相談の上十月一杯を贖ひ居らるれば諾と答へやりたり。ひこべい老母帰りたり。午後純吉・芳郎・同祖母・ぶし子・五郎等来り、十一時頃遊れ行かれき。寒暖計八十六度

明治二十六年六月

明治二六年六月

は最高なり。今日貫一氏へ日本評論第五十二号を送りぬ。麦刈りせり。

二十八日 晴天

〔欄外〕「十五夜月」

午前九時少し前里見より叔父君光吉氏・信吉氏を携れて屋形へ行かるゝよしにて立寄られき。今日また余一人にてうなぎ釣りと出掛けしも不猟なりし。午後九時頃より水曜の祈会を開き、会する者里見より伯母様に純吉氏、若林よりふじ・芳郎の両氏なりし。十五夜月也。今日佐久間氏より馬場姉事近日当地へ来らるゝ旨報じ来りぬ。おふじ様宿り行かる。

二十九日 晴天

午前貫一君より評論第六号を送らる。午後我家に小児の集りあり。余須貝にて白石手簡を借り受り来りぬ。夜分芳郎・純吉の両氏来談。五時半頃柳沢君帰す。

三十日 晴天

〔欄外〕「柳沢氏教役辞職並に当教会辞職」

親父昨夜里見へ談に行きしに、柳沢氏には今度役者辞職の申出を為されたりと、蓋し兼てより同氏の奔走せる家内紛擾事件の落着を得ず、遂に帰国して今一・二年ハ故郷に蟄居せざるを得ざる有様とわなれりとのことなり。就而は少しく氏の志案の正統ならざる様思わるれど、それらの事申出可き中ならねば黙しぬ。午後草取す、

消費金二円八拾壹錢

七月

一日 晴天

午後二時頃より会堂の草取を為しぬ、畢て五時半頃より弓曳す、純吉氏も来り試みられき、柳沢氏も来られき。今夕六時半頃会堂より帰らんとするや東南即ち海岸の方より西北の方向に紅様の一線其幅一間程と思しく、青色に出てたるは其外部の赤色なる雲の整然相別れて、青雲を紅の如く出したるなり。何か原因あるらしく思われたり。此宵里見・柳沢の兩人来談、十一時過まで談話せられき。寒暖計八十六度。日雇新吾来る。

二日 晴天 安息日

教会にても今日より時間相更り、朝八時より日曜学校（小児）、九時より祈会、十時より説教となりたり、又午後ハ三時より大人の日曜学校を開く事となりたり、今朝ヲルガンを会堂へ運びぬ。午後五時頃より里見へ行き柳沢氏と囲碁すること二番、第一番には余□に二度目には四目置せしに又勝にき。其うちに親父矢を持来り、日暮まで純吉氏共三人にて試み、親父三中余二中なりし、但五寸丸的なり、畢て入浴し夕食を馳走になり談笑十一時過に及で帰宅せり。八十八度、

三日 晴天

午後三時より草取し、五時半頃より弓試、六時半頃蕪木村の穂積先生床屋に携れられて来り、試られ八発一中せりき。親父も其うちに来り二中余ハ一中なりき。柳沢氏昼間も来られしが夜分又純吉氏と来談、十一時頃帰られき。原おきん姉ふし子姉と入浴に來られき。八十六度

明治二六年七月

四日 晴天

良一事朝飯前釣に行かれ正午頃までに鮒三尾捕り来りぬ。八十五度、柳沢氏近日東京へ出発と聞て同氏を招かん為め序でに純吉氏・叔父君等を招きぬ、又若林様よりハ祖父君と芳郎氏来りぬ、彼等ハ何れも午後七時頃来られ、里見叔父ハ東金より六時半頃帰られ、成瀬にてうんどんを食されたりと惜しかられき。斯て彼等午後十一時頃帰られたり。本月十二日、余、波多野より出発して、小網町上総屋太助方へ託したる柳栖未だに着せず大に心悪し。今日も上総屋へ問合へ遣りぬ。

五日 晴天

〔欄外〕「柳沢氏の辞職」

午前田村より米一俵持来られぬ、是ハ貸の方なりと。我家にてハ今日茄子植せり。午前十一時頃郵便脚夫投書す、執て見れば東京芝区二本榎二丁目四十一番地円福寺内佐藤銓蔵氏より山田幸次郎として余に宛てられたる手紙と同氏よりの神学校規則を送られたるにありき。同氏ハ今三四日の中に佐倉の方へ下らるゝよし。又今朝秋葉氏より里見へ来りし返書には此度の卒業生ハ皆な某任地を極められ、只だ佐藤銓蔵氏のみは□によれば来られ得べしと云ふは何がな、佐倉の方にて同氏と佐久間氏の交代を抗むことよりならん。今宵里見へ親父と招かれ、すしの馳走に預り午後十一時頃帰宅す。同家にて柳沢氏への送別の宴なり。七時半頃より雨降り出し九時半頃止みき。水曜日なれと右故休会せり。夜分大に蒸し、八十二度程なりし。

六日 曇天

〔欄外〕「柳沢氏の出発」

柳沢氏は昨夜八重田の車屋を東金まで三十銭にて雇ひ置き、今朝四時頃出発せられたりとぞ。我家にて父茄子植へ畢りたり。昨日里見叔父より此次の日曜の説教を頼まれ大に苦し。昨日文明論之概略を読み了んぬ。昨朝、又荷物の事に付き登戸の浜田男能方へ往復はかきにて問合せぬ。今日木曜日にて会堂にて小児の集ありしと。

七日 曇天

〔欄外〕「蟬出ず」

昨夜九時頃地震入りたり。今日登戸の浜田男能氏より荷物の事にて返答来り、曰く同店にても不分の由にて早速小網町太助まで問合せ明細取調とのことなりし。今日大に冷気なり、寒暖計七十一度程なり。昨日より蟬を声にて知りぬ。

八日 晴天

親父事昨日より少しく風引（風邪）の気味にて昨夜ハ按摩に療治をさせたりしに、彼非常の張按みと見へ今朝ハ大にはれ出したりと、純吉氏ハ今日八日市場へ学校の友達等と矢を求めに行き、少しく冷気を感じせしが惣ち風邪の気味にて帰宅するや、直に入浴もせで休まれたりとぞ。兼て秋葉太平次（施）氏の周施にて頼みたりし植木屋会堂へ来りぬ。

九日 晴天

〔欄外〕「小川利八郎」

余午前十時より説教す、題詞ハ不極にて祈の方法に就き其形式的なるを説明し、終りに利己的の祈の書を一言して下りぬ。小川利八郎氏来会せりき、同氏ハ三日の日に帰宅せし由、今夜は少しく脚気の味ありて早く帰りしなりと。今日会堂にて衆議により柳沢氏の後任に鈴木壽一氏を頼む事に決定し、里見ハ直に手紙を出されき、又親父ハ泉氏へ伝道者の心中を問合に出す、是れ万一鈴木氏の承認されざるを恐れてなり。植木屋今日より二人となりたり、何れも里見に宿まり居り通ふ事なり。

十日 晴天

〔欄外〕「会堂庭樹修繕の為植木屋入」

今日また荷物の事に就き上総屋へ往復はかきにて問合せり。但し親父の名にてなり。今朝ハ午前五時頃起き、茄子に肥を施し遣りぬ。午後一時頃より若林に到り、冷風にさらされて四時頃帰宅、間もなく里見へ到り夕食を馳走、七時半頃帰宅、親父は三日より風気の処、今日ハ大に快方なりとて午後ハ仕事を初め又会堂へも行かれたり。

十一日 晴天

〔欄外〕「加藤氏と会す」

日本評論第五十三号来る。昨日より家蔵の書籍虫乾に取掛る。午後里見へ到り弓曳、純吉氏尚休校中にて居りしも今日ハ大概全快の旨に談られぬ。六時頃若林芳郎氏立寄り、同氏一寸弓曳き、同道七時頃帰宅す。会堂の庭木修繕の事、今日迄にて悉皆終られたり、手間賃壹円五十銭なり。夜分東定氏の店にて加藤春之助氏に面会し臈て上の餅屋へ来り、右の会釈に甘んじて奥間に到り

茶菓の馳走になり、加藤氏ハ来月下旬ハ東京愛宕下の試験所に到らん積りなりと。余等十一時頃開散帰宅せり、若林より祖母・五郎・ふじの諸氏入浴に來り居き。

十二日 晴天

〔欄外〕「書籍の虫乾し」

今日佐倉の佐久間氏より親父及里見の名宛にて手紙來り、曰く伝道師の義、未だに先方より報知なし、是を待ち居るなりと。今夕親父麦粉三百目をうんどんに製し、少し不足により成頼より足前を十人前程取寄せたりしに、何うしても家の方メリケン粉だけ奇麗に且つ甘まかりし。八時過より会堂に祈会の為め到り十時過ぎ頃帰宅せり。新吾今日限りにて解雇す。

十三日 晴天

〔欄外〕「旧六月朔日」

今朝東京上総屋より一昨々日の返事來り。曰く斯様な荷物帳簿に不目由、併し尚ほ能く取調申へき旨申來ぬ。如何にも敬しからぬ次第なり。それにつけ余が彼の請取状を失ひたるこそ口借しけれ、何事の記付なりとも其事尚ほ済まさるうちハよく／＼大切に所持すべきこと肝要と感じ入りたり。勿論余も前／＼より此等の事軽ずる心得ハなかりしも、今までついぞ此様の事に到らざりし為少く弛心せしなり。今日は旧暦の六月朔日なり。昨日午後六時頃純吉・芳郎の両氏弓曳に來り。直に会堂に到り彼等先づ初め余一発放つや、下部の方場み居りしと見へ切れ、彼等の來遊を無興になしたるこそ氣の毒なりし。昨日買ひたるあぢ大きかりしも二十五本か三錢なりし。午後八時頃里見より叔父君及純吉の両氏來談、十一時過まで居られき。

明治二六年七月

十四日 晴天

今日午後水深の関にて大堤の玄流の子共とやら溺死せりしと。

十五日 晴天

昨日より中庸を読み初め今日畢りたれど、感ずる事今更なりし。書物の虫乾今日中にて畢りぬ。今日きりぐす及びかなくの声聞ゆ。良一、加藤の集会に行けり。

十六日 晴天 安息日

里見叔父説教し、午後の日曜学校にハ里見叔父エペソ書の講義を為し。輪講組ハ加利多前書を何れも今日より初めたり。今日貫一氏より評論第七号を送らる。今日我家の寒暖計九十三度に到り、若林のハ九十四度程となり其外にてハ或ハ五度なぞ言ひ伝ふる者あるよし。午後純吉氏弓を持て来り。余等親父・良一等と黄昏時まで発射し時々中りき、但し七寸的なり、今日太平二氏の話に秋葉氏一家ハ此夏ハ帰国せさるやも不知る由申来りし由。

十七日 晴天

今日東にて新撰正字通を二十六錢にて求めぬ。午後若林へ到り小冊子なぞ借り来る、于時純吉氏も居られ同道し帰宅せり。今宵雨將に降らんとして降らざりし。今日お嘉の組ハ試験なりし。寒暖計八十六度なりし。

十八日 晴天

十九日 晴天

〔欄外〕「土用」

此日より土用。朝程曇りき。今朝、寛賢次氏より教会転会の申出書状来りぬ。余よりハ佐倉の佐藤氏へはがきを出し、上サ屋太助へも又く往復はがきを出しぬ、要は荷物の催促なり。午後里見へ到り庚寅新誌を借り来ぬ。又今宵ハ水曜日にて会堂に至り祈会す、晚来冷風そよめき来りぬの風なりし。寒暖計八十七度。

二十日 晴天

〔欄外〕「余が誕生日／出口音吉氏逝ク」

今日ハ余が誕生日なり、実に余ハ明治六年七月二十日の正午を以て生れしなり、されハ余は今日を以て丁度満二十歳とはなりたるなり。良一朝七時頃より東金の方へ行商に出づ。昨夜里見の叔父に説教を頼まれ大に心掛りなり。北風冷、今朝田中敷翹氏より音吉氏事も一昨十八日午後四時永眠せられしよし申越來ぬ、嗚呼く、午後八時頃より降雨。于時純吉氏朋友の又友人のなりと云ふ懐中時計を持来り東氏脩膳修を頼むなりとて寄られたり。若林芳郎氏、此間渡辺氏ハ手紙を出せしに同氏より返事来り、福島三造氏試業ハ来る二十日にて相済むべく尚ほ及談、決定ハ二十八九日頃になるべしと、而して嘉夫氏来松ハ三造氏就業の合不によりて決定すべしとなん。寒暖計八十三度程なりし。

二十一日 晴天

今午後五時頃千葉より馬場・小管の両氏来松、取敢ず若林へ来られし由、而して馬場姉ハ十七日の日に佐倉を立たれしなりと、又小菅姉ハ馬場姉を送り来りしにて何れ又近日帰葉さる事なりと、同姉等ハ午後余が家へ来訪あり、十時過迄談話せられ終に祈を以て閉会歸られたり、横芝の

成蹊学舎も明日ぎりにて休む由

二十二日 晴天

〔欄外〕「馬場・小管の両姉入来」

今日ハ朝より夕方まで会堂に到りて説教の仕度す、此度会堂の植木脩膳（修）にて出来し木草なそ取方（取）付に就き、鈴木次二郎氏より田村氏にても頼まるゝ由請合れしに、田村氏方も祭り前ハ忙しとて言張遂に鈴木之を方付（付）たり。五時頃里見純吉氏弓を持来り、親父・良一等と大に試みにき。

二十三日 晴天 安息日

〔欄外〕「佐倉へ佐藤氏来／理吉より写真及手紙来る」

余説教す、主意ハ聖書講読（方法）の法方と云ふにありき。今日フルガンの費用の中十円程不足なりしが、之を募集せしに金九円九十四錢程を得たりと、又秋葉太平次氏ハ時計を寄附せんとて金三円を出されたり、馬場・小管の両姉ハ午後秋葉氏と同道蓮沼へ行かれたり、また若林のふじ様も同伴せられたり、尤も同姉ハ少しく心地悪しこととて見合す様語り居りしが、遂に都合により行くことゝはなりしなり。昨日泉氏より不日マクネア婦夫来松さるゝやに申越来ぬ、又井深・山本の両氏も不日来らるべしと、今日また上総屋よりはかき来り、曰く彼荷物（荷）の義目下搜索中なりと、午後里見と連名にて貫一氏及福音新報へはがきを出しぬ、

二十四日 晴天

〔欄外〕「関谷つね子逝去」

今日東京関屋（谷）よりはがき来り、報じて曰く長女つね（恒）事兼て病気の処、本日午後第七時三十

分死去せりと、去る二十二日認め報来りぬ、大学医学医院にて失せしなりと、又佐倉の佐藤氏よりはがき来り、曰く同氏ハ去る二十一日来倉せし由、一昨廿二日出の報なりし。又理吉より手紙来り、特に本郷真砂町にて写せし写真を送られぬ。

二十五日 晴天

〔欄外〕「須貝祖母様不快／里見にて出産／浅間及末広神社の祭礼」

馬場・小菅・若林の三姉ハ一昨日秋葉太平二氏と浜見物方々秋葉氏方訪問に出掛、昨日午後五時半頃帰松されしが、小菅姉にハ今朝浜辺にて小犬に後足を噛まれし由にて、姉ハ直に海水にて洗ひ来りしが今も尚ほ少しく痛む由に申さるより、我家より親父も出掛相談の上加藤氏に見せる方可然ならんと、九時頃より彼方へ出掛診察し貰ひしに別段大した事もなく、不取敢セキタン酸にて洗ひ来たりし、危なき事にこそ。今日我家より関谷へ帛状を出しぬ、又余は田中へ暑中見舞を送りぬ、但しはがきにてなり。真壁の栄氏祭の爲来。里見にて午後九時頃出産ありしと。須貝の大祖母様の御事、数日前より御不子の旨にて、余も去る二十一日頃見舞しが其後兎角不快にて薬石其効見へぬには困まるよし、気の毒の事どもなり。又、叔父様にハ是ハ此頃初まりしにはあらねども兎角貧血の様子にて、加藤氏ハ十二支腸虫ならんかとも思わる由、然し未だ判然せずと。本日は松尾末広神社の祭礼と田越の浅間神社の祭礼にて日暮より賑かなり、午後八時頃降雨ありき。小菅・馬場・おふじの三人ハ熊田氏へ行れき

二十六日 晴天

〔欄外〕「早川順氏入来／手製つる」

明治二六年七月

朝程降雨かなりにて風さへ出て、為に昨日小菅姉と蕪木へ行様同道を約せしが、右の次第故午後
に延し二時半頃より馬場に三人にて行きしに、生憎今日亡父の四十九日祭に当れりとて来客多
かりしが、今日ハ其未亡人に話さん積なりし故、彼の隠居家へ案内され、先づ小菅姉ハ第一番に冒
頭談に引續て教話せり、而して同姉ハ余に罪の事でも話せやと云ふ中、聞人多く来り。遂に志を
果たさざりしも、彼未亡人の求道心の誠に望み居らるゝにハ感心せり、当家の家名否通称を次郎
兵衛殿と云ふ、かくて余等ハ四時頃帰路に就き着松せしハ五時頃なりし。此日会堂側にて弓引相
始まり大に逸したり。八田の人々等も来り試みられき、何れも重藤にハ毒気を抜かれし様なり
し。今日早川順氏来りぬ。早朝四時出、二時頃着松せし由。此夜ハ祈会にて余司会せり。但し親
父・鈴木の両氏ハお鋭姉の騒動にて不参、里見の伯父ハ産にて不参なりし故なり。今日は大に冷
気を覚へぬ。七十二度、此日純吉氏手製のつるを余が弓に附けしが別条なかりし、然し終に利八
来、矢はづをはつして切りぬ。

二十七日 晴天〔凶あり 省略〕

〔欄外〕「撃劍／弓引／角力／秋蚕発生」

此日ハ午前より動き通しにて、先づ初ハ弓を我家の裏にて試み、其うちに良一撃劍の道具を借り
来り、一同一番づゝ試みぬ、余は初め純吉氏と一切長仕合を為し終に親父と一番為し大に労らさ
れたり。かくて午食後また会堂裏にて試弓、昨日に増して試み火に当てき。特に此日ハ初より二
寸半の的に二寸半の弓割等にて、黄昏時まで遊び、遂に若林氏の番に切蔓となり、時に居合たり
し与惣治角力を申出せしに、余先づ試みお箱の寄にて余の勝となりしが、向も矢張此□りきぞ、

已前得手なりし様子なりし。其外芳郎・良一・純吉の諸氏も更く試みられて帰宅せしハ七時頃なりし。それより順・栄の両氏ハ直にこれの方へ行かれたり。純吉氏も追て歸られき。余又八時頃より里見へ見舞に行き十一時頃帰宅し、于時丁度母等灸を焼き居りし故使手に余の九ツ灸をも焼かしたり、処が灸冷氣を得たりしにて大に痛たかりし。午前八時頃在原の婦来り、午後一時頃まで飲酒し里見へ到り又四時頃歸られたり、要は一昨日の濟方金を三十円里見へ持来りしなり、此日母に若林のおぶし様ハ渠に灸を下し貰ひたり。小管・馬場の両姉ハ十一時頃より東陽村向後氏方へ教話に行かれたり、有益なる乗りなりしとぞ、中にハ有為の青年も多く来り居られしとかや、但し小管姉ハ今日出葉さるべきの処里見へ向後氏より使来り、今日来られるや否と問合られたるより伯母様ハ直に若林へ行き小管姉を止みしなり。小管姉ハ足に痛所ある故乗車にて行きしが、馬場姉ハ大本老母と徒歩なりしが、大に弱りし様子なりし、尤も三四日前より出つめなれば其はづなり。運動の取組及優劣は、擊劍にては勝負不明、

第一仕合 里見純吉 山田幸三

第二仕合 山田良一 早川順

第三仕合 山田良一 眞壁栄

第四仕合 山田良一 山田幸律

第五仕合 山田幸律 山田幸三

弓にては的二寸五分丸にて

星第一中り里見純吉

明治二六年七月

第二中り山田幸三

第三中り里見純吉

弓割二寸五分角にて

第一中り山田幸三

第二中り早川順

第三中り里見純吉

第四中り里見純吉

角力にては

第一取組 勝 負

山田幸三 宮崎与惣治

第二取組 山田良一 宮崎与惣治

第三取組 宮崎与惣治 山田良一

第四取組 里見純吉 宮崎与惣治

第五取組 里見純吉 宮崎与惣治

第六取組 山田幸三 里見純吉

第七取組 山田幸三 若林芳郎

第八取組 若林芳郎 山田幸三

此日、原総二郎・藤本・鈴木真砥・平川薫の諸会堂にておきん姉(ママ)のヲルガを聞き居られしが、多

方此を見たさに来りしなるべし、又原氏と藤本氏ハ余等の矢場の方へ来り、三四手試みられしが何れも下りたり、上り過ぎるより之を弓の勢にしてかこつこそおかし、また若林の祖父君も試みられしが是又不届而して弓よはき勢なそと言はるもおかし、此夜里見に行きしに純吉氏出産届を書居りしが、実は一昨二十五日午九時出産にて男子なれハ義吉と名付しと、今年ハ桑を改良せん為秋蚕を一斗分程養はる由にて今日発生せり、午後桑附けす。

此日寒暖計七十八度強なりし。

二十八日 晴天

〔欄外〕「小菅姉帰葉ノ須貝の祖母様逝去」

小菅姉ハ朝八時の馬車にて帰葉されぬ、余食前より送りに行き、帰路須貝へより一寸祖母様の病氣を見舞遣りぬ。高林ハ新田屋へ頼み呉るゝ様頼みたりし、弓つる一本、渠は横着なりとて他の人に頼みし由にて此日届きたり、常より上等なりとて五錢五りなりし故手数料として一錢使しぬ。午後純吉氏来り、間もなく畳屋来り、相共に五時半頃より会堂裏にて試に寛氏も来り試られき。二時頃須貝より御病人様危篤なりとて呼に来り。親父直に馳せ行又七時頃よりハ母も行きしが八時半頃とかに意氣止まりし由、母十一時頃〔翌二十九日の記述につながる〕

二十九日 晴天

〔欄外〕「須貝の葬式」

帰宅。親父ハ宿まられ今朝一寸来られ又直に出行かれき、純吉氏ハ昨夜宿まられ今日八時半頃帰られぬ。此日午後四時頃より須貝の葬式に列し五時半頃出棺、七時頃帰宅せり、会送せし者凡そ

四十名程にてありし。古和よりハ順・栄の両氏も来られき。今日里見へ北田参りし由、

三十日 晴天 安息日

此日石田平三郎氏入来。里見叔父ハ直に氏に説教を依頼したり。而して氏も承諾されて昇譚説出されしハ基督信徒の責任と云ふにてありき、市原計衛氏此夏に到り初て会せられぬ。写真師横浜太田町の某⁽²⁶⁾なる者ハ兼て田越の鷲山方へ来り居る由に聞き居りしが、此日会堂を写さんとて来りしが光線の都合にて明朝に延されたり、併し我等人影ハ此日にも充分差困なきよしにて一同採影せし、人ハ山田幸律・同幸三・同俊三・同ふく・同りゑ・里見富三郎・同純吉・同郎吉・同かし・若林ふじ・同母・同芳郎・笥つや・同勝次郎・息女・秋葉太平二・石田平三郎・筒井小太郎・鈴木二郎・向後鎌吉・布施浅二郎・笥嘉猷・山田わか・馬場姉・浅野氏・小川利八郎・川島伝左衛門・多三郎氏・市原計衛氏・海保能太郎氏の諸氏なりき、尚我家にても家内一同採影せり、

三十一日 晴天

朝程降雨あり、九時頃止みき、而して午後四時頃また降りき、而して直に止みにき。午後四時半頃降雨後昨日朝程来る積なりしが降雨為来らざりし由にて午後後に延したりとて会堂の全景を採られたり、余及び里見の一家女の成人を除けての人等も其景を添へやりたり、尚ほ其後里見一家も採影せり、此日須貝にて祖母様の速夜取越にて会堂より直に参上、八時頃帰宅せり、一寸若林へも寄りしが、馬場姉とおぶし^(ふじ)姉ハ大越より小川氏の方へ行かれしよしにて、余が行きて間もなく帰られたり。此日須貝へ会せし人二十人程なりし。此日午前試弓せし、蓋し写真屋の為、会堂を

開かんとて来りし故なり、而して里見純吉氏の来遊ありたればなり。此日里見にては魚を買ひ過ぎたりとて余は純吉氏に携れられて馳走になりぬ。

消費金五拾三錢三厘

八月

一日 晴天

朝程大に曇り九時頃晴れ、午後三時頃また曇り雷さへ鳴りにけり。里見にては七夜なりとて我家より母事十一時頃より出掛られ、若林よりハおふじ姉ハ助手方くとなりとて九時頃より出掛られ、馬場姉も母に後れて行かれたり、かくて母ハ五時頃外の者ハ八時半頃帰られぬ。五時半頃須貝信敏氏入来。暇乞の為なり、氏ハ明日松戸まで行く積のよし。

二日 晴天

昨日認めたる秋葉氏への書状今日出す。今朝九時半頃千葉町の泉氏より同氏・マクネヤ氏今日出頭、明夜説教会相開かる様順備されよとの事にて、余は直に会堂より純吉氏を伴ひ来り、広告を書き、早午にて富田より遠田・上大蔵の方へ広告張付旁々浅野・小川・布施氏等へ報じ帰宅せしハ六時頃なりし、尤も小川利八郎氏の宅にて大に消光し歸りにハ田越の犬塚氏方へも寄りたればなり。又純吉氏ハ東陽村の方へ行れしなり、今夜ハ水曜日にて出堂、まさに始まらんとせし頃、秋葉省像氏の来入にハ大に驚きたり、聞か如んば同氏ハ一昨日不意に帰省の事と定まり、昨日無

明治二六年八月

事帰宅せしなりと、又明日ハおかつ様も御入来さる由、秋葉氏今夜の進めは祈と行を兼務むべしと云ふにありき。今宵着床せしハ十二時過なりし。

三日 晴天

〔欄外〕「秋葉氏一家帰省／泉・マクネヤの両氏入来／基督教大演説会」

今朝八時半頃、泉氏とマクネヤの両氏入来。直に里見へ案内し、余等も彼処に到り両氏に面会、間もなく帰宅し教会の事等順備し居りしうち、海保・斎藤等の両氏これに入来、午後三時よりハ兼て報じ置きし通り信者の懇談会様の集りを為さんとせし時、里見より諸氏の入来遅かりし為、マクネヤ氏一人に説教を頼み菓子等も出すべかりしに時なかりし為め見合せぬ。午後八時よりハ秋葉氏の天国、マクネア氏の信仰、泉氏の宗教の必要等にて何れも有益にして聞はへありしも、殊に泉氏なるハ上出来なりし。聴衆ハ百五十名程もありしやに見受けしが何れも満足の体にてありし、閉会後もよりの信者にて兼てまうけ置きたる菓子を食し、散会せしハ十一時半頃にてありし、マクネヤ氏ハ自転車にて来られ、今夜ハ昨夜とまられし東金まで氏の演後間もなく帰られたり。会堂の写真今夜一枚出来上り来りしがかなりに出来たり。秋葉太平次氏ハ朝九時頃より少々心地悪しくなりし由にて十一時頃より着床、大したことはなき由にて懇談会へも演説会へも出席なられ、今夜ハ我家へ宿られる事となりたり。今日マクネヤ氏の談話に佐久間氏大多喜行ハ伝道会社にても見合せたるより、同氏・佐藤氏の中、何れをか佐倉へ置きとて登標せしに、佐藤氏の方多数にて佐久間氏ハ行方なくなりしより、我教会へ此夏中なりとも送る事を為すべきやとの事にて、何れも直に頼み度旨申出で、就てハ家見当り次第報知すべしと申上置かれたるよし、おか

つ姉ハ我家へ秋葉氏ハ里見へ行かれたり。

四日 晴天

泉氏ハ八時頃出発せられたり、余も一寸出会たり。此日会堂へ読書に行き九時頃より一時半頃まで嘖^(マヤ)りたり。午後馬場・おふじ・おかつ姉等遊に來り、秋葉氏も里見より入來、十時頃より水瓜を買ひ來り半食せりき、質佳なりしが少しく早熟なりし。此代金十二錢なりと、未だ高かし。秋葉夫ハ我家へ、おかつ姉ハ若林へ行かれたり、

五日 晴天

此日試弓、午後四時頃より初五時半頃終りたり、于時床屋も勝氏の矢を借り來りて加はりき、夕食にうんどんをうたれ、余、純吉氏と手伝遣り午食せり、須貝叔父事昨曉千葉の方へ行かれたり、蓋し病氣診察を受けん為めなり。此日波多野へ暑中見舞を出しぬ。

六日 晴天 安息日

〔欄外〕「須貝叔父は十二支腸虫」

秋葉氏説教したり、余と純吉氏は秋葉氏の勧めに由り六時頃より蓮沼^(マヤ)を行く事となり先着せしハ八時頃なりし、是より少し前歸路にて大松魚を驕り、歸蓮するや直に良平氏調理され大に午食せり、余は此日余の写真を秋葉氏に進呈しぬ、太平二氏は一昨朝車にて歸られし後、何事もなかりし由、此日須貝の叔父よりの手紙否はがきに同氏の病氣ハ矢張加藤氏の診察申し通り十二支腸虫にて二週間位ハ入院せざるを得まじと

七日 晴天

〔欄外〕「蓮沼行浜見物」

此日午前六時頃より良平氏・〔病カ〕□氏・秋葉氏・純氏・余と浜へ出掛けるや、丁度引網の最中にて、収物は小せくろにて五まめの類四五荷と云へ、あまり思はしからざるならんが金高ハ五円なりと、秋葉氏ハしたびらめとこちを貰ひ、其後少々秋葉氏と純氏の泳ぎし後帰宅せり、而して右中の下ハ水生すにて食し、こちは煮付て馳走されたり、午後また純吉氏と一時頃より入海し三時半頃帰宅、談笑数刻にて纏て六時頃退き帰松せしハ八時頃なりし、秋葉氏の蚕は秋蚕なりとかにて此迄三四匹開生居りき。良平氏も大に様子良く、何れ氏の信仰快復も近きことあるべし、余が去る一日、秋葉氏へ出したる手紙今日蓮沼へ届き、余ハ今てハ用なしと直に貰ひ来り、

八日 晴天

お越儀事件に付、屋形より□□〔金皇カ〕とやら申者先日眞野家の事にて鈴木氏へ来り、同氏に談般〔判〕に来られかしと頼み来りし由、而して今日ハ里見の叔父も大に困まり居りし由、午前十一時頃伯母様御事、またく御立腹の体にて車にて帰松、午後六時頃より鈴木氏ハ出掛られたり、余今夜より須貝へ泊まりに行く、

九日 晴天

〔欄外〕「理吉事不快の報来りぬ」

今屋方の鈴木氏より里見及び親父を向に手紙を以て使され、里見叔父ハ三時頃より車にて出掛ぬ、我父も行くへかりしと、東京関谷及び川辺より理吉病なりとて申来り、何れも親父の出京を

望み来りし、お越姉事ハ御面を蒙りたり、今夜ハ水曜日にて出堂、余司会を為し開会せしハ九時半頃にて其うちに親父も入来、閉会せしハ十一時頃なりし、今朝関谷の叔母の理吉を携れて診察を乞ひしにハ腸胃痛とありしが、お□よりのはがきにハカンケ(2)なりと、何れが信か

十日 晴天

〔欄外〕「親父出京」

今朝又関谷よりはがき参り曰く理吉の病カツケの重病なれハ早速出京可然と申来りぬ、親父は今朝五時頃出発せられし由、昨日若林へ田中氏の荷物着せし様子なり、余小倉氏へ手紙を書きぬ、昨日より馬場姉の伝示にて食パンの製法に着手し居れど、今午後二時頃焼上りたるハ少し早かりしがパンなりにハ出来たり

十一日 晴天

里見・鈴木の両氏ハ昨夜里見まで帰りしに、是より少し前間野氏来り居り、若お越姉を間野氏へ置くには今の職業を廃せざるを得ず、故に何かに付け金子入用なれば越姉を置く更りに金子を請求せらん、之に於てが鈴木氏も里見も大に立腹され遂に間野氏ハ憤怒の末にゝくるが如くにして帰られしとぞ、是より前越姉ハ里見・鈴木の諸氏へ話の折くゝに棒もてりなんとし、或ハ火烽の灰を投ぜんとして間野氏に止められて止みたりし事ありしと、如何にも正氣の沙汰とも思われざる処ありと、鈴木氏は現に三〇丁程打たれしとぞ、時に我家の桃盛りとなりぬ、此日寒暖計九十度強、

十二日 晴天

昨夜秋葉兄姉来松、兄ハ里見へ姉ハ我家へ泊まれたり、時に兄の写真を我家へ呉れたる由、今朝東京親父よりはかき来り、曰く理吉病氣事大事には無之、又今日は昨日よりも一層快方なりと、尚ほ明日ハ親父同道本所の朝倉と申す脚氣医に好く聞きたゞし、何れ其様子にて千葉までも帰るべしと申来りぬ、東洋村へ道伝(伝道)へに行れし人ハ若林のおふじ・馬場姉・おりつ姉・小枚橋おかつ姉及び下の老母姉とハ午前八時頃より出掛られ、里見及び秋葉氏ハ午頃より出掛られしか、男子部ハ集らざりしとは此日向後氏用事ありて外出の故なりしと、今日純吉氏と演説会の広告を書きぬ、三十枚、

十三日 晴天

秋葉氏説教されぬ、今日白幡の石田氏も入来されき、秋葉夫妻ハ午後五時半頃より帰宅されたり、于時パン（指押）少々遣しぬ

十四日 晴天

今朝九時親父よりはかき来、曰く理吉事一昨朝脚氣医朝倉氏へ見せたるに胃も脚氣も未だ初まりのことにて大事の様ハ無之、旅行も差支無之由にて昨朝関谷へ引取り、今朝八時の汽舟にて十一時頃千葉の早川へ着、明朝病院長の診察を受けながら須貝伯父を見舞ふ積なりしとは昨日午後三時出の音なり

十五日 晴天

里見叔父事今朝東金へ出発、午後屋形より門野氏・金皇・渡辺伊太郎氏等お越姉(作カ)の嫌にて入来、

鈴木を携れ里見氏へ行かれしも、彼不在にて彼等むなしく帰宅られたり。我家の蚕も朝程より上り初め今日半分過も上りたり。今夕国民之友百九十九号を東にて求む。六銭なりき。今日渡辺嘉夫氏より若林芳郎氏手紙来り、氏ハ今度箱根へ行くと、又三造氏ハ試業失廢(悲)、

十六日 雨天

〔欄外〕「早川順帰葉せり」

暁来益雲濃く八時頃より降雨甚だし、風少し加われりし。今朝親父よりはかき来り、曰く理吉事大西と申千葉の医師に見せしに矢張胃病と脚気の衝突にて大事にハ非る由。然るに昨日ハ熱氣少々有之下痢せし故、大西氏を呼びしに氏ハ今も東金より帰宅せし故疲れ居れり、故に明日早川へ来らる積なりとハ昨日午後投ぜられしものならん、順氏只今歸れりと、順氏ハ昨日午前九時頃大和より歸られ直に千葉へと歸へられたりしなり。水曜日にて里見より純吉氏一人来り、会堂へ集りしハ九時頃にて馬場・おふじ・芳郎・良一・鐸・純吉と余にて、余司会者たりき

十七日 雨天

昨夜ハ福事、須具へ留りに行きぬ。本日、馬場姉里見の方へ引移るに就き、余八時頃より姉の荷物運び遣りぬ。自宮館よりい(26)のち(58)二十号を見本として二部寄賜されぬ。

十八日 雨天

〔欄外〕「井深・山本両教師の来松／基督教大演説会／会堂の大時計求」

風かなり烈しかりし、今日兼てより井深・山本の両氏来松、基督教大演説会を打開くべき筈なりしも、右雨天に加へ風いと烈しかりし故思はしき集も出来ざりしハ遺憾の限りなりし、然し両氏

明治二六年八月

ハ此日午後二時半頃今朝佐倉より出発せられし旨にて着松、八時頃より開会せしに信者二十名程と未信者十名程も見受たり、井深氏の演説ハ基督教の初りしより（我国へ）以来の略歴と今日の基督教の模様を延べられしなり、而して山本氏ハ人生の価値といふにて懇切明細に説明せられたり、閉会せしハ十時半頃にてありしが、于時風雨烈しく何れも帰途に難渋せしならん、鳥嶋の三郎と大蔵の新太郎氏ハ泊まられたり、而して何れも午前帰られたり、里見叔父今朝馬車にて東金より帰松、于時大時計を四円八十錢とやらにて求め来りぬ、是れ教会の爲のにて此うち三円ハ秋葉太平二氏の出金になりとの事なり、

十九日 晴天

〔欄外〕「七夕」

井深・山本の両氏ハ今朝早く千葉迄出発致すべきなれど昨夜ハ風雨にて集も少なかりし故、朝程ハ有志者の為質問に応ずべしとて十時頃まで滞在せられしが、あまり臨席されし人もなく、宮川の向後氏の外ハ皆此辺の五六名の者のみなりき、而して彼両氏ハ十時頃東金の帰車に二十七錢にて乗込まれ出発せられたり

二十日 晴天 安息日

今朝古田氏横芝より来り、曰く昨日午後馬車にて横芝見物に行きたりしなりと、蓋し彼処ハ氏が叔父古田某の住はれし処なればと、今朝日本評論百五十四号来りぬ、又浜田氏よりはがきにて、いのちを購読せられ度旨申来ぬ、秋葉氏説教されぬ、昨日は旧の七月の七日にて節句なりし、処々に七夕を見る、

二十一日 雨天

横芝の成蹊学舎も此日より開校さるよし、里見純吉氏ハ一昨日伊藤氏方へ行き退校及出京の旨を申延^④たりと、尚風烈しかりし、

二十二日 曇天

午後快晴となりぬ、千葉の親父より手紙来り、曰く理吉も追々快方と相成、須貝叔父も追々快となり、叔父ハ今度最後の試業を為し其様子にて帰松せると、親父等ハ二十三、四日頃帰松の積なりと、是も天気次第なりと、東京の理吉の宿よりも見舞状来りき、我家にてハ昨日繭を七升五合程を二円五十六錢にて鵜沢に売りたり、一杯三円八十錢の割合なり。須貝にて梨取られし様なりとて悉皆採り収めたり。今年ハはづれ

二十三日 晴天

〔欄外〕「須貝叔父・親父・理吉帰松」

風少し吹けり、但し南風、今日田村氏及浜田氏へ連封にて手紙出す。午後五時頃親父・理吉・須貝叔父同道車にて帰松、何れも無事、特に理吉は早川にてハ大概休床にありしも今ハ然らず、八時頃より里見より純吉・伯母・馬場の諸氏来り、祈会、親子司者にて十時過閉会せりき

二十四日 晴天

〔欄外〕「百合芋採」

午後一時頃一寸須貝に至り叔父様に面会し、種々入院中の様子等承り、十二指腸虫のアルコール漬をも拝見し、礼・老・釈三人の幅等を拝見し帰りぬ、帰るや里見純吉氏約束の如く来り居り、

直に袴・夸半等の出立にて百合芋を採りに出掛け、中頃にて株折れ若林と鈴木にて鍬を借り六時頃までに百粒程を採りたり

二十五日 晴天

今日午後一時半頃より雷鳴しきりと鳴り雨さへ降りき、是より少し前否直前、石田平三郎氏、明日東陽村演説会の為来松、五時半頃より余等同道、兼て招かれし故出掛すしの馳走に預りき、理吉も招れしも腹具合の為静静させたり。囲碁なそして十時半頃帰りぬ、石田氏へ二目純吉氏へ四目置かしてなり、水瓜を馳走になり帰宅するや我家にても丁度食し終り、余か分とて残し置かれし物ありき、若林芳郎氏ハ足部の腫物の為学校も休み居きとや。昨日床屋より理吉へとて水瓜賜ふる

二十六日 晴天

〔欄外〕「東陽村の演説会」

今東京より、いのち第廿号を自宮館より送られしはがき添へて購読を求め来、又鉄道シグナル。郵便ミツシヨン等も同断、是ハ五部程教会へ来りき、午後里見純吉氏北田へ行かんかとて来りしが、時に三時頃なりければ余り後しとて兩人とも見合ぬ、而して彼此談話の末若林へ行き、若林芳郎氏と理吉にて戦れし碁を受け続き、純氏一勝余二勝と三度試みしうちに日ハ暮れはてにけりき、但し封聞在りき、此日宮川村向後氏方に演説会を催す様兼て同氏より話しありし故、石田氏も昨日より入来、里見方へ宿り今日午後早々出掛られしと、又秋葉氏ハ昨日此地に来るべきの処此日直に宮川の方へ廻られしとぞ、集会ハ十二名程なりしが何れも熱心に求め居れば後來有望

の地なりと、彼等の多くハ説教演説より聖書に就て精しき説明を願ふ方なりと、中にハ哲学談を望み居る者多き由

二十七日 晴天 安息日

此日説教ハ石田氏なりき、主意は心霊の説明及び見修養にてありき、此日大蔵より三四名の未信者入来あり、何れも熱心なる求道家と覚へたり、蓋し布施氏の誘引せしなりと、有望なる事東陽村と比すべし。此日里見貫一氏より国友ハママの民第百九十九号を送られたり、されど余も持ち居る故純氏に遣りぬ。

二十八日 雨天

秋葉氏里見叔父と午後五時頃入来泊せり、同氏の昨日五反田へ行かれしハ源氏明治学院へ入学事件故其相談の為なりしと、而て尚未定カ、芳郎氏の諾非にありと、此日ハ此頃の暑さなりき、寒暖計八十六度、但し午後四時頃よりなり。去る二十四東店より源平盛衰記を四十五錢にて求めぬ。

二十九日 晴天

此日昨日の如く蒸し暑かりし、此頃ハ夕方より朝まで霧空を蓋ふ事咫尺を弁せぬ程なり、今日佐藤銓藏氏へはかき出す、小倉君より返信有之、午後里見より鶏を二羽首落したれば余と親父に來れとて六時半頃より出掛、大に馳走、然るに右鶏の一羽ハ肺病らしき故廃捨せし由、若林のおぶし姉も來り居りき、此夕食後の談話ハ発句界の事にて特に親父ハ即席数句を發せられたり、秋葉氏も二三句出されき

三十日 晴天

〔欄外〕「佐久間吉太郎⁽²⁶⁾氏入来」

此日午前、間野お鍼姉里見へ入来、曰く間野氏此度東京へ行くに就き一寸来りぬ、妾も不日後を追ふて出掛る積なりと、されど里見にてハ其□談なるを不信、直に鈴木・親父を召きに来り、交談頻なりし由、然し鍼姉も此日大に温当に出立られし由、去る程に午後五時頃にか佐倉より佐久間氏夫婦、小児を携れて入松、余は里見叔母否伯母様と直に芝田へ案内し遣りたり、伯母様は鍼姉に面会を好まぬより我家へ来り居りしなり、午後ハ祈会なりしが、十時少し過し頃若林芳郎氏及び秋葉・鐸氏等入来、直に開会、閉会せしハ十一時頃なりき、帰宅するや鈴木・里見親子等鍼姉の此事件に付内談に来られ、終に二郎氏、明日間野氏の方へ出掛る事として別れき、伯母様ハ我家へ留る事となりき、又秋葉氏も同断、佐久間氏ハ昨日荷物を残ず馬車に持来りし由、又学校より持来りたるヲルガンも来りし由

三十一日 晴天

〔欄外〕「二百十日」

此日大暑、寒暖計九十度、此日午後三時頃より秋葉氏の手紙を以て五反田へ西瓜を無心に行き、先づ太三郎氏をと思ひしに氏ハ此日会議ありとて留守、□太郎氏にハ途中にて出会しも度を失し遂に伝左衛門氏へ到りしに源氏のみ居りて伝左衛門氏も不在にて女人共のみなりし故、彼の手紙は出さゞりしに、余等トモに行や早速西瓜を出され兩人共存分に食し、源氏学校事に就き暫く相談の後、余等むなしく帰宅、此よしを秋葉氏等に告るにぞ、親父・秋葉氏の惜しがらるゝ事はし

たならで、余等が右手紙を置かざりしハ千万不徳も思しきなりと少しふらるゝも道理にて、余等大に閉口し純氏ハ居も居られずやありけん、直に帰宅されぬ。余も余りの事故、再び純吉の宅へ行き再拳を計り、八時頃余ハ上の道に居り、氏を待受、道も遠からず難なく太三郎氏が是に到り、此日の終結を告げ、遂に大物二表を貰ひ兩人にて更々からうじて若林まで持来り、彼処にて一休みし須貝にて端尺(短冊)を求め口まかせに記して名譽回復を為したるこそおかし、

一 昨年の種も今年の西瓜かな すみ子 本日ハ二百十日なり。

雨こひの望はてにしあとのあめ ゆき子

出金額五拾五錢四厘

九月

一日 晴天

〔欄外〕「北田彦三郎氏の宅を伺ふ」

余此頃の例として八時頃より会堂へ行き読書す、時しも十時頃にか純吉氏入り、曰く今より父の用を負ひ北田へ行けど同道ハ如何と、余曰く諾とて即ち一寸家に帰り直に出発、先着せしハ十一時頃なりしが生憎にも彦三郎氏今將に外出せんとて身装も出来門口に出で来りし処にて、余等入るもはした出るもはしたにて進退少しく谷まりしが、氏の申にも一寸出行くなれど明日に延すも苦しからざれハとて見合せられ、余等も仰に従ひ足を洗ひ上半先づ久しぶりの面会辭を済すや、

明治二六年九月

幡二郎氏も出来たり挨拶しぬ、少しありて西瓜の馳走に預はもなく午食出で是ハ今日野合の木内氏方へ見上(土産)にとて買たりし魚の残りなりとて極鮮品の魚を馳走しなりき、其時青のすの御親父も来り居り北田と一杯喫し行かれ、やゝありて北田碁を進むるにぞ、純吉氏先づ九目置にて掛り、其後〇七目置にてかゝり相応なりき、夜分に及びたれば遂に帰る事となりぬ、此日四時頃時々降雨まし、又夜も少し降り雷さへ聞へき、純吉氏荷物高村より出さる、昨日二百十日なり。

二日 晴天

彦三郎氏ハ九時頃より青のす方へより野合へ行き其道にて成田まで行くよしにて、余ハ其後より出掛着松するや両氏ハ親父さんと同道来り直に行かれたり、幡二郎氏入来り、昨日純吉氏の持行きし手紙故なり、昨日松尾役場に村長撰(選)拳会あり、里見当撰(選)されし由、併し大概ハ再び辞するらし、北田の来りしも此故なり、今日西瓜を一表つど貫(貫)ひ来りぬ、

三日 晴天 安息日

〔欄外〕「里見叔父再村長に撰(選)ばる」

此日はかなりな集会にて三十名程に見受られたり。佐久間氏ハ二三日前より風邪の催しあり不参せられ妻君のみ来られき、本日説教は秋葉氏の詩篇第六十三篇一節を神と人の靈魂の關係と云ふにて解されしなりき。白幡の石田氏も親戚の人一人携来りき、秋葉氏ハ今夜食後五反田の方へ行れ、明日彼処より蓮沼を指て帰らるよし、此日若林おふじ叔の縁談事件にて里見・秋葉祖母と一寸相談あり、尚ほ秋葉氏ハ五反田へ行掛祖父に氏の承知の通りを語るよし。午後八時頃芝田金三郎氏入来、里見叔父も居り談笑、十時半頃に及びき、筧の事などを重談なりき、芝田氏ハ明日ハ

小見川へ帰らるべしとの事なり、此日午餐に若林へ招かれ、すし馳走になりぬ、秋葉夫婦・馬場姉と共に純吉氏も呼れしも不参、故ハ昨日より腹見合悪しとの事なり、此日村長撰^(選)拳会あり、里見叔父またく当撰^(選)せりと、寒暖計八十五度、此日時々夕立通りき、

四日 晴天

おかつ姉昨夜ハ里見の方へ泊られ本日午後四時頃五反田へ廻り、彼処より秋葉氏と同道帰蓮さるよし、本日佐藤氏よりはがき来り、此度余が出京の際は是非寄れかしとの事なりき、佐藤氏の話に氏も大に疲れ居るよし、蓋し余り心欲過ぎる事のある故なるべし

五日 晴天

〔欄外〕「親父千葉へ行く」

親父、高林銀藏氏の不快故千葉へ行き、瀬川或ハ大西の誰かを往診の為来松を乞はんが為、午前八時頃より出発せられたり。余八時頃より芝田なる佐久間氏を見舞しに大に快方なるとて起床し居し、妻君の方ハ尚ほ床に在られき、之は佐久間氏の申出にハ此処土地剣しければ子玉に障りしなりと言へど、普通に女人に在る月経とや云ふ事ならんと

六日 晴天

〔欄外〕「里見純吉君上京の途に就」

里見純吉氏も愈々此日出発の途に就かるゝ故余が家にても何か別食せばやとて、良一芝横^(横芝)へ買物に行き午食にすし出来馳走せり、尚ほ二時半頃ハ良一の要意^(用)し置きし西瓜を披りしに是れ又佳味なりし。かくて純吉氏ハ径半^(脚絆)わらんじの出立にて午後三時頃我^(我家カ)を出発、一寸若林へ寄り尚三十分

程過ぎ愈々別袂せりき、親父午後八時頃帰松、千葉よりハ明後日大西先生一日掛りにて来診らる積なりと、尚ほ此日ハ遠州より高林のをひの寺田某なる者来診、曰く肺部余痛み居り一部ハ六ヶ敷様なれど養生次第にてハ快方すべけれハよく看病怠らぬ様との事なりと、氏ハ明日帰途に就かるゝ由。此夜祈会あり、会るもの佐久間氏初め余と良一・芳郎・鐸・福・和嘉・□□の諸氏にて里見叔父ハ後にて来りき、佐久間氏司会せられき。里見叔父昨日より出役せり、午後秋葉氏一寸入来、直に帰らる、氏ハ明後になん上京の積なりと。佐久間氏行かれたりと。

七日 晴天

〔欄外〕「医師大西先生来松」

九時頃千葉刀菊より大西先生今日出張すべしとののかき来り、親父は早速高林へ行き周旋方をさくく忙かしく、聽て十一時頃先生入来、直に受診、午食は茂十方へ案内し加藤氏を相手に一杯進じ午後四時頃帰葉されたり、診察の話に銀藏氏病性ハ矢張肺病にて、一方左の部ハ大概腐廢し居るよしにて、今ハ其右方にうつらざる様養生する外なしと、委細ハ加藤氏へ申込行かれし由、蓋し昨日寺田氏の申に肺病は同氏も少々血統にて高林も其数故実はせん方なきなりと、兄弟姉妹等皆なるゝハ此病にて終れりと。此度大西氏を千葉より招聘するに付き病院へ金五円往察料・車料ともに払ひ、外に金二円ハ大西氏へ礼として進呈せしよし、尚ほ理吉も診察すべしとの大西氏の仰せにまかせ一診しもらひしに、尚少々ハ脚氣の気味あり今少し冷気の時節を待ちて出京すべしと。其他に須貝よりおふみさま・叔父様に後られて応診に来りしが、あまり早まりたりとて親父に悪かりしよなと申さるも一理あり、其他に東の正造氏及青木信夫氏等も応診に来りしが、何れ

も差程の性にもあらぬを如山に大西氏を領すとはいみじかりし由

八日 晴天

大暑、八十七度程なりし。昨日午後一寸若林に到り柿しぶを貰わんとせしも無之、波多野にて取りたりしと云ふ西瓜を馳走になりき

九日 晴天

大暑、昨日の如し。午後里見へ行き蕪村の発句の掛物を借り来り須貝^(マ)叔へ貸し遣り、一寸若林へ寄りしに若林祖父ハ一日昨日午後より少々風邪の気味なりしが今日ハ宜しき由、余此間の純吉氏の
上京を警戒して歌を作り遣りたり、

義実が初出の陣にたどへてもかりそめならぬ君かはなむけ

十日 晴天 安息日

〔欄外〕「大蔵の集」

此日尚ほ大暑、八十七度強なりし。又此日ハ旧の二百二十日相当するも何事もなく暑きのみなれば作物の爲め好都合なりと、佐久間氏今日初て出堂、初て説教を為さられ、弁舌と云ひ思考と云ひ衆望あるらしく覚へぬ。尚ほ午後七時頃上大蔵へ教話に頼まれ佐久間氏出掛くとの事にて余も同道、案内せんと約束ハせしものゝ少く熱気ありたれば見合、親父替りに行かれ午後十一時半頃帰宅せられしが、会するもの大凡男女とも十三名程にて何れも謹聴され実に有望なりし由、今夜ハ古和に烟火のあるにも不拘かく集まられしハ特望の求道心あればなるべし。因に記す、同村にてハ目下信徒三名程ハ毎日曜の夜ごとに集会を開き聖書の研究に怠りなしと。此行此頃初てな

明治二六年九月

り、尚ほ未長く続かしたし

十一日 晴天

昨朝八時頃例礼の写真屋を頼み家内中採りたり。馬場姉も二三日中には帰国否帰京さるゝ由にて、里見にてハ今夕すしを造りたりし故来食あれとて余と理吉・良一等を招かれ、余ハ七時頃より出掛け午後十時半頃帰宅しぬ。此腹具合少し常ならざりしが別条なかりし、西川も馳走になりき。若林おふじマツ叔も居られき。純吉氏より尚不音なりと。

十二日 晴天

時々曇りて風少く吹きしが差したることもなく晴れ渡りき。馬場姉明日帰京するに付き我家にてハしるこを造り馳走せんとせしに、最早若林にて矢張しるこを馳走になりしとて充分思尽さざりしハはずしたりき。余此頃十日程前より風気なりしが未だに不快なり。秋葉氏よりはかき来り、曰く同氏ハ九日の日に東京、其日に着せし由、又おかつ氏及おせい子ハ都合ありて共に東京せざりし由。此日ハ大に冷しかりし。一昨日採写真せしハ先月の分、先方にてはづしたれば採り直したるなり。

十三日 晴天

〔欄外〕「馬場姉帰京の途に就く」

佐久間氏此日九時頃より富田・浅野氏の方へ行かれ、其外戸村・栗田五郎左衛門・松崎の諸家へ立寄られたりと、水曜日にて会堂へ集り十時頃閉会せりき、昼間より大に冷氣なりしが夜分ハ殊ニ特更なりし。今日純吉氏より実家父上へ手紙来りしよしにて叔父持来り、拝見するに氏ハ出発せし

夜ハ在原へ泊り、翌日ハ千葉まで北田氏等と徒歩し千葉より馬車に乗り、兩國より貫一氏の宿へ車にて出掛、難なく帰り、翌八日北田・佐瀬等来り、牛肉を午食し此日草間氏へ行き、やゝありて波多野へ貫一氏と同行し、貫一氏ハ帰り純吉氏ハ泊る事とし、翌日二時頃草間へ一寸帰り、又直に二本榎の方へ徒歩にて出発せしが青山の方へ道を失し大に困り、漸くの事にて秋葉氏へ到着せしよし。馬場姉ハ今日上京の途に付き佐倉を廻り、彼地の服部氏（姉）と同道する積なりとて出発せられたり、車賃六十銭なりし由。

十四日 晴天

〔欄外〕「余の荷物見付」

母事、昨日より風邪の気味にて昨夜ハサツソウを服薬せしが発汗なく少便数度あり、大に快くなりしとて今日尚ほ床にあり。本日秋葉氏より手紙来り、曰く純吉氏も源三郎氏も無事入学せりと。学校即神学校ハ二十人程の入学生ありと。余の上京を急ひて来たり。又、上総屋太助より余が柳合利見付り、今千葉登戸の菓子屋に預けあれど御地へ送るべきか、又ハ東京の方へ配達すべき哉とて、わび旁々報知来りしハ、先方にて余の最早上京するならんと心付きたる故ならん、何にせよ幸甚、餅（マド）より朝程松魚一本理吉の爲とて送られき、尚若林よりハ余と理吉に午食を馳走する故来れとのことにて理吉と同道馳走。須具にても招き来りしがかゝる次第故辞したり。去る日曜に採りし写真此日出来、持来られたる。

十五日 晴天

此日上州の櫻井亮海氏へ家内中の写真を送りぬ。昨日知せありし荷物発見事件に答へ上総屋と菓

明治二六年九月

子屋へ又再東京赤坂波多野へ届さる様申遣。

十六日 曇天

明日出京の事にて荷物造りに掛り何となく忙かりし。

十七日 雨天 安息日

〔欄外〕「出京」

此日雨天なりし故集り少かりしが二十人位ハ見へき、但小児部ハ二十四五(ツマ)日名程ありし、鈴木亮治氏久しぶりにて来会ありたり、氏の欠席ハ病故なりしなり。太平二氏の話にお勝姉の此度秋葉省像氏に後れて出京するハ、良平氏親戚の某と上京し居り家内不人なる故なりと、良平氏も今明日中にハ帰省さるべし故、其時ハお勝姉も直に上京せらるゝ由。理吉ハ午後四時頃馬車にて東金まで出発。余ハ四時半頃出家、若林を出立せしハ丁度五時なりき。かくて成東一本松より帰り、車にて田間の稲成まで四銭にて乗り在原へ着せしハ七時少し過ぎなりし。此夜ハ上より御祖母様宿りに来り、不相変面白き口演にハ腹をよりたり、かくて余ハ十一時頃着床しぬ。是より先、余出発の際、鈴木二郎・同亮治・太平二氏・里見・浅野の諸氏、会堂より立寄られ何か議する処ありしが、際するに過日純吉より純吉氏を教会より推撰(薦)して明治学院普通学部(部)の月謝を無謝と為し得る様、井深氏へ頼み込むの一条と、又二ハ佐久間氏を今より永住されんことを同氏に歎願せることなりと、是れ重もなる要件なり。又伝左衛門氏・多三郎氏の両氏も来られ里見と何か談する処ありしが、鷺山家に対する源三郎氏出京の事件なりき様子、何れ里見叔父中に入りて如何様にか落着さすべしと云々、但し源三郎氏ハ到底離別の外なかるべし。此件に關してハ小島家にて

幾分の落度ハありしにもせよ鷺山家の不埒ニ勝るべくも見へず。お越姉本日会堂へ来られき。里見伯母様、余に語り曰く妾ハ鋭を避け東京へ行くべしと云、其意ハ今や鋭姉ハ間野に棄てられしか如き様なるも、鋭姉はあまり意とせざるか如き様子に呆れ、伯母姉にても外出せば実家なりとも里見家にハ正か居られまじ、即ち直に間野氏を通か自分にて暮さん為、他に出行くべしとの計ひなりと。今ま是をなさんと或ハ鳥の目の前にて網を張るが如き感なきを得ず、況んや鋭姉の英眼をや。此度の施費として金壹円五十銭を当飼われぬ。

十八日 晴天

六時頃起床、七時半頃理吉は馬車にて在原前より乗出、切符は昨夜買ひたりしなり、白幡の石田氏も同車なりし。余は八時半頃より徒歩にて出発、野本にて中休止梨三ツ五厘つゝにて茶代共二銭置き、廳て着せしハ一時頃なりし。余は石田氏を見舞人為万菊へ寄りしに同氏不在にて留守人書生風の者出来り、余ハ案内のまゝ其室に入り中食を為し暫らくして石田氏来り、曰く此日ハ余が祖母の東京より帰るを問ひに来たるなりと、其時石田氏ハ東町の方より来られしが、彼方へ向に行きしなりとて彼祖母氏に付之者・執事・下女共二三人来り、別向に入られたり、かくて余ハ食代に七銭払ひ二時半頃早川の方へ来りしなり。かくて間もなく順君・理吉と裏通向山きゝ川の清水小太郎氏を尋ねしに、丁度東宿にて種々相語り東京への伺言など頼まれて別れ帰宅せしハ黄暮時なりし。然して間もなく叔父様も帰られ伺言の言書や小太郎の事など語り、叔父ハ此頃大忙にて八時頃より蚊張のまにて何か□籠。仕事を始められたり、而して此より前、叔父ハ此頃弓を初めし由にて、其購求方を余に岐度にハ非れども頼む様子故、余ハ直に叔父の引く弓を試まばや

とて八時頃より少し先の矢場に至り、早川の弓は何れ位と問ふに四分ナリ、弱め位なるにて極く柔かきものなりき、かくて余ハ四十本程試みしに十三中的に□□二本外入らず、大に恥かしかりし、故ハ病後なる上に旅勞れもありしならん、かくて早川へ帰り十一時頃着床せしか、右の腕上に勞れ稍や眠り得ざりし。叔父様事順氏の事に付き早川申さるにハ、彼も学問ハ不得手なれば何か実業に就かせ度心得なりしが、此頃思ふにハ芝の水光社と申へ入れ度、就てハ三年間位ハかゝるなれど、其うち寄宿舎に置も危険の事故、誰か相当の人ありて賄ひ呉るゝ者なきや心掛られよとの事なりき。此日大に温かなりし。今日東金を出発の際、在原の老母に案内され在原の墓地並に高の墓地を見舞たり、余此日大に勞れしハ病中の故なりと言はんハ少く瘦我慢かわしらねど、實際然るをまた奈何せん。今夜十二時頃より雨肅とおとりもあれ此秋は菊見ながら東京見物に出掛らる由言ひ居りき。

十九日 晴天

〔欄外〕「着京」

朝程七時頃、登戸の汽船宿に到るや八時出の事と聞き暫らく相待ち、其うちに時も来り、松魚なぞはしけ舟に積み終り將に出船せんとするや、沖より一人の馬上軍人來り、曰く此日八時より此下に物を置き登戸山より大砲の試験是あり、通なぞ出来べくもあらねば朝船は見合すべしと注意ありければ、船客の憤怒少々ならず、特に氣の毒なりしハ漁屋（ママ）にてありし、然し其うち一人の魚屋ハ之を船宿に罪せんとせしも、元より不意の注意故、此処に到りし由云ひ含め漸く歸られしが、かく言へバ血氣も減ずるものなり。かくて余等は午後の船に乗らん事と諦め今ハ大砲試の見

物と待ち居るや、隔離一里程沖に一町程距れる的舟二艘を置き登戸山より発砲せし事、大凡二十発程にて正しく中りしハ悉皆無之、何れも近辺にて落ちたり、丸ハ何れも破裂するものにて田舎の花火を的に向て発せし通りなりし。一時間程して彼等ハ稲毛の方へ移られ、余等は再び早川へ帰り、余は一寸修吉氏と多田屋にて国民の友二百号を求、是より前十時頃一寸飯を食しき。さる程に間もなく発舟の時来り、二銭のはしけに船賃二十五銭にて切符を買ひ半道程はしけに送られ大船に入りしハ二時頃なりし、初め一時間位は何の事もなかりしが追々風も烈しくなり、沖に出るに随ひ遂に余は第一に吐戻し、品川へ来るまで吐き続けにて生まれて初ての苦をなしたり、大橋下に上り関谷へ来りしハ六時半頃也

二十日 雨天

昨日の疲を以て一日ぶらつき暮しぬ、又胃を損したる有様故薬種屋にてキエンサンを二銭五銭(厘カ)のピンに求め、理吉にも飲ませ余も服したり。理吉好く耐し寝ぬ。昨日の試みハ小松宅の企なりしなりと、彼も見張居りしなりと。秋葉氏より手紙来り居り、曰く加藤氏より波多野へ送りたる教師の讃言書を貰へと言へと右なし。

二十一日 曇天

午前七時頃関谷を出発、一寸里見氏を伺ふに最早留守にて名のみ書き置きぬ。かくて九時少し前波多野へ着し、午食及夕食を馳走になり、五時頃より二本榎の秋葉氏方へ行くに秋葉一寸留守にて純吉・源二郎の両氏勉強最中なりし、かくて間もなく秋葉氏帰られ種々談話し十時半頃着床す。

明治二十六年九月

二十二日 晴天

〔欄外〕「明治学院神学部試験」

朝六時頃起床、先づ余と秋葉氏同道明治学院寄宿舎食堂にて朝食を為し、再び帰宅し、更て純氏及び源二郎の両氏出掛、余ハ八時半頃神学部の方へ到りしに、間もなく余等本科へ入学の者ハ二階へ別科の者ハ下へと着床し、九時頃より試業相初り、第一番目に漢文附点、其次に英文和訳、其次に文章と二科に別けられしなりき、かくて十二時半頃悉皆済み食堂にて食事を為し、秋葉氏へ帰り、以て其有様を秋葉氏に語りぬ。漢文ハ秋葉氏の説に支那の小説ならんと、又英文ハ、フイツシャルの万国史と何か心理学位のものにて見易かりし、作文ハ武士道とキリスト教と云ふにてありき、余は漢文を以て最も六ヶ敷覚へぬ、外の二科ハ並にハ出来たる積なり。今宵浪多野の方へ帰らんとせし為、学校へ食事に行かざりし為、又秋葉氏宿る故そはやにて三杯を食し以て五銭なし、三銭を家へ見上に持来り遣りたり。今日植村氏、余か試業日故申し余に向て曰く君は英訳を出せしか、余曰く然り、彼に曰く是ハエライと、氏も又□の人、

二十三日 晴天

〔欄外〕「秋氣皇靈祭」

今朝も学校へ食事に行き、其足にて三光町の自営館に到り田村氏に面会し一寸談じ、田島・中村・椎名・峰尾夫婦・佐々の諸氏にも面会しぬ、浜田ハ留守なりき。三十分程経に此処を退き今里町の小倉氏を伺ふに、氏ハ二十日ほどやらに二本榎の東善寺とかへ移りしよし、加藤氏妻君余が声と聞き余が名を呼で小倉氏の事を語られしなるが、彼の婦ハ六膜炎とやらなるよしにて奥の

間にて叫ばれしなり、此時余ハ上りて見舞わんとせしが少しはがりて採口にて答へ注意なぞして去りぬ、時に裏手の畑より仕事の裳にて加藤氏出来り、小倉氏及び同家妻君の病の事逐一語られ、しきりに上りて休まれん事を励められしが辞して去りぬ。純吉・源二郎の両氏リーターの下読を為す由にて余助けやり、十二時過ぎ学院にて午飯し、昨日分と共に朝の分三錢に午の分五錢の割りにて十六錢払ひ出づるや、純吉・源二郎の両氏見へぬハ兼て余と買物同行を約し置き直に出掛積なりし故少しく出掛しと覺り、追行けと見へざりければ遂に断念して余ハ愛宕町の鈴木へより十五錢の皮表紙の聖書を求め、出雲町の警醒社（あきさめ）にて秋葉氏の為めベンリーゼスミスの組織神学を求め、再び二本榎指して日影辺を通るや純・源の両氏、不図古本屋に冷かし居り、彼等も只今一寸警醒社へ到り、君の来りし事を聞き今彼処へ歸り来しなりと、此処より両氏を携れ飯倉まで行き彼処にて別れぬ、時に四時半頃にてありき、余ハ直に波多野へ到、夕飯馳走後里見君の宿を伺ひ、久しふりなればとて宿まりぬ、余の来りし時、間野氏居り、小生ハ色着眼鏡を掛けし為見えたりしハはしたなりし、氏ハ大坂（大阪）へハ行かざりし由、今ハ此辺の月宿屋に止まり何か口を尋ね居る由、当人ハ旧職に就き度旨なる由、今ハエサカ方とも文通互に為したる由。里見氏の友人村上・戸田ハ不相変まだ此宿に居る一更今宵も来られき。里見此日ハ百花園より亀い戸の方へ回避され大に疲れし由、国元へ試業模様を知す、

二十四日 曇天 安息日

〔欄外〕「戸田氏」

戸田氏朝まだきより来り、長談不相変にハ飽る程なりし、氏曰く余は二十五の才にハ村落及び何

明治二十六年九月

とかやらを著すべしと、氏今二十才なり、氏も又文に雄なるの人なり、氏ハ余等に大に曰く余は此程家督ハ妹に譲り度旨叔父へ申送たりと、氏の父ハ亡きが有様なり。氏又文学の事に就き曰く文学ハトクイなる人やアイドルなる人の仕事なりと。自らアイドルを気取ものゝ如し。氏は今麹町の日本中学校(26)へ通学し居る由、余は未嘗て此人の如く好て談じ且つ遊(遊)弁家なる人に会いし事なし。午飯後、里見君と同道数寄屋橋教会指して出発、氏ハ渡倉橋より赤坂へと別れ余ハ真直に有楽町の教会に到るや、入口閉しありけれバ無理に押し開き中に入れバ、思わざりき時間の更りて礼拝式は午前十時よりなるとは、それより直に波多野へ行くや、皆様銀座へ行かれし由にて女共のみにて一寸休息し、草間様方へ一寸寄り叔母に会ひ、貫一と同道神田の氏か宿に來り、一寸休み間もなく退き本郷関谷へ來りし頃ハ正に六時頃なりし。今宵は旧の八月十五日の夜の月にて月見の晩にて、賢き関谷の慣しにて月見の飯なぞ馳走になりぬ。戸田氏名を鶴龜と云ふ、昨日神学弁稿を六錢にて求めたり

二十五日 晴天

(午前七時頃関谷を出発、一寸里見君の寓を伺ふに最早不在にて、余は直に白金指して歩を早やめ、聽て十時頃自営館へ着し田村氏に面会証明書を求むに、午後來れ、浜田に書かせ置くべしとの事にて、余は秋葉氏へ來るや台所にてお勝姉の声せり、余は黙然上座稍暫く彼姉と青物屋との談話を傍聴し居りしが其うちに姉座敷の方へ來り、余の坐し居るを見て大に驚かれし風情にて久ぶりの対面も一寸にて済み、姉ハ又も台所の方へ行かれ午飯の支度を為すか如し。余十二時頃秋葉氏と同道寄宿舎に到り午飯し、直に田村氏方へ到り浜田に此度始めて面会、氏に書せ田村氏に印

を押させ再び明治学院神学部へ来り、井深氏の室に到り証明書を差出すにぞ氏は余に福音史を与へられ（是は呉れたるなり）、其他の分ハ今差当り不足なれば其うちに配分すべし、尚スウィントンは余持ち居る旨通し置き来たり。帰路高輪の東禅寺内の小倉氏の宅を伺わんと徘徊する折柄、不図小倉氏の声にて余を呼にぞ見れば即ち氏なりき、余其家の裏手より座敷の方へ廻り談、半時程なる頃ワイコフ氏入来、余は其ワイコフ氏の着坐の時挨拶せしと供に退き帰りぬ。秋葉氏へ来りし頃小雨降り来き、時に午後四時半頃なりき。）以上は二十六日の記事たるなり

二十七日 曇天

〔欄外〕「入学」

午前五時頃起床、七時四十分頃寄宿舎へ朝食に行き再び帰宅、又九時少し前より出校、柏木氏英学の教授となりて英文学の明日の場所並に歴史の場等を知らせられ、十一時より井深氏の倫理の口演あり、十二時午飯し一時より十五分間礼拝式あり、ランデス氏の福音史ハ氏の妻君病故休まれ、二時少し前帰、余が寄宿舎の宿尚不定、朝五時半頃波多野へ入学の報を為し、又親父より昨日余が身上の事に就て手紙来りし返事を書き今朝出したり。午後五時にハ関谷及貫一氏へはがきを出しぬ。此日井深氏の倫理口演ハまだ教科書の米国より来らざる故なり。又氏ハ此日サツポトの事に付き注意されぬ、チャペルにて川田氏に会ひき。此日長谷川・山野の両氏と知合ひぬ。

二十六日 曇天

〔欄外〕「試業の結果／時間表／教師」

（午前五時頃起床、三時頃まで芝よりの報知を心待し、其半頃より春氏と池の辺を一週し弁天内

明治二六年九月

をも徘徊し歸宅せしハ黄昏時なりし、又宵にハ春氏と天神（湯島上）を詣て来たりき、歸るや叔母の命にて薬屋へ行き、歸るや余等の一步前に脚夫郵便を持って関谷へ行けり、余は心付きたり、里見氏よりの報なりと、而して余は忙て上座を見れば安の如く里見氏よりのはがきにて単に「可喜大兄」君の名は慥に及第生の中に見へたりと、嗚呼、神は余を今は棄てざりき。此報に切するや余は直に早川及び我家へ報知し送たり、蓋し余は親父へ此度のも六ヶ敷様申送りし故、彼の心使さこそと思へば少しも早ふと知ればなり）以上、弧内なるハ去る廿五日の記事たりしなり、余の此度入学せしは神学部内の予科と云ふなり、念の為時間表を記さんに如左

Monday	English B	History B	Moral Science A	Chapel C	Gospel History B
	9-10	10-11	11-12	1-1.15-AM	2.15-3.15
Tuesday	〃	PEconomy	〃	〃	〃
	〃	11.50-12.30	〃	〃	〃
Wednesday	〃	History B	Moral Science	〃	Gospel History B
	〃	10-11	11-12	〃	2.15-3.15
Thursday	〃	Psychology C	P. Economy	〃	〃
	〃	10-11.50	11.50-12.30	〃	〃
Friday	〃	History B	Conversation	〃	Gospel History B
	〃	10-11	〃	〃	2.15-3.15

教授は井深樞之助氏（倫理）・大西祝氏（心理）⁽²⁶⁾・柏井其氏⁽⁶³⁾（英学・万国史）・ランデス氏（福音史）・ワイコフ氏（会話）⁽²⁶⁾・美濃部俊吉⁽⁶⁴⁾（経済）の諸氏、余が組の受持なり。

二十八日 晴天

〔欄外〕「入塾」

此日大西氏の心理学の講義相始めぬ。経済学の教師は此後よりなる由か、余等待ち居りしも来ざりし、是は普通学部⁽²⁶⁾の四年生の為講ずるものにて彼処の教場にて開演さるなり。一昨日一寸笹倉氏に話し置きし通り神学部の寄宿舎へ入塾しぬ。然るに余等予科の中より誰か二人程普通学部の寄宿舎へ行かざるを得ざる由にて、余は右神学部の方は余より後に入来の山野氏に譲り、余は明日普通学部の方へ移る積に為したり。

二十九日 晴天

此日ワイコフ氏の会話始まりぬ。是は各級雑混なり。又ランデス氏は福音史の此次の場所を教へられて終りき。余午後⁽²⁶⁾ベボン館の三階の西隅の室、即ち二十八番⁽²⁶⁾へ入る事に定め、五時頃移りたり、是れ余と同室者となるべき群馬県人平民矢島宇吉氏⁽⁶⁵⁾の撰にまかせて彼処に定めしなり、氏は来る月曜に移る由、氏は明治二年の生なりと、氏とは今朝始め知り合ひしなり。余は又机と椅子を学校より借り受く。今日長野県人清水次郎氏⁽⁶⁷⁾と知合ふ。今夜は別科への石原保太郎、神学本科へのアレキサンデル氏⁽²⁶⁾と柏井其氏の歓迎

三十日 雨天

〔欄外〕「起時並に寝時」

明治二六年九月

余並に生徒新入者の為にとの会并歓迎会あり、六時の鐘と共に開会、北野氏司会にて小倉氏の神学校総代の歓迎の辞並に処感を延べられ、次に別科の八田氏も祝話を為し、次に我組を総代せる千磐氏の感話に續て好田氏の感話又之に續て鹿子間氏の感話等ありて、此度は教師連の答話、先づ第一にアレキサンデル氏は一通りの答辞に附て何処の学校にても其氣風あれど此学校にてハキリストを理想としてキリストにならんと云ふ事なりき、其次に石原、其次に柏井氏にて式終り、菓子や茶出で、其時笹倉氏の名古屋の伝道の報告に附け体育の必要を述べ、是に就き柔術を盛大にせよとの励めありき、又某氏の伝道報告此ありき、聽て八時半頃にか閉会せりき。右は昨夜の記事にてあるなり。偕て今日と云ふ三十日は、朝より夜まで雨りつゞけにて一昼一夜三階楼に蟄居したり。余学校へ来てより朝は大概五時より半の間に起る事とせり。夜は十時過ぎなり。此年神学部の入学生は本科へ十五人に別科へ七人ありと、而して余が組ハ本科内の予科にて其姓名を記さんに左の如し。(福岡県人) 千磐武雄氏⁽²⁶⁾・(高知県人) 池幸雄氏⁽²⁶⁾・(群馬県人) 矢島宇吉氏⁽²⁶⁾・(青森県人) 山野友一郎氏⁽²⁶⁾・(長野県人) 清水次郎氏⁽²⁶⁾・(茨城県人) 長山万次氏⁽²⁶⁾・(高知県) 和田氏三郎⁽²⁶⁾と余なり。

出金額金壹円九十五錢

十月

一日 雨天 安息日

午前七時半頃、山野氏のこわれ傘を借りて秋葉氏の館へ到り、純吉氏を供ひ数寄屋橋教会へ到るに時は九時半少し過にて、田村氏の羅馬書講義の組に入り是を聞きぬ。又十時少し過より礼拝式に、今日は第一安息日の故を以て晚餐もありき、田村此日の説教はキリストの我等の罪を救ひ給ふ事を切に心に覺り居るべしと云ふにありき。時間は尚夏中と不更九時より日曜学校に、十時より説教ありと、余等此処を退き直に赤坂の氷川なる波多野へ到さつま入なぞ馳走になり、午後六時頃余の本なぞ少し携へて帰校したり、余は学校よりの弁当を食し、純吉氏は波多野にて馳走になりしなり、又晩食をも励められしが辞して帰りき。承五郎氏は余等が行くや間もなく外出され帰る少し前帰られたり、余此日益太郎氏の分なりし会話的讀本と誰かの佳人の奇遇を借り来ぬ、又承五郎氏ハ余が家の逸夫の句字のある分葉本なるは国にあるや否と問はん、又彼は大切にすべしなぞ注意され、余が持ち居りたる前巻をも出し供に預けぬ。妻君余程永くより病ひ居れど今尚不快の由氣の毒の至りなり。

二日 晴天

秋葉氏は昨日海岸教会⁽²⁶⁾₍₇₄₎へ説教に行かれし由、然し彼処へ行く事ハ全く言張りたる由、井深氏の倫理の教科書にはホブキンスを用ゆる積なれど未だに着なき故、其中来るべければ其迄ジャネー氏の小倫理を用ゆる由にて今日借^(貸)されたり、然し少し不足故、余は矢島宇吉氏と供読の分として借り受けぬ。矢島氏今日帰りぬ。然し氏ハ四時過友人と出行き今夜は帰らぬ由。昨夜神学部の

明治二六年一〇月

チャプルに明治学院共励会の祈会あり、余出席せり、純氏も来られき。二十人程集りき。井深氏も来られき。

三日 曇天

〔欄外〕「東京第一中会開会／里見叔父出京／柔道初」

此日、美濃〔マナ〕教師始て来られ矢張筆記にて授けらる。若林芳郎氏よりはがき来り、余を祝され且つ本の買入方を頼み来たり、但里見叔父中会の為来京せりと。今日より第一中会芝教会にて開かる。第二もある由。午後四時より穴宮の道場にて櫛辺氏に柔道を教わりぬ、是れ我が此道に就ての初稽古たるなり。衣装は里見より借り来りしなり。午後六時頃より秋葉氏へ行くに里見叔父在り、一寸交談、稍ありて帰宿しぬ、于時七時半頃なりし、服部姉も見へき、氏昨夜は貫一氏の宿へ泊りし由、

四日 雨天

〔欄外〕「中会参聴／花嫁事件」〔26/15〕

此度の中会にては神学部は予科のみ休みならざる事となりしが、今日の午後は定めし是非参観せまほしとの願我等の中に生じ、千磐・八田の両氏してランデス氏に申出しに、彼も昨日よりしか思ひ居りし故丁度よしとて直に承諾され一同相散したり、かくて余と矢島は午飯後間もなく芝教会へ出席、初の程はまだ誰も不居、否田村氏・奥野・其外三四名位なりしが、聽て午後二時と云ふ頃集ふべき員々は大抵揃ひ、其二時より讚美と祈を以て開会され、第一にて田村氏の花嫁事件は和田氏より此を如何なさると中会への申出と、此に就き調査委員を撰びし事は昨日一寸為した

りし由にて、其調査委員井深・山本の両氏は右調査の件々を読挙げられ、中会を此を調査済として受、又是を議すべきものとして委員三名即ち井深・山本・熊野の三氏を撰挙、明日までに調べ由にて先づ今日は是までとし、其次に昨日一寸出たりし加藤氏審判の際、戸川氏の加藤氏の著書に対しあまり委く論ぜば欠物多く出づべければ大概に止め置くべしとの事、教師に不明なる挙動なりと原武一氏の訴訟なるべきを、昨日ハ曖昧にて止みにきは残念なりとて出づるや、奥野其時の議長たりけれバ大に怒りて之を弁論し、稍暫くして此済み、偕て遂には戸川氏に再び今日賛同すべき事あらば能為すべしとぞ、井深氏よりの動議にて向小嶋賛成し、田村氏先づ戸川氏に賛同して曰く君は加藤氏の著書を審判せし時、彼に伺ひ欠物出べければ大概に為すべしと云ひ、又云々曰い出るにぞ、是より先き戸川氏は少しく笑を含みて出立つにぞ傍のバラ氏ハ大に慨歎され注意なぞされ大騒動なりし、然し遂に戸川氏は曖昧なる返答にて終りしが原武一氏の譖言一通ならざりし。然して是此の畢らんとするや、原武一氏は田村氏の事に就き戸川氏の或処為の不通なる事を訴訟として出すべきを動議として出されしが、是は初め木村氏議なりしが、右動議とありし故、直に和田氏に読せるに大に戸川氏の名譽に關する事にて此は訴訟なり、然らば訴訟の手續を為して出せとて却下されたり。窮鼠猫を食むとやら、原氏は皆田村氏より指揮されての挙動なるべけれど如何にも氣の毒なる心掛にこそ。余等まだ閉会ならざる時五時少前退場、帰宿せしハ六時頃なりし。今宵大に冷を覚ゆ。

五日 雨天

中会にては田村氏の事件大騒ぎとなり居る由、余行かず、明日にまで続けらる由。親父より余へ

の手紙秋葉氏方へ来り居り、余午後行きたりし節受取。若林の巡查出で佐久間氏入る由。而して余より此度金子を贈与されんことを今宵はがきにて申遣しぬ。はみがきを求む、但し二錢也。給食はパンを出し大にめずらしがりし故、他に放ふて換へしか、夫にも及ばざりしなりき。此日午前は曇り居りしのみなりき。此日余等三階の二十八番室より下の第八番室へ移転しぬ。

六日 雨天

此日読書將に始らんとするや池氏動議を出して曰く、今日は田村氏の件に就処分^(註)の極相定らん有様にて、我等教役者ともならん者は此時黙々是を傍觀せず慎で傍聽せん事然るべし、就ては余は先づ是れより彼処へ出席せん為退校するが諸君は如何との事にて、諸氏も大概は賛成なりしが遂に此英訳のみ為し然後行かるべしとの柏井の申出より然する事となり、余等十時頃より出席、十二時少し過、余は一寸波多野へ行き午食を馳走になり、又三時芝教会へ到り、議事は田村氏の要求なりし、米国人の証人を呼ぶの可否の否と定まりし所にて、五時なりければ余は矢島と帰路に就き六時頃着宿しぬ、三田にてけい紙一占^(註)を四錢にて求めぬ。又波多野より余が字引を持ち来ぬ。妻君尚まだ不快、然し平臥。

七日 晴天

矢島氏友人と朝七時半頃より横浜へ出掛られたり。余は九時頃より秋葉氏へ行き、馬場姉・里見叔にも一寸面会す、純吉氏一昨日より風邪の気味にて学校も休み居りしと、然し今日は快方なりと。余が荷物、純吉氏の分と共に来り居り、夕飯後車を雇ひて学校まで持来りぬ、但し前日より同家へ預け置きし分も持来りしなり、荷物代は二十七錢、純吉共にて氏先づ払ひ置かれぬ、車代

ハ三錢なりき。

八日 晴天 安息日

〔欄外〕「鳥羽氏尚ジャワに在り／原田章吉」

国元へ昨日荷物着の旨はがき差出す。此日午前八時頃より波多野へ出掛け、里見より頼れ来りし絹糸を届け、直に数寄屋橋教会に行き。田村氏の説教てふ名目の下に氏の此度中会にて宣告されし事件を否み、且つ此事の起りより第一中会の処置の当否を一部始終申出られ、終て原武一氏の中会の模様を語るを聞きぬ。是より前、田村氏説教の前に当り此度当教会の或二十名の人々は連名を以て数寄屋橋教会を日本基督教会より脱せずことを総会に申出る書面出たりと広告せりき、而して是に就き総会は今月末に執行さる由、不知如何なる理由ありて然る者出来しものか。田村氏説教中の語気或は之に付き脱会を煽動するが如き意なきにしもあらざりし。余此処を十二時頃去り一寸高田氏の峰子嬢を伺ひ、彼の叔母様と同行帰宅と聞き直に日本橋なる蠣殻町の田中氏の方へ到り若林より頼まれし蚕の糞を届け、余弁当はありけれど午飯を馳走になり、二時少し過頃彼処より本郷関谷に到るや老母のみにて小児等及叔母様ハ芝の方へ無沙汰見舞に行かれ後にて、余は直に余が合せを貰ひ波多野を指して歩を進め、聽て同家に来りし頃は六時頃にて、すしの馳走になり湯も使ふて七時頃同家を出発、七時五分頃帰宿せり、矢島氏は今七時頃帰宿せしも賄戸を閉ぢ今宵は食^(せず)居る積りと聞き、余は直に余が弁当を食わずして再び持帰りしを腰より取り出し与しは上好都合なりし。かくて余は直に秋葉氏方へ到り、今日田村氏の申出を逐一聞せ相計りて帰宿せし八十時頃にて直に寝ぬ。此日父より手紙来り居り、(秋葉氏へ) 曰く鳥羽氏ハ東

明治二六年一〇月

洋ジャワに写真及び画工の一名士となり大に流行し居り、何れ若林家は錢賭を以てなりとも面目を顕す積なる由、此程音通ありし由。余此日芳郎氏の為ギソウの文明史を二十錢に、ユニオン第四リーダルを二十錢にて求め波多野へ預け、里見叔父(にじか)を渡す様頼み來ぬ。昨日久ぶりにて原田章吉氏に会ひき。

九日 晴天

矢島氏午後小石川へ用達に行れき。余午後秋葉氏へ到りすしの馳走に与りき。佐倉の佐藤氏へはかき出す。此日より合衣を着し初む、但し此頃はシャツに合衣に合の羽織位にて適當なり。此宵西ノ久保の洗沢屋(洗濯)來り、一重物とシャツを遣りぬ。

十日 晴天

親父より手紙來り、曰く彼地にても商景目下の処、大に不景氣にて困り居る由、而して余が分の金子二円は不日送らる由、是も工夫を為してのことなりとなり。又鳥羽権三郎氏よりの手紙の写も送られたり。余午後五時頃より秋葉氏の寓に到り里見叔父に面會、種々談話し芳郎氏へ送り遣りし本の代四十錢を貰ひ、同氏への手紙を頼、七時半頃別れて帰宿す、お叔様も昨日より居られ今宵尚居りき。今日、日本評論社へ余の分此院へ送る様、尚代金処も取に來るべき様申送り遣りぬ。然るに親父の手紙に此程ハ同社より五十一号よりの代金の催促に來れりと写まで送り來りき。叔父事、昨夜は加藤覺氏へ泊まられし由、

十一日 晴天

午後六時少し過、川田氏を伺ひ同氏と同道七時より台町教会に於る祈會に出席し八時に散會、于

時に雨催し余等急走帰宿したり

十二日 曇天

此日ライブラリーよりサレイの心理学（アウトラインヲフサイコロジ）を借受、但し二週間目にて記直すものなりと、純吉氏は昨日よりベースボールを始めたりと。

十三日 晴天

〔欄外〕「金曜会／入会」

此午後四時頃より矢島氏と同道三田に到り、勘工場にて矢島氏はたきを買われ余は慶応義塾の下にて西洋帳面を十九錢にて求めぬ、聽て帰宿せしは五時頃にてありし、余は食事後直に秋葉氏の寓に到り、七時少前まで雑談し且つ聖書の注解並に聖書を調ふるに任用なる書目を書写し来たり、帰るや兼て広告しありし通り神学部チャペルにて金曜会てふ集会、是は明治二十三年の頃創立されしものにて、主意は同窓の交際を暖ため信仰を温め智識を錬磨し以て各自に益しつ益さるゝ様為すにありと云ふ会なる由にて、余が到りし頃は丁度開会の時にて笹倉氏先づ司会となりて此会の来歴を物語り、又今春来大に衰微せしことを歎せられ、又此後尚相続け益々盛大に為したければ諸氏奮発せやとて激励され、次に讚美ありて、鹿島氏の会員の欠席せるゝを歎ぜられ大に進む処あり、同氏祈りて其に鈴木氏の目下の有様にては教会内に活潑なる気性なきを慨せられ、其他に一二名の祈る者ありて祈会は閉会せりき、夫よりし余等新入生の一部其処に居合せしものは皆な其場にて入会し之を帳簿に記し、尚当秋よりは会長を新に撰ひ直すことになり、当標〔投票〕にて笹倉・好川の両氏が幹事となられたり、右会長と記せしは誤りなり、因に記し右会員ハ今

は神学校の生徒は皆会員となり居れりと、又今宵会せしものは余等新入生の七人程を入れて都合十二三名程にてありき。此日評論第十四号を求めぬ。

十四日 晴天

此日朝より二時頃まで心理学の写直に掛り、三時少し過より秋葉氏の寓に到り芋の馳走になり、四時少し前より片山氏と同道御殿山近くまで散歩に行き五時頃帰宿しぬ。片山氏は近日帰省するやも不知と、而して氏は余に語る限、余は身体少しく弱手なれば養生旁々一先づ山間に寓を求め今二年も経ば再此地に來り、其時は神学部え入学せん心組なりと、氏は総領なれど身弱に就き氏の父は氏を見放し、氏の兄弟四人ある故其うちの何れをかを相続となさん積の事故、君は今父に對しても少しく注意を弛められて居る身なれば、神学にても学び幸ひ命あらば道の為に尽し見んとの心組なる由なり。氏の父は氏に法律を学ばせ度旨なれど氏の之を好ま^(このはカ)さは大に父の意を損ひ居るなりと、氏の父は長野にて裁判処え務め居りてキリスト教の為には余り動く方には非るも、賛成家として幾分は通常の人とは異なる由。

十五日 雨天

〔欄外〕「高島女」

教会に到り、序路神田なる里見君の寓を伺ひ彼処にて弁当を使ひ談笑の末囲碁、一回は余三目置にて負け二回目は余四目置にて勝ち、四時半頃(雨降り居りしも)退き一直線に白金へと足を向け、聽て五時五十分頃着宿せりき、此日手帳を五錢にインキを四錢にて求む。昨日は石田平三郎君事、秋葉氏へ來られし由、氏日今日赤坂靈南教会へ行く由、秋葉氏は同氏に里見淑子姉を世話

せんとて此夏の頃より周施^施しやり居りしが、今度秋葉氏へ来りしも其為なりと、同氏は四五日前出京せしにて又二三日中には帰省する由、此日田村氏は説教の時、我国日本基督教会の憲法及び信条等の不完全なるを難ぜられたり、思ふに此度教会内の或部の人の教会脱会説を總會に出せしむ、此意も否此故の事なるべし。里見叔父は昨日帰国の途に着けりと、又里見叔父出京の際は東金より高島女を同道偕ひ来り、一夜は貫一氏が宿に叔父と泊られ、翌日車にて一乗寺へ送り遣りたりと、又昨日叔父一寸見舞たるに、彼女の叔父なる者東京見舞に携れ出る処にてありし由、尚数日の間は滞在し居る由。右今日貫一氏より聞きぬ。

十六日 雨天

〔欄外〕「金曜会々則」

本日は井深氏何故にてか欠席せられたり。笹倉君より金曜会の会則を借り受、之を左に写せり、「金曜会々則、第一章名称、第一条、本会を称して金曜会と名づく、第二章目的、第二条、本会は智識を研磨し徳性を涵養し信仰を増進するを以て目的となす、第三章成立、第三条、本会は明治学院神学生有志者を以て成立す、第四章集会、第四条、本会は毎金曜日午后六時より例会を開く、但し時間は時宜により変更することあるべし、第五条、本会は第一・第三金曜日を以て祈禱会を開き、第二金曜日を以て文学会を開き、第四金曜日を以て討論若くは談話会を開く、但し祈禱会の司会者は幹事之を定む、第六条、本会は時々名士を聘し演舌^説会を開くことあるべし、第五章役員、第七条、本会を整理する為に幹事二名を互撰す、第八、^{マヤ}毎学期の始に於て總會を開き、役員^{マヤ}の改撰、諸事の討論を為すべし、以上、明治二十三年十一月。」と

明治二十六年一〇月

十七日 雨天 神嘗祭

本日は神嘗祭故休業なりき、然に雨天なりければ只だ籠室読書に暮しける。此日渡辺嘉夫氏へは
かき出す。

十八日

今宵里見貫一君秋葉氏の寓へ来られ、秋葉氏及び純吉氏等と来宿され間もなく帰られたり。渡辺氏より返事来り、氏は二十六日頃鎌倉へ発火演習ありて都合悪しければまた不日伺ふべしと。余はまた早川へもはがきを出し、彼の高山彦九郎の返戻を申送りたり。大西氏今日は講演はプロト
プラズムより神経の成立に到るまでを為されたり。此大西氏の事ハ明日

十九日 晴天

此日午後一時頃より秋葉氏へ到るや石田平三郎氏来り居り、又里見お淑様も御来会せりき、蓋し秋葉氏の取計り置きし事なるべし、余は三時頃秋葉氏の生理学二部を借り来りぬ。今宵矢島氏の山野や長山の話すなりと云ふを聞くに、余等此度の新入生は今年度又は試の中にあれば、此学期の費用は余等自弁なりとか又は否とが何れが信なるや氣遣しと。

二十日 晴天

〔欄外〕「金曜会の演説会」

此日より毎金曜の英学の時間は翻訳を為す事となりたり、但し其月曜に先生より其処を知せ貰いて此日までに訳し来る事なり、此日はギツボンの自序の終りを訳せしなるが、余の分は余り原文に拘泥せしやの嫌ありき。又午後金曜会には愈々余と矢島とにて演説を為す様今朝笹倉君より

言渡され大に閉口し、矢島は自信と余は所感として申遣りしに、氏は之を諸処の広告処へ出されしハ大に大事らしく、何となく驚□げに覚へぬ、然し余何ぞ所感のなき事あらんやとて勇を起して弁ずる事とは為したり。余は会開前三十分程前より散歩に出、其時少し考思する処ありて帰校するや、恰も開会の直□にて時計は六時を報じぬ、全体今宵は五時半より祈会を開く積り、六時より演説となさん積のよしなりしが会員の遅かりし為六時より祈会始め、好川氏司会にて石原氏の励めあり、二人程の祈者あり、祈会終て矢島氏先づ自信と云ふ題にてかなりの雄弁を振われ、次に余は所感を存外に長く且失語に為したり、終て比評者好川氏曰く山田氏のは少しまだへたにて、あの位では公衆の前にての説教を出来得まじ、然し沈落なる様子に、財料も沢山の事故後來一層勉強せば宜しからんと、又矢島君のは大に雄弁なるのには感じたりと、次に北野君ハ山田氏は少し威勢なく且つ体裁なども不則あれば其辺後來注意すべしと、又余が品性交換てふ事を述べ、土佐及水戸の事口に出しが彼様の事ハ申さぬ方可然と、然し余其故を不知、其外笹倉君鹿島君の励の為の比評あり、全く閉会せしハ八時少し前なりし。秋葉氏八時頃來り談じ行かれき。今夕散歩せんとせし時、学校の傍らにて里見のお鍼姉の車にて行に合ひける。

二十一日 晴天

〔欄外〕「第一回クラスミーチング／組長」

昨夜室のがきを渡されたり。小倉一寸來りき、少しありて純吉氏も一寸來られき、氏ハ今日赤坂の方へ行かる由。今日クラスミーチングを千磐氏等の寓に開き、先づ会費三錢づゝ出し合ひ余と長山にて菓子を求め來り、十時半頃より矢島氏司会となりて第一にさんびを歌に、次に同氏の祈

明治二十六年一〇月

あり、氏一寸此会を開く(所以)以所を述べ千磐氏の発議にて十分間程祈会を開く事となり、長山・千磐・和田の三氏祈り、又さんびを歌て式は畢る事とし、夫より菓や茶なぞ出され、是を喫しつゝ雑談交々相出、其うちに山野氏神田より来り、池氏はげり気味にて欠席の旨はがき来りし旨是を持来り、夫より稍ありき、閉会し帰宿せしハ丁度十二時頃なりき。但し此会は毎月第三木曜(マイ)日に開くこと、其時は信仰上の感信会は勿論祈会をも開き、以て互に品性の修養を計らんこととしぬ。又時々は野外散歩の事も為すことなぞも定めたり。会せし者ハ池氏と野村氏を除て組中の人なりき、野氏(マイ)ハ昨日より出校されし人にて今日は用事ありとて欠席され、和田氏名紙を持たれき。氏は高知人にて今迄は小学校の教師たりしなりと。又此日の会には竹内氏と云ふ別科の人も居りける。又千磐氏を今学期間の組長に撰びたり。但し学校名順の順に順ふて更る事とせん。矢島氏午後五時頃より本郷の方へ行かれたり、南と云ふ人と同行にて。

二十二日 晴天 安息日

朝八時頃より教会へ行き午後五時頃帰宿せりき。此日田村氏説教は聖書に就てふ題にて聖書の何物たる事、其紀源(起)の事、其勢力と別られて極く明亮(略)に説かれたり、田村此頃の説教らしき説教なりき。尚ほ午後二時よりは教会振起策に議事あり、其前一寸祈会あり、余も祈にて間もなく議事初まり二三の発議者あり、最後に田村氏の辛がりにて今までの放光会・光荣社・麗光会等の上に総長の職を置き、以て今日流行の共励会様のものを作る事に決したり、会するものは十名程にてありし。尚又当教会より第一中会へ田村氏の件に就質問するてふ件ハ早川重躬氏外二十名の出せしものなりと、未だ其何故なる事をも知り得ず、此次の総会に明すなりと。田村氏日本の花嫁は

原田之を訳し、一二三館より出版せらる由なりしが、是は其翌日其筋より出版を禁止されたりとぞ。此本の事に就ても此教会内に二派に別れ居る評者あるなりと、余其誰々なるを不知。又当教会には去る金曜日より今日まで毎夕七時より基督教演説会ある由。現に昨日も一昨日も百五十名程の聴手を得たりしとぞ。矢島氏も五時頃帰らる。午後七時台町教会にて石原氏の説教を聞きける。今日教会月報三十二号即ち十月分のを貰ひたり。自営館出の「(26-16)わらべ」はかなり売れる由。

二十三日 曇天

柏井先生、不快の由にて欠席、為に余等大に助かる。矢島君一昨日より乳を飲まる。午後一寸秋葉家へ行き手帳を閉ち来ぬ。

二十四日 雨天

午後四時頃より晴る。四時少し過より矢島氏と入浴し、衣物の重かりしには驚だり。此日経済の教師欠席せりき。

二十五日 晴天

此日漸く彼の貸費の金五円を貰ひ受けぬ、但し今までは六円なりし由なるが今年よりは神学部の子科の一年丈ハ五円つゝとなりしなりと、こは井深氏の申出なりしが其時我級にても野村・山野・千磐の三氏は体格特(殊)の外不格なればよく注意せよとの事なりき、又我等新生は、尚今年中は試の中にあるなりと、気掛なる事にこそ。かくて午後一時半頃バラ氏より普通学部のヲフイスにて受取りたり、今宵一寸秋葉氏方へ至り七時の祈会へと出掛、八時過頃銀台を頂きつゝ帰宿せり。賄へは二円五十三銭払ひたり、但し先月二十六日より此二十日までのなり、

二十六日 晴天

此日、純吉氏に金五十五銭を歸し、尚残ハ十六銭ありき、又昨日ハ秋葉氏へ荷物の運賃立替の分金十二銭を払ひぬ。午後雨り来り、夜に入り烈しかりし。

二十七日 晴天

国元へはかきを出したり。柔術及びベースボールハ此校の運動科と定まり、井深氏ハ大に生徒諸氏に励むる処ありき。但し上の費十銭に下のハ三銭なりと、

二十八日 晴天

天気晴朗にて野外の散歩座ろに禁し難く、幸ひ矢島氏も同感にて、先つ余の用を達さん為自営館に到り、彼処に一時間程を費し、火薬庫側より大崎村へ出で水田に沿ふて御殿山の麓を廻り、同山の南面なるガラス製造処に出で彼処より品川に下り同所にて余半紙を求め、秋葉氏へ立寄りさつまいり(マ)を馳走(マ)に与り、新聞(基督教)を一葉(冊)帰り受け帰宿せしハ四時頃にてありき、是より前出発せしハ正午頃にて秋葉氏へ来りしハ三時二十分頃なりし。互いの談話ハ重に英語を使用したりき、ブロークンなからも通ずるハ奇妙、此日里見お淑様秋葉氏方に在られ、余の出る前帰られ、車に乗りてハ余が後より礼して行れき、秋葉氏ハまたく本買の蕩(頼)に行きける由にて不在なりき。同家にてハ五六日前よりおさんを置きけるに、此者中くの白物にて誠に氣のゆるすだに心苦しき次第にて大に困り居る程に、彼も又此方と同様烟たくもあるにや暇を願ひ度旨語られだれハ今宵ハ出すなりと告げられたり。此日、自営館へ余が払金の七月八月九月と三ヶ月合せて壹円五十銭を払ひたり、田村氏用人来り居る様子故会はずに帰りぬ。余も柔術科の会員に加はり

ぬ。

二十九日 晴天 安息日

〔欄外〕「徳富猪一郎君の演説」

本日は兼々告広めありし総会も時の語出者の再び戻され度との願により戻下せし故見合となりたり、余当月より教会費として毎月金十錢づゝを納むべき様申遣りたり。午後即ち会堂より直に里見氏の宿に至り弁当を食し、廳で二時頃と思き頃同氏に聞て青年会の徳富及び内村氏の演説を聞かんとせしも、最早充滿して上樓を不能、不得止本郷に転足し彼処にて夕食を馳走になり六時頃同家を出発、本郷会堂に来るや、徳富氏の演説ある由故へ直に入堂するに、聴衆は將に充滿し居り、辛して極前傍の末席を得、殆ど三十分程待ち居る程に、司会者の照会(紹介)にて登壇せし男ハ色黒く長け高く肉瘦せたる徳富氏にして極品なき人物に見へたり、演題ハ維新革命の半面(26-78)てふにて弁雄ならずと雖も意匠の美妙なる沈静の下に聴衆を感服させしめたるが如し。余も聞き甲斐ありしに喜び満ちて帰路を忙(急)ぎ神田橋にて八時を聞き九時半頃着宿しける、徳富氏の演説は評判より案外面白かりし、彼話ハ何れ近日の国民の友へ出さるべしと。此日朝程天気具合明らざりければ、雨の用心に高き下駄を得まく保(保)齒を十九錢にて求めぬ。

三十日 晴天

空風も□に北方より吹き来りしことゝて寒さ身に浸む。

三十一日 晴天

〔欄外〕「北野氏横浜海岸教会に行る」

明治二六年一〇月

明治二十六年十一月

此日初めてボールの投合を為したり、三年生の北野氏ハ今般横浜の海岸教会へ同会伝道者として招かれ明日出発せられるやにて、当校有志者ハ六時より送別会を開き、互に祈り又は感話を為して終りに茶菓なぞ出で八時半頃散会せりき、会せるもの二十名程なりき。但し会費ハ金三銭なりし、余ハ之を松原より借り受け居れり、氏ハ時の會計にて又司会にてもありき。鶴野氏ハ彼の教会の会員たるの故を以て其大体の有様を語られしが、彼の教会は余程困難なる教会にて、党派二ツに別れ居るハ明治七年頃よりの事にて此頃は其極に達し、稲垣氏の出でしも全く此二派の党故ありしなりと、其の二派の党派とハ学者派と商人派なりと。自営館にてハ来る四日の日には館設立五年目の祝会を催す由にて余にも案内来りたり、

出額金二円三拾五銭

十一月

一日 晴天

午後一寸秋葉氏へ到り、帰路台町教会の祈会に出席し一時過ぎし頃帰宿せりき、秋葉氏にては今日とかより下女の替り来りし由居たりける、秋葉氏今宵ハ芝の方へ行れしよし、金曜会にて新聞雑誌の投標あり、六合雑誌・やつね雑誌・基督教新聞・国民の友と当る。

二日 曇天

〔欄外〕「柔道会ノ開会式」

余此日より股引をはき初む、一寸腹痛せし為早けれどせんなし、此日午後四時半より柔道会開会式あり、齋藤氏先づ開会の主意を陳べられ、其次に柔道教師山下先生の此道に付ての口演あり、終りに櫛辺氏を相手に其の新ましを見せられたり、目今員々ハ二十五名程なれど此日ハ十二三名程見受たり、但し先生の出張さる日ハ火・木・土なりと、

三日 晴天 長節天^{〔マヤ〕}

〔欄外〕「天長節／身体重量」

昨夜雨り来り、昨日は危うしと思ひし掛念は夢と消へ、思の外なる好天気とわなりたり、我学院にてハ礼^{〔例〕}に習ひ午前第八時より井深氏の司会にて齊藤氏の聖書朗読に祈と普通学部^{〔例〕}の四年生の「^{〔例〕}」氏、同二年生の末松氏の詩歌、同一年生の足柄氏の論文、予科生の二年の松川氏の演説等あり、時に讚美歌あり、其次に神学生の鹿島氏及び笹倉氏の演説あり、而して終に君が代を三度繰り返し最後に天皇陛下万歳く／万々歳と異口同音に号叫し、閉会せしハ十時頃なりき。尚是より前、井深氏ハ勅語を厳肅に朗読せられたりき、秋葉氏より廻鮎の馳走ありとて招きに來り、余は矢島氏と午食一杯を食し直に出掛け、甘酒二杯に廻鮎三杯（しかも大盛）を喰ふて同二時頃退き、矢島・純吉の両氏と本郷の方へ出発、其路にて貫一氏を見舞たるに不在にて関谷へと向足し、矢島氏とはおちやの水橋の先にて別れ、氏ハ小石川へ行れたり、かくて余等は四時頃にか関谷へ着し一寸休息し、間もなく忍蓮の池ぎわより上野の動物園前まで到り、彼処にて身体の重量を計りしに、純吉氏は正十五貫に余は十三貫五百匁にてありき。聽て五時半頃帰関し直に食事^{〔マヤ〕}を馳になり、入湯後七時頃退き、貫一氏の寓にて二時間頃まで談話し茶菓など馳走になりて帰

芝、十時半頃着宿し純吉氏を泊らしたり。此日は何処の小学校にても運動会にとて諸処の名地へ行軍に行かるゝ様子なりしが、力氏の校にてハ上野へ行きし由にて、特は勝負に勝ち、半紙三占程の賞与を得たりとて嬉びいたりける、尚春太郎氏も勝ちたりとて同様半紙を貰ひたる由、此日里見およし姉秋葉氏方に見へき。

四日 晴天

〔欄外〕「自営館五年紀」

純吉氏朝食後帰らる、午後一時頃一寸秋葉氏へ到り、直に同処より三光町なる自営館に到り、間もなく小倉・川田の来会に会ひ、纏て二時半頃より日本伝道学校講堂にて先づ兼々招待ありし如き、自営館第五年紀の祝会式を開きしが、第一番に小川教師の聖書朗読及び祈と、次に浜田氏自営館の履歴を朗読し、其次に田村氏の会計報告及び自営館此後の方針目的等を陳られたり、会計の事に付てハ米国より毎年三千円程は入り来るありと、然して今や不動産及び預金ハ七千五百円程ありと、尚委細は近日活版にて配附する由、其次に和田・バラの両氏感話あり、畢にハリス氏の祝祈あり、式ハ是にて畢り田村氏の住家の方に到り茶菓の馳走になり、四時半頃帰宿しぬ、此日集りし人ハ三十五六名と覚へたり、中にハリス²⁶・ワイコフ・バラ其外西洋夫人三四人、マコーレーも居りき。日本人にハ小川・和田教師・和田・松本・小倉・川田・景原・佐藤・原田・丹羽・原の諸氏も見へたり。午後七時より台町教会に石原・服部の両教師の説教会あるよしにて出席せしに、石原氏の悔改のみにて服部氏ハ遂に來らざりき、

五日 晴天 安息日

八時頃より矢島同道教寄屋橋(マ)会に到り、説教後同氏ハ帰校、余は赤坂へ廻り波多野にて弁当を使用し、同家の伯母様・峰子様等の山内の勘工場に行ると聞き同行し、暫時の間に從覽し彼の勘工場の前にて別れ、帰宿せしハ五時過なりき、于時三田にて七錢五(五)りの西洋紙面を求めたり、波多野にてハ奥様不変不快にて特に今日御在床にて、余は一寸見舞やりたり、蓋し同姉ハ妊身の御事にて来年一月ハ娩産さるべしとの話なり、此日教会にては先日決せざりし共励会の幹事五名の中一人を撰び直したるに都合左の諸氏と定たり、杉本・浜田・鈴鹿・加藤・出口の諸君是なり、尚会長は田村直臣氏たるなり、矢島氏ハンテングキャップを譲らる、今宵台町教会に井深氏のキリストの救拯、貴山氏の人の罪てふ説教あり、聞たり、

六日 晴天

山野氏隣室に移らる、

七日 晴天

此日四時半頃より柔術の稽古を初め、第一番に渡辺氏に習ひ、次に先生山下氏に揉まれしが其の終には随分疲れ少し心地悪き程なりし、されど水を使ひし後の心地はさらにも言わず、其の心快筆し難き程なり、東京なる五神学校学生の集會とて、年に秋と春と二回づゝ学校順に開かるゝ神学講話会てふへ入会したり、但し会費ハ毎回二錢つゝの事なりと、

八日 曇天

午後三時半頃秋葉氏方へ行きしに、間もなく里見およし様も来られ同姉ハ不日帰国の途に就かる

由、尚叔父様より秋葉氏へはがき来り居り、同氏ハ此度獵鮑及び獵犬を求め石田氏と野遊に行くよし、本ものと云ふべし、又同伯母様も今月中位にハ御出京あるべしと云ふ、七時頃より祈会に行き歸りに雨られ大に困りたり、此日秋葉氏より植村氏の基督の性行を借り参考とす、

九日 晴天

此日柔術稽古致し咽喉の絞り具合を教りたり、經濟の教師欠席、柔術故か午後六時頃よりハ平常になき快神(ハツ)を得たりき、

十日 晴天

午後四時頃一寸秋葉氏へ到るや、純吉氏今朝急に腹痛の烈しきに感じ学校も休みし程にて、余か至りし時床にありしか、間もなくぶら出て薬局の方などを徘徊せられしが大した事ハなきなり、多分胃か腸を損したることなるべし、此夜金曜会の演説は和田氏の体絆論は少し滑稽交りに且つ議論も明なるらしかりしも、兎角六ヶ敷して十分聴取れざりし、氏は二回目なりしが先なるは赤須氏にて保守の潮流と言ふ題にて、弁舌は感服せざりしが意匠は随分面白覚へたり、大意は今や我国にては保守の蹟其の理想を保守的に尋ね意に由なきメサヤを頼まんとせり、此際我等神の人たるもの如何で彼等に真正なるメサヤを紹介せずして居られんやと言ふにありき、今宵は青山に同盟文学会あり、鷺山氏は行けり。

十一日 晴天

〔欄外〕「聖書之友十年期大懇親会」

片山氏事明後日ハ帰国の途に就かれ長野にて勉強せん積なりとは、昨日同氏より承りたるか、此

日は秋葉氏にてもお萩の餅を製られ余等も招かれ大に逸したりき、石原氏も在られ氏は間もなく大森の方へ行れたり、かくて余等は秋葉氏を初め片山・鷲山・今関等と同道芝なる弥生館(26)の聖書の友十年期の大親睦会に到り、先づ入場料弍銭を払ひ登楼せしハ将に二時になん／＼とする時に定めの如く二時より開会、市中音楽の奏楽先づ初り、其に次て讚美・祈祷・開会の主意・此会の報告及び小歴史の陳述あり、又其後に立石寛(26)司(81)氏及び袴田潮氏の祝辞あり、最後に本多庸(26)一(82)氏の聖書に付ての話あり、而して讚美・祈を以て畢り、此時一端参集員を下に降らせ写真を採られ、写真畢て再び楼上の奏楽及び西洋人某のバイヲリンを聞き開散(解)せしハ四時半頃なりし、閉会と同時(俵)に館前にて角力の土表の上に八ッ程の土山を造り置き、小児(マヤ)にをして之を掘らせ中より夫れ／＼聖書句の記しある紙片を尋ね得しものに其々称誉を与へ以て教の道の一手段として示されしは一寸興ありたり、純吉氏は全快せり、此日は日本橋教会も会堂建築落成し奉堂式あり、同宿のものも多く行れたり、夜に到り山野氏に菓子を馳走になりしが其の菓子ならん。

十二日 晴天 安息日

〔欄外〕「厚生館(26)ノ大演説会」

八時頃秋葉氏と同道芝鈴木てふ聖書屋まで到れ彼処へ一寸立寄り、同所にて同氏に別れ、余は其時桜田町の床屋にて散髪し二銭を払ひ、時は二十分程費へしが数寄屋教会(マヤ)へ着せしハ十時半頃にて、間もなく田村氏の説教初り、畢て共励会に就き今迄の放光会の其の名を存し共励会の一部と為し十二時頃散会、余は二階にて弁当を使ひ直に厚生館に行くや未だ開場ならず、依て近辺を散歩せんとせし際、不図したことより下駄の緒を切り大に困りしと雖も新しきこと故、収吏間(修理)に合

明治二十六年一月

ひたり、かくて開場さるゝと同時に、入館するや時將に一時を報じて少し過ぎつる程に、会集の遅きは如何と心掛りしに、漏れ聞くに一時に開場の積にて開会は二時なりしと、偕て程なく開会の時となるや、和田氏司会者となりて、真先に登壇せしハアレキサンデンにて聖書の力てふ題を平易懇切に説明され、其次にハ浅田榮²⁶二⁸⁵氏の詩篇研究の法てふ題にて壮快に弁せられ、其次にハ増野悦興²⁶氏聖書の保存てふ題にて之又雄弁に且つ実着に説明され、其次は最後に星野光多氏の家庭と聖書と云ふ題にて、之又中々の雄弁を振われ、之にて演説は畢り、其時盲人の聖書を読まれしを聞きたり、其書はかなり大部なるものなりしが翰伝簡丈のみなりと、其の盲人の手から十日程かゝりて製せられしものなりと云、かくて帰宿せしハ六時半頃なりし、余は尚秋葉氏方へ到り九時頃帰宿せり、今朝秋葉氏より金二十銭を借り来る、厚生館の集会は聖書の友十年記の祝会たりしなり

十三日 晴天

〔欄外〕「片山君帰郷ス」

此日二十日目にて入湯す。

十四日 晴天

〔欄外〕「火烽使用初」

秋葉氏に居られし片山君病痾治療の為一先づ上田まで帰らる由にて、今朝八時二十分の品川出の汽車にて出発せられたり、送り人には聖書学館の人二人に好川・馬場・里見・鷺山・今関・秋葉・同せい、マクネヤ氏方へ来られし、片山氏の郷友等なりき、余と今関とにて荷物荷ひ行き

たりき、矢島氏昨日炭を買ひ来り、今晚より遣ひ初む、余秋葉氏より夜具を持来る、右片山氏発の事ハ一昨十三日事なり、余柔術を休みたり、矢島余に古手袋を贈らる、烈寒骨髓に浸む、為に元氣を失せり、誰人の差別なき功めし、

十五日 晴天

日本評論第五十七号来る、本日源三郎氏と稽古す、尚ほ笹尾氏とも、午後台町教会の祈会に行、秋葉氏の連中も見へき、

十六日 晴天

〔欄外〕「第三回クラスミーチング」

此日一時半頃より千磐氏等の庵にて例のクラスミーチングを開き、初に一寸祈会あり、千磐氏司会にて余と俣野と祈り、矢島と千磐の励めあり、其後二時半程談話し閉会せしハ四時頃なりき、

十七日 晴天

〔欄外〕「芝教会、及ビ東京同盟青年会演説会」

一昨日の続、菓子周旋方ハ矢島・和田の両氏務められしなるが、容量多かりしも駄菓子子の勢か腹悪しふなる程喫したり、別て今日の面白きは千磐君と永山君の授洗、此方入学の来歴を略陳されしにありき、会費も例の如く三銭なりし、会せしものは池・野村・長谷川の三氏の外ハ皆来られたり、昨日ハ柔道の教師欠席せられし由、余も元氣なく休みたり、此日笹倉氏と稽古す、此日岩瀬泰三郎氏と相知る、此日来年聖書の友日課表を求む、矢島氏委員たり、金曜会の祈会あり、自分出席、会するもの七名、鈴木氏司会たりき、芝教会にてハ昨日より三日間基督教説教会ある

よし、尚ほ東京青年会の演説も今夜鳥井坂の会堂に、明日日本郷会堂に、其次の牛込にある由、
十八日 晴天

矢島氏ハ県のキリスト教信徒親睦会にとて八時頃より出掛られ、午後十時過帰宿さる、但芝教会にて説教会を済し来りしなりと、余一日蟄居す、但し午後三時過頃一寸秋葉氏に至り、直に純吉・源氏等を誘れ(マヤ)柔術を為し大に逸したり、先生ハ常より一時間早く来られしとて余が至りし前已に帰られたりと、余は此日渡辺・ハ山(マ)の両氏と為したりき

十九日 晴天

〔欄外〕「中野／坂本直寛(26+87)」

午前八時頃より秋葉氏方へ到り秋葉氏と同道芝に到り、余は数寄屋橋へと別れ、午後波多野の方へ回り彼処にて弁当を使用し、其中に里見貫一氏来り、同氏は承五郎氏に向ひ朝野新聞へでも入社し得る方法のなきやと申出るや、承五郎氏ハ大に止め、何処にても同事にて特に新聞事業の忙さは勿論社会よりの受の悪きは官吏の遠く及ばず次第なりと、尚ほ朝野新聞も事によりてハ近日廃業するやも不明ざる次第故迎も駄目だとのことにて、貫一氏も安外(案)なる申出に呆然諦めたり、斯て三時頃なりしか承五郎氏ハ家中の御方と芝山内の辺へ運動に出掛るに余等も同道中途まで到り、余等ハ中野重遠氏の宅を見舞人として麻布六本木一番地に至るや、容易に見付られもせぬ様子なりとて、貫一氏は帰途に就かれ余は尚も尋ねあへりし程に、不図中野重遠てふ門札を見出し甲子戸を開き入るや、取次に出来られしハ御伯母様にて大に喜ばれ、直に上座を命せられ仰のまゝに上り、久しぶりの会合を竹氏と共に為し四時半頃まで雑談し、日没頃再び波多野まで帰り、同

家にて夕飯の馳走になり午後六時半過頃同家を退き、兼で広告ありし故、赤教会（ニッポン靈南坂）に到り、増野氏の基督教の五大真理なる演説を聞き、夫より芝教会に至り、坂本氏の安心立命てふ演説を中程より聞き、矢島子（マユ）と同道帰宿せしハ午後十時半頃なりき。承五郎余が直き後より来り終まで慎聴し歸られたり、出堂するや余に告て曰く「少し六ヶ敷かた、お母さん来ませぬで宜かりし、……少し早口だ……中国辺の人だな……んー彼ハ伊予の人です、んーそーだろー、何でも海辺の人だと思た」、是より先ぎ中野にて種々話せし際、同家の次男に当る章吉氏は三光坂上の園田氏方に書生となり居る由、偕て此の園田と申の人の妻君と云ふは福島音吉氏の父の妹の娘なめりと、而して今章吉氏の行きをるも音吉氏の周施（ヒト）なりと、然して音吉氏ハ麻布我善坊町なる寺岡求馬氏方より商業学校へ通学在らせらるゝ由、今年三年目の級にて今年卒業せらるゝ筈なりと、勿論氏ハ園田氏の補助を受けをるものなる由、又音吉氏の母君と言ふは目今は玉子とやらの林氏方に居らるゝ由、此日麻布区役所前にて関谷の叔母に出会しが、彼叔が一昨夜清水様の奥様亡なられしにて一昨彼方へ出掛け今朝葬式を済し今返（帰）るなりと、余は此夜初て坂本氏の演説ハ勿論姿をも見たりし、名に背かぬ容貌なりき。

二十日 晴天

此日貸金五円受取、但し此月分なり、秋葉氏より借り受居りし金四十五錢を払ふ、

二十一日 晴天

此日笹倉氏へ先月分と此月分、土佐教役費二十錢を払ひ、尚来る講和会の費用七錢に金曜会費四錢を払ひたり。

明治二十六年一月

二十二日 曇天

午後三時頃より三田へ矢島と出掛、小間物買入る

二十三日 曇天 新嘗祭

此日午後矢島氏と同道築地の三一神学校(26)なる東京同盟神学生講会(89)へ出席す、会するもの五六十名内賛成員六七名程ありき、余等の至りし頃は一時頃にて将に初らんとして、最初の讚美を歌ひつゝありき、司会者は此校の上級生某にて山田と申す、矢張此校の神学生なるもの聖書を朗読し其に祈りあり又讚美あり、司会者の注意あり、直に開会の主意を延(94)べられしものあり、而して後、金々(兼々)予定の弁士小倉氏は我校を代表して第一席に出しハ氏の私願によりてなりと云て、神の国てふ題にて懇切に説明せられ、其次に吉村太郎氏とて三一神学校の未だ初級生なりと云ふ人は神学生の覚悟てふ題にて勵戒的なる感話様なる説明法なりしが少しく滑稽を混へられしが如何なるものによ、其の次即ち最後にハ福音会の某氏にて宗教家の事情と云ふ題にて是又少し奢礼的に弁せられ、其後に浅田栄二氏の神学生への励めとも謂フべき数個條を麗弁(麗)に述べられ、畢りしハ四時少し過にて直に隣なる茶菓用意しある室に至り、大に交らんと心組し程、好機会を得ず、特に各学校とも皆な其の同窓同志にて集り合ひ、為に十分其の意を得ざりし、蓋し余が此の会に望みし宿望は諸氏の演説よりも寧ろ温き交際を為さばやと思ひしなり、如斯く此室にある間、一寸各校より其校の有様を報告したるのみにて、直に□々歸路に着きしハ凡五時頃なりき。かくて余等は芝の丸山の月見へ、あたり静なる公園にて兼て用意の弁当を食し帰宿せしハ午後七時半頃なりき、小倉氏は演説後直に帰られしは御家中に御病人ある故なりと、

二十四日 晴天

〔欄外〕「金曜会ノ討論会」

此夜間金曜会の討論会あり、会員は笹倉・好川・矢島・上野・山野・長山・鶴野及び余の八名にて、倫題は独身乎非独身乎てふにて、上野氏は独身の方の主唱者にて、会長なる好川氏は賛成員にて、非独身の方にては笹倉氏が主唱者にて、其他の者は皆之が賛成者たりしハ最後の結にて明かりしなれど、之が討論を為せしハ笹倉・鶴野に対する好川・上野の四氏のみなりし、但し右ハ我々教役者に限りたりし、千屋氏も来り居りき、八田も、余午後四時頃一寸自営館に至り先月分弁償金五十銭を払ふたり、田村氏にも面会し、活版墨を拝見したり、時に氏余に向て曰く「君：君の方にては何も仕事ハせなひの：うん甘るね：えー楽だねー、大層勉強が出来るだろーねー、今何人生徒が居るか、四十何人、えー非常なもんだねー、自費ならそんな出来やすまひ、貸費の勢は非常なものだねー」と、氏の人物推知すべし、今日千屋氏に小倉氏の家誰か悪しきと尋ねしに、母君少し病みたりと最早快き方となれりと、

二十五日 晴天

〔欄外〕「明治学院普通科生徒ト芝正則中学校⁽²⁶⁾トノベースボールマッチ」

小倉君の母君御病気の由、秋葉氏にて聞き午後六時頃より純吉氏と見舞に行きしに、秋葉姉及び源三郎来り居り、品川の医師も来り居り、其外数名集り居たれば余等は其の雑沓^(雑)を推察し門前より帰りぬ、明日波多野にてすゝとりを為す故都合付け来られよとは兼て頼れ居りし所にて、今夜七時半頃より出発す、途中十番にて福沢の時事小言を六銭にて求めたり、此日午後一時少し前よ

明治二六年一月

り和田・鵜野・矢島・八田・山野・長山等と品川の海晏寺より三笠山辺を散歩し、海晏寺の紅葉・三笠山の小ふじ等見ものなりし、特に小富士山頂にて焼芋の会食ありしハいと興ありけり、こは矢島・山野・長山の周施(施)たりしなり、帰校せしハ四時頃なりし、此日本校と芝正則中学校とベースボールマツチあり、一回にて本校二十三の負に四の勝にて差引十九の負となりしとなん、此方の為宜しからん。此日純吉氏の借金二十一錢を払ひぬ。此日大寒なりし、

二十六日 晴天

〔欄外〕「波多野ノすゝはき」

余七時少し前に起床、少しく面目なかりし、余の正に起床せんとせし頃亀右衛門氏起しに來り、一層はしたなりし。然し午後四時頃には悉皆整理したり、純吉氏は余が独断にて頼みし為二時少し前頃來り、掃除等助け呉れき、承五郎氏は西野てふ人を尋ねて川越辺まで行けりし由にて午後八時頃帰宅されたり、全氏ハ九時頃より本郷より上野へと道順を定めて行かれしなり、益太郎氏三日程前帰京せりと。同家の夏花も昨今の寒氣にて全く衰萎したり、かくて帰宿せしハ午後九時半なりし。

二十七日 晴天

午後五時頃秋葉氏を伺ひき、此日小倉氏に會ひしにぞ、母君の様子を聞くに大した事ハなけれと場所が場所とて咽喉の傍なる故大に五月蠅かられる由、又随分痛みて毎夜此頃は休まれざる様子なりと、併し品川の醫師來りてより口出来、大に治療も施し安くなりたりと、特に彼は務めて見舞呉るゝ由、此間は高田耕安(261)氏にも一寸見せしが矢張同様なる診察にて、はしよふ風の軽きなり

と、

二十八日 晴天

柔術稽古す、但し込みたりし故、笹倉氏と仕合し(試)のみにて先生とは頼はざりき、余風邪の気味快覆(試)したるか如し、

二十九日 晴天

〔欄外〕「九十九里教会ノ模様／泉氏千葉ヲ去ル」

柏井氏昨日歴史の問題を出され来月十八日迄に出せと、左の如し一イラスマス(新学問との係)関、宗教改革との関係(こ)一印度航路発見前欧州と印度・支那間の交通(商業上、宗教上、学問上)及びコロンバス以前米国と欧州との交通、是なりし、右の内何れか一ツにてよけれど、なるへくは先なるを書けよと、此日小倉君の母君の病氣を見舞、一寸秋葉氏の寓に立寄り其の馳走になりき、昨夜ランプのホヤ破れ四錢にて求む、但し此日破れしハ矢島求めき、更くと言ふ定めなればなり、親父より秋葉氏へはかき来り居り、彼地の模様も一寸見へしが佐久間氏は今尚帰国中にて困り居ると、併し石田氏大に尽力され此間も寺崎とやらに演説会あり、其際は親父も芳郎氏も演せられし由、其外別に変りたることもなく教会の不振は相変ずにて、特に此頃は麦蒔や其外農業の為兎角人出少き由、千葉にても泉氏は今月の初とやらに辞職され、氏は目下銚子に他人を助けつゝおる由、千葉を去る原因は先頃より難高かりし氏の結婚故なりと、才子才を恃んで誤るとは氏の如きを云ふや、右に依り小倉氏は先日の日曜に行かれし由、尚其後の二度の安息日には赤須氏外九(氏カ)し内、秋葉氏へ(ママ)をかまち氏来る、

明治二六年一月

三十日 晴天

此日は晴天、ところか十一時頃より雨り大に悩みたり、柔術の先生欠席されたり、又大西氏も不快なりとて休まる、⁽²⁶⁾₍₉₂₎

〔別紙 一二月金銭書付〕

十一月

三日

一、金一銭

身体計量

十三日

一、金一銭

湯代

五日

一、金七銭五り

西洋帳面

十八日

一、金一銭

はがき

十一日

一、金二銭

聖書の友一年期会費

一、金一銭

湯代・いも

十二日

一、金二銭

散髪代

二十一日

一、金七銭

十一月分講和会常費並

同

一、金四厘

ケボリ

同

一、金四銭

に親睦費

十六日

一、金三銭

クラスミーチング費用

同

一、金四銭

金曜会

一、金二十銭 十・十一月分高知伝道費

二十二日

一、金五厘 サムジング
一、金五十銭 田村氏（十月分）

一、金三厘 はり

一、金一銭 はがき

同

一、金五銭 評論 第十七号

一、金二銭 帳面

一、金十三銭 話園

同

一、金二銭 筆一本

一、金二銭五厘 はみがき

一、金十銭 柔術の月謝（十一月分）

同

二十九日

一、金二銭 大□^(審カ)

一、金四銭 ランプほや

同

十二月

一日 晴天

〔欄外〕「里見勝子²⁶来京」⁹³

午後六時より金曜会の演説会あり、笹倉氏の聖書に於る哲学管見と松原氏の神学生の本領てふ題にて、両氏とも学者風に気取られて放演されたり、批評者として鶴野氏が笹倉君を評して余り音声の抑揚が自然に非るを難じたるや、上野氏が同氏を評して語尾甚だ正確に過ぎ聴衆の耳に激突せるを以て長き時間には飽倦さるべしと言れしなぞ至極妙評なりし、里見の御伯母様には二三日

以前着京されし由にて今日秋葉氏へ来られ、余の一寸伺ひたりし節面会しぬ、又善三郎氏の父君今関某は勝二郎氏の横須賀へ入営せられしを送りて其の帰りなりとて秋葉氏へ寄られ、今宵宿まれる由、純吉氏余が床に同寝に來りたり、矢島氏午後十一時頃帰宿されたり、

二日 晴天

昨朝より山野・八田・鶴野氏等の催し居る朝八時半の祈会ハ出席することゝす、午後秋葉氏よりダービン氏の宗教革命史を借り來ぬ、

三日 晴天

秋葉氏方へ到り同氏及び沓内氏と芝まで同道、余の教会に着するや間もなく日曜学校も畢りき、但し平常よりは早目に畢りしと、蓋しクリスマススの仕度を為せし也、第一の日曜日故晚餐式及び三人の洗礼者ありき、余クリスマススの寄附金五錢を付く、説教後直に通より関谷の方へ出発、一時半頃同家へ着し弁当を使ひ三時半頃より渡辺に到り、嘉夫氏^⑤函画会とかありて学校に在りしも種々談話の種尽ず四時半頃までも話したり、特に老母の会釈の上^⑥なるには感心の外なし、尙当家にて始て聞きたりしは福島三造氏の御不快の事なり、同氏は過日余程悩まれしが目今にてハ最早快方にて別に安ずる事もなしと、余之を聞くや直に其足にて見舞はじやとは思ひしが、又歸校の後れことをなぞ托して果さざりし、関谷へ還りしハ五時頃にて同家にて夕食を馳走になり六時半頃去り、向なる中央会堂の演説に清教徒と題せる演説の増野氏のあるを聞き、九時頃再び関谷へより綿入衣を貰ひ、直に帰宿の途に就き着せしハ十一時少し前なりし、里見氏を行にも歸りにも訪へと留守なりし、里見氏は一昨日より自由新聞社の方へ出らるゝ様転職せりと御伯母様の

話なりけり、併し氏は尚通信省の方へハ病氣届を出し居る由、

四日 晴天

福島三造氏へ見舞状兼無沙汰詫の為はかきを出しぬ、石井より九錢の炭一俵取る、今日より綿入を着す、

五日 晴天

美野部氏欠席せり、柔術込みたり故見合たり、矢島氏より金十錢借り受く、

六日 晴天

〔欄外〕「秋葉姉ノ帰省」

ランダス氏横浜に何か会議ありとて欠席せり、井深氏倫理の試験問題を出せり、秋葉お勝姉正午(早)頃出発、千葉宿り位に見込帰省の途に就きぬ、余朝程別れに行き、其の際芳郎氏への手紙を頼みぬ、午後独り柔術を為して心地悪しくなりたり、尤も今日天気西南の生温く吹く風に当りたる折節、急に烈く転倒したる故ならん、笹倉氏へ先月分柔道会費十錢を払ひぬ。矢島氏日本橋の聖書の友へ行れたり、同氏は此日三田より貯金を戻取せし様子なりしが氏も要心深性なるかな、長谷川氏と台町教会へ行きぬ、三造氏より返事来りぬ、

七日 晴天

大西氏尚病治せさると見え欠席せり、美野部氏も同断、昨日より胃の故か心地悪しかりしが、柔術を為し初て快気となりぬ、

八日 晴天

午後小倉氏の母君ヲ見舞、暫時小倉氏と談じ同氏同道二本榎まで来りき、田村氏の事出で氏の意見をも承りぬ、御病人様御事、追々快方にはあれど尚ほ今にも切りたる程なりと、昨夜一寸秋葉氏へ伺ふに貫一氏来り居り、種々談話し同氏と同道学校側まで来り、同氏明日用事ありとて大寒の上の風を犯して歸られたり、于時六時半又波多野のお伯母様も昨日秋葉様へ来られしとぞ、金曜会の祈会あり、山野氏司会たりき、田島進氏は足柄氏と共にある理由よりして自営館を出され、去る五日とやらの日に帰国されたりと、理由とするところ如何なるものか、何にしても心の毒千万なりと謂フべし

九日 晴天

一日閉居したり、矢島氏ハ十二時頃より宿りかけにて小石川へ行れたり、柔術為す、自営館へシャツ二枚とふんどしを頼みぬ、

十日 晴天 安息日

午前八時出校、九時頃教寄屋橋教会へ着、矢張クリスマスの仕度にて其の志向なか／＼盛なりき、説教後十一時より共励会の放光部の祈会あり、余と金井氏励を為したり、余は信仰を増さん為実行を務むること、金井氏ハ共同一致の必要を説かれて励め合ひたり、司会者ハ早川氏なりき、会するもの十五名程ありき、当放光会の員々として余は伝道員と訪問員々(ママ)とに撰ばれたり、長老野沢重次郎氏ハチブス病に罹り目下佐々木の病院に入院しをる由、氣の毒千万なり、余此処を去り直に里見貫一氏を訪ふに丁度居合せ、弁当を食し一時間程語り、同氏と駿ヶ台下まで来

り、同氏ハ富山県出身の代議某の家へ行れたり（此者ハ松田の知人にて、此度富山にて新聞を起す故、其時里見氏も松田氏と同行する様に計り居るらし、其の口調見へき、かくて余ハ浅草なる福島へ到りしに同家にてハ大掃除の処なりしも、最早大概片付きたる処なりき、而して三造氏ハ火烽の傍に座せられしが随分疲労の様子なりし、併し最早大概快方致し薬は飲み居れと不日全快の見込なりと、併し今年一杯はかゝるらしと、氏先々月の二十五日頃より病の兆候あり、十一月一日頃より大に募り全く医を煩せしも一日よりなりと、然るに途中にて大学の第二医院へ転じたるに一層快方の早くなりしなりと、同家を四時頃退き一寸要足し旁々波多野へ寄らんとして、彼処へ来りし頃ハ六時少し前なりしが、伯母様と奥様ハ尚食事最中にて余も早速馳走に与りたり、承五郎様二三日前より風邪の気景にて着床し居られ、余は九時頃まで種々□む高談を伺ひぬ、宗教上の事にて大に御考遊さると見へ余輩等の知らざる処までも注意さるゝぞ面目なき程なり、今夜の如き話しぶりにてハ同氏の行末誠に頼もし、同氏言ふ様、人ハ如何にしても唯物的にてハ生き幸福を得ることハ出来なしと、而して余に神の愛てふことを好く説明せる本を借さ^(貸)れ度と余託す、又独逸の教理歴史をも借り度と、十時頃宿へ帰りき、

十一日 晴天

井深氏事故ありとて休まる、此頃の珍事なりと、午後秋葉氏へ到りき、午後六時半頃より普通学部チャペルに増野氏の基督教の不振内因てふ演説ありき、

十二日 晴天

午後秋葉氏へ到り一時間程話しき、柔術休みぬ、蓋し下帯の都合ありてなり、

十三日 晴天

食事の都合あり祈禱を休みき、井深氏の教授は今日までにて休業と為されたり、

十四日 晴天

此日余が神学生となりて貸費を願ふ志望を書認書をタムソン氏に届けたり、波多野へ秋葉家の間の狭きを報告す、

十五日 晴天

朝来風ヒュー／＼大に寒ず、金曜会に山野氏の所感と云ふに鈴木氏の処世の法てふ演説あり、例の比評色あり、七時半散会せりき、灯火の料として一学期五十銭なりしも此頃バラ氏より此学期よりハ七十銭出せとのことなりと、銀相場下りしをかこつけたるには非るか、

十六日 晴天

午前九時頃矢島氏と同行秋葉氏へ到り、余は泰西通鑑を彼ハ倫理を借り十時少し前帰宿、途中で貫一氏の帽(マ)なしにて元氣なく車にて行くに会ひ帰りに依らる、笑なきも寄らざりけり、余が苦年のエラスマスも大概成功したり、午後炭を求めぬ但し十銭也、又入湯す、ランデス氏も今日ぎりにて畢られたり、

十七日 晴天 安息日

八時少し前より出発、教会に到り午後波多野へ廻り弁当を食し、午後九時頃退き十時頃帰宿す、当家にても奥様御事、去る十六日午前〇時四十五分とやらに何にも急に御流産被致たる趣き、誠に気の毒千万にてありし、併し御産婦ハ何か御障もなき由、されど大事を取らん為看護婦を雇わ

れたり、今日も承五郎氏より種々有益なる談話を聞き得大に益し、同氏のキリスト教に於る思想も略拝察し得たり、中々頼もしき思考なりき、

十八日 晴天

ランデス氏福音史の問題を出されたり、波多野の出来事関谷へ知らず、尚先方承五郎様より秋葉氏なる里見伯母様へも夕(談カ)□等通信ありたり、

十九日 晴天

柏井・美濃部の両氏は今日ぎりにて畢られたり、但し美濃部氏の経済ハ試験無と知られたり、
二十日 晴天

井深氏の倫理の試業あり、首尾好やつた積りなり、バラ氏より五円受取、賄には直に払みき、
二十一日 晴天

エラスマスの論文出来上り、午後秋葉氏に一寸見せ柏井氏へ届けぬ、同氏ハ小倉君の隣室へ越されたりとて彼処へ持ち行きたりしに、同氏睡眠中なりし故、枕基へ置きて帰り、小倉と一寸話し帰る、又(要約カ)謄訳文も出来ぬ、純吉氏今日朝(マコ)く出発せりと、

二十二日 晴天

午前九時半頃より十一時半頃までランデス氏の福音史の試験ありき、矢島氏今夜フェリス学校(26|94)にクリスマス(マ)あり、星野氏より招れ鶴野と二時頃より行れたり、余午後六時頃より芝教会へ到りクリスマス(マ)の祈会に連る、七時開会八時半散会せりき、かなり盛会なりし、此処を去り波多野に到り奥様を見舞、十時少し前去り、本郷関谷へ着せしハ十一時頃なりき、春木町にて馬可講義を

二十五銭にて求めき、秋葉氏方より里見の伯母様と下女と義一氏行かれたり、親父より手紙来りぬ。

二十三日 晴天

温かにして風なし、大除掃(マヤ)には妙なき、余は六時半頃起き八時頃より打始め午後三時半頃略ほ方着たり、六時半頃より春太郎氏と小川町の方へ行き、里見氏の寓を訪ひしも留守なりければ(カーライル)カライルの英雄論のみを借し、帰りに勤工場へ寄り積木を十五と十銭なると五銭なる当絵に傍の帽子二十五銭を求めたり、

二十四日 晴天 安息日

八時頃より数寄屋橋教会へ到り十一時半頃豊田氏を尋て三十間程の寓に会ひ、尚益太郎氏にも面会し又豊田氏の妻君にも面会しぬ、午食を馳走になり去て秋葉氏に到り、都合により同家に宿まり承氏等の滑稽談を拝聴したり、

二十五日 晴天

午前八時頃学校へ来り、矢島氏と同道三田に來り、郵便局にて金一円国元より送られしを受取り、矢島氏と三田辺を彷徨し、余は別れて自宮館に到り峰尾氏に面会、十一・十二月分の弁償金壹円を払ひ、十二時頃秋葉氏方へ到り午飯を馳走になり、間もなく退き再び学校に來り、長谷川氏と当校日曜学校のキリスマス(マヤ)に臨席し、小兒輩の暗誦及び大平・泉・四方田氏等の話に鈴木直丸氏之が司会者たりき、用事ありし為会未だ畢らさる中に帰宿したり、かくて四時半頃にか鈴木氏に一寸暇乞、矢島等に別れ、暴風を冒して波多野へ着せしハ六時半頃にてありき、峰子様ハお

さく様と本郷より小石川の普及福音会のクリスマスに行かれ九時頃帰られたり、又看病婦も今宵ハ例年の通宕愛町の病院内のクウリスマス(ウイリスマス)に行かれ午後十時過に帰宿されたり、承五郎様も是より少し前帰宿されたり、看病婦ハ名を井狩まさとして下野宇津の宮の人なりと、中く好人物なり、今宵承五郎氏より里見へ伝言に曰く太田資美殿(あきたけ)の姫君峰子様事、甲賀の産なるを太田家の産に為し度と、尚手紙をも托されたり、

二十六日 晴天

朝程かすみ町の大工原氏と申す人を伺ひ矢島氏の用をたさんとせしに、氏不在にて大塩氏と申すに面会し事明り直に帰り再び波多野へ来り、九時半頃なりしが同家の叔母様一ツ木の郵便局にて預金五円のうち四円五十銭を受る為一寸書物等世話致し、同処に別れ余は神田の里見貫一君の寓を伺ひ午食を馳走になり、二時頃同宿を去り直に関谷(せきや)に來り、間もなく団子坂の桜井成明氏方に長谷川氏を伺ひ、帰路渡辺嘉夫氏方を伺ひ夕食を馳走になり、大田様の若様に初めて拝顔を得、間もなく七時少し前にか帰路に途き、本郷日本基督教会へ立寄り、矢島氏の取計にて当夜のクリスマス祭に臨席し、九時少し過る頃矢島氏と別れ関谷へ来り、而して関谷より金子を借り、東金の島へ見上物に帶止(おび)を三十二銭にて求めたり、数寄屋橋教会のクリスマスも今宵なりけれど都合あり行かず、

二十七日 雪天

余六時半頃起床、見れば即ち雪降り居れり、見る間に積り来ぬ、かくて七時と約束せし長谷川君未だ来ず、遂に九時頃余は同氏(おと)を向に本郷赤門前まで到りしに丁度氏も先方より出来り、彼此時

明治二十六年一月

明治二十六年一二月

は九時半頃にてありし、それより直に桐通(ついで)を経て、向柳原の福島へ一寸立寄、国への音信を聞き、両国橋出て雪雨を冒して足を急ぎ、十二時頃小松川村の端に來り一茶店に休みぬ、頃しも雪も雨も止みたりき、此所にて弁当を食し卵湯を二人して飲み五錢置て出でぬ、かくて四時頃船橋へ着し千葉へ着せしは夜の七時半頃なりき、是より前余は東京にて馬方共のかむり様なるかむり傘を草にて製せるを求め之を冠り來りしに、市川辺にて皇太子殿下(26)の市川まで馬車にて來られ、同所より車にて中山の寺へ詣てらるゝ為にてありけん、供人三十名を携れ通行あらせらるゝに会ひしも、其初は何人にてあるらんと唯見止り居りしに、其行半頃(後)に至り初て皇太子殿下に承知致し、夫より忙しく傘を除かんとせしも風烈しき朝出來しよとて堅く結びあり、漸く脱せし頃は早や御通り過て遊しけり、余初め第一車の警部に注意されしなりしも近眼の故知れざりしなりとは後より來りし長谷川の話なりき、早川にて何も無事、余玩具二品程呈すに小兒等の喜ひ一方ならざりし、

二十八日 晴天

沓内氏にては一昨日御出産あり、男子なりと、名を芸五と云とぞ、早川にても南の方へ座敷六丈間位を建出され、余等其間に寝ねたり、此朝五時頃出発、一寸本町講義所の千屋氏に面会し直に東金さして歩を進むるにぞ、長谷川君は昨日にて余足草疲れけん、余と同行し得ず一里程にて全く閉口せし様子にて余は夫と知り、前行の馬方に相談せんものと長谷川氏より離れて馬方へ忙しに、丁度追着かんとせし頃彼は其辺の人家に入り、初て其者の東金行ならぬを知り、馬鹿されしに自分なからも笑かしかりし、之に於て後の長川谷(長谷川)を見は彼は山の後に見へずなり、かなり待

ちたりしも影だに見へぬにそ、余は昼食を為さん為其所へ並足にて行ぬ、余が心にては其休息所にて彼を待ち受けん積なりしなり、かくて余はのろにて一茶店に入り早川にて持たせられしすしの弁当を食し、尚三錢程の菓子を取り外に某を取り、長谷川の来りしより早速余は一步先に出ぬ、蓋し長川(長谷川)ハ到底馬車或は人力ならてばかなわぬと思ひたればなり、余此店に來りしハ十一時半頃にて、長谷川來り直に発足せしハ一時頃なりしなり、

〔二十九日〜三十一日条記述なし〕

〔別紙 一二月金銭書付〕

十二月

二日

一、金十錢

ざうり一足

一、金四錢五厘

炭代

四日

三日

一、金五錢 出金

色鉛筆一本

一、金一錢

はがき

十六日

同

一、金二錢

×、十一月分教会費

一、金二錢

はがき二枚

十九日

一、金一錢

ぼてとう

一、金三錢

特別 金曜會費

二日

一、金一錢

ゆ代

一、金二錢

講和會

一、金十錢

柔道費

十二月分

明治二六年一二月

明治二六年一二月

一、金十銭 教会費十二月分

二十七日

一、金十銭 同 高知伝道費

一、金二十壹銭

関谷より

一、金二銭 金曜会費

一、金三銭

せんだく

十二月

一、金十銭

せんだく

二日

二十三日

一、金二十銭 里見純吉君より

一、金二十五銭

帽子

四日

同

一、金十銭 矢島君より

一、金三十銭

玩具

四日

同

一、金四銭五厘 同氏 炭代

一、金五銭五厘

鉛筆

三日

二十五日

一、金五銭 教会クリスマス費用

一、金二十銭

東洋哲学

十六日

二十(ママ)

一、金五銭 炭代矢島氏より

一、金十一銭五厘

ヨウジ

十八日

一、金五銭

東(京カ)□よりノ茶代

一、金二十七銭 矢島氏より

一、三十二銭

東金ニ 帶止

一、金二銭 矢島〃

一、一銭二厘

市川の渡

十二月

〔日記卷末読書記録〕

読史余論 新井白石著 全六本

日本評論 自四十八号至

福音新報 自

基督教信徒共励会トハ何ソヤ 全

女学雑誌、赤白両標 自

太平記 下巻

文法学講義 岡三慶著 卷ノ上(第二週目)

條約改正及内地雑居 国友重章著

Sill's Practical Lessons in English. 全

新約聖書地名 全

Barrow's Biblical Geography and Antiquities.

□ un 39page □

聖書(出埃及記、利未記、民数記)

悔改事曆 全

基督教新聞 自

幕府衰亡論 福地源一郎著 全(二回目)

以上一月より読出し或ハ畢りたる分

聖書(申命紀、羅馬書) 全

羅馬書註釈

有神哲学 高橋五郎氏訳

聖地故事 全

六合雜誌 自百四十五号

聖經年表 三浦徹氏訳 全

The ism. by Flint

勅語と仏教 加藤熊一郎氏著 全

震世文体明弁 岡氏著 自一至四(全)

關邪小言 大橋順氏著 貞ノ巻

学問ノス、メ 福沢諭吉著 全

以上ハ二月に読了の分と読出しの分なり

聖書(約書亞記、箴言) 全

文法学講義 岡三慶氏著 下巻(二回目)

第二之維新 人見一太郎氏著 全

柳北遺稿 成島柳北著 全

真理一班 植村正久氏著 全

明治二十六年一二月

帝室論 福沢諭吉氏立案 全

史海日本之部 田口卯吉氏著 自一至九卷

以上八三月中読了分と読出の分なり

聖書（伝道書、土師記、雅歌） 全

折焼柴（たぐ）の記 上巻

兵論 福沢諭吉氏立案 全

基督伝 ストーカル著 足立氏訳 全

Mystery of life. by [K]nox 全

基督教と忠君愛国 宮川経輝氏口述 全

基督信徒のなぐさめ 内村氏著 全

我党の徳育 全

教育と宗教の衝突 井上哲二郎（次） 全

以上四月中読了及読出の分

聖書（撒母耳前書、同後書）

救之奥義 村田勤著 全

靖献遺言 全

静思余録 徳富猪一郎 全

評論一 自一至

一枚遺誓諺論 全

宗教論 福地源一郎著 全

以上五月中読了及読出の分

青年と教育 徳富猪一郎 全

人物管見 同 全

実業論 福沢諭吉立案 全

基督の心 松村介石 全

日本文明論之概略 全

耶蘇教衝突論 全

聖書（箴言） 全

以上は六月中読了及読出の分

白石手簡 新井白石 上巻

政教時論 磯部武者五郎

基督のすがた 上巻

史記評（破損）□ 九巻まで

日本外史論文講義 菊地先生 全

聖書（雅歌、耶利米悪哀歌） 全

中庸章句 全

基督の模範 全

日本文明論の概略 六の巻

以上は七月中読了及読出の分

聖書（亜賽亜書、伝道書）

人生之指南車 全

History of the World. by Swinton 古代史

日本文明論の概略 一卷

以上八月中読了及読出の分

聖書（路得記、箴言） 全

感応篇経文 全

蒙求 上巻

大学 全

以上九月中読了の分なり

進歩乎退歩乎 全

佳人之奇遇 一卷

基督伝 ストーカル

折焼柴（たく柴）の記

明治二六年一二月

今里日記

東雲生記〔印〕「山田蔵書」

明治二十七年

神武天皇即位紀元二千五百五十四年

耶蘇基督降世紀元一千八百九十四年

一月

一日 晴天 月曜日 四方拝

良一して青木方へ吹矢筒を借りに遣し、午後二時頃まで矢製に掛り、二時過より筧・餅屋・原・平川・鈴木・須貝・若林・佐久間氏等へ年賀し、若林にて夕飯馳走、長谷川君は佐久間氏にて、又同氏ハ佐久間氏へ余は若林へ宿りたり、余暮方若林にありし頃里見の叔父来り、青年就学及び出世の事ども談上に出で相互に甚傾合同ママせしなぞおもしろかりし、此日佐久間氏ハ寺崎へ説教に午後三時頃より出掛られ、夜の十一時頃帰宅せられ、余等尚十二時過まで話したり、純吉・芳郎の両氏ハ此日横芝の蹊成蹊成学校なる同窓会に出掛られすしの馳走ありし由、芳郎氏里見へ宿らる、聖書の友日課表を守らんとす、

二日 晴天

七時頃起床、雑煮の馳走あり、后祖父を助けて同家の鶏一羽を殺し之を料理し遣りたり、十一時頃里見より純吉・芳郎の来られ、尚西松尾の方へ年賀に行る、余間もなく帰宅せん為須貝の前に来るや伯父に伴れて立寄り、同父の珍らし様に見せらるゝ玩弄物を拝見し居るに、不図前道を北

明治二十七年一月

明治二十七年一月

田佐四郎(分)氏通りぬ、余即ち呼止む、蓋し此辺へ年賀に來りしなりと、依て余は純吉氏の若林に居るを良一して呼び、彼等若林へ行れ余帰宅す、長谷川君ハ散歩の爲とて山の方へ行れ、余食後吹矢筒を携へ田方より山の方へと彷徨せしも何の獲物もなかりけり、かくて帰宅せしハ四時頃なりけり、時に我家にて純吉・芳郎・佐四郎の参氏及び里見の叔父も在り、其内に鈴木二郎(27)氏も入來大に賑ひ、佐四郎氏の宗教論に就ては其説の可否は兎に角少しも臆することなく憚ずして氣烟(氣)を吐かれしこそ勇しけれと感せぬ者はなかりける、かくて五時頃より何れも若林へ出掛け鶏の馳走に与り余興として歌かるた会あり、十時過頃散会せりき、佐四郎氏里見へ行かる、栗田年賀の爲來り若林へ宿らる、

三日 晴天

余午前九時頃里見へ出掛、時に佐四郎氏猶在り、余か到るや間もなく去らる、長谷川氏も次で松尾へ出掛らる、同家にてすしの馳走に与りき、かくて午後二時頃より佐久間氏の招待に応じましたすしの拳(マ)応に与り満腹したり、柴田金三郎氏も在りき、五時頃帰宅す、今宵我夜(マ)に歌合会の催あり、近所の若者十数名來られ十二時頃まで逸したり、今宵須貝の君・文・真壁のきよ・里見のきよ子等宿られたり、此日元始祭たり

四日 晴天

午前は小女等の相手となり吉ごまなどなし無為に消光、午後は説教の支度を爲んとして睡魔の爲に冒され前後を失(破)□日暮頃若林芳郎氏の起す所となり、直に入浴し始めて醒たり、鳥喰(三郎)の郎嫁の出奔騒動に就き相談に來り、種々親父と物語する内に里見の叔父來り、三郎も尚同氏に大に頼み間

もなく去られたり、叔父も芳郎君も十一時頃去らる、福と和嘉里見へ宿に行かる、
五日 雨天

〔欄外〕「里見純吉君上京ス／屋形村にて全国同盟の祈禱会を為せり」

八時頃余尚在床の頃里見より石田・純吉の両氏来り、純吉君は上京するなりと、親父同氏に金十錢を遣し、尚余が同氏より借り置たる金二十錢を返されたり、余井戸辺に顔を洗わんとするや石田氏鉄砲を掃除すとて誤て発砲し、其丸余が髪をかすりしこそ危かりし、かくて純吉氏は上京の途に就かれ、石田君は山の手へ狩に出掛られたり、此日屋形海保敬一君の宅にて全国同盟の催に罹りたる祈会の教会振興の為てふ主意に基ける集を開く事にて、当方よりは佐久間氏風気味の為欠席し、芳郎・鈴木鐸・長谷川・親父の諸氏ハ九時半頃より出発、余は算を誘ひて十時頃出発、時に算氏臘砲を携へ行たれば、途中ひよ鳥一羽に赤腹一羽を得たりける、かくて屋形へ着せし頃は正に十二時頃にて、余は直に弁当を使用し、其うちに多三郎氏来り、三人にて海岸へ到りしも何の獲物もなく三時頃帰たり、時に祈会已に始らんとする所にて親父之か司会たり、会する者十数名あり、有益なる集会なりし、開会マツせしは午后四時少し前にて、何れも四時頃帰途に就き六時半頃着松せりき、何れもすぐに入浴し尚食事を済され、良一・芳郎・鐸の三人ハ里見の歌かるた会へ出掛、勝氏話され、長谷川氏余か頼まれし分の説教を引受られ、一寸佐久間氏方へ行れ十一時頃還り宿られたり、良・芳・鐸里見へ宿らる、

六日 雨天

〔欄外〕「諸方年賀」

長谷川君西松尾佐久間君の所へ九時頃より到る、蓋し同氏明日の支度を為んには里見の騒雜しさを避得為ならん、里見にてハ昨夜は大に更し今暁四時頃漸く何れも床に就き十二時頃(ママ)帰床されしと、良一午后五時頃帰宅す、余が出せし年賀状は秋葉・波多野・関谷・里見貫一・佐藤・井深、余へ送られし分ハ早川順・渡辺嘉夫・里見貫一の諸氏なりき

七日 晴天 安息日

此日会衆は教会員二十六名に未信者一名、他教会人三名、午前十時より小児の日曜学校初まり、十一時より祈会開かれ、山田氏之か司会にて同十一時半閉会后直に説教初まり、万国同盟(27)の目録表に依りペンテコステの時の力てふ主意にて長谷川峰吉君之を説教せらる、尚午后二時よりハ日曜学校二組に別れ、新参及び婦人達の為里見叔父の馬太伝の講義あり、青年及び古参組ハ哥林多前書のりん講にて今日は十二章の十二節より初めたりき、近頃来初めしなりと聞く尾垂村の千葉貞一氏ハ三里の道も遠とせず早々と来堂され大に悟る処ありたるが如し、実に一昨日屋形へも来られしなり、尚今宵は寺崎村の仲に説教会の催あり、佐久間氏風邪の故を以て余と長谷川氏に更て若林芳郎氏を携れて出張、戸村弥三郎氏の宅にて開き、質朴なる聴衆十数名を得有益なる会合なりき、長谷川君第一席に宗教の何たるを懇切に説かれ、時に余は司会の役を為し居たりしが、長谷川君の話畢るも別に質問者もなきより長谷川君に尚一談を頼み、後余も一寸人間の価値に就き勧め、十時過に到り散会し十一時頃帰宅しぬ、長谷川里見(敬稱)□無人なるを以て還る、石田君帰郷せり、此日母事里見の叔母君と西松尾の方へ年賀に行れ佐久間氏にてすしの馳走に与りたりと、

八日 晴天

〔欄外〕「万国聯合初週祈祷会始ル」

「朝程より界紙（マモ）を十占程すり尚帳面などを製りたり、今宵鈴木二郎氏方にて夕飯の馳走ある由昨日回章にて招待あり、五時頃より出掛そばの馳走にて大に満腹し、后尚食事をも勧められしが誰も進む者はなかりけり、后祈会あり、万国同盟の主意に由り感謝と謙遜てふ意にて、佐久間氏之が司会にて会員十二名を得有益なる集なりし、小学校授事始（マモ）る、

九日 晴天

名簿帳を改書し大に消光し、尚ほ親父を助て教会の安息日誌等を製りたり、今宵は祈会は原方にて主意は合同教会の爲にて長谷川君之が司会たり、会員十二名また盛なりし、里見叔父後れて来りし、同氏の話に市原氏の嫁事件到底破談物なりと、又昨日波多野より先日 of 返事来り、島の内と申者来るべしと、蓋し彼の来らぬは島野の方便なるのみならず、議會解散後忙しくもあることにてあるならんや

十日 晴天

今宵は若林に祈会あり、自分司会を為す、会するもの十二名、主意は国民及び治者てふにてありき

十一日 晴天

〔欄外〕「東陽村行」

午前九時より弁当持にて東陽村に到らんとして先づ里見へ長谷川氏を伺ふに、同氏漸く食事に掛

りし処にて相待つ程に、出発の時は早や十一時半頃なりき、蓋し余は同家にて弁当を使ひしなり、かくて東陽村宮川もなかく遠く、上原なる竹内氏に到りしハ廳て二時頃にてありき、此日余等昼間の説教の積なりしに竹内氏は夜分の積に計画し置きしが如し、同氏は風邪の由申されしが、さも然らんかの顔色なりき、向後氏は尚在浜なりと、而して彼よりの音信を見せられしが、向後氏も又甲斐ある人なり、彼は横浜にてハ山本氏を尋ね同氏のクリスマスへも行かれしと、又詩歌三四首程も送られありき、種々談種も切れず遂に四時過とはなり、全く去りしハ四時半頃にて六時頃里見へ着し、夕飯馳走、直に五反田なる川島太郎氏方の祈会に行きたり、親父之が司会にて会するもの十名、主意は外国伝道なり、十時頃帰宅、長谷川君我家へ宿りぬ、里見の叔父風邪の気味故祈会も欠席せり

十二日 晴天

長谷川君十時頃去らる、余教会の人名簿の改写をなしぬ、午后四時頃鈴木二郎・里見叔父来り、寛氏を招き大に譴責するところあり、若し禁酒するか又節酒するも此後必ず慎み得るや否や、若し其決心なきに於ては教会の方も除名致さんとの掛合に寛氏も大に困り、即答為し兼る由にて来る日曜日まで延期を寛申出、其事となり畢りき、其内に太三郎氏来り、里見叔父明日東金へ行かばやとの事にて、余は為に里見へ同氏の着物と印形を取りに行きしも風氣ありし為今は富田の祈会にハ欠席しぬ、今宵祈会の主意は内国伝道並に猶太人、我家にて甘酒出来大に上等出来なりし、若林祖母君年始に來られき、佐久間氏病氣インフルエンザの気味なりとは鈴木二郎氏の話なりき、

十三日 晴天

昨日より□気味にて齒大に癢く今朝尚止ず、漸益々募り午后にて到り如何にも五月雨（蠅）くなり、遂に梅乾を張りしに幾らか堪へ善し、此日十一時頃里見へ行き同家の公税の切手及び金子を受取に役場へ納め遣り、其足にて西松尾に到り佐久間氏の病を見舞に先づ近々快方とはなりし由、午后又里見へ到り長谷川君の書数（マ）及袴と純吉氏の洋服と純吉氏が小島家より頼まれたりし源三郎君の衣物等を持来る、明日余が方と出荷せん為なり、長谷川君風気味にて着床しおり、余も夕飯の馳走に与り同氏と氏の床側にて食しき、併し大した事ならねば明日の説教ハ同氏為し呉る筈なり、お淑子も少し風気味なりと、余少々風気味なれば五反田の祈会は欠席しぬ、此夜の主意は学校と家庭なり、親父尚風気直らず夜分按摩来りぬ、酒井に歌かるた会あり、良一及び二女等も行れ十二時過頃帰られたり、

十四日 晴天 安息日

〔欄外〕「東雲子上京の途に就く」

佐久間氏病尚療ず、長谷川君亦々更て説教せり、但し此日万国同盟の定によればキリストの再臨てふ題にて為すべかりしに、故ありて外題にて愛てふ事を説明せられたり、寛勝二（マ）郎氏は断全禁酒（マ）の事に決定せりと、今日午后会堂にて親父及び里見昇に白収（状）せりとなん、余午后三時半頃より我家を出発、高林・餅屋・寛・原・須貝・若林・鈴木等へ暇乞ながら松尾を出でしは四時頃にやありけん、東金へ六時半頃着したり、時に在原にてもおよしは黒田へとか行れし由なりしが間もなく帰られ大に喜れ、同家にては新郎も一昨とやら帰里させ全く近所たりとは驚くべし、かくて

明治二十七年一月

馬鹿むこ談は単なくて宵の談種とはなりたり、尙在原逝去の当時の話も出でたりけり、鳥も此度の新郎には大に閉口せし由にて仮に病氣の体に居り苦しかりしとなん、可々余十時過着床す、尚ほ鳥及およしと暖談す、此日昼の食事に原氏へ招かれ里見・長谷川と供にすしの馳走に与りき、
十五日 晴天

朝床中にておよしと話す、およし曰く之こそほんの寝話なりと、此日未明に出発すべかりしに家人皆な留め、およし曰、どうせ千葉宿ならめ、然ば何も忙だ処で芸なき業なりと、而して昨夜の話に新宿の医者にて余が為に齒の葉を貰ひ来るべしとの事より遂出發を延したり、蓋し余が齒根の如く磨滅するは「はくさ」と名くる病にて注に其患者多しと、かくて鳥は九時頃より新宿へ行かれ、余は彼女の持来りし小瓶を貰ひ十二時少し前発足し、廳て五時頃着葉、沓内方へ須貝よりの頼れ物を届け、直に早川へ到りしハ五時半頃なりし、沓内様近辺にては三四日前より続けて付火有之、人々枕も為す暇なき程なりと、早川叔父も余が到りしより間もなく帰宅ありき、当家に湯あり入る、眞壁の栄氏居り三日程前に来れりと、尙三四日居る由、十時着床す、

十六日 晴天

早夜九時頃雪雨少しく催し大に心配せしが今朝は晴れ渡り好き心地せり、同家にて常よりは少し朝寝なし余も八時頃起きたる程にて大に心組を損じ、順氏・叔父様等の御出を送り、廳て九時半頃余は叔母様の手に整へられし弁当戴き出発したり、かくて十二時頃船橋の入口なる茶店にて休憩し弁当を食し、大にゆだんなし為に一時間を損し二時頃此処を出足せり、此処にて茶代として金三銭を置きぬ、但し三銭の菓子を食したりしなるが故茶代として一銭都合四銭置きたりを当

家の奥間に若者三名程入り何か為すが如し、問ずして察し得たり、故を以て一氣取り戻して三錢置きたりしなり、呵々五時頃入京、関谷へ六時半頃着しぬ、此度上京の裳属(装束)は風気味(フキ)なりし故シャツ二枚に綿入衣物に綿入羽織に腰引・股引・脚絆・足袋・袴・手袋・まわし(マワシ)(関谷より借り来りし分)等を着し、頭には草傘を戴き足には草履を穿ち、右手にはステッキを携へ、左肩にはカバンを下げたりしなり、草履は我家より(マヤ)畜ち来り尚一足用意し来りしに一足にて足りける、道中費は三錢なり、此日我学校も規則通稽古始なりし由、夜分国へ安着の報出す、

十七日 晴天

〔欄外〕「東雲子帰校」

昨日早川を出で登戸を少し過るや後より上総の片貝の人なりと云町人風の男、耳の側に筆なぞ挟み余に言葉を掛けぬ、余も程に答へぬ、而して彼は余と歩を競わんとするものゝ如し、余又之を辞せず、互に忙きぬ、かくて船橋まで競ひ続なりし、余が二時間半にして千葉より船橋へ来りしも彼故なりし、尚東京より一里半程離れる逆井橋側にて両国行の船あり、今出と余を勧めたり、其賃二錢也と、余之を避く、蓋し船より徒歩の方速からんと自信せしなり、然るに豈に凶らん、船も間もなく出で余と行を競ふが如し、而して大に余を残さんする勢を顕しぬ、余何ぞ平気ならん、亦競ひぬ、かくて此行も、彼氏負(負け)ず勝(勝ち)ず同行したりしなり、されば今度は競争徒歩とて大に疲れ夜分家内を歩行することすら五月蠅ありし、而して今日尚疲れ去らず故を以て学校の方は授業は休みたり、午前九時頃通にて保下駄十九錢なるを求め、はこべ(27)は三ツ一錢五厘づゝを求めたり、而して十時頃より駒込なる渡辺に到り大に馳走に与り(安符)(安部川餅)殊に午飯をも戴き、

明治二十七年一月

十二時嘉夫氏学校より帰るに会ひ一寸談じ、同道一時少し前退きぬ、嘉夫氏と中学校前に別る、二時関谷を去り神田小川町の里見貫一君を訪ひ夕飯の馳走に与り、同氏と同道赤坂に來り、南部坂下にて同氏は小松之尚氏方へ余は波多野へと別れぬ、波多野へ到れば承五郎様尚新聞社に行きて不帰、其内に峰子様舞踊の会より帰られき、話すこと一時間程にて去り十番にて民情一新を三錢にて求め八時頃帰校しぬ、炭九錢なるを求めぬ、キリスマス(マ)の送物ならん、自転車競争発車の所と名馬の絵紙二枚を送る者ありぬ、

十八日 晴天

〔欄外〕「秋葉勝子帰京」

此日始て教場に出席す、池氏妹の産故不來、清水君は病故、大西先生尚養生の為当分欠席すべしとなん、午后二時半頃より矢島君と秋葉氏方に到る、時に聞けば妻君事昨夜無事帰京され今里見の老人と三田へ買物に行けりと、秋葉氏泉氏の間にて居り彼の間にて両氏に面会、泉氏本を売るとて広告を学校へ張らん事を頼まる、尚余九十九里にて一寸話ありし臨時伝道者一名程の供給を泉氏にうながし、誰となしに適當なる人はあるましきやと尋ねしに、同氏の第一言にて早や同氏自身にて其求に応せんと言出しぬ、而して早速其手續を秋葉氏より上総の方へ申送らる様話し來たり、物の賄る都合に行く事も珍らしき方なり、矢島君一步先に帰る里見貫一君四時頃來り、一寸加藤氏方へ行くとて去り又間もなく來り、秋葉氏の東の中間にて話し、間もなく里見の伯母様の歸る処となり、暫時家の事に就て相談あり、五時半頃貫一氏同道帰校、同氏に夕飯を勧め一寸話し金五十錢を乞るゝまゝに貸し六時半頃去られたり、それより明日の下読す、大に手間取り其上

に充十出来ざりしハ又々小休みし勢なるや、風氣募り来り安からず、
十九日 晴天

〔欄外〕「里見^憲叔子上京／柔道始まる／金曜会」

ランダス氏の福音史休まる、午后自営館を年賀し、秋葉氏の宅に到りお勝姉に謹で年賀しぬ、時に里見の淑子様も此日千葉より上京、先程此処に来りしと言ふに会ひぬ、同姉ハ一昨日石田氏と白幡に到り、昨日一寸東金へ寄り在原にて午食し千葉へ宿りしなりと、此度は石田氏と同道にて、石田氏は叔父の成川知事に来りしにて淑子様も彼に会わせん為たるべし、秋葉氏の来客蔭より窺ふに服部氏・石原氏・泉氏等なりき、好川君も一寸来りし様子なりし、此日尚ほ風氣少しあり、故を以て今日より始むる柔道部をも欠席せんかと言張に、櫛田氏に会ふや同氏曰風氣なるか然は一番取て汗を出し之を手拭にて拭わんには大概の風なら直るべしと、依て余は氏の言に従ひ氏と試みぬ、成程心地大に宜しく風氣薄きぬ、奇体なものと謂つべし、今宵七時より金曜会開かれ、好川君司会者となり始に祈会を三十分開、五名祈り畢て会議あり、幹事に鈴木・好川の両氏撰挙され、次に松原君の発議にて此度高知より大石、浜田の両氏帰校されし故、其慰労会を開かれては如何と言事満場一致にて之が為委員三名矢島・鹿島・笹倉と撰挙されぬ、閉会せしハ八時半、長谷川君未だに帰ず少しく心配なり、此日府下六神学校同盟会の為委員一名を撰びしに笹倉復当たりたりとなん、

二十日 晴天

午前バラ氏より今月分貸費金五円受取、直に賄へ五十四銭払ひ尚学校へ去年第一学期分の油代

三十五銭と今月分十二銭を払ひぬ、食後小倉君を年賀し氏留守にて直に秋葉氏の寓に到り奥平敏子と荒木とみ子の居るに会しき、淑子も尚居りき、長谷川君の来らぬを心遣はがきもて問合す、二十一日 晴天 安息日

〔欄外〕「長谷川君帰校」

午前八時矢島君と同道新し橋まで到ル、彼処に氏は本郷へ余は数寄屋橋教会へと別る、帰路銀座にて小き姿見を十四銭にて求む、一時頃波多野へ到る、時に高田おさく子在り、二時頃より歌かるた会あり三四回戦ひき、夕飯馳走、后高田の息子を馬に乗せ悪しきひやうし（拍子）に落馬し障子にて頭を打たれしか別條なかりき、七時頃帰途に就き一寸秋葉氏の寓を見舞九時頃帰校、矢島氏七時頃帰り夕飯に後れたりと聞て直に余が弁当の残を出ず、氏妙とて食す、時に長谷川君在りき、同氏は昨日松尾を出発、昨夜赤坂の小林氏まで来られ今朝帰校せしなりと

二十二日 晴天

柔道の教師今年になりての初出をなさる、余先生と試む、今宵麻布英和学校（2716）に六神学校同盟講和会の理事員あり、笹倉君行けり、

二十三日 晴天

〔欄外〕「大石・浜田両兄ノ慰勞會」

今宵六時半頃より大石・浜田の両兄が今度土佐より無事帰校されしを以て其の慰勞会あり、之の司会者ハ松原君にて祝辞を赤須君と井深教師の両氏、教授会員と生徒代表の為なされ、次に上野君朗詠集の一首を朗読し以て祝辞に替へられたり、其后大石君答辞を兼ね土佐伝道の模様を語ら

れ信仰上大に有益なる奨励も少からざりし、氏其の概略を挙て白状すらく、余は今度の伝道に於て自ら進て伝道を為真の信仰なかりしこと、聖書に暗かりしこと、又浜田君も氏の感ぜし所を述て曰、余は人に道を励むるに愛のなかりしことと学理に鈍なりしを悔ひぬと、茶菓の馳走あり、閉会散出せしハ八時半頃なりき、場所ハ学校神学部(寄贈)の書籍縦覧室也、会費金三錢なりし、但し教授会より一円三十錢程(寄贈)寄送され一人前五錢当位なる馳走ありき、浅野茂十郎氏今日秋葉氏へ来られ宿られたる由、

二十四日 晴天

〔欄外〕「柳沢直次君」

午後ラランダス氏の福音史を休み一時半頃より京橋区聖書の友へ国より頼まれし会費金壹円八十錢を払ひ、尚丸善まで到り来週より初むるゲーテの書八冊を八十錢にて求む、蓋し級友の分をも引受しなり、かくて午後六時少し前帰校、食後秋葉氏方へ一寸訪ひ、里見きよ子へ手帳とペンを送り、在原へはこべじほを二箱送り、帰路台町教会の祈会に出て柳沢氏に面会せりき、山内にて里見貫一君の秋葉氏方より帰ると言に会しぬ、本日柔術を休む、今朝名古屋より能々来られて同地の教勢を告知せんとて我校にも来り、普通学部の講堂上チャペルにて三十分程実体に報告されたり、其名は山鹿旗之進氏(分)、メソヂスト派の人なり、京都へハいで氏行けりと

二十五日 雨天

午后二時より矢島君と入浴し帰路秋葉氏へ寄り、同家にて一寸借金し頌栄学校前の下駄屋にて唐傘一本二十三錢なるを求め、其間秋葉に在りし矢島君と同道、帰宿せしハ五時少し前なりし、山

野もマクネヤ方へ来られしとのことにて秋葉へ来同道帰りぬ、

二十六日 曇天

昨日チャヤルにて広告あり、其事ハ我神学校にて一昨々年にかありけん神学生重に出で、教師等は虎の如に為して説教会を開きしが、此頃東京同志会の運動あるが其后にて行統一週間程我神学生のみの大説教会を一週間（五日間）来月五日より開くことに決し、学校にても其間は休業さる由、其の許可ありたりと、依て昨日午後其の順備相談会あり、凡そ定決せし由今日夫々役割等出づ、午后七時より金曜会祈会あり、来る大説教会の為に重に祈る事とせしにて、浜田氏之が司会者たりき、其の励むる処に曰、我等今度の運動は全く神の福音を通ふる心地にて為すべし、又其目的は府下の人々の靈魂を救ふを以てし、手段は今已に為しつゝある同志会の補助たるを忘るべからずと、昨日本月分の講和会費二銭と柔道費十銭を出す、此日柔術を休みぬ、故は少し退気ありければなり、親父への手紙書す、今宵西村宗重君遊に来る、接する処大に西国味あり、年を聞に十三年四月九日生なりと、君また望ましき少年なるかや

二十七日 晴天

〔欄外〕「盲人慈善音楽会」へボン館在生懇話会」

昼の食を済し室を出るや純吉君の彷徨するに会ひぬ、氏曰く今より芝山内なる盲重院（唯）の為の慈善音楽会へ出席せざるやとのことにて、余即ち其切符を貰ひ同氏と秋葉方へ一寸行き川島氏と三人にて出掛、おせい様も義一郎氏と出掛らる、聴て真弥館に着し入場するや時は早や一時三十分過ぎなりしも尚始り様にも見へざりけり、而して二時頃某氏司会となり一寸開会の主意を述べられ、並

に盲姉二名琴とバイヲリンの合奏あり、次に本田庸一君の演説あり、其主意は吾人は盲人の爲大に其の扶助者となり彼等に自活の道を与ふべしと、殊に普通人が彼等盲人ノ爲べき事業を爲んとするは盲人保護の爲不可なりと、又彼れ盲人は肉眼こそ見へざれ心あれば其心の目を明になすこと肝要なり、之即ち基督教の責任なりと、又盲婦の楽あり、其次に伴直之助氏の演説ありぬ、曰く余は盲亜人の如き不具者には相応の扶助を爲すは敢て咎めず否大に其の挙を賛成す、然し今の世に所謂貧民救助は大不賛成なりと、其の理を一寸述べられたり、之れ氏の宿論と見へたり、此に次でびは・琴・支那楽の合奏あり、其尚島田・岩本・何某の演説ある由廣告に見へしも故ありて来れざりし、余等四時少過帰途に就ぬ、今宵普通学部(マ)の講堂にてへボン館在の生徒等の懇心会(マ)なる会あり、尤も此会は昨年来執行し来られしにて当塾管齋藤氏の企にてありしなり、余前より此会に臨ばやと心掛居りしが、今宵西村来り其の主意及び様子を語らるにぞ、余は矢島氏と同道出席しぬ、行けば員等廿名程満室、間もなくまさご氏司會者となり開会し一寸新年の辞を述べられ、其次に藤井君の基督教に対する意見てふ言出にて我等人間は己の良心の命に従ハば即ち之れ足れり、何ぞ宗教に依るの必要あらんとて大に氣晴られたり、併し仏教よりハ基督教の方勝れりとは信ず、否余は或意味に於てハ慥に基督教徒たるなりと、次に杉本君の人は自心にて賢固なる意志を製り其の意志にて万事に対接せざるべからすてふ有益なる談話なりき、又引續て島氏其他三名程の簡端なる談話ありき、是より前菓子出づ、今宵は熊野氏も菓子を驕られなりとて二抱ありし、平常ハ齋藤氏のみ馳走なりと、九時頃閉會帰宿す、但此会初三十分祈会あり三名程祈りぬ

二十八日 晴天 安息日

〔欄外〕「東京同志会大説教会」

午前八時頃よりはたのへ到り国元への手紙をお淑様へ頼まばやとて同家へ頼ミ但し渠は今母君同道一ツ木へ買物に行れ留守なりしなり、余何気なく靈南坂教会へ到る（尤も今日およし様石田氏と会合、其為当会堂へ来るとは聞き在ありき）、時正に日曜学校畢らんする頃なりしが、先づ見渡に大人小人数組に別れ、増野氏の組ハ男の大人十名、某の婦人組十二名程、其他小供の部は幾組にて在りしや不明、併し九時五時分頃小兒不残一に合し、某文学士大衆の小兒女等にキリスト伝を話し聞かし、講壇後の大なる掛図により懇切に教へ居りけり、かくて十時二十分頃より増野氏教を話さる、其前讚美の不整を注意され、追々其の上図にならんことを注意し居りけり、かくて氏ハ神を信仰することは神を知と大に異り、知りしが上に其の身を神に委かせ奉る時、始て神を信仰するものとは言ふなれと、其礼に武鑑を見て某は何石取の代名と知も、其者は其代名の臣下なりと言ひ得ざることと同じと平易に説き得て妙なり、実に今の世に信者と名乗る輩に此理を別前へぬもの多かるこそ基督教不振の第一因なりと思わる、十一時半頃石田氏並にお淑様と同道神田橋傍まで到り、兩人は彼処にて乗車し先せらる、蓋し両氏は今日日本所へ行き明後日帰国の積なりと、余直行関谷へ到りしに皆様不在、叔母様清水様の引越を手伝わん為青山へ行れ、お婆さんは四ツ谷へ行れしと戸も閉ちたる、山田様にて余は用意の弁当を食し、間もなく帰路に就き波多野へ寄り里見のおつめ様の同家のおつめ様に旧約の話を聞せ至ひ居りし処なりと言ふ処にて、余が到りしより談話家の事になり、種々相計りし程には暮れかかるに、峰子様の中野より帰の遅

ければ女供の中野を知らぬ由聞ハ、余年始方々向に行き一寸話し月を戴て帰坂、直に夕飯を馳走になり六時半頃退き、赤坂教会に到り秋葉・河崎の両氏の同志会説会の派出員としての説教を聞き、九時頃長谷川・秋葉の両氏と帰校、帰宿しても十一時過頃までくづつき塾等に叱かれ面目を失す、実に該同志会の大挙説教会は去る十五日より始り今月中にて畢んと

二十九日 晴天

今日よりカーラエルのゴエテ論を読み初めぬ、午后秋葉君寓に到るや妻君昨日より風邪の氣味にて、昨夜は殊に苦痛を感じ秋葉氏にも大に迷惑は掛けしとはお勝姉の申様なりき、併し今日は大に快方なりと、長谷川また在り同道帰校す、同氏杉本君の基督伝を売ると告るにより余其値の廉なると書の逸物なるにより直に求め度旨談じ同氏に周旋方を依頼す、西村氏にステテツキを与へしにて喜はしくもありけん、大に逸し行けり、柔術を為す、

三十日 晴天

今朝昨夜話せしアンドルースの基督伝を一円二十錢の割にて杉本君より譲り受く、但し一昨日神田にて求めし二十五錢のカーラエルの英雄論を長谷川に譲り、其代と共に一円を渡しぬ、午前カーラエルのケーテを下読し大に其の六ヶ敷に閉口す、午后秋葉氏に到り妻君を見舞ひぬ、聖書学館の渡辺姉の居るに会しぬ、午后三時頃里見貫一君来り、間もなくお婆様も帰られ聞けば家も麻布鳥井坂上に見付りしと、家賃三円なりと、余五時過貫一氏と同道帰校、同氏は食後一寸話し波多野へ訪して帰られぬ、石井より十四錢五厘の灰を取ぬ、此日考明天皇祭たりし、小河内氏築地の経蒙学校を教ふることとなり、先方へ越さる、

明治二十七年一月

三十一日 晴天

午后一寸秋葉方へ到りしにしろこの馳走に与り大に腹を満しけり、故は明日里見のお婆様等引越に付送別の為か、妻君癒ゆ、今宵七時より神学部チャペルにて今度催さんとする神学生の説教会の為の祈会あり、長谷川君司会たるべきの所風邪故浜田君之に更り大に熱心なる励話及び祈等あり、会員二十名を得たりき、右浜田と書せしは間違にて鹿島君なりしなり、氏励て曰、今度の説教会に不成^{（マダ）}賛の者あり、又弁士撰挙に就て不服の者あれと之れよくく彼等の誤解なるべければ余輩彼等の為に祈り、且つ自分の確信を堅固にせんこと必要なりと、

べ消費金三円二十九銭三厘

〔別紙 一月分金銭書付〕

〔一月〕

十六日

一、金三銭 茶代 東京に来る途次

十八日

一、金五銭 聖書の友会費

二十日

一、金三十五銭 去年の油代

同

一、金十二銭 今年一月分

十八日

一、金十銭 昨年^{（マダ）}の借矢島へ

十七日

一、金三銭 民情一新

十七日

一、金三銭

はがき三ツ

二十日

一、金五十四銭

十二月末 昨年より此一

月の食料

二十二日

一、金二銭

講話会費一月分

二十三日

一、金三銭

慰労会費

二十四日

一、金十銭

ゲーテ文

二十二日

一、金二銭八厘

西洋帳面

二十五日

一、金二銭

金曜会費

一、金十銭

柔道会費

一、金一銭

ゆ代

同

一、金二十三銭 傘

二十四日

一、金十四銭

鏡

十、シャツ

四ツ

十、^(単衣)一重物

五點

十、^(拾)合衣

一十點

十、綿入

一十點

十、羽織

二枚

十、衣

一ツ

十、しばん

一ツ

十、夜具

一ツ

十、着

二ツ

十、ふとん

一ツ

十、こしかけ

二ツ

一、金壹円二十五銭

基督伝

一、金八銭

ちゃわん

一、金三銭五厘

筆入

二月

一日 晴天

〔欄外〕「里見純吉君祖母君ト麻布ニ寓ヲ定ム」

午后源三郎氏来、秋葉氏荷物来ると、余直に行き之を開き某々の分を別け里見の分は一先づ余が宿へ持来る、賢いんは秋葉せい子に与へぬ、尚余が為送られしそば粉をば半分同家へ呈しぬ、此の賃錢十一錢也と、里見のお婆様には今日麻布の方へ引移られし由、純吉氏も二時頃より出掛られぬ、今宵も昨夜の主意にての祈会あり、山野君司会者たりき、会するもの二十四人

二日 晴天

柔術の師匠山下氏不参、弟子二人来、余また其の一人と試みたり、夕飯後矢島君と同道秋葉氏方へ到り、矢島君説教の仕度ママの為書籍二・三冊借り来る、七時より礼ママの祈会あり、清水君司会者たり、会するもの二十五名程、また盛会なりし、殊に大石君の神学生たらんものは学校に在るよりよく実地運動を為すの必要を励められなぞ大に感動すべき話にてありけり、河合・馬場の兩人は今日マクネヤ氏の宅にて結婚の式を挙げられたりと、

三日 晴天

午前一寸秋葉方へ到り午后三時より矢島君と同道小石川へ行き、小川利八郎君を尋ねしも見当らで本郷へ廻り今宵は関谷へとまり

四日 晴天 安息日

午前九時頃関谷を発足、教会に間に合わさなければ直に帰校しぬ、今朝関谷にて金一円借り受、

秋葉氏の為理学沿革史の上冊丈は本なりしを三十五錢なるを三十三錢にて求めたり、飯倉の本屋なり、此日秋葉方へ借金を返しぬ、矢島君兩國教会の夜の説教に行れ十時頃歸られたり、余此日西洋帳面十八錢なるとイソツポ物語の八錢を求めたり、午后入浴し秋葉氏方到り奥平・亀井・庄田の諸姉の来りしに会ひき、

五日 晴天

〔欄外〕「明治学院内神学部生徒大説教会」

此度の大説教会の為八時より祈会を開き鈴木君之が司会たり、今宵は明治学院神学生大演説会を日本橋の元大工町教会(27)に其第一回を開き、浜田君神の国と言ふにて六十分程話し熱心口にあふれ大に聴衆の注意を引きたり、鹿島君ハ我神と言ふにて三十分程極簡易に話され、婦人多き聴手にて当りぬ、赤須君ハキリスト爾を照さんと言ふにて少し六ヶ敷言葉は惜しかりし、然し何れも真面目に打語りたるが如し、今宵学校よりも大概出席せられ会衆は小兒二十名、婦人十名、男子十名、神学生等二十五名都合六十名以上と見へたり、七時開会九時半閉会、余等五時半頃出発歸路は九時半歸り十時半着校す、三田にて焼芋を二錢矯りき、柔道に出ず

六日 晴天

礼(マ)の如く八時より祈会あり、長山君之が司会にて熱心なる集会なりき、午後六時頃秋葉氏方へ到り此時品川の吉田里美氏に初て会ひ、同氏及び泉・秋葉・今関・川島の諸氏と品川教会へ到る、今宵は鹿島君司会にて鶴野君のイエス、キリストてふ題にて流暢に説明され、次に山中君死と云ふ題にて之また痛切に人生の意義より死の何物たることを弁解せられ、最後に笹倉君は神の国は

近けりてふ題にて教の必要を解き励められたり、聴衆ハ九十名程ありし、是れ当教会近来稀なる集りなりしとぞ、

七日 晴天

礼の如く八時より祈会開き笹倉君之が司会者たりき、浜田君ハ励めて曰、抑も毎夜説教せらるゝ者は三人なれど実は我等一同の説教とも謂フべきなれば老人口を弛すべからすと、此の祈会の畢るや浜田君の動議にて今宵は本所の演説会故、其序に亀井戸散歩は如何にと、合意十六名程出来午後一時より腰弁当にて出発、各位其の扮立の異様なるは一興なりし、故を以て巡査ハ之を壮士とや見けん、小児等は学校教師とや見けん、かくて三時半頃本所教会へ着するや六名程は彼処へ止り、残十名にて亀井戸へ着せしハ四時頃にて先づ本町より大浜橋を渡り亀戸神社内を一通徘徊し、茶店の娘の指図により臥龍梅見物にて一快の主興を設け行くこと二丁程にて、正しく名にしあふ梅屋敷を見出し、当所にて用意の弁当を食し、暫時休息しあたりの梅をながむるも、梅尚早く尚間に一花二蕾を見認る程なりしも、花盛りし時より快遊を得たり、上野氏茶代を五錢置き曰く、我々は書生の事なれば先づ之にてと店主に出せしぞおもしろし、かくて五時五十分頃本所の教会へ来り、暫く休息し七時より演説始まり、馬場君の司会にて第一席に竹内君の疾なるに更り鈴木君天主教の失敗と云ふにて金曜会の演説風に語られ又然聞受けぬ、其次に竹林氏の祈祷の応験てふ題にて極平易に説明せられ、其次に大石君のキリストの愛てふ題にて愛に本能的と道理的とあり、キリストの愛は其の後に属するものなりとて得意の能弁を振われ大に人心を動したるが如し、今宵聴衆八十名程なりし、我校よりも寄宿生は勿論通学生の人も大概来られたり、今宵演

説の始る前芝君(志場)今日永眠せりと報来り、鹿島・笹倉の両氏直に見舞に行きけり、此の柴氏(志場)は神学部本科第二年生の人にて兼てより病氣の故学校には余り来られず、余は只二三回遇(マ)ひたるまでの人にて、よく人相の程も覚へぬは今に於て遺憾なり、余等本所を九時半頃出十一時半頃帰校せり、途中にて焼芋三錢驕り大に愉快なりき、

八日 雨天

礼(マ)の如く八時より祈会あり、大平君之が司会者たりき、午后、二時頃より弁当持にて秋葉氏を一
寸訪ひ、小倉君の寓に到り同家にて弁当を食し三時半同家を小倉君と同時に出發、將に雨も止み
たりしも路悪しくして大に難渋なりし、かくて和泉橋(ウヰ)邊より車に乗り下谷竹町なる明星教会(マ)へ着
せしハ六時頃にてありき、蓋し余等今宵ハ順番委員にてありしなり、七時を報ずるや矢島君司会
にて白土君の智識(マ)と信仰、白石君の国民の道徳、松原君の宇宙の大恩恵者等にて九時半頃閉会、
日本橋辺にて小倉は人力車へ乗り、余は矢島・四方田・富田等とがた馬車へ乗り来るや、松原・
馬場の両氏も入来り、新橋に下りまたく悪聖坂を避ん為田町より伊皿子坂へ通りたるに尚ほ悪道
には閉口したり、伊皿子坂上にてそば店に入り疲を散じ帰校せしハ十二時頃なりき、今宵集る者
四十名也、昨夜山中氏と談整、同氏の柔術の稽古着を七十五錢にて求む、

九日 晴天

〔欄外〕「志場邦雄君永眠ス／其ノ葬式」

八時より祈会あり、余之が司会たり、午后柴氏(志場)の葬式に出席せん為衆皆な同道にて午食後直に番
町なる同氏の寓に到り、間もなく西森氏之が司会にて、大石君聖書朗読と祈祷を為し、千屋君神

学部生徒総代として弔詞をなし、次に井深氏の簡短なる説教あり、同氏の祈りにて閉会し式畢りき、一時より二時にて畢りしなり、かくて余等は両国の説教会ある事故青山へは行かざりけり、而して余等は九段よりニコライ堂の見物なぞなして両国に到りしハ丁度五時頃なりき、余が同行ハ山中・太平・鹿島・赤須・鶴野の諸氏にて、九段の池の端にて二錢づゝのコンパニーを為し大に快を得たりき、時の談現今の女学生の批評にて彼女輩の神学生を賤みの大憂を難じあへりき、ニコライにてハ其の高大なるにハ聞きしにまさりて驚き入り申候、バラ氏おりき、さて両国にては星野尚築地より不帰にて同氏の室六丈敷程の間へ十五名程詰かけ夕飯を喫し、纏て七時に至るや赤須君主会にて八田君の生命、上野君の文学と基督教ハ何れも先づ上出来にて、何れも一寸仏教を撃難されしところありしが、之れ我等の最も注意すべき也、三番目の松永君の我爾何をなすべき乎との題目にて言気頗る痛快なりしと雖も如何にも文章朗読風にて言調の定韻なりしハ説教として打聞悪しかりし、今宵の説教は何れも一時間を消費し大に長かりし、午后十一時頃帰校せり、是より前鈴木直丸君番町なる柴氏より来られ今日葬式に列したる人々に菓子を呉れたりとて余等其の菓子を食すを得たり、尚説教後には茶菓の馳走あり、衆皆な悄然として星野氏の調到なるに感ぜしか如し、聴衆八十名

十日 晴天

八時より祈会あり、松本君之が司会者たりき、九時半頃より矢島君と同道、入湯し帰校するや我屋（マ）と佐倉なる佐藤君へ手紙を認め、午後秋葉氏の寓に矢島君と同行、余は馬太伝の注釈を借り来る、小川内氏居りき、午后五時頃より鳥井坂なる里見様を初めて見舞わんとせしも最早日暮た

れは不明中野へ到りしに、同家の叔母様も丁度里見様へ行く処なりしとて出口門口に出られ幸の事とて余彼姉に従ひ同行、里見に到り菓子や茶のと叔母様の会釈に心ならずも長座なし、芝の説教会あるよし告げ忙^急で退き、直に芝教会に来るや將に始らんとせし処にて清水君司会の役務められ、川添氏の広久^{恒久}の精神と題にはありしも宗教の必要てふ意味にて如何にも書生風に打働たるは宛も改進黨説会の前座とも謂ふべきかの如かりし、次に国沢君の心の改革とて悔改と云事を極痛快に説明せられ、最後に好川君の基督の救と云には好川氏丈あり、説教らしく弁ぜられき、聴衆八十名より百名位にて見受けられたり、川添及び国沢の両氏ハ何れも一時間程の説教なりし

十一日 晴天 安息日 紀元節

〔欄外〕「紀元節」

午前八時半頃より数寄屋橋教会指して出発、説教後に長老の撰事会あり、其后放光会の集のあるべかりしを遅れたりしを以て次の日曜に延べたり、余波多野へ到、弁当を食し二時半頃より同家の婆様と同道、里見様へ行き大に二老婆の宿談を聞き特に彼のお婆様の昔話は相不変盛なりし、同婆ハ五時頃帰られ余は尚残り其うちに純吉君も学校の方より帰られ、夕飯後暫く話し、七時退き鳥井坂なる教会にて高木氏の希望てふ説教の先づ何処とも指すべき見覚なきを聞き九時頃帰校しぬ、今宵集れるものは女学生と男学生のみに見受られ八十名程位なりし、今日波多野のお婆様の話に益太郎氏も此間銀座の太田資時氏方へ書生に行けりと、同婆様の喜び一方ならざりし、三時頃より雨ふり来り五時頃止みき、

十二日 晴天

〔欄外〕「明治学院ノ紀元節」

我学校にては昨日の紀元節を日曜なりければ今日に延し午前八時半頃より井深氏司会の基に祝会は開かれたり、宮坂君の祈あり、次に熊野氏の開会の主意を延べられ、次に普通学部より藤井・椎名・田島・西村・某の祝詞あり、神学部より浜田君基督教の所謂愛なるものを説て愛国のこと(マ)に及びじ大に快明なる演説を為されたり、開会せしハ八時半にて閉会せしハ十時半頃なりき、尚ほ午後七時よりハ学校より生徒一同への饗応あり、薩摩琵琶(マ)及び生徒諸氏の茶番興言等あり、特に田島及び佐久間の鎗舞は本ものなりし、是より前□□君の演説簡短なるあり大に当りたり、今日柔術す、里見君午前十一時頃来られ余に金を借らんことを求むるも兼□ざりければ其まゝ帰られしが秋葉氏へも行きし由なりしが、丁度不都合なりとて言張られしを話されき、純吉今宵さればとて夕飯を喫せられたり、

十三日 晴天

〔欄外〕「松尾ナル士族ノ懇親会」

昨夜より風吹き続き五月蠅し、今朝親父より手紙来り、余が立替たりし金壹円を送られたり、先方何れも無事の由、市原計衛氏ハ石田氏のいとことやらと縁談整ひたりとかや、一昨日は松尾(マ)にも礼の士族の親睦会あり、雨天にも不拘七十余名の集会なりし由、

十四日 晴天

昨日純吉君来り、余与ふに国より送られし麦粉とさたふを以てす、又湯飲及び匙をも呉れたり、

今朝大に寒浸みたり、午前六時半頃より台町教会に到り初め三十分間讚美歌第四・十・七十九番を稽古す、但し七十九番は今宵始め出せしなり、石原氏励の主意は我等何時主に召さるも差尽なき様心に於て用心すること肝要なりと、尚ほ尾崎氏励めて日く実に近頃は此辺にても死人大に見受られ、特に教会内にも三名程も腦充血に罹りし者あれば之等を思ふにつけ我等の死に就ての予備こそ必用なれと、柔術(マ)為す、

十五日 晴天

午后二時より三田に到り親父より送り来りし為替金一円を受取り、半切を求め下路を通して品川なる棲雲堂(のり)に到り口中を診察し貰わんとせしも齋藤氏不在にて直に帰路に就き、秋葉氏へ寄り久野兄妹に会ひき、今日雪降りしも積らず、又当館の小使更りたり、

十六日 晴天

〔欄外〕「金曜会演説会並ニ規則改正」

此日身体の具合常ならず、殊に頭痛の気味催し、為に午后三時頃より山野君と秋葉氏の寓を目掛けて散歩に出掛夕飯時頃帰校せりき、柔術も休みなり、午后金曜会の演説会あり、鹿島君のスペインセーはスペインサーハ不可思議論を唱へしが、之れ我等に比して或る点にてハ劣る所ならめと、又松永君は皇室とキリスト教徒と云ふ題にて皇室の我国に如何ばかり勢力のありし方より、我々は自由と真理を害せられさる範圍内にて皇室に従ひ行さるべからずと、諸君の比評(批)あり、尙当金曜会の為に雑誌等を取り来りしが之を廃することゝし、会費は尙集むることゝせり、また第一金曜日を祈会の日とし其外ハ皆演説会とし、毎夜六時より八時まで四人ツゝ出席して弁し得ることゝ

せり、今朝佐久間君より返書来たり、余また国元へ為替金落手の報を出せり、此の宵金曜会に入会するもの八名程ありたり、今日山野と共に炭を取りたり、

十七日 晴天

〔欄外〕「齒根ノ疾ヲ得品川ノ棲雲堂ニ掛る」

午前八時より品川棲雲堂へ到り待つこと二時間にして先生帰堂、直に診察を受けしに、其委少けれど前頃娘子の十四五位なる君と同様にて彼等は余程重きものにてありしが直せしと、此の病は齒根の肉腐失するものなれば、防腐濟を要すとて其の為ヨジムを呉れ、其後にて吞薬を為す為含漱料を与へられ、尚胃も幾分か変化あると見しにやきえんさんを糖瑳にてときしを与へられたり、又ヨジムを引く為脱脂綿を与へられたり、十一時頃帰校直に施療す、但しヨジムぬりハ食後直に為し三度づゝとし含漱は時に閑に乗して務むることゝせり、

十八日 晴天 安息日

午前八時出発、九時頃着堂、十一時退堂、直に本郷関谷に到り用意の弁当を食し、先日同家にて借り受たる金子一円、昨日催促ありしまゝ直に今日返済す、偕て叔母の語らる様、此間理吉殿来り、曰く自己方元来齒の具合至極不慥なりしか此頃は特に悪しく、何処かの医師に診察を頂き度とも存ずれと何分にも小使の程も充分ならぬ故若し御都合は如何と、而して叔父は然ば幸三氏と相談の上如何にも取計ひ遣るべしとて其中に返事差出由言聞して返せしと、故に余は叔母に佐藤の順天堂へ見せらんことを願ひ、費用の程は一時立替置る様頼み来ぬ、年末は余帰省せしに親父の齒も矢張余等と同所に大に困まり居られしが、思ふに之れ所謂遺伝の然らしむる処なるや、

それわさておき理吉事此頃は少々生ひき風になりやわせまじかと叔母の申せしハ如何にも然るヤも不知、彼昨年帰国せし時も余は業已に彼が□分其気味ありしを見、大に注意せしことなりしが、今日尚叔母の話ありては全く其の傾向生したるものならん、実に彼等如き若年輩が江戸の職人中間(中)に入ることなれば、其無覺の感化にても沢山あるに殊更其の先輩を做ふが如き風あるは実に其の生意氣風となるも是非なき次第とわ言ひながら悲(嘆)かわしき次第なり、之れ理吉が言前にて知るべし、叔母理吉に何用ありて来りしやと尋ねしに彼御小使を拝借しまほしと、叔母何にするやと、彼答て齒云々また本を云々、叔母曰く何の本(要)の入るなると、彼曰く何か続ものを欲しく思ふと、かくて同家を一時半頃退き麻布なる里見へ寄り余が送りし蕎麦の湯やかきたるを馳走になり、尚弁当の用意ありし故午后七時頃まで話し、純吉君と同道麻布教会へ到り河合某の説教を聞きたり、氏ハ神学生ならん、塵風を冒し歸校せり、八時半、里見君の話に承五郎氏は今日遠州の方へ行かれし由、矢島君神田へ宿らる、

十九日 晴天

東京在の日本基督教会の非ラルソドキシ一派のラルソドキシ派對の相談会(27)及び、ナックス及びインブリ氏の二人或は何れかを再び送らんことを先方のミシヨンへ請求せん為の集会日本橋教会に在り諸氏行り、今日柔術稽古為す、

二十日 晴天

午前十時より品川棲雲堂に到り診察を受け、胸部の視察を為されしも別条なしと、而して必ず治療其効を奏すべしと、病名は原語にて「ストスカッケ」と言ふ由、余理吉のも同様なりと語りし

に、血液の具合より原因するものなりと、内用及び含漱料を貰ひ来る、但し身用ハ三日分たるなり、午后バラ氏より五円受取内三円八錢を賄方へ、十錢を柔道部へ、十五錢を秋葉様の拝借へ満てたり、午后入湯し帰路一寸秋葉様へ寄り泉氏と貫一氏のマクネヤ氏へ来らるに同行帰校す、千磐君余が眼鏡を貸せし為其の礼なりとてポープの詩を贈らる、台町に小火事

二十一日 晴天

朝程雪降りき、柔術稽古出席す、千磐君今日より入宿せり、

二十二日 晴天

志場邦雄君の永眠に就き神学部生徒同礼に見舞を遣すに就き、我組にては一人前五錢出したり、

二十三日 晴天

今日にてスウキン⁽²⁷⁾ントンの英文学の上巻を上げたり、午后三時より品川棲雲堂に到り葉貫ひ来り、帰路先生の帰らるに会ひき、故を以て柔術には後れ^(遅)欠席したり、午后六時より金曜会の演説会あり、八田君軍隊と基督教てふにて軍隊の腐敗を借り基督教内の弊害を論せられしに、後にて浜田君の批評にハ軍隊の弊害を論じ基督教内の弊害に及ぼ^(ママ)すと云ふ方可ならんと、其次に白土君ハ故障ありて出席はせしも演せられず、次に池幸雄君祈祷と云ふ事に就き話され、其次に好川君は我宗教ハ生命てふ題にて己が通用話を為されたり、八時頃閉会したり

二十四日 晴天

唐風吹き荒れる、午后二時より自営館に到り印版室を縦覧し、出版物編輯室にて田村氏に面会暫時相語り、話末に余が同氏に払込金子を今年よりの分此七月以後に為さんことを願ひしも、先方

にても余が払込を待ち居りたる様にて、他人より借金せる其利金あれば誠に困ることにて、余は其上は迫りもせで帰り来りぬ、時に浜田君も居りしが氏ハ余の帰る時のちの石川省吉の追悼文あるを呉れたり、蓋し同氏のものせられしなり、午后二時より普連土教会(79)に行き秋葉氏の神の国てふと増野氏の基督教の教理と神の靈性てふ演説を聞き、帰路台町教会にもありし演説会へ一寸寄りマレキリンデル氏の基督教の基礎てふ演説を聞き九時頃帰宿す、

二十五日 晴天 安息日

〔欄外〕「波多野すゑ子ノ第三年紀ニ招カル」

午前九時より教会に到り十一時退堂、直に本郷関谷へ参上、弁当を食し一時頃帰路に就き、池水にて貫一君の払金如何様やらんと問ふに三四十円位なりと、又松田なるは二十五円程なりと、娘のカせしこと故当にはならねど後にて純吉君に聞に下宿屋より上総の方へ申送りしにハ三十円とありし由、かくて今日は波多野にておすえ様三年紀に当るを以て、其の記念の為め夕飯を馳走する由報知来りし故、里見よりも誰の行く事と推察し、同家へ先づ到るや長谷川君在り、其中に波多野の祖母様も同家の祖母様のお向(47)に來られき、余も後より波多野へ繰り出し、純吉君と同道し茶の間に承五郎氏及び海老原某と四人にて会食、食後茶菓出で九時頃まで談話し、十時少前退き里見へ来り、一寸話し帰校せしハ十一時頃なりき、今日御客にハ青山様より母君と二人のお子様と高田のおさへ様にてありき、

二十六日 晴天

午后第三時半頃より品川へ葉取りに行き、先生留守なりければ只葉のみ貰ひぬ、但し胃の葉のみ

明治二十七年二月

なり、帰路秋葉様へ寄りすしの馳走に与り、近頃は中食は丈成慎^(ママ)まん積なれど食時なりければ有難拝食しぬ、今日も柔術を休みぬ、

二十七日 晴天

〔欄外〕「里見貫一君図書掛トナル」

此日一時頃かなりなる地震振ひき、里見貫一君本日より学校の図書掛となりぬ、柏井氏歴史の教方を更へ今日より近世史の大事件のみを先生先づ其の大体を筆記させ、細きことは口演にて教へらるることとなり、

二十八日 晴天

〔欄外〕「押川氏演説ス」

井深先生疾気の旨にて欠席、また歴史の時間に英文学を為すべかりしも此また整ず休となり、依て十時より品川の医者に到り診察を受け、尚今少し辛忘^(ママ)せよとて含漱と胃の葉等貰ひ来ぬ、午前国元へ手紙を出しぬ、今日自営館の中村君に託し金一円を峰尾様へ届く、之れ先月分と今月の払金なり、午後柔術す、但し山下先生は欠席せられたりき、今宵六時より押川氏の演説普通学部の講堂にあり、主意は我々は常に主耶蘇基督の心をもたざるべからずてふにてありき、

ベ金五円九拾七銭

〔別紙 二月金銭書付〕

明治二十七年三月

一、金五錢 御礼

同

一、金五錢 志場氏見舞

一、金三十錢 教會費

二十一日

二十五日

一、金二十七錢 日本評論六冊分まで

一、金二錢 散髮

一、金十二錢 油代

一、金十一錢 郵便代

二十五日

一、金一円 自営館

一、金十四錢 帳面

三月

一日 晴天

〔此日第(一)回帝國議會議員の総撰挙あるの日なり、委細は明日を以知り得べし、午後入湯す、

二日 晴天

此日柔術為す、但し山下先生不参せられき、午後六時より金曜会の祈会あり、野村君司会たりき、

三日 雨天

午前十一時より品川棲雲堂に至り診察を受け、此日は尚ほ鉄薬の丸薬を呉れたり、此日は其外にハ礼(ママ)の胃の薬のみ貰ひたり、此日東京にては節句にて秋葉氏にては白酒を求められ茶碗二杯汗(汗)したり、此日また入浴しぬ、

四日 曇天 安息日

午前八時半より教会に到り晚餐式あり、後ち供励会の総会あり、十二時頃散会、余は直に本郷関谷に到り午食を馳走になり、矢島君三時頃来るに同道帰校す、此日桐通上にて小倉君にて兼て注文し置(マ)きる帳面を受取、午後七時より台町に武藤氏の演説ありき、

五日 雨天

此日柔術す、但し先生は来らず、井深氏今日より出席す、午后六時より秋葉氏へ到り八時頃長谷川と道行帰校す、

六日 曇天

午后二時半より品川に行く、丁度先生在り、直に応診を受けしに先頃よりハ幾分か好き方なりと、また今日は薬も今までよりハ強むるとやに言れたり、今日は含漱料・腹用薬・丸薬を貰ひ来りぬ、今日先生の言ふやなれば余は全く貧血質性なる由、是れ余も最前より或は然らんとは心得居たりし也

七日 雨天

午后秋葉氏方へ到り同氏の為学校より教義歴史を借り遣りたり、帰路台町の祈会へ出席、八時帰校、此日里見君の話に叔父様事昨日出京せられし由、此日柔術為す、但し山下先生不参

八日 雪天

井深氏出校せず、あるひは風邪再興なるやも不知、午后矢島と入浴、余は帰路秋葉氏へ寄り日暮方帰校す、時に雪二寸程積りたりき、此日すみ十二銭なるを求む、此日より英文学の下巻を讀初

む、蓮沼より今関喜一郎氏及同氏の祖母なるもの勝二郎氏へ面会旁東京見物に來られし由、借本
残す返す

九日 雨天 今上皇帝大婚二十五年祝

〔欄外〕「大婚二十五年紀」

此日午前八時半より普通学部講堂にて銀婚式の祝会あり、井深総理之が司会にてマコーレー氏の
演説あり、熊野氏賀表の文を朗読され君が代を唱ふて開会せり、当学院よりハ献上物を美術家齋
藤某に依頼し銀捲(壽絵)の花ハ梅にして中に筆の莖を銀にて飾りたるとうくいすの水入を安置したる
硯箱を差上る事とせしとぞ、金額ハ三十円程なりと、昨日秋葉夫人より話ありし故十時頃より同
家へ出欠(出掛)すしの手伝をなし、また馳走になりぬ、矢島君も与りき、午後せい子を携れ泉君の寓へ
到すしを送り二十分程話したま帰秋、直に矢島と品川に到余が葉丸薬と服薬を貰ひ來る、此日泉
氏の妻君と初て会す、一見里見のお鉞姉に彷彿たりし。

十日 雨天

午后一寸秋葉氏の寓に到るや此度蓮沼より來られし勝二郎氏の母君居られ初て面会したり、

十一日 曇天 安息日

午前八時より櫛辺君の牛込へ行くに会ひ同行、赤坂まで到り彼処にて別れ余は一寸波多野へ依り
直に靈南坂教会に到り増野君の原罪てふ題なる説教を拝聴しぬ、時に里見の叔父、貫一君と同道
入堂、尚祖母様も御出にて散会するや祖母様と叔父様ハ買物に通りの方へ出掛られたり、余は波
多野の叔母様と同行同家へ行きたり、貫一君叔父様の買物□□六本木へ残し、妻子は危険なりと

て先づ草間様へ預に行と間もなく波多野へ参り、余は承五郎様の為書物を做し遣り、後貫一君と
囲碁一番上りにて余初め三目置き三度戦ひ三番目に四目となり、黄昏催し(折柄)降柄中野重遠氏来り、
余等間もなく退く、余貫一君と六本木の同家に到るや叔父様等已に帰宅せられ承五郎氏の貫君へ
言はたの家叔父様は直に波多野へ行れ、余夕飯馳走になり午後十時頃帰校す、叔父様には今日銀
座にて舞踏のだしを見らる所すりに合ひ袖なる金子三円程を取られけりとぞ、

十二日 晴天

午後秋葉氏方へ到りかきもちの馳走になりき、此日品川へ行く日なれど未だに薬料の効果見へざ
る故断然罷めんとす、此日柔術を休む、

十三日 晴天

午前函書室にて里見叔父に面会せり、昨夜秋葉氏へ泊りしなりと、余三時より品川へ到りしに先
生尚服薬を進められ亦薬を貰ひ来る、帰校するや国元親父より手紙来り居り、秋葉・里見の分も
あり直に届く、先方にては風邪大流行にて誰しも之に感(冒)せぬ者とはなき程なりと云ふ、吾家
にも達者なるは和嘉と俊三のみなりと、然し何れも大したことはない非る由、石田君には去る九日
の日に里見へゆいのうを送らんとて我家に来り、親父病氣なりければ良一更りて里見へ行きたり
し由、理吉事去る六日の日とやらに関谷の叔母と同行、順天堂に到診察を受けしに、只た齒の垢
さへ取り除かんには追々全快すべしと申されし由申来り、はれ薬を呉れたりと、賄パンを食せ
り、

十四日 晴天

経済の先生議論文の問題を出さる、矢島君と入浴し後散歩かたく河野氏の寺を尋ねしも彼等留守なりき、午後六時半より台町教会に祈会に到る、此日も柔術を休む、

十五日 雨天

午後植村先生の福音史へ出で大に益す、一昨日品川より貫ひ来りし薬如何にも徴効知れぬ故全く棄放す、

十六日 晴天

〔欄外〕「中島裁之氏²⁷支那内地漫遊談」

矢島君金曜会の演説会委員なるを以て今明夜と深川と浜町の臨時演説会にて浜町の方へ行けり、浜町なるは今夜は大石・赤須の両氏、深川にてハ馬場・好川の両氏、また明夜は浜町浜田・笹倉、深川に小倉・千屋の両氏となりたり、金曜会の祈会を五時半より六時半まで開き、六時半頃より普通学部の講堂にて此頃支那内地を漫遊せられたる中島裁之氏の演説あり、廿四年の六月頃行れ此度帰朝せられたるなりと、重に旅行の難澁話にして随分あれが本当なら感心なものなり、終に際し支那人は一体に無学なると、学者を尊敬することゝ礼儀の正しきと、婦人と男子間の厳密なることの如きは余が全く見抜たる事なりと言れしハ実らしきことなるべし。氏は九州の人に於て西京のある寺院に育ちし由。余此日柔術す。昨夜より将来の思想の園てふ忘備録を書初む。

十七日 晴天

〔欄外〕「齒医渡辺良斉²⁷ニ掛ル／明治学院神学部臨時説教会／同盟文学会」

午前八時より弁当持参にて本郷に到り関谷にて之を食し、同十一時半頃下谷中町の齒医に到り診察を受けしに、余が齒は随分手後(通)となりしものにて、今になりては只だ之より腐蝕し行を止むるの外詮なしと、而して前齒一葉は是非抜き取り入齒となさねばなるまじと、而して全く治療を施し終りて蝕滅の止まるには三十日位を要すと、其費用一日十錢位の割なりと、また入齒は一本なれば老円にて閑然する処なかるべしと、余即ち再考すとて帰り、再び関谷へより直に退き、高田(冊女)耕安氏の宅に到り診察を乞ひしも、救療会の紹介なければとて言張られ、夫より直き近き齒科渡辺良齋氏の医院に到り、先づ診察を受しに、また下谷の医の申せしこと、大同小異にして只た彼れは余が前齒一本は入齒にすべしと言しも、此は然言わざりしなり、されど余が齒は仮令今治療を加ふも元の如とは到底成らず、大概は近年に落ちなんと、かくて余は一寸前齒の辺を掃除し貫ひ含料水を貰ひ来りぬ、矢張一月位は通はる様申されたり。帰路里見へ寄りしに此日は波多(マ)及び草間様よりの来客あり、夕飯の饗応にてもあるらしき。純吉君及び原君と同行帰校す、于時五時。今宵普通学部講堂に青山との同盟文学会あり、ながく盛なる様子なり、矢島行り、純吉氏と弓を曳き十本つゝにて彼は角を割き。

十八日 晴天

午前八時頃より矢島、好川の両氏と共に神田まで至り、余は渡辺へ行き治療を受け十一時頃関谷に至り弁当を食し、直に麻布なる里見へ来り暫く談し四時頃帰校せり、叔父尚居り明日帰国さる由、余は親父と芳郎氏への手紙を彼に托(託)しぬ。叔父は草間様へ行けりしとて留守なりき、午後七時台町にて泉氏の説教を聞きたりし。国元親父へはかきを出しぬ。

十九日 晴天

午後三時半頃より秋葉せい子を携れ高山⁽²⁷⁾に到り、彼女の齒を抜き貫ひ余も診察を受けばやと思ひしもせい子の治療料の高価に驚て見合せぬ。せい子の分二十錢取られたり。矢島君日本橋教会の同志会員の報告会に行かる。余柔術を見合す。柏井氏試験の為とてゲーテの中より翻訳の処出さる。

二十日 晴天〔欄外〕「第二回東京神学生講話会」

八時頃より神田の渡辺へ行んとし台町より千屋和君の麴町へ行くと云ふに出会い永田町まで同道、氏は今の学校の有様より前の有様を語られ、小倉其他の今度の金曜会の演説会にもあまり先達ぬ故は、先年萩野・小川其他の人々の処置大に其等を得ぬより、彼等に反対せしことありしによりてなりと、其内情尚ほ不尽、さて渡辺に到るや今日はたゞ塗葉のみを為し呉れたり、関谷に到りおはぎの馳走に与り、一時半頃退き二時頃築地福音教会⁽²⁷⁾に到り、第一席に布施等（麻布東洋英和学校）の英語の論文朗読、其次に青山よりの三宅貞次氏の世紀の日本に於る主導者てふにて弁せられ最後にアンデレー⁽²⁷⁾学院の多田潔氏の神の顕現てふにて、伝道者たらんものは神を直観せざるべからずと、最後に増野^(ママ)の氏の神学の価値てふ題にて神学の高尚なる故を説明せられたり、会終て福音神学校⁽²⁷⁾講堂にて茶菓出で夫々学校の報告ありて後間もなく閉会せり、時に誰か主の祈をなさずやと云ふものあり、笹倉君曰此の騒しき処にて主の祈は出来得さらずと曰や何処の者にや洋服を着たる者にて曰、やれくわけわあるものかと衆立て祈れるぞわひしかりし。今日理吉よ関谷へ手紙来り曰、菓の方は見合せ牛乳でも飲まんと、蓋し胃弱きなりと

二十一日 晴天

〔欄外〕「月蝕」

午後山野君と秋葉氏方へ行き直き帰校す、柔術休む、親父へはがきを出しぬ、

二十二日 晴天

此日バラ氏より貸費金を受取り賄へ二円五銭、其外へ少つゝ払ぬ。午食後直に神田の渡辺へ行、今日も只塗療時〔マ〕と含料を貰ひしのみにて一寸関谷へよりしに清水小太郎氏の叔父君千葉へ行れ只今帰京せしなりとて一杯初りたる処なりしが、余は直に帰路に就き六時頃着校しぬ、昨日竹林君移転され余も一寸手を貸したりしに、夜に到り呼に來りし故直に上野氏と參上、そばを馳走になり、種々伝道上の感話等の実験談等を聞き十一時頃帰校したり、此宵月蝕にて三分一余程欠けたりき（此宵とは二十一日夜）、入浴す、

二十三日 晴天

〔欄外〕「大西先生解職サル」
〔27〕〔26〕

昨日神学部の理事員会あり、大西先生はスニテリヤン主義の人故、当校の教授となさんは宜しからじと云ふこと議結〔決〕となり断然罷るなりと、今日之を聞き直に矢島・千磐を總代として井深氏に掛合たるに如何にも種々なる事情あり、此度の事は再び改議〔会議〕するも無駄なりとのことにて衆皆遺憾ながら後策を失せり、今宵の金曜会には余司会者となり、大平君の基督教と神道てふに上野君の東洋の性理てふに國澤君の不平哲学てふに千磐君の武士道とキリスト教てふにて二人程の批評あり、閉づ。

二十四日 曇天

午前九時より神田渡辺へ到り午後一時より高田耕安氏に診察を受けしに矢張品川の医師の申せしと大同小異にして毎土曜日に行く筈になし来り、一週間分の薬料びんごと九錢払ひ二時半頃帰路に就き帰路里見へ依り茶を馳走になり六時頃帰校せり、

二十五日 曇天 安息日

〔欄外〕「大谷虞君(アヤヒ)帰校ス」

午前七時和田・千磐等と番町教会に到り今日より初むる植村氏の約翰伝の講義を聞き九時半より神田渡辺に到る、此日は日曜なれば人雑(マヤ)混せし故薬のみ貰ひ関谷へ一寸依り三時頃秋葉氏へ来り、同家にて手拭を借り入浴したり、此日芝山内に弓を試み二十本の中三本、但し八寸角位なりき、大谷虞氏二三日前帰校せり、

二十六日 雨天

ランダス氏試験の問題を出さる、井深氏故(アヤヒ)あ休まる、一昨日余等の総代として和田と千磐の両氏大西先生解職の議に就き理事員会へ意見書を出せり、柔術為す、先生来らず

二十七日 晴天

午後神田渡辺に到る、

二十八日 雨天

今日井深氏は倫理を翻訳させたり、午後泉氏の寓に至り十時過まで談笑す、千葉より一色氏なるもの試験後の休にて来り、増田氏もあり供に帰校す、柔術為す、

二十九日 晴天

午前柏井氏の歴史の試験ありき、

三十日 晴天

午前ランヂス氏の福音史の試験ありき、尚午後翻訳を仕上、柏井氏の寓に持行、柔術は山下氏の更に二人の弟子来りき、

三十一日 晴天

弁当持にて里見へ行き彼処にて使ひ、直に高田氏へ行き治療及び薬を貰ひ来る、薬料六錢（二週間分）、帰路波多野へ寄りしに関谷の叔母君御出にて、其うちに同家の伯母様里見より歸られ、次で峰子様の舞踏の師匠来り、峰子様の稽古あり、夕飯馳走十時過まで談笑、関谷叔母を田町まで送り、彼は車にて歸られ余は一向に帰途に就き十一時過頃帰校しぬ、

ズ金三円八十四錢五厘

〔別紙 三月分金銭書付〕

二月分三月出

一、金一錢五厘 自営館せんだく

一、金二錢 集會金

一、金六錢五厘 せんだく

一、金二錢 講話會

一、金二錢 はがき

一、金十錢 柔道

明治二十七年三月

一、金二銭二厘

ほや代

一、金一銭

はがき

一、金三銭

鉛筆

一、金二銭

鉛筆

一、金二銭

矢場

二十四日

一、金一銭

はがき

一、金二十一銭

下駄

廿四日

一、金九銭

高田薬代

一、金三銭

本

三十一日

三円五銭

食料

一、金六銭

高田

金七十九銭五厘

四月

一日 晴天 安息日

〔欄外〕「神学部春期休業始ル」

午前七時より番町教会に到り植村氏の約翰の講義を聞かんとせしも、同氏不快の由にて休まれ、それより数寄屋橋教会に行き晚餐に与り、直に里見へ来り、弁当を食し一時半頃より伯母様と貫一君と山内を散策し、四時頃秋葉氏へ行き暫時談話し帰校せしハ五時頃なりき、桜花まさに盛ならんとす、此日佐久間町にて根むち八銭なるを求む、⁽²⁷⁾₍₂₈₎

二日 晴天

〔欄外〕「長谷川君事上総松尾へ行」

長谷川君今朝五時頃千葉県九十九里へ出発せらる、尚長山・白土の両氏も水戸へ帰らる、両氏は目黒より汽車に乗らる、余等之を送りき、午後秋葉氏へ到り諸氏と御殿山に桜見物に出掛く、余一寸医者に到り薬料二円六十六錢払ひたり、御殿山の桜今日以て盛時とす、午前三田にて為替金三円受取りたり、明日は神武天皇祭なり、

三日 晴天

波多野にて用事あり来られ度とのことにて余は純吉氏を誘ひ出頭す、彼方皆様花見に行る由にて余等其留守居を為す、今日は上野・向島辺へ行れし由にて午後七時頃御帰宅あられたり、十一時頃まで花合あり余大に負く、奥様の弟君串戸真佐樹君昨日来京せし旨居られき、

四日 晴天

午前またく花合あり、余また敗、十一時頃より伯母様里見の伯母様と中川とか云ふ処へ老人会にて行れ六時頃帰宅されたり、尚余等奥様・真佐樹・純吉して山内へ桜見に出掛、弥生館のシノラマを見、純氏と彼処に別れ、次で勘工場を一覧し丸山を経て愛宕下に出て、峰子と奥様は上乗し余は串戸君と愛宕山に登り徒歩にて帰りき、今宵また波多野へ泊す、今日承五郎氏と碁を囲み余白にて負けたりし、初めて相手稍となりしなり、

五日 曇天

南風烈しく閉口したり、八時頃波多野を出て串戸君を携ひ学校に帰り稍休息し九時半頃より仙岳(泉岳寺)を見物し、尚品川停車場にて汽車の発着を見、進で御殿山に出で夫より帰校、直に午食し一時頃より再び波多野へ行き稍ありて帰り、終に里見へ寄り貫一氏より貸金五十銭受取り六時頃帰校

す、串戸君を留めんとせしも明日早く日暮へ行くとのことにて送り還せしなり、午後六時半頃より聖書学館に至同校の卒業式に列す、蓋しマクネア氏より学校へ召喚状来りしなり、卒業生は荒木・渡辺・宮城・吉田・庄田・中村・竹林の諸姉なりき、秋葉氏司会にて木村・石原の励めあり、生徒の奏樂あり、畢て菓子及コヒーの馳走あり、八時半頃閉会せりき、余歸路秋葉氏へ寄り十時過まで話し、歸路赤坂の火事を見大に心配する処ありしも松本氏の話に麴町辺なりと聞て行もせざりし、

六日 雨天

午後秋葉氏の宅に昨年卒業の神学生の親睦会あり、稲葉・村木・中村・浜田・大石・伊達・北郷・泉・大谷の諸氏会され大石氏此が司会にて聖書朗読あり、祈ありて相語会ありたる様子なり、散会せしは十時過なりき、此日秋葉姉はすしを造られ諸氏に饗せんとせしに大石君すしを誂へ来り全く衝突したりき、今晚秋葉氏へ宿す、今朝長谷川氏の為芝市役所に至りしに於寄宿地徴兵応徴願済届てふを出さむ、

七日 雨天

午後頌栄学校の卒業式に秋葉氏と同道す、式畢て余興に謡戲あり、また菓子の馳走ありき、浜田氏より植村氏講義の倫理学を借り之を写し初む、昨日芝へ行き掛に雨に合り歸路八錢にて車を雇わざるを得ざることとなり憎らしかりし、又懷住事談十五錢五厘にて求む、

八日 雨天 安息日

午前数寄屋橋教会へ行き、歸路里見へ寄り遂に宿り純氏と麻布教会へ行き村上二氏の説教を聞き

し、此日昼食は波多野にて弁当を食し夕も里見にて弁当を食しぬ、波多野にては峰子様御誕生日なりとてすし出来馳馳走になりき、承五郎氏風邪の気味ありとて臥し居られき、間野鶴太郎氏出来し御鉞姉臨月にて少し異様なりとて差配のもの引取らんことを願ひ来りぬ、国元へはかき出す、承五郎氏と囲碁す、

九日 雨天

一寸波多野へ到り間もなく芝区役所に行き長谷川君君の放寄宿地徴兵応徴願済の届を差出し帰校せしは十時頃なりき、倫理を写し、午後入浴し一寸秋葉氏へ到り吉田里美氏千葉へ巡廻伝道に行るゝに就き千葉の図を貸し与ふ、里見伯母様鉞様の世話に行れ貫純等学校へ食事に来らる、

十日 雨天

此日倫理を写しぬ、午後秋葉氏へ到りしに妻君少し病氣の前兆らしとて臥床、午後七時頃矢島氏の友三井国助君来る、二三日滞在するなりと、渡辺嘉夫氏より此度同氏其他人と協議の上、旧松尾藩人の青年会を組織する故、来二十二日の日同家に来れかしと往復はかきにて知さる、余直に賛成して報じぬ、

十一日 晴天

弁当持参にて先づ波多野へ到り一寸庭修めの手伝をなし、一時頃より高田へ行き、序に関谷へ到り直に千駄木町の渡辺へ行き原田の祖母君に面会し暫く話し、義夫氏留守にて関谷に夕食馳走、渡辺にて聞き故福島に到り同家に内中の不恙を見舞、九時半頃退き十一時頃麻布の里見氏へ来り、裏手の開きを越し雨戸を開き貫氏ノ床の辺を這ひ漸く其の貫氏一人なるを知り之を起し其俵

共に寝ぬ、

十二日 晴天

六時頃起き貫氏先に出校、余後を閉て出で先づ赤羽へ到り三州砂一表(畝)に石灰一表(畝)二十五錢とセメント一斤十錢を八錢の人力にて波多野へ持来り、九時頃より金魚池の修繕に取掛りぬ、之れ昨日承五郎氏に約束せしなり、かくて午後五時半頃此日は止めしが破損の半程繕ひ得たり、夜分承五郎氏と囲碁す、

十三日 雨天

〔欄外〕「明治学院神学部基督教大演説会」

昨日の疲を以てか七時半頃起床、大に面目なし、昨夜より雨り今朝尚不止、今に晴るかと待ちわびしも止む様子なければ、午後四時半頃帰校の事にきめ六時少し前着校す、矢島等不在、日本橋の明治学院神学部基督教説教会へ行かれしならん、承五郎氏と午後囲碁し終に余黒を持ちしがまだ氏白とわ打たれざる様子なり、氏午後慶応義塾の理事員会へ行る、

十四日 晴天

今暁三時半頃かなり大な地震入り、余も平生ハ起きもせさりしが今朝ハ大に驚きたり、先づ岐阜(岐阜)の地震此方の地震あり、後にて新聞を見るに東京近方に限られしと、但し横須賀辺もかなり振ひたる由、今宵六時半頃赤坂教会に浜田・清水・山中等の説教あり、余も出席、四十人程来り、

十五日 晴天

風少し出づ、十時頃より貫一氏と赤坂靈南坂の教会へ行きしに、増野氏同教会の神戸に於る総会

の報告と所感を聞くに中々好結果にて其の重なる問題は外国ミッションより独立せんかとのこと否決となり、次に基督教公認を政府へ願出度とのことをも否決となりこと等、他に細くせしこともありし由、話中大に高慢話の中に暗に我教会内の争乱を当てしやに聞へたりき、今日池も悉皆繕ひ上りたり、午後里見貫一君と囲碁し初め三目置き二回続て負け遂に四目置となり其なりにて了りき、時に十一時頃なりし、同家にて妻君も教会へ行る、夜分承五郎氏大に基督教に就き話さる、今宵台町教会に千磐・野村・白井等の説教会あり、三井氏昨朝帰国せりと、

十六日 晴天

〔欄外〕「神学校第三学期始ル」

風可なり吹きぬ、九十九里教会にても佐久間氏事尚永住さる様なりし由、里見姉と石田氏との結婚は明日なりと、秋葉氏へ招状来りし由、今日午後一時を以て第三学期始まりフルベッキ氏ノ演説、基督教の基礎とも謂フ可き三大要素は神と人間と未来となりと、三時頃より波多野へ到り池の水を入れんとせしもまだセメント乾かず、少く割目を繕ふて帰校せしハ六時半頃なりき、柔術休みぬ、

十七日 晴天

今日より学校授業始まりたり、矢島と入浴す、

十八日 晴天

倫理書来り、今日よりホプキンス氏を用ゆ、ウエスコットの後話の福音を借りぬ、午后矢島・八田等と品川の台場へ散歩す、柔術為す。

十九日 晴天

午后波多野へ到り池に水を充すに今尚瀾る処あり、之を膳(膳)ん為再び放水しぬ、十一時頃帰校す、但し波多野より中野へ到り武雄氏と囲碁し余三目置にて負けたれど氏も貫一氏位な処なり、

二十日 晴天

バラ氏より貸費を受取り賄方へ二円九十一銭出り、好川へ柔道費十銭、講和二銭、金曜二銭払ひぬ、午后七時より金曜会の祈会あり、笹倉君之が司会たりしも祈る者二人微々たりし、后幹事の撰びあり好川・松永当りたり、また近く親睦会を催しては如何てふ動議出で端なく員委(委員)を撰ふことになり余と笹倉・国沢等之に撰ばる、先づ来る二十八日にあすか山行の積に円ぐ定め散会す、今宵集りし者十名、川添君余等か室に同居す、

二十一日 晴天

九時頃より弁当持にて先づ波多野へ行き一寸池を膳(膳)ひ、弁当を使ひ十一時半頃同家を出で小川町辺の本屋を冷かし、二時頃高田氏方へ着し三日分の薬を貰ひ、雨降り相なりければ関谷に到、小太郎氏の只今千葉より帰れりとの処にて同氏と同道赤坂まで帰り、一寸波多野へ寄り、また里見へ寄り一寸食事馳走になり九時半頃帰校す。小太郎氏は早川へ同居し居る由、長谷川君の事に就き国本へ手紙出す、

二十二日 晴天

八時頃自営館に至り峰尾様へ三四月分贖金(贖金)一円を払ひたり、同九時退き里見へ一寸寄り直に教会へ行んとせしも、時間迫り芝教会に至り久ぶりにて和田氏の説教を聞、十二時に波多野へ行き池

に水を充すにぞまた漏出せり、然に水入の所に石あり、其左の辺少しく割れ其処より漏ること別に他に漏所もなき様子なれば、またく他日をきし此を膳（膳）わんと約し来る、但し午后十時頃まで花など遊び帰校せし八十一時頃なりき、矢島君両国より余より少し後れ十一時半頃帰れり、

二十三日 雨天

昨日長谷川君より手紙来る、同氏ハ松尾にて病氣なりし由て尚全快とならず、廿五日頃まで先方に滞在する様なりと、余氏の為バラよりサポートを受取内三円を同氏に為替を以て送りぬ、赤羽にてメセント（セメント）を買来る、メセトハ湿を受けると仕舞なりとぞ、柏井氏欠席病氣にや、柔術為す、

二十四日 晴天

二時過より赤坂波多野へ行き池の膳（膳）を為す、六時頃帰校す、午后一寸秋葉氏方へ至りしに皆留守なりし、

二十五日 晴天

十二時より神田高田氏へ出欠六時頃帰校す、但し今日は齒根を切り開きて以て塗薬せり、少しも痛みを感じせざりし、夕食後上野君と散歩し大に快を得たりし、

二十六日 雨天

午前入浴せり、親父より手紙来り、金二円五十銭送られ内新報社へ五十六銭、石原氏へ六十三銭配送せよと、

二十七日 雨天

金曜会の演説に白石君の悲喜と主命に武内君の敵てふあり、此評盛なりし、白石君のはアーチフヒシヤルなりとは名批評なり、川添・原不参

二十八日 曇天

〔欄外〕「旧松尾藩青年会開設並初会」

午後高田へ至り受術葉貫ひ関谷へより直に駒込なる渡辺へ行き叔母様の指図に従ひ牧田氏の宅を尋ね、同家に到りし頃ハ四時頃なりし、之れ兼て渡辺、四宮義雄、遠藤氏等の催に係る旧松尾藩青年会の発開の初集会たるなり、会するもの三十名ばかり、後は青年のみの積なりしも牧田・国井・大木・河野・遠藤を初とし数名の親父連も来り、青年には三浦・中野・渡辺・田口音吉・福島於□吉・福島三造・里見貫一・高林其他数名ありき、議事には会則を議せしのみにて他に演説等もなく、夕飯に酒出で後ち興^{〔余興〕}返あり、九時頃散会せり、会費二十五銭なりし、

二十九日 曇天 安息日

〔欄外〕「須貝信民氏上京」

昨夜関谷へ宿り今朝数寄屋橋教会へ到り教会費を払ひたり、正午頃波多野へ到り午食馳走に与り、二時頃より家内総出にて（但し下女等を留守居として）大久保のつゝじ見物と出掛け六時頃帰宅、時に須貝の叔父波多野に来り居り、今日出京せしなりと、彼は松尾社の用を負ひ兼自己の払物を持来りしなりと、今宵九時頃余は同叔父を携れ白金へ帰り叔父を宿さず、昨日金曜会員はあすか山へ運動に行けり、飯倉にて使徒行伝を三十銭にて求む、

三十日 晴天

十二時より芝伊手氏へ到り彼処に待たるに春太郎氏を携れ觀靜27學校29へ行き委細を聞くに、英語は第三リーダーを用ゆと言ふより再考の上来るべしとて去り直に関谷に至り叔父に談じたるに、叔父も大に困り尚ほ明後日至り採用の書物及び時間の程を聞正し来られよとのことにて余は退きぬ、

べ金七円三十一銭七厘

〔別紙 四月分金銭書付〕

四月

一日

一、金二銭三厘

一日

一、金八銭

五日

一、金八銭

一、金一銭八厘

一、金一銭

一、金一銭

美濃紙

十一日

一、金六銭

薬料

一、金八銭

芝山内より車代雨

一、金十五銭五厘

懷住事談

一、金二銭

はがき

一、金二銭五厘

ほや

一、金四銭五厘

せんだく

ゆ代

半紙一帖

仙岳寺見物料

(泉岳寺)

明治二十七年四月

明治二十七年五月

一、金十四銭

好川会費

二十三日

一、金二円九十銭五厘

賄へ払分

一、金一銭八厘

筒袋

一、金三銭

高田茶代

二十四日

一、金十五銭

珂氏倫理

一、金二銭

切手

五月

一日 曇天

昨今寒さ身に浸む、衣服はシャツ・綿入・綿入羽織位なり、柏井氏歴史の試験問題を六月十四日までとして出されたり

二日 晴天

一天晴れ渡りて一点の雲なし、午後一時頃より秋葉氏より芝電信学校の予備校に到り其の細則を聞出し、直に本郷に到り之を関谷に告げ、四時帰路に付き一寸波多野へ寄りしに、伯母様風邪の気味にて臥せられ居き、里見にて夕飯馳走になり八時帰校す、柔術休む、秋葉氏にてお萩の馳走ありき、

三日 晴天

午後一時より波多野へ到り池の最終膳(給)を為し、兼て弁当を持参せしことなれば夜分まで居りしに承五郎氏帰宅、暮出で二席試み帰校せし八十時頃なりき、五時頃須貝(叔父)来り、明日帰国すべく何れ売物は承五郎氏に御依頼申とのことにて帰られたり、今朝長谷川へ様子伺の為はがき出す、

四日 雨天

二三人の風引あり、余も幾分か気味あり、蓋し氣候あまり寒すぎる故ならん、昨日日本評論來る、午後金曜会祈会あり、尚普通学部にも学校に係せし演説会あり、一寸余も聞き來りき、

五日 晴天

〔欄外〕「東京基督教青年会開館式」

矢島君と九時頃出発、神田にて同氏と別れ余は本郷関谷へ到り春太郎氏の本を買ひ遣り一時頃退き、兼てより切符を持ちたりし東京青年会館(27|20)の開館式に臨み六時頃帰校せりき、司会者は原、(江原)祈者原田、聖書読ル井深、演説フルブツキ・市原・押川・本田・スウィット(27|31)諸君のあり、奥野氏の祝祈にて畢り散会せしハ五時頃なりし、会せしもの七百名程と覚へたり、帰り際に出口にて粉菓
子呉れ城内の小森にて鈴木・小倉・田島等と開き、後より來り里見純吉氏等と共に去り帰校せし
ハ六時半頃なりし、

六日 晴天

午前数寄屋橋教会に至り、それより本郷関谷に至り弁当を食し、三時半頃同家を退き銀座に出で、春太郎氏の本を買ひ伊手氏へ預け、六時頃秋葉氏方へ到り弁当を食し、七時頃より秋葉氏の品川教会へ演説に行くに従ひ至れば聴衆余等の外吉田氏夫婦など折(折)り由て三十間祈会あり、後二人の婦人來り、秋葉氏ハパウロの獄に於る教の処をなされき、八時半頃散会、帰れば上総より秋葉太郎氏來り居りき、余十時頃帰校したり、

七日 雨天

〔欄外〕「長谷川君帰京」

午後秋葉氏へ山野と同行、七時頃帰校、泉沢(相沢)の基督教の学術的研究を貰ひ来りぬ、八時頃長谷川君帰校され車屋松尾より来り壱円なりしとて安かりし、長谷川と同行木賃宿に車屋を案内、帰路秋葉へ寄り十時頃帰宿す、若林芳郎氏より手紙来り、また神学部(マ)の規則を送られたしとなん、

八日 雨天

経済学の教師当期に至り始(マ)て出席、午後矢島君と同行、勝田氏方へ到り談ぜしこと一時間半にして帰宿す、此日カーラエルのゲーテ論読み畢ぬ、但し中のヘレナは抜きたりしなり、

九日 曇天

午後高田氏の所へ行き治療を受け、一寸関谷へ行き六時半頃帰校し、台町の教会に至り祈会に臨み八時半帰校す、

十日 曇天

午後二時より波多野へ行きしに皆様御留守にて奥様のみ居り、須貝の大黒を持来りたり、夕刻一寸秋葉氏へ行き間もなく帰校す、

十一日 晴天

午後長谷川君と入浴す、金曜会に長山・島田・白井・山中の諸氏演説せられ、何れも其の雄弁なるには感服す、此評また白面(ママ)かりし、九時半頃より松本君の帰国を品川まで送ったり、柔術また休みたり、

十二日 晴天

〔欄外〕「星野又吉君兩國教会²⁷ニテ牧師トナル」

正午より矢島君と同道兩國教会の星野又吉君牧師就職式に行く、着すや丁度式まさに始まらんとする処にして、篠生□六氏司会にて植村氏・アレキサンデル氏の牧師及信者への勧告あり、終りに菓子出で閉会せしハ四時頃なりき、学校よりは余等の外に島田・千屋見へき、余両氏と帰り秋葉氏へ寄り弁当使用す、今日神田青年会に福島中佐²⁷の禁酒演説会の演説あり、学校よりも大部行れたり。

十三日 晴天

今日より合せ羽織一重衣を着す、長谷川君と赤坂教会に到り、午後波多野へ行き弁当を使用し一寸讚美及び聖書の説明をなし四時頃去り、須員の大黒を榎の木坂辺の古道具屋に見せしも到底相談ものに思れさるよし、去て里見へ行き弁当使ひ九時頃帰校す、今日赤坂教会に田中太郎氏なるものに合ひき、一寸小林格氏の宅へも行きたりし、

十四日 晴天

此日柔術為し大に快を得たり、先生欠席さる、矢島君尚ほ帰校されず。

十五日 晴天

此日よりシエキスピーヤのジュリアスシーザーを読み初む、矢島君午后帰校せり、芳郎氏へ学校の規則書と基督教学術的研究を送りたり、

十六日 晴天

今日樺島氏と柔術を為し投られて飛だ目にあふたり、柏井氏は病の為井深氏ハ都合の為欠席せられたりき、昼中風烈しかりし、朝程須貝へはかきを出しつうの書全く実物なしと波多野なる勘定写に見せし^(ママ)反答なりしと報ず、

十七日 晴天

午后二時頃普通学部講堂に米国にて其名高き元國務大臣たりしホースター⁽²⁷⁻³⁵⁾なる人の演説ある由にて、聴衆多く集り来りしも別条なる話も無く、皆々失望し歸られたり、但し教役者は神学部講堂にてホースター氏同室にて茶果の馳走ありたりと、午后入浴したり、昨日秋葉夫に頼みたりし余が帯の裏反し出来居り貰ひ来ぬ、福音新報第四卷九号より取り初む、

十八日 雨天

午後四時より山野と秋葉氏方へ行き夕飯時すし馳走になり七時頃帰校、金曜会演説に長谷川・矢島・笹倉の三氏演説せられたりき、今宵山野君金曜会に出席中同氏の衣服五点程盜難に合ひたり、ワイコフ氏より五円受取りたり、長谷川へハ十三錢返金す、夜晴れ月輝々たり、

十九日 晴天

今朝賄へ金三円七錢払ぬ、昨夜山野氏の取られし衣服は十点位にて単価は三十円位なものなりと、又今朝見ればマチも落ちてあり、又柔道室に一重物一枚棄けるを見出せりと、昨日八時四十分頃馬場君帰宿の際一人長身なる眼鏡掛たる書生のかなりなる布留敷包^(風呂敷)を抱へ行くに会ひ、先方は顔を傾けしが後に至りて見れば彼こそ盜賊なりしかと語られたり、秋葉氏へ至りしに、琴

今日買求めたりとて妻君引き居たりし、三造氏本日来る由なりしが言張たり、

二十日 晴天 安息日

午前台町教会へ行き、午後二時頃より矢島君と同道両国教会へ到る、蓋し余今宵は教会にて教者を為せ度しとの星野氏の頼みに応じたるなり、八時頃星野君司会となり余三十五分程演ず、主意は神を知るの方法より神の靈なることを説きしに如何にも不整述なりしは耻せらる処なりき、聴衆は十五人程なりし、帰路銀座にて馬太伝注釈を四十五銭にシーザーを七銭にて求めたり、

二十一日 晴天

午后秋葉氏へ行き話しき、夫人は小倉姉と同道、午より波多野へ行かれたりしと、柔術休みたり、長谷川君今夕麻布六本木の里見へ転ぜられたり、

二十二日 曇天

美野辺氏欠席さる、福音報代を取りに來り、親父の分丈払ひたり、

二十三日 曇天

〔欄外〕「クラスミーチング」

ランダス氏の時間は日頃面白からざるより眠むるもの多きより、誰が此間を睡眠哲学研究時間と名けしは数日前よりのことなりしが今日廻章來り、來る金曜日には此時間には総欠席は如何と言ふより、余と山野ハ其の理由を正せしに二度目には余等の保守親父なるを攻撃し、清水君は□□時間の哲学研究中なりと通し來る、清水を見れば睡眠最中にて腕をはづさんはかりの様子あるにぞ、衆皆な堪へきれずして口を無理にべ、顔を赤くして聲なぞつめりて憤笑を堪へ到りしか、之

と知りけん又は如何が思ひけん、ランデス氏は常より早く仕舞われ退席するや衆異口同勢に憤笑せされしぞ此頃の珍事なりき、去る月曜日なりき、千磐君クラスへ檄文を廻され同くクラスミーチングを来る水曜日に開ては如何と、衆其の可なるを表し、さて今日千磐氏は井深氏にB室を借りらんことを約し午后七時半頃より開会、河野君一人欠席にて余と長山にて菓子一人前三錢づつを求め来り、山野君の主会にて祈会あり、長山・池・清水等感話あり、千磐・清水尚祈あり、后おそめのかんざし・長右エ門のきせる・おはんのふりそでやごろ／＼や人呼なぞを遊び其罰も積あり、或は腹切りの池読経防子の長山・和田の和歌あり、山野の役者のこわいろは一番興ありき、十時少し前閉会、衆皆な存外の快を得たりとて散ず、午后柔術為す、

二十四日 晴天

今日一日重(マゴ)に明晩の演説の仕度に尽力す、

二十五日 晴天

午后七時より金曜会の演説会あり、余も其弁士の一人にて余は教会不振の内因てふ主意に就き二十分程弁じ、后山野友一郎氏も信仰上のことに就き十分程弁せられ、后批評には国沢氏曰く、余のは大人小児らしく山野のは小児が小児らしく演ぜられたりと、余が主意に大に同情を寄せられき、矢島・山中・千磐・浜田の諸氏も批評されたり、九時頃散会せりき

二十六日 晴天

午前九時頃より山野・矢島の両氏と神田まで同行、余は本郷へ行き、午后高田氏へ行きしに今日は薬のみ貰ひ、同先生も最早治療に倦みたる有様なりき、併し幾分か快方とはなりたれど、まだ

判然とまでは愈へず、帰路散髪し入浴し秋葉氏へ到り弁当を食し午后加藤斐氏の来るに合ひ十時
過まで話し帰宿着床せしハ十一時頃なりき、

二十七日 晴天 安息日

〔欄外〕「故小倉修吉君ノ追悼会」

午前八時頃より里見へ行き長谷川・里見貫一氏等と六本木より別れ、余は芝山内なる東京病院(27-36)に
至り中野章一氏のチズブ(チフズ)の為入院せるを見舞、十時頃数寄屋橋教会に至り田村氏の説教を聞き、
十二時波多野へ行き弁当を食し暫く休み、三時より赤坂教会に小倉修吉氏の追悼会あり、新島君
之が司会にて大石・浜田の感話及び大谷虞氏の寄文、谷口氏の和歌等あり、閉会せしは五時半頃
なりし、会するもの七十名程なりし、秋葉氏と里見へ行き余が弁当を食し七時半頃より開会の増
野一氏の神理講和を聞き帰校せしハ十時頃なりき、

二十八日 晴天

〔欄外〕「単衣着初メ」

今日より一重物を衣初む、柔道の教師山下氏議院へ壮士の鎮守の為雇れ当分の間来られさる由、
秋葉婦人は小倉姉と里見へ行れ今日は波多野の人を同家へ招き彼処にて話す積なりと。午后千
磐・池・和田・矢島・長山等と三田辺へ散歩し面白かりし。

二十九日 晴天

午后一寸秋葉氏へ到り教会歴史を借り来る、

明治二十七年五月

三十日 晴天

午前驟雨ありき、午后四時二十分バラ氏帰国の為品川より横浜へ向て出発を送りたり。また七時より植村先生の演説普通学部の講堂にあり、宗教は青年にも必要にして教育とは最も大なる關係を有するものなりと

三十一日 晴天

〔欄外〕「中野章一君永眠ス」

朝程里見貫一氏来り、中野章一君事昨日午後二時頃遂に薬石其の功なく芝東京病院にて永眠せりと、即ち午食後貫一と同道一寸同家へ寄り二時頃より中野へ到りしに国井氏独り居り、其うちに川添英太郎氏等来り、余氏とは十年ぶり位にて面会せしも好くしたもにて旧の姿は変はらざりき、かくて三時少し前法師来り、一寸読経し少し過てより出棺、青山の埋葬寺にて式を為し、式畢て菓子の包みたるを一本つゞ配り、式に三十分程費やし直に青山墓地の西端なる中等地へ埋めたり、会送葬するもの三十名程、中十五名程は同氏生前の学友と見へたり、帰路一寸休息し五時半頃散別して余が帰校せしハ六時半頃なりき、章一氏は十七年也、帰校し石井孝一郎氏の為めにママ警語を与へしにぞ幾分感したるが如し、純吉氏昨夜宿らる、

ベ金四円八拾四銭七厘

〔別紙 五月分金銭書付〕

五月

六日

一、金八錢 高山彦九郎

一、金四十錢 眼鏡

一、金三錢 西洋帳面

五日

一、金二錢 切手

一、金八錢 孔夫子

一、金二錢 筆一本

一、金一錢 ゆ代

一、金八錢 ベースボールへ寄附

十七日

一、金一錢 ゆ代

一、金二錢 半紙

一、金一錢 はがき

十八日

一、金十四錢 好川君へ

十九日

一、金一錢 はがき

一、金三錢 せんたく

一、金一錢 石衝

一、金四十五錢 馬太伝注釈

一、金七錢 シーザー

一、金三円七錢 賄

一、金二錢 はみがき

一、金三錢 散髪料

一、金一錢 ゆ代

一、金一錢 はがき

一、金拾錢 教会費

一、金六錢 高田未納

一、金三錢二厘 半紙

一、金一錢十一厘 洗沢

一、金三錢 クラスミーチング

六月

一日 晴天

ロヨラの伝を書き授業に欠席す、

二日 晴天

朝よりロヨラを書き、午後入浴したり。

三日 雨天 安息日

数寄屋橋教会に至り赤坂教会転会の願書を出し、序に田嶋のも出しやりたり、午後中野を見舞又夜赤坂教会にて奥野翁の慈善の説教に、秋葉氏のキリストの弟子てふ説教を聞き雨に犯され十一時頃帰校す、

四日 晴天

五日 曇天

朝程晴れ午后雨りき、午後一寸秋葉氏へ行き暫く話したり、

六日 晴天

此日国元父より手紙来り、母事懐妊の処今月は月臨(臨月)なりと、又理吉兎角身体不快に何か国へ頼事為し送られし様子なり、蚕昨今頃上籍する筈なりと、

七日 晴天

午後三田へ散歩し日本評論の製本を頼みたり、

八日 晴天

此日ロヨロ^レ及ヂエスイト教社記事試験書き畢れり、本日ワイコフ氏サツポートを配附^{（つ）}せり、

九日 晴天

午后三田に散歩旁々製本に参りしに一昨日頼みたる日本評論の製本出来、賃九銭なりき、午后入浴す、

十日 晴天

午前九時より赤坂教会に到り水戸より来れる高木氏の説教を聞き、波多野に行き午食に弁当を使ひ、帰路午后五時頃中野へ寄り御伯母様の悲哀に沈めるを慰め一寸道の話を為し、尚ほ教話を望まるゝ故何れ此后屢来るべしと約し去る、午后七時半より台町にて秋葉氏の説教を聞きたり

十一日 晴天

今朝井深氏の語に九十九里へは長谷川君行きしこととなりたりと、余はまだ定めずと、井深氏の授業今日を以て終りぬ、衆等雨降らんかと恐る、歴史の試験問題答案出す

十二日 晴天

午后曇りたりし、然るに午後三時半神学部生徒及教師の写真採影^{（撮影）}ありき、特に採影せんとするとき植村氏を初め笑叫全口に出で、特に「ハイ只今カラ」と写真師の注意せしときなぞの笑れしは如何様に影つりしやらん、七時頃より三田に至り日本評論の製本出来たりしを持来る、但し八銭なりし、

十三日 晴天

ランデ氏試験題問題を出さる、余今夏は台町教会に動くとの風聞あり、困たものなり

十四日 晴天

午后入浴しぬ、

十五日 晴天

シエクスピヤーのジュリヤス、シーザー今日終りぬ、午后二時半より観⁽²⁷⁾校館⁽³⁸⁾に神学部⁽²⁷⁾の卒業生送別並親睦会あり、千屋氏司会にてアレキサンドル、笹倉氏の送別の辞あり、后大石君答辞あり、与にフルベツキ及び鹿島の話あり、五時半頃帰校したり、会費金十五銭、午后田村氏方へ到り先月分と此月の払壱円払いぬ、

十六日 晴天

井深氏の倫理出来上りたり、

十七日 晴天 安息日

午前九時頃里見を一寸見舞、直に赤坂教会に至りサレキサンドル氏の説教あり、尚一人の洗礼受洗者ありき、波多野にて弁当を使ひ二時頃より本郷関谷に至り兼て借り受たりし金を払ひまたシャツ地縮を白なる分十尺三十銭にて求め叔母に製造を頼み来る、午后十一時頃帰校

十八日 晴天

柏井氏の翻訳の試験ありき、但しフランクリンの自序^(自叙)伝なりき、午后入浴しぬ、

十九日 晴天

〔欄外〕「赤十字社ニテ診察ヲ受ク」

午前八時頃より青山の赤十字社に到り齒根の診察を受けしに矢張り他の医師と変りたる治術も施さざりしが、此次には血液を分析すべしと、然らば如何なる原因なるやも知れ得べしと、斯て健胃剤及び含嗽を三十四銭にて貰ひ来りぬ、今日序に田村婦をも見舞たり、時に姉は床机上に座せられてい処せき、

二十日 晴天

〔欄外〕「東京ノ大地震」

午后二時少し過頃突然大地震入り、初め余は窓の処に至り事大とならば直に飛び出すべしと悟覚〔覚悟〕を定め居たりしに、聽て變動の有様にて下より上に振ひしにぞ、こは大事と窓より飛び居る、時に飛ぶ眼にて神学部及び普通学部の屋上なる個□の陥ると共に屋根の破損さる有様を目撃し、且つ大地の振ふ様宛も舟中にあるの心地致し大に気肝をつぶしたり、余は直に秋葉氏を見舞、帰校するや直に国本〔ママ〕へ報じたり、学校にては直に写真屋を頼来り破所を影させたり、但し今日の地震は東京こそ中心ならんと、市中には死人多かりし由新聞に精し

二十一日 晴天

但午后三時頃一寸聚雨〔驟雨〕あり、間もなく止みたり、関谷の春太郎氏今迄の学校廃校されしに就き郁文館〔27-39〕へ入学したりと、就ては書籍数部を求められよと余に頼み来り由て余は二時頃より出欠本郷〔出掛〕にて大概便じやりたり、福音史の試験来学期に延べたり、日本評論及び福音報の代七十八銭を払ひ

ぬ、

二十二日 晴天

今焼^(曉)二時頃下谷中町辺に出火あり、力を携れ弁天社内へ駆付けたりしに已に見物人は山の如く集り、余は録に見もせず帰りたり、力だけは余か肩の上にて見られたり、午前十時頃秋葉氏へ到りしに京都より小川おてつ姉来り居り、稍や談話し間もなく余は帰校す、兼てより嘸ありし如く同姉は今度縁談の儀に就て事定まりたる為引上げ来りしならん、本郷にて^(解散)一ポンド二十四銭にて求む、但し大日本製薬会社の製造に係るものにて可なり上等なり、こは四方田氏より聞きしにて医師の含嗽は大概之を使用さるなりと、余^(美際)実察試みるに大に宜し、医師の分と差る処なし、午后八時頃里見へ行きしに貫一氏と長谷川氏居り、母君と純吉氏は今宵草間の誕生祝の宴に招かれたれば今に帰宅さるべし、少しは^(土産)見上ものもあるべしなぞ語りあい兩人の帰宅を待ちわみる程に、余は余り遅きは誰か変でも起りしやらんと口つさみ居りしに、聽て十一時頃純吉君来り、祖母さん病氣となり今波多野にあり、速で来れと告ぐ、余等一驚直に駆付けゝるに承五郎氏は洗足にて銀座に至り高田氏を携れ来り、余が行きし時高田氏既に在りき、高田氏と承五郎氏の談話を窺ふに^(疑似)数似コレラの様^(疑似)に聞へ、高田氏も其様に手当を為されたるが如し、余等徹夜看護す、高田氏十二時少し過頃帰宅さる、

二十三日 晴天

病人事今朝は余程快き様子に見ゆ、今夜より湯や水を求めらる事非常なりし、朝程余等知ずく睡む、御病人も少しは休まれたるが如し、偕て此度御伯母様の御発病の由来は、昨日朝程より少

しくは萌し居りしものなれど、昨夜草間様にて馳走になりしものゝ因する処なるべし、思ふに御酒を召し過ぎ遊れたるからかと存申すなり、而して純吉君と同道草間を出で麻布の兵營側まで来るや如何にも退気を催し何ふしても足(マ)まれずなり、車に乗らんと欲する折柄先方よりから車來たり、純吉君先づ音なひ六本木へ幾許なりやと、車夫四錢と純吉君これと掛合最中早や伯母様は堪へ兼ね純吉君に少しもたれ屈みながら嘔吐すること少からず、時に車人此を見て驚きたるにてに直に水までもち來られ其内に先方より書生一人來り、いと懇ろに拵(マ)保し呉れしは医者(マ)の書生らしかりしと、斯く純吉氏は伯母様を車に乗せ先づ赤坂病院へ携れ行きしに、医師の申には之は酒に当りしもの故家に歸り休まば快方に趣くべしとて歸され、純吉氏はに於て大に困まり、伯母様と相談の上波多野へ寄ることゝなし、同家へ休まれしに、又々嘔吐と下りもの少なからず、波多野にても皆様大に驚き、承五郎氏は純吉君に近辺の医師を呼ばせしも何れも不在にて遂に某てふ老医を携れ來りしに、余り心置かるゝ故其薬を見合せ、承五郎氏は直に電報をうちに行きしも早やに遅れたりし故御自身にて高田氏へは行れしなりと、今夜純吉氏に国元へ報せさす、長谷川九時頃來る、余同氏と十時頃去り直に里見にて午食の支度に掛り牛肉を矯(矯)り大に満腹したり、斯て午后秋葉氏方へ到り夕飯にすしの馳走に与り、來客には石原父子・宮川・小川おてつ姉在りき、斯て十時頃まで遊び帰宅し着せしは十一時頃なりき、今日三時頃和田秀豊氏を叩きしも不在なりき、

二十四日 晴天 安息日

午后二時頃より村木町の北郷氏の宅へ行き同氏の聖書の講義及び説教を聞き、后ち屢々談話し歸

明治二十七年六月

路、余は長谷川と別れ波多野へ行き、長谷川の為に金子五円借り受け直に帰宅、貫一君同道、時に同氏は肉を余等の為求められ、余長谷川と食し、長谷川は忙で聖書学館に到り、余も后程より学校に出掛け井深氏の卒業説教の天国と云ふを中程より聞き、一寸秋葉氏へより小川てつ子姉の縁談事件にて齊藤来り居り、余等間もなく六本木へ帰り寝に着く頃十一時半、

二十五日 晴天

午后和田氏を訪ふにまた不在即ち后行を約し去る、夜分卵湯を飲み鶏鳴頃まで寝におりて眠らず、長谷川又然り、互いに中心を明す、

二十六日 晴天

長谷川君大井田姉及其の付添遠藤姉と九十九里郷へ出発せらる、但婦人等とは船宿にて会ふ筈なりし、里見の老母様八時頃帰宅さる、午后散髪し五錢取らる、

二十七日 晴天

〔欄外〕「明治学院第九回卒業式」

午前七時里見を去り和田氏へ行き、波多野にて音楽会の切符秋葉氏より頼まれしを売り、和田氏に面会し何れ金井氏と相談の上万事好き為すへとて約し去り、学校に到り赤十字社の札を取り、十時十五分頃同社へ到り兼て血液分析を為し呉る筈の処、如何なる故にや之を為し呉れず、即ち薬を貰わずして去り、秋葉氏へ帰りしは十二時頃なりき、今日より秋葉氏の〔厄介〕拒介となる由申出ず、午后三時より卒業式あり、郡山君の〔忍耐〕忍耐の必要、大石君の日本信者の使命、演説され岩本氏の励めあり、また其后浜田・早坂両氏の答辞あり、后マコーレーの祈あり、閉会せり、市中音

楽隊

二十八日 晴天

昨日純吉君と約したれば朝八時より同氏を誘ひ関谷へ到り、午后上野へ到り長谷川氏の頼まれ事を達し、上野山内へ入り屢々逍遥し、動物園前にて純氏身体を計らんとして錢一錢取れ損を為し、夫より進で少し到り一氷店に息ひ菓子氷の代六錢なりと、余初め念じたりし上其のわきへ六錢置てなるや十間程の処にて余を呼びたる婦人あり、即ち前の氷屋の女なり、何事ぞと問ふにお茶代をと、余即ち如何程なるや、渠日思召なりと、余純吉君に計りたり、氏即ち二錢銅貨の外なきを告げ余に問ふ、余遣りて此女に与ふ、渠得て去る、一笑事、斯て路々余等大に不快、山を下り対岸の下に來り、氷の飲直しと思ひしることを命ず、一人前三錢づゝ取らる、関谷へ五時頃歸り入湯后食事の更に麦生を馳走になり七時頃歸路に就き、九時頃六本木の里見へ着す、余疲れたれば宿まりぬ、今日理吉へはがきを送り置しも來らざりし、

二十九日 晴天

学校の書籍等整へ秋葉氏へ半分、学校千磐の処へ半分置きたり、夕方ワイロフ氏より七月分の更り八月分を都合により變(ママ)ハ金八円受取りたり、

三十日 晴天

尚今日も学校の形付(ママ)に大骨折る、

ベ金八円貳拾八錢五厘

明治二十七年六月

明治二十七年六月

内 賄料三円三十九銭 薬代五十八銭 自営館へ
老円、其他は小使なり

〔別紙 六月分金銭書上〕

六月

一、金七銭 下駄はいれ

一、金一銭 ゆ代

九日

一、金九銭 製本料

八日

一、金一銭六厘 半紙

九日

一、金一銭 ゆ代

十一日

一、金二十五銭 基督のすがた

一、金十四銭 好川

一、金二十三銭 油代

一、金二十銭 写真代五銭

送別会十五銭

一、金□□銭 製本

一、金一銭五厘 半紙

十四日

一、金一銭 はかき

十六日

一、金一銭 はがき

一、金二銭 ゆ代

十七日

一、金老円 自営館五六月分

一、金二十銭 写真代

一、金三円三十九銭 賄料

三十四銭 薬

六錢 洗濯(籠)

二十三日

七十八錢 日本評論・福音新報

一、金四錢 切手

一錢 はかき

一、金十二錢 肉

三十錢 シヤツ地

一、金二錢五厘 玉ねぎ

一錢五厘 石付

一、金一錢 生瓜

二十一日

一、金一錢五厘 ごんぼう

二十四錢 藥(棚敷)

一、金四錢五厘 玉子

同

一、金三錢九厘 玉子

一錢三厘 きふ

一、金五錢 砂糖(砂糖)

二十八日

一、金七錢五厘 玉子

一、金十八錢 氷

一、金十錢 どぜう

一、金八錢 矢 しるこ

べ金四拾九錢五厘

一、金一錢 はかき

七月

一日 晴天 安息日

〔欄外〕「里見富三郎氏大会ノ為出京」

午前七時より芝教会へ行き八時半より日曜学校初め、余が加拉多書(本)の講義を受持ち今より初て教

ふ、余組十名程の衆ありき、九時半よりワデル氏の説教あり、后晚餐式あり、十一時半頃閉会、是より前日曜学校畢る頃里見叔父貫一君と入来、余は同氏等に后ツマれて会堂を去り、直に波多野に到り先づ金魚池の水を更へ、后入湯し用意の弁当を食し、其内に承五郎氏帰宅、純吉氏入来、峰子様と奥様本郷関谷より帰り、余尚庭の水灌等に手伝へ、また夕食の馳走になり七時半頃純吉氏と同道里見へ到り、秋葉氏と叔父は只今靈南坂教会へ行きしと云ふ処なりしが、同氏等は九時半頃帰宅され、それより屢々談話し十一時頃余は秋葉氏と帰宅す、時に台町にて氷水飲みき、里見叔父に託して国より送り来りし金子一円と羽織と着物の何れも麻なるを受取りたり、

二日 晴天

小倉兄姉午后夕方来られき、

三日 晴天

〔欄外〕「日本基督教大会」

午前九時頃より明舟町の鈴木へ行き秋葉氏の分なる史海読林・心理学等を貰ひ余も小本聖書一冊と聖地図を求め、帰路里見へ寄り十二時頃帰宅、午后又里見へ行き純吉氏に早川へ手紙を托す、今朝程は福・和嘉と親父へも純吉氏に托して送たり、此日大会は灼熱充堂の最中のことゝて苦しかりし由、余石原と□合し氏の話に午后は休む様なるやも不知と、余十一時頃帰宅、秋葉氏夫婦フレンド教会の演説会に英人某此度支那より渡り彼地の模様を話す由にていきたりしも別条面白き話もなかりしとなん。日本基督教大会此日より開会、築地新栄教会に於て、

四日 晴天

五日 晴天

此日午后降雨あり、夜分尚ほ盛に雨りき、午前は八時頃より秋葉氏と同道、新栄教会の大会に行き十一時頃帰路に就き、日蔭町⁽²⁷⁾にて四十一銭の表付下駄を求め一時頃帰宅しき、炎熱甚しかりき、大会の議事は顛西中会より出提せし總會と云大会の上なるものを居き、以て大会を中会の如くなすの動議及び他数件の議事ありき、午後七時半頃より中野に至り秋葉姉より頼まれし雑書数種と余は武雄氏に小聖書一冊と学術的基督教研究を呈し、重遠氏に面会の上茶菓馳走になり九時頃帰路に就き一寸里見へ寄り帰宅せしは十時半頃なりき、

六日 雨天

武藤健大氏昨日学校へ留りし由にて来り、夜前より腹具合悪しとて床に着かる、余午前八時千磐氏の高田へ行くゝを品川に送り、序に品川の吉田氏の宅へ袴の洗沢^(ママ)を頼み来りぬ、武藤氏嘔吐の気味あり、午食にはパン一つに牛乳一合を喫せられ、頭部には氷を以て冷やし夕方⁽²⁷⁾に到り架字木氏来りしが其時は大部直りたる時なりき、午后二時頃蓮沼の人義一郎氏の叔父なる方其の妻君と共に来られ、今度入湯に来られし序に立寄りしなりと、間もなく義さんと外出、夜の八時頃帰られき、

七日 雨天

余今朝より牛乳一合づゝを飲むことゝす、武藤氏の病状大に快方なり、日病氣の原因は一昨日原生館の馳走に少しく古びたる煮魚を食ひたる后、尚氷水など沢山きめこみし故ならんと

八日 晴天 安息日

〔欄外〕「鈴木寿一氏上京」

七時出発、芝教会に到り日曜学校後大儀見元²⁷一郎氏の説教あり、十一時半頃閉会、余は六本木の里見にて弁当を食し、また二時より開会さるてふ芝教会に於る全国共励会大会の爲の祈会及び相談会等あり、余も神田行は身疲れ居りし故見合せ、右祈会の方へ行き原田助氏司会にて会するもの二十名程なりき、午後六時頃帰宅しぬ、間もなく里見叔父来り、今宵宿らる、今日鈴木寿一氏と面会す、氏も又世話く敷き人物なり、今日は午後三時よりは星野・井深・岩本、午後七時よりは大儀見・押川の諸氏の演説青年会館にありし由、儀一郎氏行き十二時頃帰られたり、武藤氏全快今日青年会の方へ向はれたり、

九日 晴天

〔欄外〕「秋葉太平二氏上京」

秋葉氏同道築地の大会へ臨むに別段面白き事もなく十一時頃閉会、里見叔²⁸と三人にて銀座のめし屋に登りどんぶり飯を八錢なるを食し、十二時半頃同店にて里見叔に別れ三時頃帰宅しき、午后品川吉田より袴の洗沢²⁹を受取、其の賃八錢なりき、今宵秋葉太平二氏出京さる、

十日 晴天

午前八時頃出発、大会に一寸臨場し里見叔父より金子少し借り、純吉君より依頼し起したる草木二部耕種法と殖難秘法を求め、一時頃関谷へ着し午食馳走になり二時半頃退き、理吉を見舞んとて佐久間町辺を尋ねしも迎々見付かり得ず、むなしく帰路に付き五時半頃着榎しき、飯倉にて鉄

治仙(マコ)を求む、

十一日 晴天

午後五時頃より雨りき、今朝八時の気車(マコ)にて品川より赤須・鈴木・川添・四方田・千屋の諸氏其々任地へ向はれたり、余送りす、午後二時より里見、波多野へ行き午後九時頃帰宅す、大会は休みなる由、里見叔父秋葉氏へ来り今宵宿らる、余午后里見・波多野を見舞午後九時頃帰宅す、

十二日 晴天

午后五時頃風吹き来り、黒雲天にみなぎり大雨ふらんずらん有様なりしも左程の事なくて止みき、武藤氏一寸見へき、大会今日閉会

十三日 晴天

午前九時より宮川氏と同道、同氏は東京府庁へ余は銀座へと出掛け正午過頃帰榎しき、矢島宇吉氏今朝五時出車郷里上洲へ下らる由、午後五時頃和田三郎君来り、夕方しることを馳走し六時頃帰られたり、七時頃鈴木寿一氏秋葉氏へ寄り今宵岡見に宿り明日帰坂するなりと、

十四日 晴天

秋葉太平二氏今朝四時半頃出宅、品川の出車五時四十分発にて伊香保の温仙(マコ)に出掛け、二週間程滞在の余定(マコ)なりと、余また品川まで送りぬ、余今朝は三時半頃起きぬ、

十五日 晴天 安息日

例の通り午前は芝教会に到り、秋葉氏と同道里見へ行き午食し二時頃より波多野へ出掛けしに承五郎氏は不在にて里見叔と貫一氏在り、屢々談話し四時半頃秋葉氏及里見兄弟は退かれ、余は留

まり夕飯馳走、后退き一寸里見へ行き丁度来合せし草間氏の長男時恒氏を携らるゝに面会し、間もなく秋葉氏と同道霊南坂教会に到り増野悦興氏の基督の贖罪論てふ説明を聞き、帰宅せしは十時頃なりき、今日秋葉氏の寒暖計九十三度なりし由、

十六日 晴天

理吉より昨日はがき来り、今日は関谷へ居ますと、蓋し余より然らんかとて問合たる返事なり、余八時頃より銀座を経て正午頃関谷に着しき、今日銀座にて帽子壹円四十五銭と云ふを一寸壹円三十銭付価せしにぞ直に負けられ、実は閉口したれど買はぬも変なりし故当々噴火憤澆購求したりしは亜米利加形の「ロンドンベスト」会社の製造と伝れるものなり、理吉八時頃帰られたり、但し今朝来られし由なりしも直に春木座27の芝居に行きたりしと、如何なる処か一日見て弁当料とも十銭なりしと、余程よく驚語を与へ九時頃同道退き鏡橋側にて別れたり、理吉も今事は此の春の頃は兎角病気沙汰のみ報せしが今は至り丈夫となり見掛る処も至て丈夫相に見へき、是より別渡辺喜夫氏を見舞、同氏不在なりければ間もなく帰る、午后十一時過頃帰宅したり、

十七日 晴天

炎熱焼くか如し、余が房また浴炉場の如し、午后学校に至り両の房を見舞ひしに氏曰く賄事一昨日食を仕賄はず、とて大に困却し居れり、而して余にはすし屋より弁当を取り居れりとなん、

十八日 晴天

炎熱身縋を溶かさん(マ、マ)はがりなりし、秋葉氏の寒暖計九十四度なり、今日秋葉庭木の刈り込に掛り余また手伝、午后八時よりの芝教会なる祈会に出席し十時頃帰宅しぬ、小川姉今宵は当家へ留り

ぬ、祈会の主意は寛忍てふ事なりき、此次は熱心と云ふ事なり、

十九日 晴天

昨日より牛乳を夕刻五勺増したり、今日寒暖計九十五度

二十日 晴天

〔欄外〕「誕生日」

午前八田・鶴野の両氏来り、朝九時頃より十一時過まで遊び行かる、今日は妻君の思付きにて白玉しるこの馳走有之き。本日正午十二時は丁度余の誕生せし日の時にて、自身の既往を顧み感ずること少からず、

二十一日 晴天

午後一時より宮川、今関の両氏と共に品川海游泳の議成り、即ち高輪のかし舟屋より舟一艘を借り受け、乗り出すや時恰も沙塩の引きたる時なれば、かひは勿論竹管も其の要をなさず、加ふるに真向に信じ来りたる今関君も余り漕ぎ得ず、反て宮川の方今関君より少し達者なりしには感心なりし、さりとても引切たる時なりければ如何なる上図（マ）の漕ぎ手なればとて迎も遠くは漕ぎ出で様もなかりき、如斯なりき故余等は鉄道線路下半丁ばかりの所に竹管を打立て裕然（マ）と休息し、用意の桃三十五箇を三人にて食尽し、而て后再び漕ぎ出で少し深味の方へ行んとせしも、尚浅く遂に三人共入水、舟を押して漸く泳ぎ得らるゝ程の処に至りて数分間遊泳し、五時頃上陸、直に塩湯に到りしに井深氏小女二人を携れ居り、余等於后よりお先へとやらかし先生の帰路を避け氷屋に入り、余二杯、今関二杯、宮川三杯、今日遊（興）教費舟賃十五銭・桃五銭・氷七銭・湯四銭にて一厘

明治二十七年七月

釣来りし丈なりき、今日最も耻しかりしは汽車中の客共の余等の体多楽(為体)を見物されしにぞありける、

二十二日 晴天 安息日

〔欄外〕「早川父子」

午前七時より出発芝教会に到り、午食は波多野にて弁当を食し三時頃より本郷関谷へ行き、理吉其うちに来り、洋傘一本七十銭なるを求めたり、午后八時頃余は本郷基督教会堂(27-15)へ行き小倉□喜君の基督伝を聞き九時頃去り、一寸中央会堂へ寄りしに今宵は少しく迫害ありしとて祈会を為し居られき、小倉君の集りは一男二女なりき、今日早川叔父の関谷に居るに会しき、同氏は昨日出京せしにて昨夜は両国の烟花にも行かれしと、また順氏は去る十七日頃出京赤坂なる清水氏の宅に滞在し居れりと、今日は関谷に在りき、

二十三日 晴天

順氏と共に八時頃関谷を退き波多野・中野を携れ里見にて午食馳(マヤ)になり、午后三時頃二本榎へ帰宅す、帰路順氏に学校を見ず、順氏留むるにも不拘本郷へ帰らる、御鉞姉小兒二人携れ大坂に行く、余午后四時小倉君を見舞、時過ぎ遂に夕飯を馳走になり尚小倉氏、柏井氏を呼び来り「トラップ」を弄し、余等の組勝たりき、斯て十時過ぎ退きぬ、宮川氏等今日軽井沢を出発せられたりと。

二十四日 晴天

外号〔号外〕の新聞来り、我兵漢兵(韓)と小戦せりと、一昨日の日附にて上野君よりワ氏(ワイマ)より金子受

取方を依頼し来り、十一時頃五円受取る、余も同断、直に上野氏へ報告す、
二十五日 晴天

午后小倉姉遊に來り、余送り遣す、若林芳郎氏へ暑中見舞を差出す、此日朝またきより南風甚しく家内座敷の上まで紅塵万丈□ならさる有様なりき、

二十六日 晴天

〔欄外〕「小川哲子の結婚式」

我郷里松尾にては今日は末広神社の祭礼にて大騒ぎならん、当二本榎秋葉に於ては何れも常より早起して朝またきより戸障子の拭掃除、天井なる蜘蛛網〔マヤ〕を撥き払ひ、席薦の塵埃を打発し、釘よ鉄槌よ大混雑、何となく平生と異なりたる家人の有様、特に人しれず心の波を振動せる一婦人は当宵の晴人なるに、聽て午后の七時頃に至るや渠女の顔色打変り打消れたる有様は宛ら屠所に曳かるゝ牛の如く、牛にもあらぬ御仁にて、特に目出度此の夜の宴に如何なれば斯く戦慄し給ふらんと未だ極度に達せる愛の真相を味わぬ小子等の心の中こそ可笑かりけり、去る程に石原氏入来、間もなく身の丈高中肉一見伝道士と見ゆる紳士は二三名の知人と共に入来、斯て八時頃來賓十五名程は並整しく着座し、石原氏は床の間近に座を占め、其時日本橋教会の野本某は昇口の辺にて紳士と袴を着し、紳士の手を取り賓客の間を分て床の間近くに進出で、紳士着座するや否や叔姉は茶の間の方より里見の老母に手を採られつゝ出で來り、縁端より床の間近に紳士と相對して着座せり、此時石原氏定文を朗読し以て賓客に結婚の証人たらん事を要め、次に祈祷を捧げ、次に男女をして交〔マヤ〕に握手せしめ嚴肅に結婚の心得を告示し、勿て石原氏は再び祈祷を為し爰に結

明治二十七年七月

婚式は目出度畢りたり、それより賓客引続て御目出度くくと祝し上げ、其中に手廻よくも茶菓は各々への前に持来られたり、茶は三回斟れぬ、菓子は一人各十五錢程掛けたるものなるべく一箱へ三箇ずゝ入り、随分上等なりき、製造は榮太郎に係りき、斯て十一時頃新郎は新婦と相乗にて、后に新婦の荷物を一車に乗せ日本橋辺の客舎へとは引取られたり、車賃二台にて七十錢なりき、是は是れ小川哲子と仙台地方に動(働)かれ居る美々教会の伝道師北原文治との結婚式の模様なり、里見の伯母様留宿さる、

二十七日 晴天

二十八日 晴天

支那政府にては日本国と開戦の布告を為せりと、今日長谷川・矢島の両氏に手紙を差出す、

二十九日 晴天 安息日

昨夜波多野よりはがき来り、用事あれば来られ度と、六時頃より地獄谷の辺より五錢にて波多野まで行き、着するや御伯母様申さる様、当家何れも大森の方へ行きたる方便よからんとの事より大森に行ば御身も同行致し、教会にも彼方より通はれては如何にと、余即ち二日程を一同一間の中に除ば宜敷由申述べ承知したり、今日芝教会より直に神田佐久間町錦町の鈴木方、上野静平氏を訪ひ同氏に昼飯を馳走になり、兼て氏の為ワイコフ氏より受取置たる金五円に、余が分の内三円を足し都合八円を同氏に渡し三時頃退きたり、時に上野氏は余に車を励め金十錢を呉れたり、余は強く言張しも其甲斐なく遂に受取りたり、蓋し此次親睦会の節氏の為出金せん積なり、五時頃波多野へ帰り直に石炭酸(27)の備たるありし故、之を以て先日右足の平の痛傷を洗ひぬ、午後中野

の竹氏来りき。秋葉氏今宵北郷氏の所にて説教を為したりと

三十日 晴天

今朝五時より同半時まで芝教会に於て時事問題、即ち朝鮮滞在の兵員等の為祈禱会を開き、以て彼等の安全と我国在留の兄父母姉等の為にも祈る主意の催にと、余も四時半頃より出掛たり、五時半頃閉会、集る者十名程なりき、斯て松本町辺より五銭の車に乗り六時頃二本榎へ帰りぬ、尚午後二時頃よりは地獄谷より波多野まで六錢にて挽車を雇ひき、

三十一日 晴天

〔欄外〕「大森行／汽車の初乗」

午前四時頃起床、荷物なぞ取集め運送車二台に積み、八時頃亀左衛門就添〔付添〕にて出掛け、伯母様・峰子様は車にて、余と妻君とは徒歩にて新橋へ行き、中野の武雄氏も后より出掛来り、九時二十分の汽車にて出発、同九時半頃大森へとは着したり、時に余と下女及武雄氏は下等列車に乗りたり、亀左衛門等の荷物車は十一時頃着、直に形着〔片付〕に取掛り午后三時頃全く整ひたりき、大森の家は松原続き海見へて風通よき大屋にして荘潔愛すべき家なり、此処は東京府下荏原郡の新井村山〔入新井村〕王八景坂上〔27〕（前に好川氏住みたる処）と云ふ、午后二時半頃より伯母様・峰子様・武雄氏等と〔海邊〕海頻へ行き入泳、一時間程して帰宅す、此日何処の女にや見掛けしならぬもの泳ぎ居たり、余等男子の身にてゑ泳ぎ得ざりしは一入耻かしかりき、余が汽車に乗りしは今日こそ初めてにて、思ひしよりは早からざりし。余は兼々思ひつる様、汽車は早きこと車窓より電信柱を見れば甲子窓の如しと。それ程にはあらざりき。

明治二十七年七月

明治二十七年七月

べ金四円〇九銭五厘

但し小使のみにして、秋葉氏へ払ふべき食料と田村氏への払金は此中になし、

〔別紙 七月分金銭書付〕

七月

三日

一、金二十拾貳銭

聖地囀

一、金二銭

えもん竹

一、金十一銭

聖書

一、金八銭

はかませんだく

一、金一銭

湯代

一、金一銭

ゆ代

一、金一銭

氷

一、金五銭

ようじ

一、金四十一銭

下駄

十三日

一、金五厘

号外

一、金二銭

氷

十四日

一、金五厘

せんこう

一、金二銭

はがき

一、金二十五銭

鉄飲泉

一、金一円三十銭

帽

一、金八銭

氷嚢

一、金八銭

水飲

一、金十六銭

下駄

廿一日

一、金二銭

氷 宮川と

一、金十銭九厘

舟瀬散費

一、金七十銭

西洋傘

二十八日

一、金三銭

人名□

一、金十銭

切手

一、金五厘

□切紙

一、金一銭

ゆ代

一、金二銭

はがき

一、金三銭六厘

半紙

一、金三銭五厘

炭酸・酒石酸

八月

一日 晴天

今朝も四時少し過ぎ頃起き先づ二階を開け洗を掛け顔を洗ふて食膳に向ふや、偶々冷気を覚へ承五郎氏など申す様、之は大変冷ひ障子の影にでも居たひ様だと、九時半頃より伯母様・武雄氏・峰子様等と海に行き一時間程遊び、帰路大森近き本道より帰ったり、午后七時三十八分の汽車にて当地発八時近き頃新橋へ着、直に腕車三銭にて芝教会に走らせ、八時頃より開会の祈会に列し、中野へ寄り波多野へ行きは十時頃なりき、間もなくばあやあと娘しま来りぬ、蓋当家の在の亀左衛門氏明日早朝より時事新報社へ務むるに就き、当家の女と高田氏にあるばあやあと更へんとしたりしなり、然るに当家に在りし女ふじ之を聞かず、妾は中働の為に来りしにて下働は出来ず故に御言張申と、之より数時間押合初まり実^{（物）}に困り入りたり、亀左衛門氏明日より酒飲めずと心得たる故、今宵飲じまいを為すなりと、貫一氏もなほ在り十一時半頃帰られたり、余十二時就寝、

明治二十七年八月

二日 晴天

四時半起床、直に芝教会に行き五時より三十分間の朝鮮事件に関する祈会に列し、六時頃再び赤坂へ帰り、食前また八時過大森より登らるゝ承五郎氏に面会し昨夜の騒に就き相談する処ありしに、承五郎氏承知され別れぬ、此時赤坂より亀左衛門の荷物を時事新報社まで持行き、里見君の為に彼より波多野の金五円借り来りぬ、承五郎氏の承知せられたる話は大森の女下菊(ウツギ)を高田氏へやり、ふじを大森に呼ふと云ふにありき、然るに余此事を高田の妻君に告るや彼婦は非常に不満なる様子にて是非共ばあやあを起し呉れ度旨申され、此処にて承五郎氏の承知されし事無駄となるにぞ、余は直に腕車(27)49十二錢にて雇ひ駿河町五番地の三井銀行に到り承五郎氏と相話せしに、承五郎氏はばあやあの夫ぢいやと今の下女ふしを赤坂に留め居らすべき方にされよと、余は直に帰宅す、然に間もなく承五郎氏腕車にて追ひ来り、逆に高田氏へはばあや行き、赤坂には堀内家残ずを引移らせ、ふじは大森へ呼ぶことと為し此処に於て漸く事談済みたり、余后三時頃波多野を出で少し荷ありたれば麻布永坂上より腕車を品川ステーションまで雇ひ、終に一寸秋葉氏へ寄り余が荷も持来りぬ、時に矢島・渡辺・上野・長谷川よりはがき及び手紙来り居りき、品川より四時三十四分の汽車に乗り、五時少し前大森へとは着しぬ、荷物はかなり重かりしも品川より只なりき、武雄氏尚居り七時三十八分の汽車にて帰られたり、余帰森するや間もなく貫一氏と同行海に入り、六時半頃帰宅しき、寒暖計八十九度

三日 晴天

四時半起床、午前九時頃より奥様・峰子・貫一氏と入海し十時半頃帰宅す、午后三時頃余は貫一

氏より一步前に大森まで行き時事新報を荒物商塵^(アマ)へ注文し、明后日より配達さるゝ積なりし、それより海に行き貫一氏と共に屢く入海、帰宅せしは五時半頃なりき、貫一君は七時半の汽車にて帰京せり、

四日 晴天

四時半起床、ふろに水を汲み六時頃牛乳屋来り、余も一合づゝ今日より飲むことゝなし約束しぬ、但し二銭五厘の割なり、朝程奥様・きく・伯母様・峰子様等入海、余は午后一時頃より行き三時頃帰宅す、帰路氷一杯頂く、今宵伯母様、峰子様に携れてステーションの辺に散歩に行き、余も随行す、峰子様のと石田栄子の分なりとて麦藁細工を十八銭なるを十五銭五厘に負けさせ尚五銭の小箱をも買ひ来りき、今日より入海の場を定め先づ其の茶屋へ十銭置きぬ、

五日 晴天 安息日

午前六時半の汽車にて品川まで行き、彼処より徒歩秋葉氏へ一寸寄り芝教会へ八時少し過着、閉会后一寸波多野の留守宅を見舞手紙なぞ取り、直に里見へ到り午食馳走になり二時頃退き学校へ一寸寄りしに、八田熟睡最中にて起すも気の毒なれば氏の午食弁当の残りたるを墨にて染め、以て徴となし三時頃秋葉氏へ来、直に去り品川より三時四十三分の汽車に投じ四時少し前帰宅す、今日約束の新聞来ぬ故其催促旁入海し帰路^(ふじ)ぶしの下女の親類某の大森にあるもの米屋にて奥方よりの御依頼により注文に來りたれど見付らず困り入り云々と云ふに合ひ、余は直に同行しやり漸の事にて大森の極南隅の海鎖に伊藤某なる者米商を開き居り此家こぞ彼女の親類にてありき、相方とも初ての面会の由にて主婦なるはふじの兄嫁の姉なるものにして種々会釈も上^(ママ)図に切廻さ

れ、余は其時家の前に徘徊し居りしに、家婦はふじを奥の座敷に案内し行けり、其時余も其裏手なる居間の採端（マツ）に腰うち掛け、ふじの方はちゃんと上り込まれ何やら可笑かりき、さる程に主婦の母なる者出来り、ふじとも会釈を済し余を以てふじの夫と誤られ「此人はあなたのおつれあい（マツ）」と、余黙座睡□茶一杯馳走になり、ふじの帰り仕度を鶴首し居りしも困難なりき、斯てふじは米一円程を注文し帰路に就かる、帰宅せしは九時半頃なりき、是より前新聞屋の荒物屋にて酒石酸（マツ）を三銭求めしに解けたれば包紙葉袋紙なれば葉くさくなり閉口せり、今日往復の汽車賃六錢也、尚是より前三田四方屋にて酒五合を求め来たり、

六日 晴天

「欄外」(府下在留ノ神学生親睦会)

今朝は如何せし故か昨朝までは丁度一週間続て四時半起を為し来りしも今朝に限り五時に眼醒め一寸失望せり、明日は氣を就ける積なり、今朝九時三十四分の汽車にて品川に下り直に秋葉氏へ到るや、妻君申す様小倉姉今朝来り、今日午食を私宅にて馳走する積なりとて茶碗（碗）なぞ借りに来りたり、故に午食ノ馳走あり、小倉氏方にて集を済し後品川海に遊ぶ仕考（趣向）なる由に申され、余も小倉の手紙に一時より同家にて祈会あり后海水浴へ行き云々とあれば、何が真なるかと数刻躊躇し、先づ十一時頃小倉氏の寓を伺ひ容子（様子）を窺ふに、矢張御馳走と云ふは小倉氏ノ厚意に因るものにて、元来集りの会食にはあらぬ事と察せられ、直に午餐の為一先づ帰り秋葉氏の宅にて馳走にならんとせしに、小倉氏の止むるに任せ雞（鶏）にて馳走、時に嶋田正七・川田繁太郎の両氏余より前に在り、余に遅れ笹倉君来りしなりき、斯て午后一時半頃八田金三郎・鶴野市太郎・和田三郎・

竹林寅藏・白井胤録・原戌吉・松原茂雄・上野龍氏・島田正七氏等続々来られ、二時小倉君屢々の押合の末に司会者となられ、初に竹林・鶴野の両氏祈祷を為し、其后小倉の申出により一同其の教報を為し、后八田君の祈祷あり、以て祈祷会報告会は畢りたり、時に三時、直に田町の海水浴に到り入浴、后囲碁・将棋なぞ思々の弄戯を為雑談数時、聽て六時半頃閉会、余は小倉君の寓に預け置きたる羽織及び本ども取り秋葉氏方へ七時頃帰りき、今日の集は東京在留の神学生の夏期親睦会の第一回にして、来月は第二月曜に開会の筈なり、今日会費金十銭なり、先日上野氏より車賃なりとて貰ひ受たる十銭今返さふとして其の機を得ざりし、今夕秋葉氏宅に到るや姉曰く、山田さん御膳を御召なさいと、余曰、有難一杯頂戴と其儘々(マッマ)離れへ来り、また間もなく茶の間へ行くや姉大に間然したる様子にて秋葉と相談し居れり、而て漏聞くに秋葉氏の音声にてそばを取れと、姉即ち余に談じて曰く、今宵は遂御飯を不残大に失敬せり、只今よりそばを取るべしと、余曰、それにや及び申さずと辞せしに、儀一郎氏早や門前へ馳行けり、此時の有様誠に気の毒なりし、然し一杯の飯はありし故之を食し後はそば二杯馳走になり直に赤坂へとは去りたり、是より前信州の人某来り、余の残のそばと尚買足したるを夕飯のかはりに出せし様子なり、赤坂より手紙と峰子の書籍とを持来り、歸りに里見へ寄り十番にて卵二十個四十銭にて求め、余が分として手拭一本三銭五厘にて求め、十一時頃一寸儀一郎氏を起し預物を取り十一時半の汽車にて帰宅、十二時着寝

七日 晴天

〔欄外〕「八景園」⁽²⁷⁾⁽²¹⁾

明治二十七年八月

昨日約束したる程に今か／＼と二本榎より儀一郎氏の来るを待ち、余り遅ればと思ひ九時五十分頃より海へとは出掛たり、然るに十時少し過し頃余泳き最中岸边の方より余を呼びつゝ泳き来りしは正しく九十九里の海上に於る逸物今関儀一郎氏なりき、紅顔麗少年なる儀一郎氏は同氏特有〔笑佳〕の笑崔を両鬢に浮へ兼て上〔上手〕図の手並に任せ意気揚々と遊び来りぬ、余は全く相接するに於いて同君なるを知りたり、余等一時間程游泳し時も十二時近き故一先食事の爲め波多野へとは還へりぬ、儀一郎氏結びの弁当持参されしも二の中一しか食はず、又波多野にて出せし〔マダ〕飯は勿論とぜふの玉子とじをば一箸も手付けずに下げたり、如何にも遠慮ぼく兼へたり、余其の芸なき事を責めたるに、氏弁じて曰く、否とよ、僕は今日は何だか食い度ない、思ふに今朝は秋葉太平二氏早起にて帰国され、余も一寸早起したれど余り早かりし故再び寝たが因果、九時過に到り漸く眼醒め不図と君と今日の約束あるに心付き、夫より〔兎〕無理に朝飯を喫し十時品川発の汽車に辛じて乗得たりしなり、実に余が今食の進まぬは今朝の食事遅れたりしに依ると白状せり、余即ち許しぬ、斯て一寸小息し一時頃再び海〔海潮〕頻へ下られとす、家人其の寒天なるを以て諫めぬ、余不聞、家人等余等の熱心に驚かれぬ、余出門近路を採りレールを横切り水田のあぜをたどり難なく游泳場へとは着きぬ、暫時休息しぬ、是より午前〔マダ〕の事儀一郎氏初て余の許に来りし時、告るに彼の処に台町教会の老女姉来り居れりと、余其の誰なるも問〔マダ〕と氏不知、然るに彼の老女姉は田中某てふ熱心なる婦人にて渠の娘及び孫と思しきものと総勢六七人の一隊にて遊に來られ、余も一寸挨拶しぬ、斯て再び余等の行くや、彼等は將に帰途に就とする処なりし、其の時老女姉は茶屋の者に払は如何程ですと、家人曰く、へいどーいたしましたして、手前方てば此頃店を開きしばかりにして

幾位頂て宜しきや不明、何卒御思召で宜う御座りますと、それより老女姉は其娘の許に尚議の爲なりしや到り后帰途若干置て去れり、思ふに渠等は午飯を採りしならん、不知幾金を置きしや、二時示点と思しき頃余は本屋の方へ着物を剥ぎ再び入海、尚遊泳すること一時頃間即ち三時頃登りぬ、時余は儀一郎氏の遠来の珍客もあり、尚自分事当地へ来りて未だ一回の口を饗せし事なければ、今日こそ機会なれと当家の店前の方へ行き何か菓子やあると云ふに、主婦主夫同音へい御座ます、余曰く、見せろや、彼等曰、へい、尚躊躇せり、余は見せよと迫まれり、婦主廳て立上り何処より菓子箱を持ち来るやらんと見張りしに、渠は米櫃(櫃)の中より前客に出したる菓子の残りにて、品も極粗末な駄菓子を取らせんとせん、余其と見るより直に止め外にて求め来るべき由語り余は出、兼て大森にて見付置きし菓子屋に至り餅菓子三錢にパン菓子二錢と尚帰路安梨二錢を求め来り、休茶屋の本家の縁端にて儀一郎氏と随食、暫くして茶代五錢を置き八景坂なる波多野へ還りしは廳て五時頃なりし、今日は茶屋の本屋の方に在り仮樓の客人の拍手に気のきかぬに気のきいたなりする家人の様子実に見ものなりき、余伯母様と峰子様と共に儀一郎に八景園に登らんとす、中坂にて別れぬ、蓋し儀一郎氏汽車時間迫りたる故なり、斯て余等三人は山の頂上に登るや先方に休樓の矮(マイ)ならざるあり、其の前に数百坪の芝平地あり、以て運動せば妙なる処ありき、眺望は我等が寓と同様なり、頂の南端に少し小高き丘あり、上に妙な庵あり、年間(年増)な婆、娘さん来を茶を入れたりとして彼処へ導れぬ、余等辞したりしも渠々此処は公園にはあらず、此処に上られなば是非茶を差上げる事と定まり居るなりと、余のみならねば伯母様等の前を憚り、御伯母様の行かま(マ)庵に到り、茶菓子にかきもちを添へ持ち来り、伯母様と峰子は飲み三錢

明治二十七年八月

置きそこく下りぬ、余等の下るや暫くありて儀一郎氏の汽車出発しぬ、毎夜なから蚊族の五月繩きには閉口くく

八日 晴天

午前九時頃里見貫一君母君同道入来、十時頃より貫一君・峰子様・下女菊ハ一步前に、余は少し后れて海に行き、余は廿五分間程游泳し、菊当休茶屋にて午の魚を求め、諸共に帰宅せは十二時頃なりし、「かひづ」と云魚五寸ばかりのもの一尾五錢づゝにてありき、蓋し此の茶店は元来魚屋なるか如し、今宵は水曜日の祈会あればいで出掛べしと五時四十三分の汽車に乗らんとせしも遂に少しの処にて遅れ、后車を待つも無念なりと思ひ直に八幡に出で、音に名高き鈴が森を経て品川を抜け、秋葉氏の寓に着せし頃は七時二十分頃にてありき、同家に着するや余は井水をつるべより飲む事自分ながら驚くばかりなりし、斯て秋葉氏も同行すと聞くより暫時相待ち、共に芝教会へ着せしは八時少し過にして、和田司会にて勧めを為し居たり、后ち一名の勧めを為す者と三四名の祈祷を為者とあり、九時閉会せり、会するもの二十名程と見受たり、余赤羽にて秋葉氏に別れ十番にて宝丹・絵の具なぞ買物し、六本木の里見へ着せしは十時過にして、有合の和□に鉄びんの水を濯ぎ湯飲に二杯喫し十一時頃着床、蚊見へざれば蚊屋(蚊帳)を釣らず、教会に居る頃より号外くの声囂すし、今宵祈会の主意は愛国てふにありき、

九日 晴天

〔欄外〕「時候中」

昨夜着床后一睡間もなく余腹具合変になり大便の通事萌したるにぞ幸い点灯し置きたれば便利好

く聽て便所に到るや吐瀉するを非常にして其様ポンプにて水を出すか如く、仕舞には心細くなりき、出でて不敢取里見氏の求め置れしキエン酸を尋ね茶の間を徘徊しつゝあるや此度は上より吐瀉すること又大変皆水ばかり少し心腹共痛み益々心細ありぬ、併し間もなく収まり先づキエンサンに尋ね当り之を服して再び蒲団の中にモグリ込ぬ、尚上下に吐利の気味今盛にして單身留守居の時なれば如何にも氣細く睡(マ)むくもなく醒むるともなく夜を明したり、昨夜初て下利(ママ)せしは二時頃と覚ゆ、斯て今朝六時頃また余程下利(ママ)す、質前と同じ、而して立歩きに退氣を催し時節(潮) 自分治療も悪しかりなんと思ひ重き身を起して□処より前の垣のそばに行き隣りの人の障子はたきつゝある人を垣根越に呼び余が昨夜の出来事を語り今の様子を話し同番地なる中野へ行き誰か人を呼れん事を頼みたり、妻なりと思しき者出来り話さる、余其まゝ床に引きぬ、間もなく中野の御伯母様は来れり、余は昨夜の事を話せしにぞ早速医者と呼ばんこと可然と仰せられ小児周造氏をして野村某(27-52)の許へ至らせり、医者は代脈の人来り、不敢取診察を受けしに別した事もなく熱度は三十七度三分程にして今日十時過に至り熱出でづんは直し、早速直呼べしとて帰らる、全く時候中りなりと、中野の伯母様何呉となく好く御世話被下今日晩まで周造氏と入更く看病致し呉れたり、薬は周造氏取り来られ今明二日分三十錢なりとて一はクミチンキ(27-53)とキエンサンを合したるものゝ如きと一ツは重そうの如きを紙に七包程呉れたり、何れも健胃劑済と知られたり、一寸医者とも相談し午食には牛乳一合夕も同様、午后六時頃里見母子帰宅、大に驚かれし由にて入来られしが余の案内達者なるを見安堵せられたり、蓋し是より前午前十時頃中野の伯母様の注意により貫一氏へ余が罹病の旨報知し送りたればなり、今朝から夕まで氷で頭部を冷し詰

め又折く口をも湿したり、今日氷を使ふを四斤四寸で十二銭なりし、夜分灯火真赤なりし、氣尚変にて氷に駄魔〔編〕されて睡みぬ、余が昨夜里見家に宿りしは同母子が大森に行かれ其居の留守居にと宿まりしなり、

十日 雨天

昨夜より屋棟を突抜ばかりの降雨にて、今日一日降り通せり、晩頃老母様雨止めかしと口占〔口吟〕ながら人間と云者は勝手なものだ、もう雨を恨む様になりたり……、余今日は大に快方なり、朝は玉子一つに粥を三杯食し、午食も同様、晩には牛乳一合に粥三杯食しぬ、食事は可なり進めり、昨夕の牛乳は少し上げ相なりしが今朝よりは吐瀉の氣止みぬ、菓は正直に飲み来り、今日不残服しりぬ、昨日より今日も尚腰部より以下非常に痛む様に疲れ足の置所なしと云ふ様なりしが、不図貫一今夕灯火を附け余の足部の所に来り、如何に按んで遣さんかと余笑談に頼むと云ふより氏は一生懸命に摩せられしか何となく少しくすぐったきを堪へば心地好く間もなく施術〔効〕聞きたるが如く今迄の痛退失せ安々となりたり、余生れて按摩の術により疾を治せしは今夕を以て初めてとす、かふるに貫一氏の按摩でさへ聞〔効〕たとは実に妙也、貫一氏は余が快方あるを波多野へ報じ呉れたり、午后風雨に混じ暴れたり、

十一日 曇天

朝飯に牛乳一合と粥三杯を喫したり、午飯には牛肉を菜に粥三杯を食しぬ、午后二時同家を退き十番より五銭にて車に投じ、秋葉氏へ着せしは三時頃なりし、秋葉氏にて暫時休憩し、余が行てより来りしに河口氏とも面会し四時頃余り后れ人を慮り当家を辞し品川ステーションに行きしに

退氣甚しかりき、斯て五時八分の汽車に投じ大森に下車、承五郎氏と同車なりしを知り同道帰宅せしは五時半頃なりし、家人皆余が快愈の早かりしを祝されぬ、今日可なり烈しき風吹きぬ、余今朝床上せしは午前十一時頃の事にてそれ迄も床上に起きたり寝たりし居りしなり、
十二日 晴天 安息日

〔欄外〕「川崎大師詣」

昨日秋葉氏に今日教会に行き余か為に更て加拉太書を講義し呉るゝ様頼み来りし故教会へは不行、今朝より又礼(マツ)の如く四時半起をなせり、承五郎氏曰、今日は川崎大師へ散行せば皆仕度せよと、又余にも同行を勧む、余初は疾後の由もて辞したりしが、大した事もなかるべしと思ひ同伴を約し、九時半の汽車にて出発、ステーションより一里程徒歩し十一時頃大師に着、不敢取大師門前の茶屋竹屋に投じ、少し前路にて一個一錢五厘の三寸丸の桃を七つ十錢にて求めし、我食し午食を注文し置き、それより大師の堂内より裏手に廻り尚不動堂の西隅にあるを見物し、再び大堂の前に出一錢の賽錢を鳩の豆に投じ、十二時半宿に還り廳で食膳出存分に食しぬ、時に承五郎氏と余は早く仕舞しが女共は何れも后れ余等其の大食するを冷し一座笑ひぬ、是より前大師の庭内を徘徊せる時器械体操あり、承五郎氏倒懸数廻転倒せり、少しはやったものと見ゆ、当竹屋は半宿屋半休憩所半農半漬物屋と知らる、客への会釈一寸宜し、午食の菜は玉子の露(注)にとぜう鍋、鍋は一尺差渡の二つと七寸差渡の一つ、都三鍋出銘々それより皿に取りて食するなり、此の扨八十七錢なりし、但し飯は一尺二寸程の縦と深さ五寸程なる乞食飯櫃に一杯は当飼の分なりしに、后より小櫃を取りしなり、四錢分程のパン菓子を添へ茶を出しぬ、承五郎氏十錢の茶代を置

明治二十七年八月

きぬ、帰次伯母様と妻君菓子^(急)を忙しいで紙に包み持来りぬ、此の処を三時頃退き帰路大師とステーションとの間頃なる森幸次郎と云ふ酒店にて奈良漬と味噌漬を二切づゝ四切十四錢五厘にて求めたり、后にて聞は此処は漬物も特に奈良漬味噌漬の名代なる店にて、年に千円位は売出す由、馳てステーションに来りしに、汽車は五時半ならねば出ぬに四時半なれば仕方なくステーション前の茶屋に憩ひ、右発車の時刻来るやは赤切符を取り汽笛一声間もなく大森へとは着したり、時に余は何時人も夫等の戸を開くは今は何故来らぬかと鶴待し、戸外を見るに家人等はぞろ／＼出口の木戸を出行く程に、峰子様余の汽車中に丁立せるを見、あら未だ兄さんはいて居ると云ふより、家人皆心付き誰にか明て貰へと云ふ声を聞き居る傍なる人夫は直に余室の戸を開き呉れたり、余下るや直に笛鳴り発車しぬ、実に危かりし事にて馬鹿の様なれど、余は正直に鎌^(機)へたりしに人夫情りて開戸を失したるなり、后で余を冷かすとも余に於て何かあらん、此間の暴風雨のなごりにて当家の兩戸皆な具合悪く朝夕大仕事なり、

十三日 晴天

午前十時頃里見貫一君来らる、余疾後の疲れ尚去らず、退気なる事、

十四日 晴天

午前七時より十一時まで峰子様^(急)の読書算術作文等を見遣す、此事昨日より初めたり、午后三時頃より貫一君宰領となられ家人を携れられ、余と菊のみ留守居たりき、彼等帰り聞けば海悪しく堪へざりしとなん、承五郎氏は両国に日本国中より集まれる銀行員の集会あり、午后九時過帰宅、余等着床せしは十一時なりき、貫一君は七時頃徒歩にて帰途に就かれたり、十四日の月小にして

清皎、

十五日 晴天

今朝は平日より少し后れ五時起床、八時より峰子様（御免）の勉学を見十二時畢る、彼女午后又手習さる、余日記を書きぬ、疾後の疲れ尚ほ去らず、用心して今宵の祈会にも御面を蒙り出京せず、承五郎氏は時事新報の伊藤氏の寓にて話過たりとて十一時半帰宅さる、余十二時就寝、十五夜の月愈々妙なり、今夕ガジャくを聞き初めたり、今宵祈会の主意は同情てふにありき、

十六日 晴天

今朝六時起床、蓋し昨夜后ありし故平日より后れたり、所謂満月とは今宵の月ならんか、皓々たる一輪中天に懸り為に就寝を忘れんとす、蓋し今宵の月見の如きは年にも稀なり、寒暖計は八十二三度、草葉にすたく虫の音は哀れを催し来りぬ、さばれ蚊族尚五月蠅さし、

十七日 晴天

今朝は五時少し前起床、承五郎氏は今日午后三時上野発の汽車にて銀行用を負ひ上野の国富岡へ行き来る、日曜か月曜帰宅すと、寒暖計八十五度なり。月また佳。余午后五時頃より鈴ヶ森辺へ散歩す。峰子西内氏へ遊に行かる。西内は大屋なり。

十八日 雨天

今朝も五時少し前起床。今日二階の障子を皆な閉す、朝来陰雨濛々海気肌に迫り辟易す、峰子様昨夜十一時頃より夜中腹痛せし由にて今朝は余程快きも尚一日臥床さる、また下女ふじも昨夜より腹痛し今朝尚悪しとて臥床さる、手紙を書き千磐君に送りぬ、

明治二十七年八月

十九日 雨天

五時半起床、六時半の汽車に后れ徒歩芝二本榎秋葉氏まで行き同家に昨夜求めたりし麦藁細工の筆筒を二十五銭に負けさせたるをせい子に送り、直に車を走らせ芝教会に到りし頃は丁度八時半頃にてありき、十一時教会を退き雨を冒して波多野留守宅へ行きしに老父と志満居り、午飯を馳走になり手紙数本を持来りぬ、同家より赤坂の小林格氏の寓を見舞ひしに丁度氏居り一時間程談話し一時半頃去りぬ、同家の小児此間脳膜炎に罹りしが、大した事にも至らざりしが其后兎角元気なく、昨今は腸胃の具合悪く且つ折々頭部痛かる由、危険の事故よく／＼養生專一と念し来りぬ、それより里見へ来り一寸話し、また中野へ行き病後の様子を告げ且つ先日のお礼を為し、豊子様に麦藁細工と周造氏に絵具を進呈し来りぬ、武雄在りき、里見を三時半頃退き秋葉氏へ着せしは四時半頃にて夕飯馳走になり、六時四十八分の品川発汽車にて大森へ帰りぬ、是より前三田より酒を取り来りぬ、此日限雨止だり降たりせり、

二十日 雨天

五時起床、今日長山萬次様へ手紙差出、里見貫一君午后二時頃来森、承五郎氏五時頃帰宅す、昨夜大森の医者来り、ふじを診察せらる、田舎の老医斯くの如き乎と知らる、ふじ病性は子宮少しはれたるにて原因は寝冷なりと、ふじ今朝尚臥床、きく薬取に行かれぬ、峰子起床、

二十一日 晴天

五時少し前起床、伯母様・峰子様午后一時半の汽車にて東京芝二本榎の秋葉氏へ行かる、貫一君また同行せり、兩人とも間もなく四時半頃帰森する、時に秋葉姉不在なりしが小倉君の北堂脳病

に罹り、為に見舞に行きたりし処なりと、せい子様の向（趣）ひに行かれしにや、姉も帰宅されしが時刻后るを恐れ斯は早く退きしなりと、寒暖計八十三度、夕飯后家内中にて停車場辺に散歩す、午
后清水、矢島の両氏に手紙を出（マ）しぬ、

二十二日 晴天

四時半起床、朝程の寒暖計七拾八度、正午八十五度、余午后四時少し過家内一同と夕飯し同四時半頃徒歩にて出京、六時頃秋葉氏へ着、石原氏より贈られしなりとて赤飯の馳走あり、直に小倉君の寓を見舞ひ、御病人を見舞わんとしたりしに、君恰も外出せんとて途中にて合（マ）ひ、様子を聞きつゝ同氏の門内まで行、彼処より同道高輪辺を逍遙し、氏は再び戻り余は芝教会指して忙（急）きぬ、北堂も最早大に快くなり通常の風邪位になれりと、初は吐瀉あり大に心配せしも今は心安しと、また曰く脳貧血の致す処なりしやも不知と、医者は品川（27）の齋藤氏（34）なりと、芝教会の祈会八時より九時までにて里見君ありき、十一時半汽車に帰森、

二十三日 晴天

〔欄外〕「鼠打占」

四時半起床、丁度此時室内にて物音するより目醒めしにてよく聞くに戸棚の中なり由て起き見るに戸棚の戸二寸程開けり、即チ之を閉ち室内を閉ぢ再び戸棚を開き方々灯を透ふすに一方より飛び出でたるは正しく鼠めにて其大き長きこと尾共一尺余なりき、余は兼て用意したりしハタキ以て打たんとするに中々当らず畳をパタ／＼打立□□家内のは目を醒し言を掛くるに余鼠なりと知せ尚征代（征伐）に余念なかりし程に到（到頭）々打殺したりしは先日里見君留まられし時蚊張（蚊帳）の中に入来り

明治二十七年八月

し者にて気尾〔機微〕良かりし、最後の鞭鼻をめ打ちけん、流血淋漓には閉口したり、

二十四日 晴天

二十五日 晴天

五時起床、午后一時頃高田郡司氏おさく初め子共ども及び他の子共を相携れ御遊山に参られ二時半頃より海へ出掛られたり、其頃貫一君来り、氏も后より追掛けたり、余家人の依頼により午后五時半頃徒歩にて大森を経て川崎に到り、桃を尋ねしも最早時候后れしにや一個も不見、即ち一休憩所に入り氷及び梨を喫し、当市に桃のあらざるを聞き直にステーション前に来り、尚ほ桃を尋ねしに矢張り時候遅れたりとて梨を籠三十五入を二十五銭なると梅千十銭の曲物を求め、其時八時なりしかば相待つこと一時半、即ち九時半の汽車にて帰森、高田様の御力も大森より同列車に投せられしと承五郎氏と貫一氏の別りに行かれしに合ひき、

二十六日 晴天 安息日

五時起床、六時半の汽車に投じ品川に下り一寸秋葉氏へ寄り直に教会へ到り十一時退堂、赤坂波多野留守宅へ行き午飯の馳走になり、石炭酸にて耳朶を洗ひ一時頃退き、里見へ寄り茶の馳走になり、間もなく帰路に就き学校に来るや原氏と八田氏井戸辺へ行き掛け余を見、即ち拍手し余に何か呉れんずる有様なりし、余は八田の室に入るや鈴木直丸氏に会しき、但氏ハ足柄を去る二十日の頃引上げしなりと、蓋し先方の伝導〔マツコ〕甘く行かねと、今一つ病氣故を以てなりと、何せよ氏は余と知り直に大皿にぼたもち（おはぎ）をナシ四個食残しありしを尚飼〔食〕はん、余はそれこそ棚からほたもちの喜にて戴き、遂に不残平げたりしは諸氏は驚かれしならん、斯て一寸トランプなぞ

遊び稍ありて辞し、秋葉氏へ一寸寄りまたぐだんご七粒を食しぬ、平生だんごなぞ一粒も食残す事なければ今日は実に閉口したり。徒歩にて六時半頃着森、北川氏遊に來り、九時半の汽車にて歸路に着かれき、

二十七日 晴天

〔欄外〕「大森より歸京」

五時起床、今暁一時頃は所謂二十六夜の月なりしかば昨夜より家内何れも用心して休みに、丁度出月の時は二時半頃なるべしと思ひし故そ名高き二十六夜の月も見損ひけり、十時半頃大家西内の留守居なる芝原氏方へ一ヶ月分の家賃十八円を払ひ來りぬ、波多野にても今日愈々引越にて貫一君先づ荷物の番して先立ち、余と家人は十一時三分の汽車にて歸京、余は品川に下り秋葉氏へ歸りぬ、尚午后二時頃より儀一郎氏と赤坂波多野へ一寸寄り梨なぞ馳走になり、間もなく銀座の天賞堂へ儀氏（儀一郎氏）行き、余は新橋より余の荷物を取り十二錢にて相乗に投じ、三田にて余は下り買物を為し二時半頃帰宅、寒暖計九十度程なりし、

二十八日 晴天

〔欄外〕「ふとんの洗濯」

五時起床、過日入海の頃より萌せる耳の腫物今日に至り日増に膨れ出し昨夜より耳穴丸で閉ち大に困り、故を以て今日十一時頃加字木へ到り診察を受けしに、大した事もなき由にて塗薬一びん貰ひ來りぬ、夜分に至り膿出でたり、二時頃福田氏來談、三時間程話さる、小倉姉來り家姉と談話數刻、後に聞けば小倉君此度番町辺へ別居するに就き余に小倉様同居を頼みに來られしなり

と、秋葉姉余がふとんの洗濯を為し呉れたり、

二十九日 晴天

五時起床、午后小倉鋭太郎君の寮に到りしに川田繁太郎氏より來隨談數刻九時過帰宅、時に高知婦人慈善会の書簡袋と巻紙の売方頼まる

三十日 晴天

五時半起床、今朝大八木氏へ牛乳代、午前学校へ到しに和田・原・鈴木・八田等居り、鈴木・原の両氏巻紙及び切手を買はれたり、八田氏の申さるに此次に催す同窓会は九月第二月曜日午後五時より赤坂表町二丁目於伏席館なりと、午后また小倉君へ行き尚ほ借り来りぬ、一昨日小倉姉来り余に同家へ同居さる様頼み呉れ度と秋葉姉に申込由なりしに、余は承諾の旨秋葉姉に告げ置きしが、小倉姉は今日また来り余の挨拶如何を問ひ余が承知したりしを聞き母嬉ぶならんとて帰られしとなん、泉氏よりマクネヤ氏今一兩人の翻訳者を用する旨秋葉氏へ申来り、余は秋葉と相談の上里見君の寓に到り其の験試の訳本を造らせん為小冊子を送りたり、当人及母君は喜ばれき、桜木なる人に初て面会しき、氏はなか／＼快活なる人なり、午後十時頃帰宅、武藤健太郎氏居り、明后日渡米の筈なりと、

三十一日 晴天

昨日より牛乳一合づゝ取る、今朝五時起床、今朝品川の長谷川てふ牛乳屋に到り今月分の牛乳代五十五錢払ひ来りぬ、聖書学館の鈴木姉来り袋及び紙を買はる、昨日八田の手を経て軍賃として金二十錢義捐す、尚ワイコフ氏より九月分のサポート金八円受取りぬ、また上野君の分も其節

受取りたり、武藤君九時頃去らる、明日横浜まで出発する筈なりと、九時頃には鹿島英二郎氏の来訪ありり、^(ママ)一時間程話されたり、午后四時より里見へ行き一寸休み、波多野へ行き夕飯馳走、小倉氏より依頼されし書簡袋及紙を同家へ売り、午后八時去り銀座なる高田氏へ寄り、波多野の伯母様に早く帰る様と付言し、築地の貴山幸二郎氏方に到り、白井氏へ上野氏の金四円と貴山氏へ小倉君より頼まれし金円の封書を届け、帰路銀座にて真宗百話を十銭に、耶蘇教衝突論を三銭に、将来の日本基督教と現今の基督教を五銭にて求め、帰宅せしは十一時半頃なりき、是より前波多野承五郎氏申さる様、三井銀行にて不用水筆の他に遣るべきもの数しれぬ程あれば、何処は孤児院へでも遣り丈けれど周旋せざるやとの事より、余は直に赤坂教会に到り小林君に話し新島君に告る様頼み来たり、何れ明夜谷町に行き彼と談する筈としたり。

べ金七円四拾銭六厘

〔別紙 八月分金銭書付〕

八月

一、金五銭 車代

一、金三銭 同

一、金六

一、金五銭 同

一日夜

一、金二銭 あいす

一日

一、金七銭 (はより三銭出)

明治二七年八月

- | | | | | | |
|-------|--------|---------------------------|-----|---------|------------|
| 一日 | 一、金三銭 | 新橋より田村町本代 ^(マコ) | 一日 | 一、金十銭 | 親睦会費 |
| 二日 | 一、金三銭 | 時事新報まで | 六日 | 一、金六銭 | 往復汽車賃 |
| 二日 | 一、金十二銭 | 銀行まで | 五日 | 一、金六銭 | 往復汽車賃 |
| 二日 | 一、金六銭 | ばあやあの車代 | 六日 | 一、金三銭 | 酒石酸 |
| 二日 | 一、金十銭 | 品川まで麻布より | 五日 | 一、金五銭 | 羽織のひも |
| 二日 | 一、金三銭 | 品川より汽車賃 | 七日 | 牛乳代七十五銭 | 七月分 |
| 三日 | 一、金一銭 | あかすり | 七日 | 一、金六銭 | 梨・菓子 |
| 一、金二銭 | 筆 | | 同 | 一、金五銭 | 茶代 游場にて |
| 四 | 一、金一銭 | あいす | 十一日 | 一、金四銭五厘 | 国民の友 |
| 六日 | | | 十一日 | 一、金三銭 | 汽車賃 品川より大森 |

三十一日

十八錢 小冊子三冊

八日

一、金七錢 絵の具

同

一、金五錢 宝丹

九十一日

一、金十二錢 氷

一、金十二錢 牛乳四人分

一、金五錢三厘 さたう

一、金七錢二厘 四卵代

一、金三十錢 薬代

十九日

一、金三錢 汽車賃

一、金一錢六厘 半紙

一、金二錢 書簡袋 一占

十九日

一、金七錢 車代

十八日夜

一、金二十五錢 麦藁箱

同

一、金四錢五厘 同

二十二日

一、金三錢 汽車賃

一、金三円 七月分食料

三

一、金拾錢 切手

一、金二十錢 軍賃(マ) 川崎にて

一、金四錢五厘 茶代

一、金五拾五錢 牛乳代

三十一日

一、金一錢 氷

一、金十六錢 サップ

一、金八錢 ヨウジ

一、金三錢五厘 水鉄砲

一、金二錢 はみがき

明治二十七年九月

廿八日

一、金一錢

ゆ代

九月

一日 晴天

〔欄外〕「臨時総撰²⁷挙²⁸」

五時半起床、午前小倉君の寓に到り状紙及び袋を取寄せ、尚しるこなぞ馳走になり十二時頃帰宅す、昨日野村へ薬料三十錢を払ひ来りぬ、昨日白井氏の話に河野君は目下望月にてマラリア熱に罹り居由、本日臨時総撰挙執行さる、

二日 晴天 安息日

六時起床、但し昨夜后かりし故ならん、午前芝教会に到り去て鈴木正二郎方へ行き中野へ遣す聖書小形を一冊と大形新約聖書の折皮を一を十五錢に、一つを四十錢にて求め、代金は当分借り来りぬ、それより赤坂教会にて新島氏に会ひ一昨日波多野より申されし事を同氏に量り、同氏も尚同志の者を尋ねんとて別る、里見君と波多野に会し一寸話し、同道歸路に就き、余は中野へ寄り聖書を蓋し一寸教の話を為し、里見へ寄り六時頃帰宅す、今日波多野へ行きしに佐倉より串戸真佐樹君来られ、故は今度工業学校の試験を受け積にて早や一昨算術丈は済し来りたりとなん、二本榎にては秋葉姉今朝より具合悪く品川に見せしにレーマチスなりとて其を薬^{マツ}を呉れたりと、臥さる秋葉氏今宵台町教会の説教さる、川崎も今度兵役に出る様なりしとなん。

三日 曇天

〔欄外〕「大井田姉及び里見君の帰京」

午前五時起床、朝程国元親父及び里見の叔母様に若林ふじ子様再び遊学如何と相談し送り純吉君の為学校の小改革を知せ尚親父には羽織調整の事を相談し送ったり、秋葉姉今朝牛乳を飲み始め、大井田姉上総より帰京秋葉へ来りぬ、純吉君も今日来りし由、午后雨降る

四日 雨天

五時半起床、八田君横浜へ下らる、余品川まで送り歸路驟雨に合ひ閉口す、午后三田に行き二本立の古本箱を二拾二錢にて求め来りぬ、小倉姉来りき

五日 雨天

五時起床、午前九時頃里見純吉君来り種々郷地の模様承知す、午后三時頃には貫一君来訪、兼て氏の訳しつゝありし原稿を持参一寸秋葉に見せ、秋葉氏之をマクネヤ氏へ送ったり、貫一君五時頃去らる、小倉君一寸来り話さる、余夕飯后腹痛非常にて為に芝教会の祈会も不参す、併クシチンキにて直りたり、

六日 雨天

〔欄外〕「長谷川君帰京、又直に帰国の途に就けり」

五時半起床、午前鈴木直丸氏より使来り、秋葉氏と同行、即ち芝教会堂を陸軍に当座貸すに就き椅子〔片付也〕などの形着に行かずやとの事より余等三人十時頃着堂、講堂の椅子を不残講壇上に積み一時頃漸く整ひ啓蒙学校の扣にて鈴木氏の求めさせしばん菓子を食し、一時半頃歸路に就き飯倉にて

余は里見の方へ別れたり、里見にて午飯馳走、矢島氏より送られし写真を貰ひ五時頃去りぬ、長谷川君には昨夜七時頃帰られ其足にて直に帰国の途に就かれし由

七日 雨天

五時半起床、秋葉姉今日より起床、台所の事も□さる、今までは儀一郎氏大概一人で為し来られたり、氏も又中々感心な人物なり、

八日 曇天

五時半起床、川島源三郎氏午后五時半頃来京、引續て七時頃秋葉太平二氏次女おさく様を携れて来京、今宵は宮川氏を呼び里見より送られしうどんを食したり。明治学院の神学部及普通学部生徒徒追々帰校さる。

九日 晴天

五時半起床、七時半より芝教会へ行き今日は啓蒙学校にて日曜学校も説教も致す事ならんと思ひしに、会堂の方もまだ陸軍の方より何とも申越さざれば、未だ其俣にて先日余等の取形就たりし(片付じ)腰掛を今朝またく取下し整へ以て礼拝式を為したり、但し日曜学校の或組は九時より啓蒙学校にてなし余が組は休みたり。一時頃帰宅す。午后台町教会にて国沢君の説教を聞き、帰路学校の上野氏へ金一円届け一寸談じ九時頃帰宅す。

十日 晴天

五時起床、午后鶴野君来り二時間程遊ばる、午后星野君来り五時頃帰らる、太平二氏家女供を携れ浅草の方へ行かれ午后九時頃帰らる、余午前品川ステーション上の長谷川へ波多野の牛乳代二

円六拾錢を払ひ、序に小倉氏方より袋二百枚を持来る。

十一日 晴天

〔欄外〕「府下在留ノ神学生の親睦会」

五時半起床、午前雨降りぬ、国沢君秋葉氏を訪はる、午后三光町の鹿島君の宅に居らるゝ、鶴野君を誘ひ、其中に八田も来り三人同道赤坂表町の伏虎館に会す、之れ在東京明治学院神学生の第二回夏期親睦会にて松原君主会にて各自及び地方よりの報告を為し、后鶴野・鈴木・国沢の祈あり、厳肅なる式は之にて畢り后菓子及びすしの馳走あり、午后五時半頃退く、余波多野へ一寸寄り純吉氏と同道帰路に就き九時半頃着宅しぬ、今日集りしもの凡そ八名、即ち松原・小倉・鈴木・和田・国沢・鶴野・八田及び余とす、今宵大風、今日は二百二十日なり。

十二日 晴天

午后一時より波多野へ行き同家の為カストウの買入に行きしもなく、本箱三本程を求め遣りたり、又大森にて飲みし牛乳代金二円六拾錢小生立更(立替)たる分を受取りぬ、夕方散髪しそろはんを十二錢にて求めぬ、貫一君同道同家へ帰り一宿、今日は午前五時起床したり。

十三日 晴天

午前五時半起床、直に帰路に就き六時少し過帰宅、今日は至上岡山広島の方へ御出張の為見物人続々行けり、当家太平二様初め儀一郎氏・源二郎氏も行けり、

十四日 晴天

〔欄外〕「鼠を退治せんとして掌を損ず」

明治二十七年九月

午前五時半起床、昨夜大雨なりしも心付かざりき。午后庄田姉・土屋姉・里見純吉氏等来り、婦人等とは面会せず、宮川来純吉君へ片山君より送られしあんずを奪ひ開鎗尽し儀一郎氏其の汁にむせ大に苦しまれしこと常談より小馬の出んはかりなりし。泉氏より秋葉氏へ手紙来り、里見君の翻訳事件は九部六ヶ敷様なりと、余午后鼠退事〔退治〕を為んとして鴨居のくぎに手の掌を損じ直に加字木に行き洗ひたり、然るに残り居りし諸氏は右鼠を取にがしたりとなん。

十五日 曇天

午前六時起床、八時頃加字木へ到りしに石炭酸の浸更のみせり。千磐・八田の両氏来訪、千磐君は三日程前に帰られし由、

十六日 晴天 安息日

午前六時起床、釜山よりの電報に我兵平壤の清兵の糧道を絶てりと。芝教会も今日より九時より日曜学科初まり十一時閉会、波多野にて午食の弁当食し同家の諸人向島へ行れし処にて、石炭酸を少し貰ひ里見へ寄り三時頃帰宅す、夜分台町教会に到り熊野氏の説教を聞きたり。

十七日 晴天

〔欄外〕「平讓〔平壤〕乗取」

午前六時起床、明治学院普通学部今日より授業初まりたり。聖書学館も今日より稽古初まりたり。手傷大に快なり。午后三時頃より儀一郎氏と同道三田に到り、余は別れて愛宕町〔マツ〕に行き机を冷かし、帰路川島君に合ひ三田にて本箱を二本立二十六銭にて求め来ぬ、我兵平讓〔マツ〕にて大勝利との号外来る、

十八日 曇天

午前六時半起床、昨夜関谷の叔母より見舞のはがき来りしは此方より余り無沙汰せし故にや、昨夜は上野君来られ十時頃まで話されたり。

十九日 曇天

秋葉太平二氏五時半頃出発帰国の途に就かる、秋葉氏伊皿子まで送らる、余午前五時起床、朝程長谷川君へはがきにて開校の期日をしらす、

二十日 晴天

〔欄外〕「矢島宇吉君帰京せり」

午前一寸学校へ行き純吉君に文章範範〔マヤ〕を貸したり、清水君及び千磐君来られ一時頃矢島君来られ時余語られ同氏と同道、一寸学校に到り夫れより小倉を兩人にて見舞四時頃帰宅す、矢島君は今日帰京せしなりと。午前五時半起床、

二十一日 曇天

〔欄外〕「海洋島辺日清大海戦、我海軍大勝利の確報来りぬ」

午前五時半起床、八時頃小倉を見舞同氏と同道一寸帰宅、同氏の依頼により伊藤常二郎氏の手紙を送り小倉氏と同道畳屋を注文の為中門前に行き、帰路芝勸工場に入り十五銭の弁当箱を求め帰宅せしは一時頃なりき、里見寛一君一寸来訪されき、支那の軍艦四隻沈み三隻焼失の号外来り、品川へ送りぬ

明治二十七年九月

二十二日 晴天

午前五時半起床。今日松尾の久野氏二女こと子を波多野へ奉公の為携れ来り、今宵里見へ宿る。

二十三日 晴天 安息日

午前五時半起床、八時より芝教会へ行き今日にて解職の沙汰を和田君より受く、又加利太書の注解も今日にて了りき、波多野にて弁当を使用し一寸小林格君を訪ひ入営后今日初て出づるなりと云ふ、川崎君に面会、氏は二時半頃より三十間の隙に植村氏の宅へ行かれ余間もなく去り中野へ一寸里見へも一寸、秋葉へ帰りしは午后五時頃なりき、今宵台町教会にて石原氏の日支戦争事件に關し基督教の必用（イマ）を話されしを聞き、

二十四日 曇天

〔欄外〕「授業始式／九月度の「クラスミーチング」／小倉様転宅余又同居」

午前五時半起床、小倉方よりの伝言なりとて余に早く来れと柏井氏申来、余食后直に参上、小倉様にて今度借り受くと云ふ今里町の家に来り、掃除を為し同家の荷物は学校の門番とマクローレーの車屋とにて六転車にて悉皆運び尽し、又余が分秋葉氏のと学校のとにて丁度一車となり、是又右兩人にて運び呉れたり、夜分尚方着（片付）かず、学校授業始の式あり井深氏話されき、午后七時半頃山野君の室に会合し、クラスミーチングを為す、会するもの清水・千磐・河野・和田・矢島・山野及び自己にて、矢島君司会にて同氏祈会に先んじ最初の祈を獻げ掛るや千磐君不図小声に発砲するや少時は何事もなかりしが、和田君少し吹き出すや会衆異口同音に笑ひ出で、矢島君は祈を中途に停止し讚美を為し、再び祈会を開き清水・千磐及び余と祈り后茶菓の馳走あり、十時頃帰

宅す、小倉様にて移りし今度の家は家賃三円五拾、芝区白金村今里町九十六番地第六号なり、

二十五日 晴天

午前五時半起床、十時頃より小倉君と竹買に行き、十二時過より座敷前なる垣根を修繕し初めたり、今宵一同にて土佐流の花合を遊び余最后二度好かりし、

二十六日 晴天

〔欄外〕「種灌学舎」

午前五時半起床、垣も午までに出来上りたり、二時頃より秋葉一寸寄り三田にて絵紙及コップ十錢とランプ十七錢五厘なるを求め、帰路伊皿子にて机を三拾五錢にて求め六時頃帰宅しき、夜分竹林君来り早く去り、続く千屋・柏井・島田の三氏来り、トランプを遊び余と小倉君連戦連勝、支那兵を破る我兵もかくやと思へたり、聖坂にて足袋を二十四錢にて求む、同所にて柳沢・植村先生等に会ひき、小倉姉の学校今日より初まりたり、目下生徒十名程なり、校名を種灌学舎と云ふ由

二十七日 曇天

午前五時半起床、九時頃昨日三田にて求めたりし日支戦争の絵紙三組を俊三の許へ送る、三田にてランプを持来る、秋葉にて父よりの手信を受取りたり、彼地何れも無事、此間は里見説教し次は亮作氏為し、其次は父の番と、佐久間君は毎度ながら仕度不十分なる説教を為され何れも迷惑の次第に居るとなん。学校にて長山万次君に会ひ、氏は兼て聞きつるに病氣春来より宿阿となり困まり居由を申が今日見受くるに余程顔色損弊傷衰の有様なりし、長谷川へ授業始引延の報出す

二十八日 晴天

午前五時半起床、一日障子張及び余が室二丈^(畳)の壁をも張り、午后矢島君を訪ひ同氏の和田姉と交際を結ぶ由告げられ余も賛成し来りぬ、和田姉の得難き婦人たる事余も兼て心着き居りし事なりしも、矢島君も目高き君なり、小倉様にては鋭喜君別れの為とて午食にすしを馳走せられき、

二十九日 雨天

午前五時半起床、午后秋葉氏へ到り洗濯物を受取来り、尚ほ午后七時より雨を冒して小倉君同道三田に到り国旗を一揃四拾錢にて求め来たり、但横二尺に縦二尺四寸程なりき、午前一寸矢島君の元に到り同氏に青年会々館に開かる親睦会の切符を遣りぬ。

三十日 雨天 安息日

〔欄外〕「赤坂教会へ転会す」

午前五時半起床、八時半頃出発、赤坂波多野へ一寸寄り直に教会に到り小林格氏の説教を聞き、十一時半波多野へ行き弁当を食し、直に里見へ到り夕の弁当を食し、雨を冒して教会に到り兼て頼まれ居りし故小林君の司会の下に靈魂の価値てふ説教を為し、聴衆は純吉氏・畠山草多・田中太郎・新島・小林の五名なりき、帰路一寸里見へ寄り十時同家を出発十一時頃帰宅しき、峰子さん琴の許免出で八円取られたりと、余今日を以て赤坂教会へ転会したり

べ金六円六錢二厘 内小使三円六錢二厘 食料三円

〔別紙 九月分金銭書付〕

九月

二日

一、金二銭

伝道費

一、金十二銭

そろばん

一、金六銭五厘

かなづち

同

一、金一銭

くぎ

一金四拾銭

折皮新約聖書

十一日

一、金十銭

親睦会費

同

小形聖書

十三日

一、金四銭五厘

国民の友第九月三日

一、金五銭三厘

さたう半斤

一、金二拾二銭

の本

一、金一銭

はがき

一、金六銭

伏紙

一、金三銭

吉田洗濯代

十日

一、金二十六銭

二本立本箱

一、金一銭

はがき

一、金一銭

はがき

七日

二十一日

一、金一銭

ゆ代

一、金一銭

号外

十二日

同

一、金四銭

散髪

一、金五厘

切手

一、金四銭

散髪

一、金十五銭

弁当箱

明治二七年九月

一、金五錢四厘 ぐぎ

二十二日

二十六日

一、金一錢 ゆ代

一、金三拾五錢 机

一、金十七錢五厘 ランプ一箇

同

一、金一錢 はがき

一、金十錢 水飲

一、金五錢 青年会親睦会費

二十六日

一、金三錢 クラスミーチング

一、金八錢 支那論

二十八日

同

一、金一錢 ゆ代

一、金十七錢 絵紙

〆三円六錢三厘

同

外に秋葉へ三円

一、金二十四錢五厘 足袋

十月

一日 曇天

午前五時半起床、午前一寸三田に到り小倉姉の為替^(為替)を出し、種物を秋葉姉の為求め、国民の友三四集と求め十二時帰宅、尚午^(マ)午秋葉氏へ行き余が説教羽織の調整方を依頼し来りたり、平讓^(マ)大勝利の詳報続々出づ、

二日 晴天

〔欄外〕「東京第一中会開会／長谷川峰夫君上京／佐久間吉太郎君上京」

午前五時半起床、本日より品川教会堂にて第一東京中会開会、余十時頃より出掛け伝道者の報告及び教役者柳沢氏辞職の議決等ありき、井深氏議長たりし、午后小倉の老婆の求めに応じ伊皿子の縁日に同道せんとて直き郵便箱の下に至ると同母様、私は少し具合が悪ふ御座ますよとしよごみなされたり、余は背部を按ぜ遣すに氣直りたり、併し縁日行は見合たり、斯て余は一人にて三田辺に行かんとし源三郎氏に会ひ余が国民の友取り来られし故同道、帰路に就きしも御田〔三田〕学校近所より雷雨に冒され秋葉氏へ帰宅せしは九時頃なりしが、かなりぬれ源三郎氏の衣を仮〔借〕り帰宅せしハ十一時なりき、松原宿まりぬ、長谷川氏今日十時頃帰京せりと秋葉に來り面会す、母様も御上京せりと、又松尾より佐久間氏上京昨日出發千葉へ宿り今日上京せりと、長谷川君と二本木に行かる、

三日 晴天

午前五時半起床、午前品川の中会へ行き和田・ワデル・バラ等の田村氏対大会の不当を訴へ、大会に再議を願出すべしとて中会に動議を出され、九時半頃より十二時まで掛り遂に否決となりき（和田・バラ・ワルデのみ后皆否）、午后秋葉姉と同道伊皿子の呉服屋にて羽織地を八十錢にて求め七十五錢にて染めさせたり。染は来る十二日に出来る筈、それより三田に至り簪と箱を求め、長谷川氏に会い同道、飯倉辺に至り彼処より一直線に帰途に就き六時帰宅す、

四日 曇天

〔欄外〕「柔術初」

午前五時半起床、朝程秋葉へ行き畑を作り菜を蒔き遣り、おはぎの馳走になりき、午后柔術を為したり、此秋は去る二日を以て始めて試み二日は先生と一番、今日は先生及び里見と試みしなり、昨日秋葉より基督の性行を仮り来り写し初めぬ、中会は昨日にて畢り伝道者試験は赤須・好川・鈴木他に一人四人にて、他一人は悉皆不合格にて、鈴木は説教のみ不合故来春は説教のみ試みるべしと、石原氏の発言なる由

五日 晴天

午前五時半起床、九時頃より里見へ行き長谷川君の母君に面会し同十時より本郷関谷へ到る、干時一時昼飯を馳走になり小倉姉より頼れたる状紙を高等中学寄宿舎の西田久寿馬氏の留守なる故小使に頼み来たり、関谷にても当夏は叔母様も余程悩まれたる由、午后六時半頃里見へ来り、夕飯馳走、九時^(編路)起路、純も鳥井坂^(鳥居坂)下まで散歩す、余パンを驕りぬ。

六日 晴天

午前五時半起床、朝程八時半頃より今日土曜に限り朝となり、柔道を試み今日は先生と二番、純吉氏と一番試たり、先生名を広岡氏と云ふ、小倉君は昨日番町の方へ越されたり、余今日横手^(マ)の明地を耕し起したり、午后矢島君来話さる

七日 雨天

午前五時半起床、八時より一寸里見へより貫一君同道赤坂教会に到りワ|デル氏の説教あり、后晩

餐式あり、波多野へ来り食事し三時頃里見へ来り一寸談し六時頃帰宅、路飯倉を通りフライの伝〔27〕を二十五銭にて求めたりき、今日初て綿の羽織を着す、昼中は単衣とシャツなり

八日 晴天

午前五時半起床、九時頃小倉君帰宅す、余家母と加藤へむかご取りに行き、午后一時よりは授業始まる事故学校に至り、それぐ授持の教師に本及び場所を聞き、其足にて秋葉へ到り四時頃帰宅せり、余等の時間は一時十五分より四時十五分となり、金曜に限り植村氏の哲学は午前十時より十二時にあり

九日 晴天

午前五時半起床、小倉君六時頃番町に行かる、車屋の正直なる五時半頃来れり、今日はアレキサンドル氏の旧約歴史の講義のみあり、柔術して帰宅す、是より先午前七時半頃よりは神田に行きエマルソンの文集を〔27〕五十銭にて求め来りぬ、肥ためを埋けたり、品川の斎藤氏来り家姉の病状を診断す、実に気管視〔支〕なりてふ

十日 晴天

午前六時半起床、午后七時より長谷川と同道六本木里見へ行き、帰路三田にて半紙十占求、代十五銭也

十一日 晴天

〔欄外〕「川田繁太郎君上京／神学部新入生歓迎及親睦会」
植村氏名古屋へ行き不在、フルベッキ氏病氣にて欠席、井深氏の教会史未来ず、何れも休み、午

后柔術二番す、尚午后六時半頃より学校チャブルにて新入学生の為歓迎会を兼親睦あり、鈴木氏司会にて好川氏開会の主意・歓迎の辞を延べ、次に□の和歌(ほつく)、鈴木氏読み□で郡山・池の両氏答辞あり、尚国沢・笹倉の感話あり、是にて先づ会も畢り后茶菓出で八時半頃閉会せり、井深氏も畢り頃一寸話されき、川田君今日上京され今度は老母様を携れられ今宵老祖様だけ当家へ宿られぬ、今日ワイコフ氏より本月分のサポートを六円受取りたり、

十二日 晴天

午前六時起床、井深氏より教会歴史受取る、午后七時頃より家母と伊皿子の縁日に至り月のさやけきに興じて帰家せり、

十三日 曇天

午前六時半起床、午前九時頃柔術を試みたり、今日は里見・柳川・篠原・先生と四番、其后散髪し一寸秋葉へ寄り午后長谷川と入浴す、又菜蒔せりき、

十四日 雨天 安息日

午前五時半起床、八時頃より雨を冒して数寄屋橋教会に到り、光氏に金二円を渡し、七・八・九・十月分の払金として峰尾氏に届る様頼ぬ、赤坂教会へ行き候は十時半頃にて、それより波多野にて弁当を食し、一寸祖母様に会ひ、里見へ行き帰路伊皿子にて兼て注文し置きし羽織を受取り七十五銭染賃に払ぬ、直に秋葉へ届く、今宵両国へ説教に行くべかりしに雨催なりし故見合せ、台町教会にて白石氏の説教を聞き、一寸秋葉へ寄り十時頃帰宅せり

十五日 曇天

〔欄外〕「奥平姉」

午前五時半起床、小倉君午前八時頃来、夜の七時汽車にて帰らる、井深氏何故かにて休まる、午後純吉君来り、余氏の家族の事に感ずる事ありしを陳べ少々忠告する処あり、菓子を驕り三光町辺にて別る、時に一寸鶴野氏を見舞ひ帰るや長谷川居り、今宵十時出発の奥平姉を送るなりと、余も其の積なりと語りしが氏一步先んじ品川の鈴木へ行かれたり、聽て九時頃余は朦朧(朧)月に降風を掛念(懸念)しつゝ悪路を冒して一人品川へ到れば、奥平姉は早や来り居り余の停車場の口に到るや姉は向(世)に出で来り謝されき、姉は一人の女の子の六才程なるを携れられしが、彼女は同姉の中兄君の娘にて大兄様の元へ携れ行なりと、其の中に長谷川君来り、氏は奥平姉の為万事世話行届き、姉の為大に尽力されたり、蓋し原姉此の夏奥平家の扼介(扼介)を蒙りし時ありし故なりと、斯て同姉は丁度十時の汽車にて発車されたり、聖書学館よりは中村・和知・鈴木・宮川・高林・大井田の諸姉送られき、長谷川と帰宅、尚ほ三光町辺まで相談じつゝ行き、話中大石保氏の醜聞を聞かされ嘆息する事数時、着床尚睡られざること時余

十六日 雨天

午前七時起床、基督伝の講演に植村先生来り、別に質問も講義もなく、此后講義の方法等を話されそれにて出づ、但し先生は諸氏に向ひキリスト伝に就き如何なる書を読みしや、また其書の記事の体裁如何と、精々しきに何れも閉口、柔術には十数名の出席あり、余は里見・川島の両氏と試みたり、長山も先日より初められぬ。

明治二十七年一〇月

十七日 雨天 神靈祭

〔欄外〕「東京在留千葉県のキリスト教徒親睦会」

午前七時起床、午前は長谷川君の世帯道具を集めんため二本榎町に到り十二時頃帰宅す、一寸秋葉へ寄り昨夜のすし馳走になりき、同家婦夫は浅草教会にて、故聖書学館卒業生たる某姉の葬式に越^④かれたり、今日開花亭に千葉県基督教徒の親睦会ありしも行かざりき。

十八日 晴天

午前六時に起床、植村氏病気なりとて休まる、フルベッキ氏今日より始めらる、氏は旧約の緒論を訳読せらる事功精到らざるなし、柔術は篠原・川島・岡広先生の三人と試ぬ、エメルソンの文集今日より始めたり、六ヶ敷丈面白味もあり、

十九日 晴天

午前六時起床、里見の叔母様より手紙来し、六本木の様子如何と問はる、

二十日 晴天

午前六時半起床、柔術に川島・里見・篠原・先生と試む、長谷川君台町に移転さる、

二十一日 晴天 安息日

午前七時起床、九時頃雨りしも晴れたり、赤坂教会へ十時着、小林氏の説教を聞き、后總會あり、十一人の集にて小林氏退会の議及び其后策及び教会負新^(普通)の事にて議し、十二時開散^(解散)、波多野にて弁当を遣ひ一寸里見氏へ行き、純吉氏は波多野へ、余は両国へ行く前本郷関谷へ行き、五時半頃より両国へ行き七時半より説教(靈魂の価値)す、但し不充分なりき、聴衆二十名程もありき、

十一時帰宅せり

二十二日 晴天

午前六時半起床、小倉君来られ午后母君と伊皿子に縁日に行れ菊を求め来られぬ、氏留らる、長谷川氏の障子張す、

二十三日 晴天〔欄外〕「羽織出来」

午前七時起床、家姉起きる、人に起されしは此頃珍らし、国元里見叔父・叔母・母・親父等宛手紙送りぬ、植村氏の基督伝今日始めたり、兼て秋葉姉に頼みたる羽織出来上り今日受取来たり、裏は今までありし分をつぶし其の裏を着け、染代に七十五錢、表地に八十錢都合壹円五拾六錢なり、おさく様の作なり、小倉氏へも近所より琴の先生来り、一周間に二日つゝ来らるゝ様となり、今晚より来り、蓋し二十五才程の娘なり、柔術休む、

二十四日 雨天

午前六時半起床、今日上野君へ手紙送る、同氏より頼まれたる事(返信)の反信なり

二十五日 雨天

午前六時半起床、午后六時頃福本にて三錢つゝ三十錢の菓子を買ひ今宵のクラスミーチングの用意す、清水と余と委員たり、清水司会にて諸氏の感話祈祷あり、后茶菓及余興あり、九時閉

二十六日 曇天

午前六時半起床、哲学の時間更て基督伝の講義ありき、今日里見叔父及親父より手紙来る、要は六本木の事にて彼地皆々心配し居る由、

二十七日 曇天

〔欄外〕「九連城乗取」

午前七時起床、柔術の先生病氣にて休まる、余篠原・熊野と試みたり、午后六時頃号外来、求むれば九連城乗取ると、我兵の死二十人に満ず、負傷八十人、敵の死二百、猶分捕物種々ありと、秋葉にて里見純吉君に合ひ同道余が寓に來り、同氏に叔父の手紙及父の手紙を渡し屢らく語り合、彼五時頃去られたり、小倉様にて余か為とて下着の半甲（絆衣）造らる、

二十八日 晴天 安息日

午前六時起床、小倉姉と起比し勝ちたり、八時半より赤坂教会に到り小林氏の説教を聞きたり、同氏も今回を以て我教会の説教は為仕舞なるが、祈の応驗を説き則ち吾人に肉体の離別こそあれ靈にはなしと、波多野にて昼の弁当使、二時頃中野へ行き、一寸里見へ寄り間もなく歸路に付き、里見純吉氏に会ひ暫く立話を為したり、昨日国元富三郎様より六本木祖母様への手紙は、以て御祖母様を警醒するに足り、彼の婆は二三回誦読し直に原書を読み、又祈を為されたる様子なりと、純吉氏も喜びて語られたり、氏又学校の寄宿舎へ行く事の可否を相談せる、余は其の大なる勘考を要すべきを告げたり、午后台町教会にて石原氏の説教を聞きたり、教会にても修繕費十月間に七十円の予算にて毎月七円づゝを集むるを以て其分に幾分づゝか約束さるゝ様執事より申渡ありたり、余大会の伝道費に金五錢づゝ出す様約束しぬ、長谷川だいだへ行かる、紋付羽織着初めたり、

二十九日 晴天

午前六時半起床、小倉君来り夜分松原氏と同道帰らる、渡辺喜夫氏より来る四日に神田の青柳にて青年会相聞（マコ）く由報知来り、矢島君持来る、氏は菓子持参八時頃帰らる、午后五時入浴、時に石油を求む、五合五銭なり、今迄の割にては丁度一月に一升の石油にて足りたり、蓋し此後は夜永き故一升にても足るまじ、但三分辛（ヒ）のランプなり、

三十日 雨天

午前七時起床、植村氏アライ町電信局より電信にて「クルマヤコケタドロダラケユカレヌ」と、フルベツキ氏の時間余り詰らぬ故何れも退屈せしが、和田氏は先生の像を画れ一席の笑事となりたり〔口絵写真（27-29）〕、猶フルベツキ氏には級長矢島もて教授方を変更する様上申したり、柔術先生と一番切試み、但今日は人出少なかりし、

三十一日 晴天

午前六時半起床、今日小倉へ食料二円七十銭を払ひぬ、但し先月二十四日より一ヶ月分なり、

ズ九円六拾壹銭八厘 内食料二円七拾銭、田村へ二円

小使四円九十一銭八厘

〔別紙 十月分金銭書上〕

十月

明治二十七年一〇月

一、金四銭	国民の友 三四集	一、金二十四銭五厘	足袋
一、金三銭	国民策 我望の女子教育	一、金二十五銭	フライの伝
一、金八銭	箸及其箱	十三日	
一、金三銭	半紙二占	一、金三銭	Kaku
九日		一、金三銭	散髪
一、金老円十銭	エマルソン	一、金三銭	Kaku
一、金十六銭	加字木薬代	一、金二銭	伝道費
八日		一、金九銭	御□
一、金二銭	国民の友	一、金二銭	鉛筆
一、金四銭	評論	一、金二銭八厘	ひも
七日		一、金二銭	伝道費
一、金五銭	Kaku	一、金四銭	切手
八日		一、金二銭	切手
一、金三銭	Kaku	一、金三銭	クラスミーチング
一、金五銭	手拭	一、金五銭	運動会費用
一、金三銭	ノートブック	一、金五銭	石油代
一、金十一銭五厘	下駄一足	一、金七十五銭	染代
一、金十五銭	半紙十占	一、金八十銭	羽織地

一、金一銭	はかき	一、金五銭	下駄齒入
一、金四銭	筆	一、金一銭五厘	ザウリ
一、金十銭	柔道費	一、金一銭	ユ代
一、金十五銭	シャツ		
一、金二銭	しやぼん	〆九円六十一銭八厘	
一、金五銭	大会伝道費	食料二円七十銭（九月二十四 十月	
一、金三銭	中会費	二十三）	
一、金老銭	号外	田村へ二円 七、八、九、十月分	
一、金五厘	切	〆四円九十一、八	

十一月

一日 晴天

午前六時半起床、

二日 晴天

〔欄外〕「明治学院の秋季運動会」

午前五時半起床、六時一先づ学校に行き将に出発せんとする普通学部及び神学部の生徒総員六拾名程は皆思々の出立なるが、大概は脚半〔脚絆〕と藁路〔草鞋〕なりき、途中確かなる先導者なき定め三分せしが余等の一隊本隊とも謂フべき一番大群に山下町辺にて合し、九時半頃王子へ着し、十時頃より競

明治二七年十一月

争（フットレース）及び玉杓子に玉を乗て競争する事、及打提を付け藁履を穿つて競争する等あり、十一時時すしの馳走あり、尚十二時頃より一時まで種々なる競争あり、最後に「チャンピオンレース」六人程あり、賞与を取りしは第一上田、第二大内なりき、其の「チャンピオンレース」には余も長山も与り入りき、尚池・熊野其他の人もありき、但し「チャンピオンレース」は二回なりき、一回は百二十間あり、一時頃菓子七個程を与へられ次で賞品を授与され、井深氏の祈祷の後閉会し、或は直に帰路に就き、或は王子の滝の川へ行人ありき、余は純吉氏・田島・原順次郎氏等と王子の孤女学院を見舞、再び滝の川へ行き、帰路を間違、再び王子のステーションの辺て出で、あすか山の傍をたどり帰路巢鴨の自営館及び小石川の田村様を見舞たり、自営館にては椎名君五日程前より脚気の気味に大に難義なる由で着床せりき、牛込見附辺にて里見と原とを十錢にて車に乗せ、余は波多野の前にて田島君に別る、波多野へ着せしは六時半頃なりき、偕て奥様は余か為に玉子を焼かれ余は午の弁当を食し屢く語る中里見貫一君来り、八時頃同道退きは帰路入浴し帰宅するや家人は余が為に床を取り置れたれば、余は直に心地快く着床、間もなく眠り入りぬ、余は「フットレース」にて一等賞に鉛筆一ダースを取りたり、之を種灌学舎の生徒に与ふ、此日天気殊に晴朗、野外の運動会には実に妙なりき、

三日 晴天 天長節

〔欄外〕「小林格氏送別会」

午前六時半起床、午前学校に至るや山野君の国元より同氏の姉君変死の報電報にて来り、昨夜同氏留守なりければ八田は藤田某へ掛合たるに、丁度山野氏其家に居合、今朝丁度同氏の受取る処

となり驚て帰校せりとて、十一時頃八田祈禱を為し同氏は出発帰国の途に付かれたり、悲惨、九時半より普通学部チャペルに祝会あり、村松・杉本の感話に閉口し中途にて退席せしもの十名程ありしが何れも不覚の至りなりき、午后二時頃より麻布に小林格君の送別会あり、会するもの十五名、帰路一寸里見へ寄り、又長谷川と新島君の寓を筭町(27)に問ひ六時過帰宅す、純吉氏より聞くに若林にても権三郎氏より金円百円(銀)を送り越されしに付其受取方の為祖父氏は兼て上京の筈なりし、芳郎氏と出京さるゝ由、小倉様にても今宵は貧民の家母等五六名を呼び遊ばれたり、

四日 雨天 安息日

〔欄外〕「旧松尾藩青年会第二回会／加藤輝明氏／鳥羽権三郎氏よりの音信／若林種房氏上京」

午前七時起床、今朝国元親父よりはがき来、日く去る二十八日頃南洋ジャワなる鳥羽鳴泉十氏(權三郎)より音通あり、序に洋銀一百円を送り来れりと、為に祖父は一昨日東金宿にて出発せりと、されば昨日頃は御着京の筈なるが果して今日里見にて御面会致し候に御祖父様の御嬉(機嫌)斜めならざりき、斯て余は時刻移りたれば教会の方は見合せ同家にて弁当を食し、午后一時祖父を携ひ波多野へ行き余は直に去り、兼て報知ありし松尾青年会の大時計前の青柳亭(27)に開会さるゝに出席せんとて風雨を冒して行ば早や大概の人は集り居り、殊に驚きしは千葉の加藤輝明君の番町教会へ転会され今は明治学院の英学専門科へ入り笹倉君の室に居ると聞にありき、氏は実に加藤春五郎君と好く似たる人物と知られたり、此日の気烟叱は同氏なりき、此日会するもの小林・三浦・福島・小柳津・渡辺・高林・加藤・若林・嶋野・秋山・遠藤・四の宮及び余なりき、夕飯の弁当に酒一

明治二十七年一月

本つゝ出たり、加藤氏酒の事に就不服を唱へ遠藤氏言訳を為す等面白かりし、与興（マユキ）には小林・小柳津の両氏劍舞を為され、加藤氏手品を為され、氏最も能く笑したり、六時半頃閉会、余は秋山・加藤の両氏と眼鏡より鉄道馬車に乗りしほつめ（ササメ）まで来り、四錢加藤氏より借りたり、是余が鉄道馬車に乗初めなる事なり、斯て加藤氏は愛宕下に用事ある由にて一丁程も来りし頃、氏は鏡を車内へ残し来りぬとて再び戻り、同会社に交渉するも遂に今宵の事に判らずして、再び明朝を期し去り、臆て愛宕山下近き処にて氏は余の待つ居らるゝ事を遠慮され、余も氏の宿るやも知れずと思ひしまゝ前に別れて歸り来ぬ、此日定めたる会費は十七錢なりしが、后下戸の爲めとて三錢つゝ出合、菓子を求め都合二十錢の会費となりき

五日 晴天

午前六時起床、九時頃より日本橋区駿河町の三井銀行に行き古筆を貰ひ来り、帰路里見へ寄り午食を馳走になり、アレキサンドル氏の時間に少し后れたり、

六日 晴天

午前六時頃起床、今宵小倉には大谷氏の送別会あり、高知の人々集会され十一時頃散会されき、是より前余は秋葉へ行き屢く話し、菓子など馳走になり鳥丸帳を譲り受け、妻君及秋葉氏に余の振舞を難せられたり、おさく様今日よりまたく気分悪しとて着床せる由

七日 晴天

午前六時半起床、今朝七時頃より小倉君は母君を相携れ郷友等に魚釣に□や海へ行れ、午后七時頃魚七十尾も捕へ来りき、今日奥平敏子様到手紙出しぬ、

八日 晴天

午前七時起床、

九日 晴天

午前七時起床、

十日 晴天

午前六時起床、青年会館に慈善会あり、波多野峰子様と同行二時頃出掛け五時頃帰宅す、本会は東浜の基督教主義の女学校より手細工品を持出し之を売り以て其の利金を此度の軍費に充つるなりと、尚一人前五銭の切符を求めて入場することなりき

十一日 晴天 安息日

午前五時起床、朝飯前に波多野へ行き、今日は移転するよし昨日より頼まれ居りし故一日手伝す、午後六時頃悉皆形着^(并付)、余は純吉氏と七時少前赤坂教会に至り矢島君の説教さるを以て其の司会を為せり、蓋し余の行きたる時誰も司会すべき者なく不得止余之を司りしなり、后より田中兩人来りき、十五六名の集りなりき

十二日 雨天

午前六時半起床、此三四日鼻血の流出頻なり、逆恙の気味合なり、夜分奥平姉より手紙来る、小倉来り宿らる、入浴す、

十三日 晴天

午前六時半起床、今日より火木と午后十一時^(前)より社会学の講話始まりたり、石坂正信⁽²⁷⁾氏⁽⁶³⁾講師たり

十四日 晴天

午前六時半起床、

十五日 晴天

午前七時起床、午后矢島君と三田へ散歩し余は肝油を二十五銭にて求めぬ、キセキ論附インスピ
レーション27も六銭にて求む64

十六日 晴天

午前六時半起床、今日肝油を飲始めつい三日分程一度に飲み一日心地悪く脳さへ変になりたり、
夜秋葉へ至るや妻君不快着床、氷もて冷せりき、今関喜一郎氏に会ひたり

十七日 晴天

午前六時起床、十時頃柔術一番す、近頃霜焼の気味にてうるさし、昨日伊皿子にてシツクイぬり
の火烽を十五銭にて求む、今日尾寄より炭一俵持来る、代は二十二銭なり、昨夜波多野承五郎氏
より招状来り、今宵至ば長塩信賢氏の家人を置いて広島へ人夫となりて行かれし為、其の遺族の為
奔走致され度との事にて、承諾して里見へ寄り十時頃帰宅

十八日 晴天 安息日

午前六時半起床、九時頃より赤坂台町卅一番地の長塩を訪ふに昨日飯倉五丁目加藤正平氏の所へ
移されたりと大屋(大家)の話なり、余大屋の老母に問ふて七月頃当家に入り昨日引移られしが月(ママ)二十
銭の割にて貸し今迄に壱円七十銭しか払はれずとの答を聞き、直に飯倉に至り加藤氏を訪ふに
六十路の老母在り、長塩様御家内皆様は昨夜御出あり、秋山様の方へでも行かれし様子なりと、

其うちに同老母の次男なりと言へる正平氏来り、種々話し十二時頃去りぬ、正平氏は二十一年頃より逋信省に出役せりと、而して同家は前松尾深田に居り、長塩様の向に在りしを以て知合となりたるなりと、里見にて弁当を使ひ一時半頃より秋山へ至り静氏と初て会し又長塩氏の長男潔氏とも面会したり、而して同氏は眼を病み為に何も為す事には実に困却すと語られたり、而して中二人の子供は何れも諸所へ預けたりと、而して眼の医者は「こふもと」と言ふに掛り居り治療費は悉皆引受け呉るゝ友人数名ありと、又活計の作は今日同氏の母君波多野へ参上語りたりと、由て余は再来を約し去りぬ、時に母君は家を探しに出でたりと、今日余が初て秋山様の入口に立つに内より妻君の呼ばるゝに、おや山田様の息子様がと、但し彼母とは初対面にて小子の名を知らざりしも、父の息子と見られしは奇体なり、斯て五時半頃波多野へ歸りしに承五郎氏既に歸り居り、談尚明ならざるより余は再び秋山の家へ行きたり、是より少し前六時半頃飯倉の加藤へ行きしに、当家を長塩の奥様今去りしとの所に至りき、時に正平氏の兄伊之助氏なるものゝ加藤と長塩は親類にあらずして只ほんの知合なりとの話を聞きたり、それより余は再び秋山氏へ行きしにまた長塩の妻君不在、即ち相待つ事三時間、妻君は七つ程の小供を携来られたり、余は初対会なりしが早速談般(談判)を申出で、余は父と早川へ寄書すべき故東京の親類へは妻君の行かるゝ様約したり、又今日波多野へ妻君が通知したりと云ふ長塩家活計費は月に七円入用なりと、明日波多野へ八時前談般に行かる様語り十一時半頃去り、波多野へ来りし頃は十二時頃なりければ寄らで帰宅したり、今宵は非常に疲れたり、去る十六日の暁朝波多野すか子様流産致され看(破損)□□□産婦は丈夫なり

十九日 晴天

午前七時頃起床、父及早川へ長塩氏の事を話し、金円寄贈を促したり、午後七時頃波多野へ到り長塩の妻君と落合詰り、波多野にて四円は承五郎氏自分諾せられしにて、外に一円五十銭を大森・父・早川にて五十銭つゝ、東京他の親類にて四十五銭出す様せば可ならんと預計し、其の行挙を實行し得る様奔走せん事を定め長塩婦を帰しぬ、余自分の羽織（綿入）及綿入衣物を遣したり、時に余は同婦を道々探索せしに関谷にて十五銭（叔母出すと）呉るゝとの事は未定なりしも波多野様には話の都合よりかく申上置たれば宜く頼む云々と余聞き嘆息数度、小倉君昨夜より宿らる、

二十日 晴天

午前六時半起床、小倉君七時頃帰らる、植村氏信州へ行かる、

二十一日 晴天

午前六時起床、午前九時頃秋葉姉を見舞、品川へ薬取に行きやりたり、斎藤氏定悪くするとチブスになりさうだと、小倉様へ今月二十日までの分食料二円七十銭払ふ

二十二日 晴天

午前六時起床、親父より手紙来り、四五十銭位は寄贈すべしと、夜分波多野へ行き奥様を初て見舞、承五郎氏不在、八時去り一寸里見へ寄り十時帰宅

二十三日 曇天

午前六時半起床、午後五時半頃より小雨降る、余雨を冒し夜に乗じて秋山に至るや長塩の妻君不

在、息子に合ひしも談(トク)に掴むべきもなく実に呆れたり、聞けば大森にても十銭か二十銭なら出さんも一円以上の事は長崎へ掛合ねば明らぬ由申されたりと、九時少過波多野へ到り承五郎氏に面会し同氏も大に心悪く感ぜられ、今や深く周旋するも甲斐なければ、先方のまゝにまかせ余は余の分のみを出す、其出方は秋山へ送り秋山より長塩へ遣さる様頼み呉れよとの事にて、余も然るべしと申上、十時頃退き十一時帰宅す、

二十四日 曇天

午前七時起床、午前柔術す、旅順口占領の号外来りぬ、午后散髪し秋葉姉を見舞、帰路正則中学と学校とのベースボールマツチにて二十四対八の負を見たり

二十五日 雨天 安息日

午前七時起床、八時半より学校に至り一寸矢嶋を訪ひ同氏と同道麻布まで行き、同氏は今日礼拝の説教を務めらるゝ為め車に乗られたり、十時頃赤坂教会へ着会するもの七名なりき、今日新島氏に三井より貰ひし筆を渡したり、帰路波多野へ寄り貫一氏も来り、夕飯に鶏の馳走になり八時頃退く、蓋し我軍旅順口を占領せし祝なりと、

二十六日 晴天

〔欄外〕「旅順口占領祝会」

午前六時起床、午后二時より秋山へ行き波多野より長塩へ遣す金四円を秋山を以て長塩へ渡さんとしたりしも同氏不在にて其俣帰り、帰路波多野へ寄り夕飯馳走、時に中野の未亡人と関谷の叔母に会ひき、承五郎氏五時頃帰宅、六時少前慶応義塾の旅順口占領の祝会に出欠家人も出らる、

余も其時退く、学校にても六時より祝会あり、余の至りし頃松永氏の演説既に中過ぎたる処にて
后茶菓の馳走あり、又興には薩摩琵琶・柔術・剣舞等其他面白事ありたり、会費五錢、熊野氏三
円寄附され他の教師も相応に出されたり

二十七日 晴天

午前六時半起床、新報社より会計員来り百七十八号よりの分として二十八錢払ひたり、小倉君来
り、夜千屋君も来り十一時過まで花かるたを為し大に面白かりし、

二十八日 晴天

午前七時半起床、今月の半頃より霜焼に煩わし、秋葉姉大に快方なり□□^(敬掛)、今日午后学校にて初
て「ベースボール」^(ベイスボール)の中間^(仲間)に入りたり、昨日より少く風気なり

二十九日 晴天

〔欄外〕「クラスミーチング」

午前六時半起床、波多野より頼まれたる金をば長塩の妻君に渡しぬ、但し今月分として金四円、
秋山氏の受取を取り置きたり、夜分クラスミーチングありたり

三十日 雨天

〔欄外〕「若林芳郎君出京」

午前七時起床、若林芳郎君来り二時間程話しぬ、氏は二十六日に出二十七日に着、午后晴る、夜
八時半頃地震揺ふ、かなり大なり

べ支払

金六円五拾貳銭五厘也

〔別紙 十一月分金銭書付〕

一、金五銭 小林格氏送別会費用

一、金二十銭 松尾青年会費用

一、金三銭 (鼻緒)花尾

一、金一銭 ゆ代

一、金一銭 ゆ代

一、金二銭 たんご

一、金四銭 加藤氏の立更 鉄道馬

車賃

一、金五銭 石油五合

一、金四銭五厘 玉子

一、金十六銭 か字木薬代

一、金六十七銭五厘 九月分牛乳代

十日

一、金二銭 切手

十三日

一、金一銭五厘 ざうり

一、金一銭 ゆ代

一、金二銭 はがき

一、金十四銭 未 すみ及すどり

一、金四銭 歴史哲学

一、金五銭 慈善音楽会切符

一、金一銭 ぼてとう

十一日

一、金十銭 教会費用 十一月分

一、金十五銭 建築費 十一月分

一、金二銭 筆

一、金一銭五厘 ざうり

一、金二十五銭 汗油(肝油)

明治二七年二月

十六日

一、金十五銭

火烽

一、金一銭

二十四日 ゆ代

十五日

一、金三銭

ノートブック

一、金十銭

進化論

一、金一銭五厘

半紙

一、金四十銭

支那開化小史

一、金六銭

インスピレーション

一、金十五銭

字帖

奇跡詳論

一、金五銭

伝道費

一、金一銭五厘

はひ

一、金二銭

金曜会費用

一、金二円七十銭

自十月二十日至十一月二十日食費

一、金三銭

クラスミーティング

月二十日食費

一、金二十八銭

福音新報

一、金五銭

切手二つ・はがき一つ

一、金二十七銭

石油及炭代

一、金一銭

ゆ代
(十条カ)
重畳にて駄魔(「騙」)さる

六六円五拾二銭五厘

十二月

一日 曇天

午前六時半起床、石油・炭の払済ます、小倉姉の為め三田に行き為替を出し、帰路風葉を求め来りぬ、今宵青山学院に同盟文学会有る由、

二日 雨天

午前七時起床、今日は風邪の気味あり、且つ時刻も后れける故赤坂行は止め台町にて石原教師の説教を聞き、学校にて弁当を使ひ矢島君の室に談し四時頃帰宅、午后六時より雨を冒して台町教会に至り同志会の演説会の本田庸一氏の真の平和、渡瀬常吉氏の宇内文明の経営てふを聞き九時頃帰宅したり

三日 晴天

午前六時半起床、若林芳郎氏来訪、二時間程話さる、小倉君来り夜帰らる、矢島君事同氏の弟君の小供永眠し帰郷を促されたる電報、今七時発にて九時少し前来りとして十時頃出発帰郷の途に就かれたり、

四日 晴天

午前六時半起床、義一郎氏に頼み国民の友を求む、昨今寒気非常に加わりぬ、午后秋葉氏方へ行きたり

五日 晴天

午前六時半起床、上野龍氏へはかき出しぬ、井深氏は昨夜帰京されしが今日は三浦徹氏の北堂永眠し其の葬儀に会する為なりとて教師何れも欠席さる、午后秋葉へ行き妻君快方なりとて談話す、間もなく荒木姉入来、余三時頃帰宅す

六日 晴天

午前七時起床、朝程長塩の妻君来り上総よりは報知如何と問来ぬ、

七日 晴天

午前六時半起床、

八日 晴天

午前六時半起床、

九日 晴天 安息日

午前六時半起床、純吉氏と同道赤坂教会に到りワデル氏の説教を聞き、十一時波多野へ来り、午食に弁当食し夕刻まで話し、一寸里見へ寄り、尚若林君を高木氏の裏に訪ひ、余か母より送られたる足袋を受取六時半頃帰宅しぬ、今日は上野に東京中の有志者集まり祝捷会の催ある由、盛ならん、

十日 雨天

午前六時半起床、

十一日 晴天

午前六時半起床、

十二日 晴天

午前六時半起床、上野氏帰り氏の金四円を滞し^{（破）}□□□□^{（損）}□□□□^{（）}受く、亞氏より旧約人物論を貰ひ（昨日）今日お知津姉に送りぬ、

十三日 晴天

午前六時半起床、

十四日 晴天

午前六時半起床、午後ベースボールを成し十四人と十三人にて余の方一人勝ちたりき、

十五日 曇天

午前六時半起床、今関儀一郎氏来り菓子を馳走す、午後九時亜氏の試験の位成る

十六日 晴天

午前七時起床、精神的修養やをば寓室にて為さんとて赤坂へ行かず、

十七日 曇天

午前六時半起床、午後長谷氏と入浴す、今関氏帰国す、「クラスミーチンク」ありき、今日ア氏の試験にて余は初の靈なる事と愛なる事てふ論文を読みぬ、或は口論せるありき、

十八日 晴天

午前七時起床、親父より手紙来り、

十九日 晴天

午前六時半起床、ワ氏より今月分サポート受取、奥平姉より礼状来りき、今日井深氏の教会史の試験ありき、午後一寸秋葉氏を訪ふ

二十日 晴天

午前七時起床、午後長谷川君来り話す、一昨夜笹倉氏来れりと聞き訪行きなりしに赤坂教会の為め十分助力如何と田中氏の話を聞きしまゝ忠告すと、余容る、

二十一日 晴天

〔欄外〕「忘年会並に笹倉君の送別会」

午前六時半起床、種灌学校に試験あり余補助す、ワイコフ氏重(註)に試験す、時に長谷川君、新島善直氏を携へ来き、柔道あり余好川氏と一本やる、今宵暮年会と笹倉君の送別会ありき、笹倉君は明年一月早早より名古屋教会に動く事となり来る二十五六日頃先づ郷国へ帰る由、純吉君も十時頃より麻布に寄り千葉泊の積にて帰国せり、余早川への手紙を托す、

二十二日 晴天

午前七時起床、午前小倉姉と点を調べ三田に至り為替を二円受取りぬ、

二十三日 晴天 安息日

午前七時起床、長谷川君を誘ひ同道赤坂教会へ行く、魚籃(27)の坂より十銭の車に乗りき、弁当を波多野にて使ひ長塩の金四円を貰ひぬ、

二十四日 晴天

午前七時起床、小倉氏の障子を張り、午后新島氏を尋ね麻布へ至りしも尋ね当らず、里見にて一寸休み、峰子様の為手袋(十五銭)と長谷川氏にフキスクの進化論を(八銭)求め今夕の送物とす、尚自分の為有神論(三十二銭)を求めたり、午后六時半頃より波多野峰子様を共(27)ふて赤坂教会に至り、七時より開会九時閉会、集るもの九十名なりき、今年は百合園の生徒三十名程も合併にて賑わしかりし、司会は田中太郎氏にて小供男女十数名の暗誦・讚美・演説等あり、后田中達氏の話(小供の)あり、最後に茶菓配(27)附さる、其間送物賞品を配附せり、而して赤坂カジ氏の

週旋〔周旋〕と見へて米人二人来り、旧約の幻灯を為されき、又一番最後に中台勝氏は甘酒を寄付され、中台氏女裳〔女裝〕して其の北婦となられき、余帰宅着床せしは十一時過なりき、今朝長塩様の妻君来り波多野の分四円〔今月分〕と親父よりの四十銭を渡しぬ、

二十五日 晴天

午前七時起床、昨日は小倉にて種漕学校のクリスマス〔破掛〕□□、余は状紙を送らる、今宵は台町教会のクリスマスにて秋葉姉の為留守居に行かんとせしに、同姉は止めにせりと為に話し来りき

二十六日 晴天

午前七時起床、

二十七日 晴天

午前七時起床、暖き事春の如し、

二十八日 晴天

午前七時起床、山野君病氣にて臥床、小倉銳喜君に同家退出の事を同氏と同道山野君の室に至る時談ず、氏即ち家人と相談すと、今夜ランダス氏のクリスマスに招かる

二十九日 晴天

午前七時起床、小倉君の為め英字の写しに一日費せり、夜分小倉様にてしるこの馳走に与りき、尚秋葉へ至り哥かるたを二番、后すしの馳走になりき、小倉君余に送るに宗教哲学を以てす、秋葉にて金三十五銭借る

明治二十七年一二月

三十日 晴天

午前七時起床、教会に至り好川二一君の説教を聞き、帰路一寸中野を窺き、秋葉氏へ行き弁当を
使ひ学校に來り、好川氏と暫く話し、山野氏を見舞帰宅す、秋葉にて良平氏に面会せりき、赤坂
教会にても今宵説教は見合せたり、

註

明治二六年

26-1 台町教会

品川長老教会（現在の日本基督教会大井町教会）の支教会が、瀬川浅の講義所を吸収して、一八八二（明治一五）年十一月に高輪台町に設立され、日本一致教会台町教会と称したのに始まる。一九〇七年に芝区二本榎町に移転して、高輪教会と改称した。

26-2 関谷

本郷にあった幸三の叔父の家（註26-14参照）。

26-3 北田彦三郎（きただ ひこさぶろう 一八七四—一九四四）

武蔵国武射郡新井堀村（現在の山武市松尾町広根）で代々村役人を務めた北田家の一五代権三郎の長男として生まれた。地元の公立借毛かしげ小学校初等科・中等科で学んだ後、菁莪義塾に入学したが退学し、成田英漢義塾に進んだ。一八九二年、東京府立第一尋常中学校に入学し、一八九七年卒業。東京第一高等学校を経て、一九〇七年に東京帝国大学を卒業。実業家として活躍し、家督を弟佐四郎に譲った。若い頃から俳諧を好み、古俳書の蒐集につとめた。彼の蔵書は「紫水文庫」として知られる。「紫水」は彦三郎の俳号。加藤時男「俳書蒐集家北田紫水のこと」（『千葉史学』四六号、二〇〇五年五月）参照。

26-4 歌骨牌うたがるた

カルタの一種。二組の札からなり、一方には和歌の上の句または上下を書き、一方には下の句だけを書いた

もの。また、その遊び。下の句を書いたものを競技者の間にまき散らし、一人が上の句を読み、競技者がそれに続く下の句の札を取る。

26-5 ウェスト→ウェスト (West, Anni Blythe. 一八六〇—一九四一)

アメリカ長老教会婦人宣教師。一八八三(明治一六)年九月一〇日来日。K・M・ヤングマンが始めた婦人伝道学校の事業を継承し、一八八五年、東京市芝区二本榎西町に婦人伝道師養成のための寄宿学校である聖書学館を開設した。一九二四(大正一三)年帰国。

26-6 青木澄十郎(あおき ちようじゅうろう 一八七〇—一九六四)

牧師、教育者。武蔵国岩槻(現在のさいたま市岩槻区)に生まれる。明治学院高等学部を一八九〇(明治二三)年に卒業、のち同神学部に入學し一八九三年に卒業した。同志社神学校にも学び、プリンストン神学校、ノースウェスタン大学にも留学。帰国後、一九〇二年から同志社神学校教授および同志社女学校教頭を務めたが、一九〇四年に日本基督神戸教会牧師へと転じた。雑誌『聖書生活』を発行。著書に『一日一文マルコ伝霊解』(新生堂、一九三四年)・『信仰群像(ヘブル書第十一章講解)』(岩岡書店、一九三七年)などがある。

26-7 秋葉氏→秋葉省像(あきば しょうぞう 一八六二—一九三二)

現在の千葉県山武郡松尾町に川島伝右衛門の次男として生まれた。一八八〇(明治一三)年同郡蓮沼村秋葉太平二(註26-55参照)の養子となり、その長女かつと結婚。一八八四年九十九里教会にて戸田忠厚より受洗。一八八七年明治学院邦語神学科を卒業。相州金目(現在の平塚市)に赴任したが、一〇月に九十九里教会に転じ、一八八九年九月まで専任教師をつとめた。同年一〇月上京後、聖書学館のウェスト(註26-5参

照)を助けて婦人伝道師養成に尽くす傍ら、一八九〇年二月より翌年六月まで再び明治学院にて基督伝・旧約史・神学・心理学・哲学などを履修した。後に明治学院神学部講師として聖書積義を講じた。また、頌栄高等女学校にて国漢・習字・修身・東洋史を教えたほか、フェリス和英女学校などで習字(書道)を教えた。井深梶之助も一九二四(大正一三)年五月秋葉省像に入門、翌年九月秋葉の推薦により雅号を湧泉と定めた(『井深梶之助宛書簡集』二〇八頁・三五八頁)。一八九三年当時秋葉は、『福音新報』第一一三号(一八九三年五月一二日)に「秋葉省像氏には従来聖書学館の教授に従事せられたりしを此度之を辞して、越後の高田直江津地方に伝道せらるゝこととなりたり」とあるように、五月頃まで聖書学館で教鞭をとっていたが辞職し、伝道のため越後高田に赴任した(「二榎日記」明治二六年五月六日条参照)。

26-8 聖書学館

A・B・ウエスト(註26-5参照)が、一八八五(明治一八)年に東京市芝区二本榎西町に開設した婦人伝道師養成のための寄宿学校。秋葉省像や田島進らが教員を務めた。一九二四(大正一三)年のウエスト帰国とともに閉鎖された。

26-9 里見叔父 ↓ 里見富三郎(さとみ とみさぶろう 一八五三—一九三四)

政治家。里見良斎・かつの長男として江戸常磐橋太田家下屋敷に生まれる。その後、遠州掛川に移り一八六八(明治元)年藩主太田資美に従い上総国柴山に移住。のち松尾村の村長もつとめた。慶応義塾第一回卒業生。一八八五年戸田忠厚から受洗。一八八七年の九十九里教会会堂建築に際し集った八名の会堂新築委員の一人である。九十九里教会の長老をつとめ教会の発展に大きく貢献した。里見純吉は長男。

26-10 芝教会

一八六九（明治二）年、アメリカ長老教会宣教師のカラゾルス夫妻が来日し、一八七四年、東京第一長老教会が設立された。しかし創立以来のメンバーである田村直臣・原胤昭らの離脱に伴って、一八七八年露月町に移転し露月町教会と改称、安川亨が初代牧師を務めた。一八八四年に東京虎ノ門教会と合同し芝愛宕町に移転、芝教会となった。

26-11 純吉 ↓ 里見純吉（さとみ じゅんきち 一八七八—一九五二）

事業家、社会教育家。遠州掛川から藩主太田資美一族と共に移住した武士の家柄である父富三郎と母よねの長男として、千葉県山武郡松尾村八田に生まれた。一八八五（明治一八）年、九十九里教会仮会堂若林宅にて戸田忠厚より受洗。一八九二年堅信礼を受けて九十九里教会に入会。一八九三年明治学院普通学部に入塾。それに伴い、東京の台町教会に転会（一九三四年に九十九里教会に復帰）。その後、一八九八年慶応義塾に編入、一九〇三年卒業した。一九〇八年三越に入社。一九四一年大丸第二代社長に就任。明治学院理事もつとめた。

26-12 聖書の友

世界中の人々が同じ聖句を読み、霊的に神と交わる運動として一八七九年に組織されたもので、ロンドンに本部を置く。日本では一八八九（明治一六）年一月のルター生誕四〇〇年記念席上で創立宣言がなされ、翌年一月一日正式に発足した。『聖書之友月報』『聖書之友日課表』などの発行、月次演説会や年会を開催。各地に支部を設け、一八九〇年末には会員が約一万五〇〇〇に達したという。

26-13 承五郎 ↓ 波多野承五郎 (はたの しやうごろう 一八五八—一九二九)

掛川藩士波多野半蔵の長男として生まれる。一八七四(明治七)年慶応義塾卒業。東京市会議員、報知新聞記者等を経て外務省に入省。のちに朝野新聞社長となる。一八九一年三井銀行に入社。一八九四年同銀行調査係長となり、その後理事・取締役にも就任した。一九二〇(大正九)年から一九二四年まで衆議院議員もつとめた。

26-14 力 ↓ 関谷力 (せきや ちから* 生没年未詳)

幸三の従弟。「父山田幸三追悼記」(山田巖〔編〕、「山田家文書」目録番号G-8)には関谷力氏の言述として次のように記されている。

一、今から五十年近くも前の話、山田幸三氏が明治学院に在学中、休日によく竹の皮包の弁当持参で小石川の拙宅へ来られた。之は学校の賄所で仕出したものと思つて居るが、昔とは云へ随分変つた弁当であつた、或竹の皮包の飯に添へて数片の牛肉が入れてあつたが、幼い子供である私はよく之を貰つて賞味したものである。

一、幸三氏は比較的多趣味の人であつたと思ふ、例へばテニスやら弓術の如き最も熱心に励んだものゝ例である。年少である私はよく御手並み拝見を命ぜられたものだ。全氏が老来頑健であつたのは之等スポーツに負ふ所が少くないと思ふ。

26-15 柳沢直治 ↓ 永井直治 (ながい なおじ 一八六四—一九四五)

牧師、聖書翻訳者。信濃国埴科郡中之条村の柳沢家に生まれる。一八九〇(明治二三)年六月明治学院神学部を卒業。長野県小諸町(現小諸市)や岩村田町(現長野県佐久市)の講義所での布教を経て伝道生活に

入った。一八九二年一〇月から翌年七月まで九十九里教会の専任教師として赴任。その後、日本基督浅草教会（現日本基督教団池袋西教会）に着任、以後四八年間にわたり同教会を牧した。聖書の原点であるギリシア語新約聖書を日本人として初めて翻訳し、一九二八年『新契約聖書』を刊行した。

26-16 勸工場^{かんこうば}

多くの商店が規約を作り、組合制度を設けて一つの建物の中に種々の商品を陳列し即売した所。百貨店、マーケットの前身。第一回内国勸業博覧会の残品処分のため、一八七八年（明治一一）一月、東京府が丸の内に竜ノ口勸工場を開場したのが最初。

26-17 数寄屋橋教会

一八六九（明治二）年、アメリカ長老教会宣教師のカラズルス夫妻が来日し、一八七四年、東京第一長老教会が設立された。一八七六年、田村直臣・原胤昭らが離脱し、日本独立長老教会銀座教会を設立、東京第一長老教会は、現在の芝教会として歩みを続けた。日本独立長老教会銀座教会は、一八八〇年に京橋区新肴町に移転し京橋教会、一八八五年に麴町区有楽町に移転し数寄屋橋教会と改称した。その後巢鴨に移転し巢鴨教会と改称した。

26-18 植村先生 ↓ 植村正久（うえむら まさひさ 一八五八—一九二五）

牧師、神学者。江戸芝露町（二説に上総国の母の実家）で禱十郎・テイの長男として生まれる。一八七三（明治六）年日本基督公会（現在の横浜海岸教会）でバラから受洗。東京一致神学校を一八七八年に卒業し、一八八〇年按手札を受けて、日本基督一致下谷教会（豊島岡教会）の牧師に就任。一八八七年番町教会（現在の富士見町教会）を設立。一八九三年、日本基督教会伝道局が計画した高知県への大挙伝道に携わった。

『明治学院神学部一覽 明治二十六年改』によると、一八九三年当時、明治学院神学部教授として旧約歴史、福音史を担当。

26-19 ナックス ↓ ノックス (Knox, George William. 一八五三—一九二二)

アメリカ長老教会宣教師、神学者。ニューヨーク州生まれ。一八七七年オーバン神学校を卒業後来日。当初横浜に住み、住吉町教会（現在の横浜指路教会）の第二代仮牧師を務めながらバラ学校での教育にも携わった。同塾が横浜から築地へ移転すると自身も築地に移り、築地大学の教授として二年務め、その後東京一致神学校の教授に転じた。同校が一八八六年に明治学院とってから神学部の教授として弁証論などを担当した。一八九三年、高知への伝道を終えた後、六月一九日に帰国した。『福音新報』一一九号（一八九三年六月二三日）に送別会の記事が掲載されている。

26-20 巖本 ↓ 巖本善治（いわもと よしはる 一八六三—一九四二）

教育者、評論家。但馬国（現在の兵庫県）に商人井上藤兵衛の次男として生まれた。のち巖本家の養子となる。一八七六（明治九）年上京、同人社および学農社農学校に学び、同校卒業後学農社から刊行されていた『農業雜誌』の編輯に従事。中村正直・津田仙に学び、一八八三年受洗。一八八四年『女学新誌』を出し、一八八五年新たに『女学雜誌』を創刊して日本の初期婦人解放運動に重要な役割を果たした。『基督教新聞』の主筆としても活躍。同年、明治女学校教員に迎えられ、のちに『小公子』の翻訳で知られる若松賤子と結婚した。一八八七年に明治女学校の教頭、一八九二年に校長に就任。キリスト教精神にもとづく女子教育に尽力した。一八九三年一月に巖本・植村・ノックスの三氏が高知伝道より帰京したことは『福音新報』第九八号（一八九三年一月二七日）にも報じられた。

26-21 飯倉

『日本全国商工人名録』（明治二五年版）によると、当時麻布区飯倉町には、森江佐七と橋爪清三郎の営む二軒の書籍商があった。また、一八九〇（明治二三）年に出版された『精神的基督教』（木村駿吉編、内田芳兵衛発行、『明治学院歴史資料館資料集 第四集』所収）の末尾に「各府県売捌所」の記載があり、「麻布区飯倉六丁目 池田書店」と見える。

26-22 若林芳郎（わかばやし よしろう 一八七七―没年未詳）

幸三の母りゑの弟であり、幸三の叔父。『宣教師百周年』によると、一八八八（明治二二）年六月一〇日九十九里教会堂にてタムソンより受洗。一八九七年四月から六月及び九月から一二月の「明治学院文学会記録」（当館所蔵、資料ID120171451）に名前が見えており明治学院普通学部に在籍していたと思われるが、卒業者名簿には見えない。

26-23 牛込教会

一八七七（明治一〇）年十一月一七日に牛込甘崎町の長老藤田尽吾宅に設立された。翌年、現在地の払方町に移転し、牛込払方町教会と改称。歴代牧師には小川義綏・奥野昌綱・服部章蔵などがある。一八九三年當時は、東京一致神学校出身の服部綾雄が教会牧師をつとめていた。『福音新報』第一〇一号（一八九三年二月一七日）によると、二月一日、牛込教会では紀元節祝賀会及び牧師就職の一年紀祝会が催されており、服部と和田秀豊が演説を行っている。

26-24 赤坂病院

一八八六（明治一九）年、ホイットニー（註26-26参照）によって赤坂区氷川町一七番地（現在の港区赤

坂)に開設された病院。キリスト教精神による慈善病院であり、眼科と普通科があった。

26-25 早乙女豊秋 ↓ 左乙女豊秋 (さおとめ とよあき 一八五五-没年未詳)

牧師、教育者。島根県に生まれる。松江藩儒学者について漢学を修めた。のちに大阪外国語学校に入学するも二年後に退学。英語教授などを務めた後、一八九七年、立教専修学校校長・東京英語専修学校校長に就任。訳書に『基督教儀式 附・詩篇抜萃』(宇宙神教出版所、一八九六年)がある。

26-26 ホイトニー ↓ ホイットニー (Willis, Norton Whitney. 一八五五-一九一八)

米ニュージャージー州に生まれる。一八七五(明治八)年家族とともに来日。当時二〇歳であったホイットニーは、日本に来てから医師になることを決意し、東大医学部で学んだ。のち帰国しペンシルバニア医学校を卒業。一八八二年再び来日。赤坂氷川町にあった勝海舟の土地を購入し、一八八六年に赤坂病院(註26-24参照)を開院した。敬虔なクリスチャンであった彼は同時に日曜学校を運営し、以後生涯の大半を日本で宣教と医療に尽くした。なお、ホイットニーの妹クララは勝海舟の三男梶梅之助の妻。

26-27 銀座の松島

一八七四(明治七)年創業の眼鏡店。

26-28 同盟文学会

他校と同盟を結び当番校に集って英語及び邦語の演説・朗読や討論などを行った会のこと。創立当初は立教学校・東京英和学校(現在の青山学院)・東洋英和学校・明治学院四校の同盟であったが、一八九三(明治二六)年当時は東京英和学校と明治学院の二校のみとなっていた。『福音新報』第一〇三号(一八九三年三月三日)に、この日の会の詳細が記されており、これによると日記一月二五日条の「中山某」は中山敬

一、「大〔 〕某」は大立目文弥。

26 | 29 里見貫一（さとみ かんいち* 生没年未詳）

里見純吉の弟カ。『宣教百周年』によると一八八五（明治一八）年二月一日、松尾仮会堂において和田秀豊より受洗。

26 | 30 美山貫一（みやま かんいち 一八四七—一九三六）

牧師。長州川島村（現在の山口県萩市川島）に毛利藩士内藤博輔の長男として生まれる。母はカヤ。一八六一（文久二）年、藩校の明倫館に入学後、一八六三年に山口の兵学校に入学。一八七〇（明治三）年三山家を相続し三山貫一と改名。その後、美山となる。一八七一年、英学と英国航海学の研究のため上京し、海軍士官の養成機関である海軍兵学寮に入るつもりであったが、その目的は達せられなかった。一八七五年に渡米。この時期にキリスト教と出会い回心、一八七七年サンフランシスコで受洗した。メソジスト会員となり、日本人福音会を設立。帰国後、銀座教会・日本メソジスト鎌倉教会などの牧師をつとめた。

26 | 31 石原保太郎（いしはら やすたろう 一八五八—一九一九）

牧師。備前国岡山に生まれる。父は石原萬年、母はかつ。岡山の普通学校を卒業後、横浜に出てアメリカ長老教会の宣教師ルミスの英語塾で学ぶうちにキリスト教に感化され、一八七四（明治七）年横浜第一長老教会（現在の横浜指路教会）において受洗する。一八八〇年東京一致神学校を卒業。同年日本基督一致教会の牧師に任命され、新栄教会の牧師となる。一八九二年に台町教会牧師に転じ、その後芝教会・赤坂教会などの牧師を歴任した。

26―32 武藤健太郎（むとう けんたろう* 生没年未詳）

詳細は不明だが、『明治学院神学部一覽 明治二十八年十月改正』に記載された「明治二十一年卒業」欄に名前が見え、「伝道者、米国留学」と記されている。

26―33 土屋おひで ↓ 土屋ひで（つちや ひで 生没年未詳）

詳細は不明だが、『宣教百周年』によると一八九二（明治二五）年九月八日、九十九里教会堂において石原保太郎より受洗。

26―34 鳥羽権三郎（とば ごんざぶろう 生没年未詳）

若林権三郎。幸三の母りゑの弟であり、幸三の叔父。詳細は不明だが、「二榎日記」明治二六年一〇月八日条によると、ジャワで写真及び画工の一名士となつてゐることが知られる。『宣教百周年』によると、九十九里教会員となり一九四八（昭和二三）年山口滝造より受洗。

26―35 品川教会

南品川の青物横丁、岡見辰五郎宅を説教所として集會が持たれ、一八七七（明治一〇）年、青物横丁會堂とも呼ばれる品川教会が誕生した。一八八七年、北品川長者町に移転、一九二一（大正一〇）年には大井町教會と改称した。現在の日本基督教団大井町教會。

26―36 貴山幸二郎 ↓ 貴山幸次郎（きやま こうじろう 一八六五―一九四〇）

牧師。伊予国吉田（現在の愛媛県宇和島市）に生まれ、幼少期は吉田郷校（藩校文武館の後身）で学び、卒業後に同校の教師になる。一八八五（明治一八）年上京し、津田仙が創設した学農社（農学校）で学び『農業雑誌』の編集に携わつた。同年新栄教會で石原保太郎より受洗。その後、東京一致英和学校、東京一致研

学校で学んだ。続いて明治学院神学部で学ぶも、卒業前の一八九〇年に退学し（『明治学院神学部一覽 明治二十八年十月改正』には、貴山について「卒業前に明治学院神学部ヲ出デ、其後教職ニ就レタリ」として卒業の扱いにはなっていない）、石原保太郎の後任として新栄教会の牧師に就任した。一八九七年九月より日本基督教会の巡回教師になり各地を巡回。一九〇一年に日本基督教会伝道局の専任幹事になり、一九二〇（大正九）年まで日本全国・台湾・朝鮮・満州などにも巡回伝道を行う。一九二〇年からは満州奉天の奉天教会の牧師をつとめた。

26 | 37 星野光太 ↓ 星野光多（ほしの みつた 一八六〇—一九三二）

牧師。上野国利根郡（現在の群馬県利根郡）に、星野宗七・るいの次男として生まれる。一八七〇（明治三）年、父宗七が生糸貿易のため、一家は横浜へ転居。光多は英語を学ぶために日本基督公会（現在の横浜海岸教会）に出席、一八七五年 J・H・バラから受洗。一八九三年当時は、フェリス和英女学校の教頭をつとめていた。兄に政治家・実業家となった銀治、弟に一八九三年明治学院神学部を卒業して牧師となった又吉、妹に津田塾大学長となった星野あいがいる。

26 | 38 頌栄学校

英語学教授のため岡見清致により一八八五（明治一八）年九月、芝区二本榎の仮校舎で開校。翌年、荏原郡大崎村字白金猿町（現在の東京都港区白金台）に移転した。外国人教師はリーナ・リート、A・B・ウエスト、C・T・アレクサンダーなど長老派の婦人宣教師であった。現在の頌栄女子学院中学校・高等学校。

26 | 39 加藤覚（かとう さとる 生没年未詳）

牧師。一八八八（明治二一）年六月に日本基督一致教会第一東京中会臨時中会において試験を受け、七月品

川教会で真木重遠により按手札を受け牧師となった。著書に『安息日学校入門』・『神を畏れ王を尊ぶべし』・『基督』などがある。

26-40 川島芳太郎（かわしま よしたろう* 生没年未詳）

詳細は不明だが、『宣教百周年』によると、一八八五年六月二十八日、九十九里教会仮会堂若林宅にて戸田忠厚より受洗。「川島芳太郎（松尾村五反田、農業）」とある。

26-41 マクネア (MacNair, Theodore Monroe. 一八五八—一九二五)

アメリカ長老教会宣教師。テンブル・ヒル・アカデミーを経て、一八七九年にプリンストン大学、一八八二年に神学校を卒業。一八八四（明治一六）年一月宣教師として来日し、東京一致英和学校の教授となった。のち明治学院教授として倫理学・経済学を教え、その後聖書学館に転じた。

26-42 バラ (Ballagh, John Craig. 一八四二—一九二〇)

アメリカ長老教会宣教師。兄のJ・H・バラに招かれ一八七二（明治五）年来日。ヘボン塾に迎えられ、一八七六年には塾の運営を担当。バラ塾・バラ学校とも呼ばれるようになる。その後、一八八〇年に設立された築地大学の副校長に、翌年には校長となった。一八八六年より明治学院普通学部の教授となり数学・天文学・簿記を担当した。

26-43 マカコーレー→マコーレー (McCauley, James Mitchell. 一八四七—一八九七)

アメリカ長老教会宣教師。一八七〇年ウェストミンスター大学卒業、七四年ウェスタン神学校卒業。一八七七年アメリカ長老教会宣教師としてタイに派遣されるが、一八八〇年に健康を害し帰国する途中に日本に立ち寄り回復。日本ミッシヨンに転属を願い出て認められ、東京一致英和学校の教授となる。一八八七年より

明治学院普通学部の教授となり史学・倫理学を担当した。

26-44 ピヤノン → ピアノン (George Peck Pierson. 一八六一—一九三九)

アメリカ長老教会宣教師。ニュージャージー州エリザベス市で牧師の子として生まれる。一八八八年プリンストン神学校を卒業後、同年九月に明治学院の教師として派遣されたが、一八九〇年には千葉の県立中学校の英語教師に転じ二年間勤めた。一八九三年頃、伝道のため北海道に移住した。

26-45 和田英作 (わだ えいさく 一八七四—一九五九)

洋画家。牧師和田秀豊の長男として鹿児島県大隅郡垂水村 (現在の鹿児島県垂水市) に生まれる。一八八七 (明治二〇) 年、明治学院予科入学。図画教師の上杉熊松に洋画の初歩を学ぶ。一八九一年、明治学院中退。

上杉の紹介で曾山幸彦の門に入る。一八九二年曾山逝去のため原田直次郎の鍾美術館に転じる。一八九三年当時は洋画修学の傍ら久保田米僊に日本画を学び、明治美術会展に「人体習作」(油絵)・「景色」(同)を出品していた。翌年、黒田清輝・久米桂一郎が新設した天真道場に入る。一九四三年文化勲章受章。一九五九年一月三日静岡県清水市で死去。葬儀は遺言により明治学院礼拝堂で行われた。

26-46 インブライ氏の送別会

『福音新報』第二二二号 (一八九三年四月二八日) 「博士イムブライ氏送別会」参照。

26-47 植村正度 (うえむら まさのり 生没年未詳)

植村正久 (註26-17参照) の弟。父は植村禱十郎、母はテイ。幼名は儀三郎。明治学院の前身である築地大学校にて学ぶ。一八七九 (明治一二) 年に兄正久が設立した下谷教会 (現在の豊島岡教会) の会員でもあった。

26 | 48 松村氏 ↓ 松村介石 (まつむら かいせき 一八五九—一九三九)

播磨国明石 (現在の兵庫県) 藩士の家に生まれる。一八七六 (明治九) 年、一七歳で横浜に行きバラ学校に入学。一八七七年に住吉町教会で受洗した。築地大学校舎監をつとめながら東京一致神学校で学ぶが退学。一八八二年高梁教会の牧師に就任。一八八七年より『基督教新聞』・『福音新報』の主筆として活動する。また一八八七年には山形英学校の教頭になり、一八八九年には内村鑑三の後任として北越学館の教頭に就任した。一八九二年の半ば頃より一八九七年の半ば頃まで、東京の基督教青年会の講師をつとめた。内村鑑三・植村正久・田村直臣と共に、明治キリスト教界四村と称された。

26 | 49 朝鮮防穀事件 ↓ 朝鮮防穀令事件

一八八九 (明治二二) 年に朝鮮咸鏡道で凶作を理由に出された穀類輸出禁止令をめぐって日本・朝鮮間で発生した紛争事件。一八九一年、梶山鼎介朝鮮駐在公使は、日本の貿易商が大打撃を受けたとして咸鏡道防穀令施行における損害賠償金一四万七一六八円を朝鮮政府に対し要求したが、朝鮮側は要求が過大とし交渉は難航した。その後、大石正巳が朝鮮駐劄^{ちゅうさつ}弁理公使となり、一八九三年に損害賠償金一万円を朝鮮側が支払うことで妥結した。

26 | 50 大石公使 ↓ 大石正巳 (おおいし まさみ 一八五五—一九三五)

政治家。土佐 (高知県) 出身。立志社・国友会・自由党を経て、後藤象二郎の大同団結運動を推進。のちに進歩党・憲政党に加わり第一次大隈内閣の農商務相となる。一八九二 (明治二五) 年一月より翌年七月朝鮮駐劄^{ちゅうさつ}弁理公使となり、朝鮮政府へ防穀令事件の賠償を請求するなど処理にあたった。

26 | 51 靈南坂の教会 ↓ 靈南坂教会

一八七九(明治一二)年小崎弘道と群羊社の青年信徒一名によって創立された教会。一八八二年新桜田町教会と称したが、同九月に日本基督教会と合併し東京第一基督教会と改称。一八八六年赤坂靈南坂町に会堂を建設し、一八九一年に靈南坂基督教会と改めた。

26 | 52 郡司大尉 ↓ 郡司成忠(ぐんじ しげただ)なりただ 一八六〇—一九二四)

海軍軍人。幕臣幸田成延の次男として生まれる。幸田露伴の兄。一八七二(明治五)年海軍兵学寮に入校。一八九三年海軍大尉として予備役に入り、報効義会を組織して、千島樺太交換条約により日本領とされた千島列島を探検。最北端の占守島(シユムシユ島)への移住を敢行した。翌年日清戦争従軍のため帰還。その経緯については寺島樞史著『開拓者伝記叢書』(伝記叢書二四八、大空社、一九九七年(鶴書房、一九四二年の復刻版)に詳しい。

26 | 53 小倉修吉 ↓ 小倉脩吉(おぐら しゅうきち 一八六八—一八九三)

伝道者。伊予国浮穴郡菅生村(現在の愛媛県上浮穴郡久万高原町)に生まれる。一八八六(明治一九)年一〇月東京一致英和学校を経て、一八八九年頃明治学院神学部に進学。神学生として東京赤坂教会と千葉県望陀郡那珂川村横田の伝道に従事。また自ら発起人となって東京麻布谷町に貧民学校を開設。一八九二年、神学部在学中に高知県本山村に伝道応援のため派遣された。翌一八九三年五月二七日、三名の日曜学校生徒と舟遊びに出た際、舟が転覆し生徒と共に水死。明治学院では追悼会が開かれた。『福音新報』第一一六号・第一一七号・第一一九号に小倉の訃報と追悼会の知らせが掲載されている。

26―54 猪の鼻台の医学校

亥鼻台は、千葉市にある下総台地の一角の高台。医学校は、一八八七（明治二〇）年に千葉町に設置された第一高等中学校医学部のこと。同校は、一八九〇年九月千葉町猪鼻台（現在の千葉市亥鼻、千葉大学亥鼻キャンパス）に移転した。現在の千葉大学医学部・同附属病院・薬学部の母体。

26―55 秋葉太平二（あきば たへいじ* 生年未詳―一九二六）

秋葉省像（註26―7参照）の養父。詳細は不明であるが『宣教百周年』によると一八八七（明治二〇）年三月一三日九十九里教会仮会堂にてフルベツキより受洗。八七歳で逝去。

26―56 川島太三郎（かわしま たさぶろう* 生没年未詳）

詳細は不明であるが、『宣教百周年』によると一八八五（明治一八）年六月二八日、松尾村九十九里教会仮会堂若林宅にて戸田忠厚より受洗。「川嶋太三郎（松尾村五反田、農業）」とある。また、一八八七年の九十九里教会会堂建築に際し集った八名の会堂新築委員の一人である。

26―57 写真師横浜太田町の某

一八九三（明治二六）年に刊行された横浜の商工業者名鑑『横浜貿易捷径』（横浜貿易新聞社編刊）、「雑種売込商之部」の項で「写真売込」として名が記されているのは「本町一丁目七番地 日下部金兵衛」のみである。また一八九八年に刊行された『横浜姓名録』（加藤大三郎編刊）には、「写真業之部」に一三人の名があるが、太田町で営業している者は記されておらず、太田町の某は不明である。

26―58 いのち

一八九二（明治二五）年一月、十字屋書舗より創刊された個人雑誌。編者人は田村直臣、編集発行人は倉田

繁太郎。

26 | 59 佐久間吉太郎（さくま きちたろう 一八五八—一九四六）

千葉県長狭郡奈良林村に生まれる。一八七七（明治九）年同郡大幡学校訓導となり、その後、奈良林ほか五ヶ村の連合戸長となった。一八八一年学校を辞し政治結社浩鳴社を設立、一八八三年自由党に入党。翌年、加波山事件の首謀者富松正安を匿った罪で入獄。獄中、J・H・バラの教誨を受け受洗。出獄後はキリスト教による囚人の教誨にあたり、一八九一年から千葉教会・佐倉教会・九十九里教会の牧師を歴任した。一八九七年日本聖公会に転じ銚子教会および新橋教会で伝道に従事した。

26 | 60 警醒社

一八八三（明治一六）年、東京京橋区西紺屋町に設立されたキリスト教関係書籍の出版社。『東京毎週新報』を創刊するとともに、東京基督教青年会が一八八〇年に創刊した『六合雜誌』の刊行を引き継いだ。編輯は小崎弘道・浮田和民・植村正久が担当、経営は湯浅治郎が行った。一八八八年福永文之助の経営となり、その後、一八九一年に警醒社書店と改称。以後、明治・大正期におけるキリスト教出版の主流となった。

26 | 61 麴町の日本中学校

一八八五（明治一八）年に東京英語学校として東京府東京市神田区錦町に設立され、一八九二年、神田大火による類焼のため、半蔵門外の麴町山元町に尋常中学校として移転、日本中学校と改称した。世田谷区庄松原にある日本学園中学校・高等学校の前身。

26 | 62 大西祝（おおにし はじめ 一八六四—一九〇〇）

哲学者。備前国岡山西田町（現在の岡山県岡山市）に岡山藩士木全正脩きまたの三男として生まれ、後母方の実家

大西家の養子となる。一八八七（明治一〇）年同志社英学校普通科に入学。翌年新島襄より受洗。一八八四年同志社英学校神学校を卒業。一八八九年帝国大学文科大学哲学科を卒業後、大学院に進み倫理問題を研究するが、一八九一年大学院を退学し、東京専門学校（現在の早稲田大学）の教員となる。一八九三年当時二九歳だった大西は九月に松井幾子と結婚。石関敬三・紅野敏郎編『大西祝・幾子書簡集』（教文館、一九九三年）所収の井深樞之助から大西祝に宛てた手紙（一八九三年八月二五日付および九月二五日付）には、井深が大西に依頼し、まもなく開講する明治学院神学部での講義について種々記されている。

26-63 柏井其 ↓ 柏井園（かしわい えん 一八七〇—一九二〇）

教師、伝道者。土佐国福井村（現在の高知県）に柏井重宣・怡久の長男として生まれる。高知中学校中退後、高知共立学校を経て、一八九一（明治二四）年京都同志社普通学部を卒業。在学中にR・B・グリナンから受洗。のち高知英和女学校教員となったが、一八九三年から、明治学院神学部の嘱託講師（のち教授）として英学・史学を担当した。植村正久主筆の『福音新報』の編集に携わり、執筆も行った。『柏井全集』全六卷（警醒社、一九二二—一九二七）・続編全五卷（長崎書店、一九三四—一九三五）・別巻一卷（同、一九三五）がある。

26-64 美濃部俊吉（みのべ しゅんきち 一八六九—一九四五）

美濃部秀芳の長男として兵庫県に生まれる。美濃部達吉の兄。一八九三（明治二六）年七月帝国大学法科大学政治学科卒業。同年八月から農商務省商工局第三課につとめていた。

26-65 矢島宇吉（やじま うきち 一八六九—一九三二）

群馬郡上郊村に矢島嘉市・花子の長男として生まれる。星野光多から受洗。明治学院神学部を一八九七年

(明治三〇) 年卒業後、幸三の伯母にあたる若林藤(フジ・富士子)と結婚。一九〇二年、ハワイのヒロ市の日本人基督教会の牧師に就任。一九〇三年帰国。のちに本郷神の教会および練馬神の教会を設立。

26-66 ペボン館の三階の西隅の室、即ち二十八番

「文部省訓令第十二号関係資料」(『明治学院百年史資料集』第二集に所収) 記載の「普通学部寄宿舎建物」(ヘボン館平面図) および『明治学院旧宣教師館(インブリー館) 建物調査報告書』(一九九五年) 記載の「ヘボン館平面図」によると、幸三が寄宿した二八番の部屋は実際には建物の四階部分の西隅に位置している。各宿室は寝室と書齋に分かれており、その二部屋を二人で共有していた。

26-67 清水次郎 ↓ 清水久次郎(しみず ひさじろう* 生没年未詳)

詳細は不明だが、『明治学院神学部一覽』(明治三〇年一二月発行)によると、一八九七(明治三〇)年明治学院神学部を卒業後、伝道者として越前福井に赴任している。

26-68 アレキサンデル ↓ アレクサンダー(Alexander, Thomas Theron. 一八五〇—一九〇二)

アメリカ長老教会宣教師、神学博士。一八七七(明治一〇)年一〇月、同長老教会外国伝道局からG・W・ノックスと共に派遣されて来日。一八九三年九月より明治学院神学部教授として神学・旧約歴史を担当した。

26-69 千磐武雄(ちいわ たけお 一八六五—一九三五)

高知県に生まれる。『明治学院神学部一覽』(明治三〇年一二月発行)によると、明治学院神学部を明治三〇年に卒業後、伝道者として高知県安芸に赴任。『白金学報』第二号(一九〇三年一二月)によると伊勢崎教会に赴任後、盛岡教会の牧師となっている。

26-170 池幸雄（いけ ゆきお* 生没年未詳）

幸三が神学部本科二年生だった一八九五（明治二八）年一〇月に改正された『明治学院神学部一覽』に池幸雄の名前はなく、卒業生名簿にも記載がない。一八九五年四月一八日に撮影された「明治学院神学部本科第一年生」（口絵写真2）にも写っておらず本科には進んでいないことが分かる。

26-171 山野友一郎（やまの ともいちろう 一八七〇-一八九九）

弘前亀甲町に生まれる。一八八九（明治二二）年青森美以教会で受洗。一八九三年三月東京の一番町教会に転じ、牧師植村正久を助けた。一八九七年明治学院神学部を卒業後も引き続き一番町教会で伝道に従事するが若くして死去。

26-172 長山万次（ながやま まんじ 一八七三-一九二〇）

茨城県久慈郡西小沢町に孝太郎・ゑきの次男として生まれる。一八九七（明治三〇）年明治学院神学部卒業後、日本基督教会東京第二中会の伝道者となり青森・足利・長野などへ赴任。のち米国に渡り、一九〇六年オーバン神学校を卒業後帰国。

26-173 和田三郎（わだ さぶろう 一八七二-一九二九）

土佐郡に生まれる。父は自由民権運動の拠点となる「山嶽社」を創始した医師の和田千秋、母はつち。明治学院神学部を一八九七（明治三〇）年に卒業後、郷里の高知で土陽新聞の記者となる。板垣退助の秘書もつとめた。

26-174 海岸教会 ↓ 横浜海岸教会

日本最初のプロテスタント教会。J・H・バラに導かれ、一八七二（明治五）年、横浜で設立された日本基

督公会に始まる。「我輩の公会は、宗派に属せず、唯主耶穌キリストの名に依りて建る所」として、長老派・改革派のいずれにも属せず、独立自治を標榜した。後に本多庸一・奥野昌綱・井深梶之助・植村正久らが受洗した。

26―75 花嫁事件

一九三年、田村直臣が米国 Harper Brothers から刊行した『日本の花嫁』(The Japanese Bride) がもとで日本基督教会の教職を剥奪された事件。

26―76 わらべ

芝区三光町にあった自営館が一八九三(明治二六)年より発行した幼児向け週刊雑誌。『福音新報』第一三五号(一八九三年一〇月一三日)に「三段四頁の一葉雑誌にして、今回新たに発刊せしものなり、内に絵画を挿入し、其の名の如く幼年の友として彼等の喜ぶ所なる可し、毎週発刊なり、いろはを読み得る者には解読し得せしむるの計画なり、一部一銭」とある。

26―77 徳富猪一郎(とくとみ いちろう 一八六三―一九五七) ↓ 徳富蘇峰(とくとみ そほう)

ジャーナリスト、評論家。徳富一敬の長男として熊本県に生まれる。徳富蘆花の兄。同志社英学校に入学し、新島襄より受洗したが、中退。一八八六(明治一九)年『将来之日本』で文名をあげる。一八八七年民友社を創立、『国民之友』・『国民新聞』を創刊し、平民主義を主張。日清戦争を機に国家主義に傾く。第二次大戦中は大日本言論報国会会長に就任。一九四三(昭和一八)年文化勲章をうけるが一九四六年返上した。

26-78 維新革命の半面 ↓ 維新革命の反面

『国民之友』第二〇七号（一八九三年一月三日発行）一〜一四頁に掲載。

26-79 ハリス (Harris, Howard, 一八四八—一九一六)

米国ニュージャージー州ベルヴィルに生まれる。ラトガーズ大学・ニューブラウンズウィック神学校を卒業。一八八四（明治一七）年来日。東京一致英和学校で教鞭をとる。一八九三年当時は明治学院神学部の嘱託教師として音楽・讚美歌の授業を担当していた。

26-80 弥生館

芝公園内にあった集会所。明治二六年頃刊行された「東京景色写真版」（国立国会図書館所蔵、請求記号四〇四一三、国立国会図書館デジタルコレクション）所収の芝公園内弥生館の写真によると二階建ての洋風建築であったことが知られる。『新撰東京実地案内』（薰志堂、一八九三年）には「弥生館 九段坂靖国神社と全く西南の役に戦死したる人霊を祭処にして、時々宴会相撲などを催す処なり」とある。

26-81 立石寛司（たていし かんじ 一八二七—一八九四）

肥前平戸藩（長崎県）藩士、政治家。長崎の大木藤十郎に砲術をまなび大砲製造奉行となる。明治維新後、長崎県会議員を経て、一八九〇（明治二三）年衆議院議員となった（当選二回）。

26-82 本多庸一（ほんだ よういつ 一八四八—一九一三）

牧師、教育家。弘前に生まれ、藩校稽古館で学ぶ。維新後は横浜修文館でS・R・ブラウンらに英語を学び、後にバラ塾、ブラウン塾で学んだ。廃藩置県により廃校となっていた稽古館の後身、東奥義塾を再興し、弘前公会を設立、一八七六（明治九）年には弘前教会（現在の日本基督教団弘前教会）をジョン・イン

グと共に設立し、初代牧師をつとめた。イングがメソジストの宣教師であったことから、イングに合わせて弘前教会および本多はメソジストに転じた。仙台美以教会（現在の日本基督教団仙台五橋教会）の初代牧師、築地美以教会（現在の日本基督教団銀座教会）の長老（正教師）を経て、青山美以教会牧師と東京英和学校の教師になる。一八八八年より渡米しドルー神学校で学び、一八九〇年に帰国し、東京英和学校の校長に就任。一八九四年七月、同校が青山学院と改称すると第二代院長となり、その後一七年間院長をつとめた。一九〇七年日本メソジスト教会を設立し、初代監督として草創期の日本キリスト教界を牽引した。

26-83 日本橋教会

一八七三（明治六）年、北原義道が日本橋区革屋町の自宅で伝道を始めたことが前身であり、一八七九年一月二二日北原宅で一致教会日本橋教会の設立式が行われた。翌年、初代牧師に北原が就任した。その後、一八八七年に明治学院神学部を卒業した北山巖（初太郎）が一八九〇年から一八九八年まで第二代牧師をつとめた。会堂は火災などで移転を繰り返していたが、一八九三年に本銀町一丁目一九番地に赤煉瓦造りの会堂が建築された。

26-84 厚生館

一八八一（明治一四）年、福沢諭吉の発案により東京府京橋区木挽町（現在の東京都中央区銀座）に建設された公会堂。当初「明治会堂」と称し演説会場として機能していたが、農商務省に売却後の一八八四年、名称を「厚生館」と変え、集会所や商品陳列館などとして利用された。

26-85 浅田栄二 ↓ 浅田栄次（あさだ えいじ 一八六五—一九一四）

英語学者。周防（現在の山口県）で生まれる。一八八九（明治一七）年受洗。帝国大学で数学を学んだ後、

アメリカに留学し神学と語学を学ぶ。一八九三年青山学院神学部教授に就任。のち高等商業学校（現在の
一橋大学）、東京外国語学校（現在の東京外国語大学）などで教鞭をとった。

26-86 増野悦興（ましの よしおき 一八六五—一九一一）

牧師。津和野藩土増野貞吉の長男として生まれる。東京一致神学校から同志社に編入するが、一八八三（明治一六）年徴兵令のため一時退校、一八八四年に再入学する。一八八五年発起人の一人となって同志社予備校を設立。一八九〇年、二四歳の時渡米し、アンドヴァー神学校およびバンゴア神学校で修学、一八九三年秋に帰国。翌一八九四年霊南坂教会牧師に就任。『基督教青年』第四号（一八八九年一月一三日）から一〇号（一八九〇年六月六日）までの編輯人となり、その発行に尽力した。

26-87 坂本直寛（さかもと なおひろ 一八五三—一九一一）

伝道師。土佐国安芸郡（現在の高知県安芸郡）に高松順蔵と千鶴の次男として生まれる。のち伯父坂本直方の養子となる。坂本龍馬は叔父にあたる。立志学舎にまなび、一八八一年（明治一四）年立志社の「日本憲法見込案」起草委員となる。一八八五年、G・W・ノックスから高知教会において受洗。一八八七年、三大建白事件運動の総代のひとりとして上京するが、保安条例に触れ石川島監獄に収容された。一八八六年から一八九三年まで断続的に高知県会議員をつとめた。

26-88 三一神学校

日本聖公会初代主教で神学博士のウィリアムズ (Williams, Channing Moore. 一八二九—一九一〇) が、家塾の形で神学教育を始め、それを母体に一八七八（明治一一）年、イギリス海外福音伝道会との共同で開設した神学校。後にアメリカ聖公会の単独経営となる。聖公会神学院設立の母体となった。

26-89 東京同盟神学生講会 ↓ 東京同盟神学生講話会

この時の内容は『福音新報』一四二号（一八九三年二月一日）にも「第一回神学生講話会」として記載されており、それによると日記中の小倉氏は小倉銳喜、福音会の某は石出精一三のこと。

26-90 正則中学校

一八九九（明治二二）年、外山正一・元良勇次郎・神田乃武が芝公園内に正則予備校を創設し、一八九二年には正則尋常中学校と改称した。現在の正則学院。

26-91 高田耕安 ↓ 高田畊安（たかた こうあん 一八六一—一九四五）

内科医。増山守正（幕末から明治時代の医師・官吏）の次男。ベルツに師事。『帝国医籍宝鑑』（山口力之助編、南江堂、一八九八年）には、「医学士 高田畊安 東京市神田区鈴木町一六番地」とある。一八九六年、東京神田駿河台に東洋内科医院を設立。一八九九年に神奈川県茅ヶ崎に結核診療のためのサナトリウム「南湖院」を開設した。

26-92 大西氏も不快なりとて休まる

大西氏は大西祝（註26-62参照）。「大西祝歌集」（『現代短歌大系第一巻』所収、河出書房、一九五二年）に収録された明治二六年の歌の項に「十一月末つかたより病にかゝりあくる月の四日医科大学第一医院に入り同じ月の三十日家にかへるそのをりの歌ども」と詞書する二首が含まれており、十一月末頃から大西は病氣（チフス）を患い、一二月四日から三〇日まで入院していたことが分かる。

26-93 里見勝子

里見富三郎（註26-9参照）の母里見かつか。

26-94 フェリス学校

ヘボン夫人が一八六三(文久三)年に開始したヘボン塾を引継ぎ、キダー(Kidder, Mary Eddy. 一八三四—一九一〇)が一八七〇(明治三)年、横浜のヘボン施療所で創始した女学校。一八七五年には現在地の山手町一七八番地に校舎と寄宿舎を建て、オランダ改革派協会外国伝道局総主事の名前を冠した「アイザック・フェリス・セミナリー」と称する学校を開校した。日本名は、一八八九年にフェリス和英女学校と定められた。現在のフェリス女学院中学校・高等学校。

26-95 太田資美(おおた すけよし 一八五四—一九一三)

遠江国掛川藩七代藩主、上総国松尾藩知事、掛川藩太田家二代。一八六八(明治元)年新政府によって領地が掛川から武射・山辺両郡に移される。一八七一年正月、同郡が松尾藩となるのに伴い資美は松尾藩知藩事に就くが、同年七月廢藩置県によって松尾藩が松尾県となると資美は免官され東京居住を命ぜられる。一八八四年子爵を叙爵。

26-96 皇太子 ↓ 大正天皇(たいししょうてんのう 一八七九—一九二六)。

『大正天皇実録 第一』(補訂版、ゆまに書房、二〇一六年)明治二六年一月二七日条によると、当時一五歳であった皇太子嘉仁(よしひと)は千葉県東葛飾郡原木村にある御狩場に行啓。ただし朝からの降雪が益々烈しくなってきたため目的の雁網をすることができずに二時二〇分同所を出発し、四時五五分東宮御所に還啓した。

明治二十七年

27-1 北田佐四郎(きただ さしろう 一八七七—一九二二)

北田家は、武蔵国武射郡新井堀村(現在の山武市松尾町広根)で代々村役人を務めた旧家で、一五代権三郎は、連合町村役場戸長や一八八九(明治二二)年に成立した大平村の初代村長を務めた。権三郎の長男彦三郎(一六代、註26-3参照)は、関西の財界で活躍したため、家督を弟の佐四郎(一七代)に譲った。佐四郎は、一八九九年の松尾銀行創立に関わり、また一九〇七年には大平村長に就任している。

27-2 鈴木二郎(すずき じろう)

「士族卒什伍組合名前」(山田硯克家文書追一三、『山武市郷土資料集一七 掛川藩から松尾藩へ—近代編—』山武市教育委員会編刊、二〇一一年所収)には、「第五番組合 八重田、八田村、横芝村、市場村 合併」の項に、「八重田 二百七十四番 鈴木二郎」の名が記されている。元松尾藩士あるいはその縁者であろうか。

27-3 万国同盟(The Evangelical Alliance)

一八四六年にロンドンで結成された福音主義のプロテスタント団体。福音主義同盟、福音同盟会、万国福音同盟会とも訳される。初週祈祷会を推進し、信教の自由を擁護、キリスト者の一致を目指す活動を積極的に行った。一八五九(安政六)年の開港以来、来日したプロテスタント宣教師の多くはこの運動に積極的であり、明治初期のプロテスタント宣教に大きな影響を及ぼした。

27-4 はくさ

歯周病。

27-5 はこべじほ

繁縷塩。はこべじおともいう。干したハコベに塩を加えて煎った粉。歯を磨くの用に用いた。

27-6 麻布英和学校

カナダ・メソジスト教会は、一八八四（明治一七）年三月、麻布鳥居坂に東洋英和女学校と東洋英和学校をそれぞれ創設した。男子校の東洋英和学校には高等・尋常科が開設され、後に神学科も設けられた。高等・尋常科は私立麻布尋常中学校、さらに麻布中学に改められ、一九〇〇年九月、ミッションから分離した独立校となり、東京府麻布区麻布本村町（現在の東京都港区元麻布）に移転した。現在の麻布学園麻布中学校・高等学校。一方神学科は、一九〇一年、青山学院に吸収された。

27-7 山鹿旗之進（やまが はたのしん 一八六〇—一九五四）

日本メソジスト教会牧師、教育者、文筆家。東京英和学校卒業後、母校の教師になる。渡米しドルー神学校を卒業し帰国後、名古屋第一教会（現在の日本基督教団広路教会）の基礎を築き、横浜教会（現在の日本基督教団横浜上原教会）・九段教会（現在の日本基督教団九段教会）などを経て横浜の聖経女学校教頭に就いた。聖経女学校は、一八七九（明治一二）年にアメリカ・メソジスト監督教会が山手二二一番地に開設した美会神学校を引き継ぎ、同教会の婦人伝道師であるC・W・ヴァン・ペテンが、一八八四年に開設した婦人伝道師養成学校である。一八九四年当時、山鹿は名古屋第一教会牧師であった。

27-8 伴直之助（ばん なおのすけ 生没年不詳）

一八九四年六月二日、第二次伊藤内閣が解散し、同年九月一日に行われた第四回衆議院議員選挙で伴直之助は、東京五区から無所属で立候補、当選している。

27-9 カーラエル ↓ トーマス・カーライル (Carlyle, Thomas, 一七九五—一八八一)

イギリスの歴史家、ドイツ文学者、評論家。ゲーテとの往復書簡がある。なお幸三が読んだカーライルの『ゲーテ論』が原書であったのか、翻訳本であったのかは不明である。翻訳本については、神吉三郎（一八九九—一九五二）が育生社から一九四八（昭和二三）年に刊行したものがある。

27-10 経蒙学校 ↓ 啓蒙学校（啓蒙小学校）

ヤングマン (Youngman, Kate M. 一八四一—一九一〇)らが東京築地のB六番女学校（新栄女学校、のち桜井女学校と合併し女子学院となる）の生徒一〇名とともに、一八七七（明治一〇）年に組織したキリスト者の会である好善社が、貧しい家庭の子女のために開設した学校。一八七八年に築地新栄町五丁目七番地に第一啓蒙学校とその夜学校を、翌年には芝区愛宕町に第二啓蒙小学校を設立し、主に貧しい家庭の子弟に読み書きや手芸などを教えた。一八九一年には好善社に男性の入社が認められ、明治学院出身の服部綾雄が社長に就任するなど、明治学院神学部とは関係が深かった。

27-11 日本橋の元大工町教会

元大工町は、現在の東京都中央区八重洲一丁目・日本橋二丁目付近。『福音新報』一五一号（一八九四年二月二日）にはこの日開催された「明治学院神学部基督教大演説会」の記事があり、元大工町教会が日本橋区元大工町九番地にあったことが記されている（『明治学院百年史資料集 第三集』（前掲書）四—M 27—6参照）。

27-12 和泉橋

神田川にかかる橋。岩本町（現在の東京都千代田区岩本町二丁目）と神田佐久間町一丁目（現在の千代田区

外神田一丁目・神田佐久間町一丁目・神田花岡町)を結ぶ。

27-13 下谷竹町なる明星教会

明星教会は、浅草教会から分かれて一八八七(明治二〇)年二月、東京下谷竹町(現在の東京都台東区台東二丁目四丁目付近)に、小川義綏(おがわ よしやす 一八三一—一九一三)を牧師として創立された。一九四六(昭和二一)年、明星教会と小石川原町に一九〇二年設立された小石川原町教会、本所押上に一九三〇年設立された友の家伝道所の三教会が合併再建し、小石川明星教会となった。

27-14 棲雲堂

『帝国医籍宝鑑』(前掲書)および『日本杏林要覧』(日本杏林社編、一九〇九年)の「歯科医籍」の項には、品川の斉藤という歯科医の記載はみられない。

27-15 ヨジム

オランダ語の *jodiumtinctuur* を語源とする単語。ヨジムチンキ、ヨードチンキに同じ。

27-16 きえんさん ↓ 希塩酸

水で薄めた塩酸。健胃消化剤としても用いられる。

27-17 非ヲルソドキシ派のヲルソドキシ派對の相談会

ヲルソドキシ(オースドキシ *orthodoxy*) は正統的信仰の意。プロテスタントのなかで、宗教改革の教理とリバイバルの信仰を受け継ぐ聖書信仰の教会のこと。一八八〇年代後半、スピネルらの独逸普及福音教会、ナツプのユニテリアンなど自由主義的・合理主義的な自由神学の思想をもつ自由キリスト教が日本に伝えられた。そのため正統的信仰と自由キリスト教の対立が教会内でも生じ、混乱や対立が生じ始めてい

た。日記の明治二十七年二月一九日条にある日本橋教会での集会の様子は、『福音新報』に「在京浜日本基督教会有志の集會とその決議」と題し、「◎日本橋会堂に於ける集會」・「◎日本橋会堂に於ける有志会決議補遺」と題して掲載されている（『福音新報』第一五四号・第一五五号（一八九四年二月三日・三月二日）、『明治学院百年史資料集 第三集』（前掲書）四―M27―9 参照）。

27―18 スウキンントン ↓ ウイリアム・スウィンントン (Swinton, William, 一八三三―一八九二)

アメリカの著作家、ジャーナリスト。一八六九（明治二）年から一八七四年までカリフォルニア大学の英文学教授を務めた。歴史や軍事史に関する著作があるが、日本では『万国史』(Outlines of the World History, 一八七四年) が著名である。

27―19 普連土教会

フレンド派の海外宣教団であるフィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は、一八八五（明治一八）年、ジョセフ・コサンドを最初の宣教師として派遣し、日本宣教を始めた。津田仙、W・W・ホイットニーの協力で一八八七年に普連土女学校が設立された。一八九〇年にはフレンド派最初の教会である普連土教会が設けられた。

27―20 中島裁之（なかじま たつゆき 一八六九―一九三九）

熊本県出身の教育者。本願寺の学校（現在の龍谷大学）を卒業後、一八九一（明治二四）年に中国に渡り、中国各地をまわった。清末の文学者・教育者である呉汝綸の主宰する蓮池書院に呉の門下生として入り学ぶ一方、他の生徒に日本語などを教えた。後に北京に東文学社と称する学校を開き、多くの受講生を集めた。

27-21 渡辺良斉（わたなべ りょうさい 一八四五—一九〇九）

幕末・明治時代の歯科医。父阜^{つとむ}齊に木製義歯の製作技術を学び、一八六八（明治元）年開業。ツゲなどを材料にした彫刻義歯の製作にすぐれ、外国の歯科書も研究し、のち陶歯の専売特許をえた。『帝国医籍宝鑑』（前掲書）には、歯科医として東京市神田区駿河台南甲賀町に名がある。

27-22 高山 ↓ 高山紀齋（たかやま きさい 一八五一—一九三三）

明治時代の歯科医。慶応義塾に入塾し英学を修め、アメリカに渡り歯科医学を学んだ。帰国後、東京市京橋区銀座（現在の東京都中央区銀座）に高山齒科診療所を開業した。一八九〇（明治二三）年、東京市芝区伊皿子坂町七五（現在の東京都港区三田四丁目）に高山齒科医学院を設立し、近代歯科医学とその教育に尽力した。同医学院は、後に東京齒科大学へと発展した。

27-23 築地福音教会

北米メソジスト系教会である米国福音教会は、一八七六（明治九）年、F・C・クレツカーらの宣教師を日本に派遣し、クレツカーは一八七七年、京橋に和泉福音教会を設立した。しかし一八八三年に京橋のスラム街を伝道している際に腸チフスにかかり、宣教医ウイリス・N・ホイットニーの治療を受けるが病死する。死後、築地新富橋に築地福音教会（クレツカー記念教会）が設立された

27-24 アンデレー学院 ↓ 聖アンデレー学院神学部

一八七三（明治六）年 W・B・ライトと共に英国聖公会福音宣布教会の宣教師として派遣された A・C・シヨは、一八七六年、芝に聖アンデレー教会を設立し、一八七九年には同教会の敷地内に聖教社神学校を設立した。聖アンデレー伝道団の設立に伴い、聖教社神学校は、聖アンデレー学院神学部と改称した。一九〇三年

に聖アンデレ学院は廃止されるが、神学部は聖教社神学校として存続し、のちに東京三一神学校と合同して聖公会神学院となった。

27-25 福音神学校

福音教会が設けた神学校で、築地の軽子橋詰にあった。山室軍平（一八七二—一九四〇）は、築地福音教会で受洗した後、この神学校に一八八八（明治二一）年から翌年六月まで通っている。

27-26 大西先生 ↓ 大西祝（おおにし はじめ 一八六四—一九〇〇）

註26-62・92参照。幸三の日記には、大西の解職について学生が抗議をしたことが記されており、大西が学生に慕われていたことがうかがえる。なお『大西祝・幾子書簡集』（前掲書）所収の井深梶之助から大西祝に宛てた一八九三年八月一日付けの書簡には、「学校の会計上意にまかせざる事情有之、巷ヶ月金貳拾円だけしか呈上仕兼候。且又約束期限は少くも一学年は相願度考にて、多分左様可成と存候得共、是又会計年度の都合により確たる御約束は本年十二月末迄しか出来兼候次第に御坐候」とあり、さらに翌日の書簡には「大兄の御講義も先書申上候通、少くも一学年は相願候積に御坐候得共、万一年末に至り、会計上の都合により変更を要候様の事出来致候節は不相済義に候故、予て其辺申上候次第に御坐候」（一部旧字を新字に改めた）とあり、井深が大西に一学年の期限付きでの来校を依頼していることから、契約満了による解職であったと思われる。

27-27 大谷虞（おおたに はかる 一八六九—一九一九）

一八九〇（明治二三）年に明治学院神学部に入學。学生生活を中断し高知県などを伝道、一八九八年に同科を卒業した。一九一〇年に青山教会を設立。著作に『求道の栞』（福音新報社 一九一二年）がある。

27―28 根むち ↓ 根鞭

紫竹の根の節の多い部分で作った鞭。幸三は四月一日に八錢で根むちを購入しているが、〔四月分金銭書付〕に「四月一日 一、金八錢 ステッキ」とあることから、根むちは竹製のステッキのことであろう。

27―29 観静学校

日記では、本郷の関谷叔父・叔母の息子春太郎の通学先の学校として観静学校の教育内容を尋ねに行ったようである。後に春太郎は私立中学の郁文館に入学する（明治二十七年六月二二日条）ことから、観静学校も中学校相当学校であると思われる。『新撰東京実地案内』（前掲書）には、「海軍予備かんじょう干城学校 芝愛宕町一丁目」が記されているが、観静学校は干城学校のことか。

27―30 東京青年会館

神田美土代町にかつてあった東京青年会（現在の東京YMCA）の本部会館である。一八九四（明治二七）年に建設された。基督教青年会会館、東京基督教青年会会館、東京基督教青年会館、神田の基督教青年会館など様々な呼称がある。

27―31 スウィット ↓ ジョン・スウィフト (Swift, John Trumbull. 一八六一―一九二八)

教育者。ニュージャージー州オレンジYMCA総主事を経て、四つのミッションボード（アメリカン・ボード、アメリカ長老教会、アメリカ・オランダ改革派教会、アメリカ・バプテスト外国伝道会社）と北米YMCA同盟合同の海外英語教師派遣委員会が派遣する第一号教師として一八八八（明治二一）年に来日し、明治学院で英語及び歴史を教えた。帰国するも北米YMCA同盟最初の海外派遣主事として再来日し、草創期の日本のYMCA、特に東京キリスト教青年会を援助、私財を投じて神田の基督教青年会館を建設し

た。

27-32 泉沢の基督教の学術的研究

『基督教の学術的研究』（マクレイン著、マクネヤ・和泉弥六合訳、和泉弥六刊、一八九四年）のこと。なお和泉については、明治二十七年一月一八日条に、「泉氏」が秋葉宅を訪れ幸三が面会し、幸三は「泉氏」が本を刊行するので広告を学校に掲示することを頼まれ、また九十九里教会の臨時伝道者一名が空席なので、幸三が「泉氏」に誰か適当な人物を紹介してほしいと話したところ、「泉氏」自ら赴任すると提言し、秋葉がその手続きをすることになったことが記されている。この「泉氏」は、和泉弥六であると思われる。

27-33 両国教会

スコットランド一致長老教会の宣教師ロバート・デビッドソン (Davidson, Robert Young. 一八四六一—九〇九) により、一八七七(明治一〇)年、両国矢ノ倉町一番地に両国矢ノ倉町日本基督教会という名称で発足した教会。所在地と名称の変更を経て現在は杉並区に移転し、日本基督教団永福町教会となっている。

27-34 福島中佐 ↓ 福島安正 (ふくしま やすまさ 一八五二—一九一九)

陸軍軍人。ドイツ公使館付武官であった情報将校の福島は、一八九二(明治二五)年から翌年にかけて、一年四ヶ月をかけて冬期のシベリアを世界で初めて単騎横断した。一八九三年九月二九日に東京へ帰省し、国民の熱狂的歓迎をうけた。後に陸軍大将となった。

27-35 ホースター ↓ ジョン・フォスター (Foster, John. 一八三六—一九一七)

第二三代アメリカ大統領ベンジャミン・ハリソンのもとで国務大臣を一八九二年六月から翌年の二月まで務めた。一八九四年五月一〇日に来日している。後に下関講和交渉において清国側のアメリカ人顧問を務め

た。

27-36 東京病院

海軍軍人で医学博士の高木兼寛（たかき かねひろ 一八四九—一九二〇）は、一八八二（明治一五）年に芝の天光院に、貧しい患者のための施療病院として有志共立東京病院を設立した。同病院は一八八四年、愛宕山下の東京府立病院を改修し移転、一八八七年に東京慈恵医院と改称された。一方高木は、一八九二年、有志共立東京病院とは別に個人病院である東京病院を開設した。『横浜東京電話交換加入者名簿』（東京電話交換局横浜支局〔編〕、一八九四年）によれば、この病院の所在地は芝区愛宕町二丁目一四（現在の西新橋付近）にあった。この病院は、高木の死後社団法人東京慈恵会に経営が移り、戦後東京慈恵医院の後身である東京慈恵会医院と共に現在の東京慈恵会医科大学附属病院となった。幸三の日記にある「東京病院」は、高木が個人病院として開設した東京病院のことと思われる。

27-37 ロヨラ ↓ イグナチオ・ロペス・デ・ロヨラ (de Loyola, Ignacio López. バスク語では Loiolakoa, Ignazio 一四九一—一五五六)

カステイリヤ王国領バスク地方出身の修道士。カトリック教会の修道会であるイエズス会の創立者の一人で初代総長。その伝記は、一六四五年に刊行されたイエズス会士の伝記集に収められたものが最初。

27-38 観桜館

御殿山にあった集会所。『福音新報』第六八号（明治二五年七月一日）に、「明治学院師生会」と題し「教授諸君は去る十二日御殿山観桜館に生徒を招じ懇談会を催ふせられたり」とある（『明治学院百年史資料集第三集』（前掲書）四—M25—20参照）。

27-39 郁文館

一八八九（明治二二）年、教育者・漢学者で衆議院議員などを務めた棚橋一郎が東京市本郷区駒込蓬萊町に設立した男子校。私立郁文館と称する。現在の郁文館中学校・高等学校。

27-40 日蔭町

東京府芝区（後に東京市芝区）内の町名。現在の港区新橋二丁目・三丁目付近。

27-41 架字木 ↓ 加治木

医師。明治二十七年八月二八日条、同年九月一日日条には「加字木」と記される医師が登場する。『日本杏林要覧』（前掲書）の芝区の項に、「加治木勇吉【試験十八年六月】宮崎士族、万延元年生●二本榎西町二△芝一一九五乙」と見える。なお△は電話番号を示す。

27-42 大儀見元一郎（おおぎみ もといちろう 一八四五―一九四一）

教育者、牧師。小弁務少使として赴任する森有礼ら一行に従行し渡米、米国留学中に洗礼を受ける。ニューブランズウィック神学校で神学を学び、帰国後、日本基督一致教会の牧師となり、麹町教会の牧師を務める。一八九一（明治二四）年より九六年までステイール・アカデミー（東山学院）の三代目院長を務めており、幸三が日記を記した一八九四年は、院長時代であった。後にアメリカ・メソジスト・プロテスタント教会に移籍する。名古屋英和学校神学部で教え、東京の第一美普教会で牧師をする。麻布・浅草・小石川教会を設立した。

27-43 鉄治仙

明治二十七年七月分金銭書付によると、二五銭で鉄飲泉を購入している。鉄治仙・鉄飲泉は同じものであると

思われるが、不明。

27-44 春木座

一八七三（明治六）年、本郷の地主奥田某が本郷区春木町に奥田座を開場し、一八七六年には所在地の名を取って春木座と改名した。一九〇二年には区名をとって本郷座と改称した。一九三〇（昭和五）年からは松竹の映画館となり、第二次世界大戦中の東京大空襲で消滅した。

27-45 本郷基督教会堂

安川亨が一八七六（明治九）年、東京神田佐栖木町に開設した神田講義所が、日本基督一致教会の設立に伴い本郷講義所となり、一八七八年、教会が設立された。のち春木町に移転し、さらに本郷四丁目に移転した。会堂を関東大震災により焼失し、新たな会堂も東京大空襲で焼失した。西荻窪で集会を守り、野方教会と合同、一九五〇（昭和二五）年、上荻に移転し会堂を建設し、現在に至る。

27-46 末広神社の祭礼

末広神社（山武市松尾町松尾）は、遠州掛川から転封となった太田資美が、東京の藩邸内の社を移して創建したもので、太田氏の先祖道灌を祀っている。毎年七月二五・二六日に祭礼が行われ、神楽が奉納される。

27-47 石炭酸

コールドールから分離するかベンゼンから合成する。一九世紀にはゴミや汚水の消臭剤、消毒薬として使用されたが、人体に対する毒性があることから、使用されなくなった。

27-48 下荏原郡の新井村山王八景坂上

入新井村は現在の東京都大田区大森駅付近で、八景坂は大森駅山王口前の池上通りの坂道。かつてこの坂上

からの眺めは素晴しく、八景坂と呼ばれた。

27-49 腕車（わんしや）

人力車の別称。

27-50 酒石酸（しゅせきさん）

ブドウやワインに含まれていて、ワイン製造の際に得られる酒石は酒石酸水素カリウムを主成分とする。これを精製して酒石酸がつくられる。このほかにマレイン酸を原料とする製法が知られている。食品添加物として認められていて、清涼飲料水・果汁・キャンディー・ゼリー・ジャム・ソースなどの酸味料としてクエン酸・リンゴ酸などととも用いられている。このほかに染料工業・写真・有機合成原料などに用いられる。

27-51 八景園

一八八四（明治一七）年、実業家の久我邦太郎が土地を購入し「八景園」と名付けて開園した遊園地。一八八七年には園内に総萱葺きの家屋を建て、桜や梅の木を植樹。さらにその翌年蟹料理を名物とする「三宜樓」を開業した。郊外随一の遊園地として有名であった。一九二二（大正一一）年頃から区画分譲され、現在は宅地化されている。現在の東京都大田区山王二丁目付近。

27-52 野村某

医師。『帝国医籍宝鑑』（前掲書）の芝区の項に、野村虎長（愛宕町二丁目東京病院内）・野村将曹（三田四国町一五番地）の記載がある。

27-53 クミチンキ ↓ 苦味チンキ

センブリを原料とする苦味薬に橙皮・サンショウなどの芳香剤を混ぜ、アルコールで浸出したもの。健胃薬とする。

27-54 齊藤

医師。『帝国医籍宝鑑』（前掲書）には、品川の齊藤という医師として、齊藤元貞（場所不明）・齊藤宗賦（下池上村）・齊藤清文（品川町大横町）の三名の名が見られる。

27-55 真宗百話・耶穌教衝突論・将来の日本基督教と現今の基督教

真宗百話については、『真宗百話』（西元竜拳著、森江書店、一九〇九年）のみ確認ができた。幸三が求めた『真宗百話』については不明である。耶穌教衝突論は、『耶穌教衝突論』（久津見息忠著、中外堂、一八九三年）、将来の日本基督教と現今の基督教は、『日本現今ノ基督教並ニ将来ノ基督教』（金森通倫著刊、一八九一年）のことであろう。

27-56 臨時総選挙

一八九四（明治二七）年三月一日に行われた第三回衆議院議員総選挙により成立した第二次伊藤博文内閣が、六月二日に解散したことから、九月一日に再度行われた第四回衆議院議員総選挙のこと。

27-57 フライの伝

『慈善美談 一名・エリザベス・フライ実伝』（スザンナ・コールドー著、水野忠丸抄訳刊、一八九三年）のことであろうか。エリザベス・フライ（Fry, Elizabeth. 一七八〇—一八四五）は、イングランドの慈善事業家。監獄改良事業のほか流刑囚の支援、厚生保護、慈善救済事業、児童のためのナイトシエルターの創設、

病者のケア、看護学校の設立、フレンズ派キリスト教の説教者等多岐にわたる事業を手掛けた。

27-58 エマルソンの文集

ラルフ・ウォルドー・エマーソン (Emerson, Ralph Waldo. 一八〇三—一八八二) は、牧師でアメリカ合衆国の思想家、哲学者、作家、詩人、エッセイスト。ハーバード神学校を卒業し、牧師となったが、自由信仰のため教会を追われ渡欧、講演と執筆の生活を行った。その評論は後の思想家・著述家・詩人に大きな影響を与えた。日本でも一八八〇年代後半から原文での刊行が行われ、一八九〇年代前半には以下のような書籍を見ることができた。 *Civilization, art, eloquence and books: essays.* (Dept. of Literature, Tokio Daigaku, 一八八三年) *Culture and behavior: essays.* (Dept. of Literature, Tokio Daigaku, 一八八二年) *Essays of Emerson: friendship, Napoleon, wealth, and prudence.* (Kyushundo, 一八八九年)。

27-59 フルベッキの肖像画〔口絵写真-4〕

日記には、和田がフルベッキの肖像画を描いたことが記されているが、日記に挟み込まれた肖像画が、和田によるものか、幸三が写したものは不明。

27-60 王子の孤女学院

一八九一(明治二四)年、立教大学校で受洗し、立教女学院の教頭職にあり、聖三一教会付属東京救育院(孤児院)を運営していた教育学者で心理学者の石井亮一(一八六七—一九三七)によって創立された聖三一孤女学院のこと。創立当初は、東京市下谷区西黒門町(現在の東京都台東区上野一丁目)の医院を仮設の院舎としたが、翌年、北豊島郡滝野川村に移転し、所在地に因み滝乃川学園と改称した。創立の契機は、濃尾大地震により孤児となった一六名の少女を保護したことによる。滝乃川学園は、移転し現在は東京都国立

市にある。

27-61 筭町（こうがいちよう）

麻布筭町のこと。現在の西麻布二丁目の大部分、西麻布三丁目の約半分、西麻布四丁目全域、南青山四丁目の一部、南青山七丁目の一部で、広域な町であった。

27-62 大時計前の青柳亭

大時計は、外神田旅籠町一丁目一三番地にあった京屋時計店本店の時計塔のこと。青柳亭は『東京百事便』（三三文房編刊、一八九〇年）にある「青柳」か。「集会借席 青柳 外神田福田屋の東隣にありて万事福田屋と伯仲す」とある。

27-63 石坂正信（いしざか まさのぶ 一八六〇—一九三四）

教育者。一八八〇（明治一三）年に横浜の美会神学校普通科に入学、同校が東京英学校と合同し東京に移ると、東京英学校で学ぶ。一八八三年にメソジスト派のジュリアス・ソーパー宣教師から洗礼を受ける。東京英学校が東京英和学校に改称すると、同校の講師となる。後アメリカに留学し、一八九四年に帰国すると東京英和学校が改称した青山学院で教鞭をとり、中等科と高等科の科長を勤めた。一九二一（大正一〇）年、第五代青山学院院長に就任した。

27-64 キセキ論附インスピレーション

『奇蹟詳論』（シュミューデル著、三並良譯刊、一八九一年）、あるいは『インスピレーション詳論』（シュミューデル著、深井英五訳、三並良刊、一八九二年）のことか。シュミューデル (Schmiedel, Otto. 一八五八—一九二四) はドイツの宣教師。一八八七（明治二〇）年、普及福音新教伝道会から派遣されて来日し、独逸学協

会学校、新教神学校で教えた。聖書の歴史的成立過程の研究を紹介。新神学とよばれ、日本のキリスト教界に影響をあたえた。

27 | 65 魚籃の坂 ↓ 魚籃坂 (ぎょらんざか)

東京都港区三田四丁目と高輪一丁目の境にある坂で、坂の中腹に魚籃寺があることから名付けられた。麻布側から伊皿子台町への登りが魚籃坂、頂上から泉岳寺のある海側に降りる坂が伊皿子坂である。

主要参考文献一覽

- ・『東京百便覽』 三三文房編刊、一八九〇年
- ・『横浜東京電話交換加入者名簿』 東京電話交換局横浜支局〔編刊〕、一八九四年
- ・『新撰東京実地案内』 井上勝五郎著、薰志堂、一八九四年
- ・『帝国医籍宝鑑』 山口力之助編、南江堂、一八九八年
- ・『日本杏林要覽』 日本杏林社編刊、一九〇九年
- ・『伝道百五十年史』 田村直臣著、警醒社書店、一九二四年
- ・『港区史 下巻』 港区役所編刊、一九六〇年
- ・『都市紀要九 東京の女子教育』 東京都編刊、一九六一年
- ・『都市紀要一六 東京の特殊教育』 東京都編刊、一九六七年
- ・『都市紀要一七 東京の各種学校』 東京都編刊、一九六八年
- ・『都市紀要二一 東京の中等教育一』 東京都編刊、一九七二年
- ・『都市紀要二三 東京の中等教育二』 東京都編刊、一九七四年
- ・『都市紀要二一 東京の中等教育三』 東京都編刊、一九七五年
- ・『九十九里教会九十年誌 里見長老と共に』 日本基督教団九十九里教会〔編刊〕、(一九六八年)
- ・『千葉県史 明治編』 千葉県編刊、一九七〇年
- ・『東京百年史』 第三卷 東京都編刊、一九七二年

- ・『新修港区史』 東京都港区役所編刊、一九七九年
- ・『日本キリスト教社会経済史研究 明治前期を中心として』 日本キリスト教史双書 工藤英一著、新教出版社、一九八〇年
- ・『宣教百周年』 日本キリスト教団九十九里教会編刊、一九八一年
- ・『松尾町の歴史 下巻』 松尾町史編さん委員会編刊、一九八六年
- ・『港区教育史―百二十年の教育のあゆみ― 上巻』 東京都港区教育委員会編刊、一九八七年
- ・『日本キリスト教歴史大事典』 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、一九八八年
- ・『松村介石』 松村介石原著、松村介石伝編集委員会編、道会発行、一九八九年
- ・『大西祝とその時代』 平山洋著、日本図書センター、一九八九年
- ・『植村正久伝』 伝記叢書一〇五 青芳勝久著、青空社、一九九二年
- ・『大儀見元一郎とその時代 侍から牧師へ・一幕臣の軌跡』 太田愛人ほか共著、新教出版社、一九九四年
- ・『ドクトル・ホイトニーの思ひ出』 ホイトニー夫人・梶夫人共著、大空社、一九九五年（基督教書類会社、一九三〇年の復刻）
- ・『青山学院一二〇年』 『青山学院一二〇年』編集委員会編、青山学院、一九九六年
- ・『井深梶之助宛書簡集』 秋山繁雄編、明治学院、一九九七年
- ・『植村正久と其の時代』 第一巻〜五巻 補遺・索引 植村正久著、佐波巨編、教文館、二〇〇〇年（一九三七〜一九四一年刊の復刻）
- ・『九十九里教会一二〇年史』 日本基督教団九十九里教会編著、キリスト新聞社、二〇〇三年

- ・『長老・改革教会来日宣教師事典』 日本キリスト教史双書、中島耕二・辻直人・大西春樹共著、新教出版社、二〇〇三年
- ・『日本近現代人物履歴事典 第二版』 秦郁彦編、東京大学出版会、二〇一三年
- ・『山武市郷土資料集一七 掛川藩から松尾藩へ―近代編―』 山武市教育委員会編刊、二〇一一年
- ・『山武市郷土資料集二三 掛川藩から松尾藩へ（補遺）―追加目録―』 山武市教育委員会編刊、二〇一七年
- ・『山武市郷土資料集二四 山武市松尾町広根 北田定男家文書調査報告書（1） 目録編』 山武市教育委員会編刊、二〇一八年
- ・『青山日誌』 明治二四年一二月～三一年三月』 青山学院一五〇年史編纂報告三、青山学院資料センター一五〇年史編纂室編、青山学院一五〇年史編纂委員会、二〇一九年

2020年3月31日発行

明治学院歴史資料館資料集【第16集】

編集代表 長谷川 一
発行者 小暮 修也
発行所 明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1-2-37
電話 (03) 5421-5170
印刷所 株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋5-49-6
電話 (03) 3983-2312
